2008年12月1日発行 第13巻第1号 通巻13号 2005年1月7日学術刊行物（第4種郵便物）認可

日本動物看護学会 学会誌

Animal Nursing（アニマル・ナーシング）

Vol.13 No.1（第13巻 第1号）— 2008 12 Dec.

投稿論文

動物看護研究 9報
動物看護研究（教育・研修）1報
HAB（ヒューマン・アニマル・ボンド、人と動物の絆）研究 4報

〈巻頭言〉日本動物看護学会 これからの10年
〈報告〉米国における動物看護師の現状について
【特集】私たちの動物看護観を語り合いましょう！
ほか

2008年7月13日開催
第17回大会より

動物看護師による多彩な研究報告
小動物看護に関する問題提起
「人と動物の関係学」に関する最新の話題

日本動物看護学会

愛犬を、美しく育てたい。

ビューティープロ

BEAUTY pro

with Marine Collagen

D5セレクト

国産

艶と潤いを与える成分マリンコラーゲン 3000mg/kg
ヒアルロン酸を全ステージに。

ビューティープロ専用サイトを新設！
http://beautypro.npf.co.jp/

美しい愛犬の未来のために。年齢ステージ毎に配慮した成分配合。

免疫力の維持に配慮
<β−グルカン>

子犬用

目の輝きの維持に配慮
<アントシアニン>

成犬用

脂肪分 50% OFF(当社比)

体重管理をサポート
<L−カルニチン>

低脂肪(成犬用)

内臓の健康維持に配慮
<タウリン>
<L−カルニチン>

7歳以上用

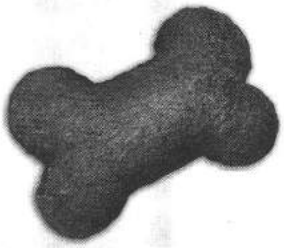
コエンザイムQ10配合

関節の健康維持に配慮
<グルコサミン>
<コンドロイチン>

10歳以上用

NPF 日本ペットフード株式会社　お問い合わせ：お客さま相談室　TEL.03-6711-3601

欲しかったのは、ごほうびだよね？



食物アレルギー、皮膚炎を
持つ犬のためのおやつ
誕生

- 健康的な皮膚と毛艶のために
- z/d、d/d、i/dに適応
- 特定の蛋白源を使用

プリスクリプション・ダイエット
〈犬用〉低アレルゲントリーツ
内容量：180g

Hill's
販売元：
日本ヒルズ・コルゲート株式会社
〒135-0016 東京都江東区東陽3-7-13

DAINIPPON SUMITOMO PHARMA
販売総代理店：
大日本住友製薬株式会社 アニマルサイエンス部
〒553-0001 大阪市福島区海老江1-5-51

獣医師専用の食事療法情報テレホン
0120-211-317
http://www.hills.co.jp

ヒルズ・ホームページから獣医師専用サイト"Hill's Vet's Site"をご覧いただけます。その際には、IDとパスワードが必要となりますので、ヒルズ・ファックスサービス事務局【0120-105-466】へお問い合わせください。

日本動物看護学会　学会誌　Animal Nursing　（アニマル・ナーシング）

巻頭言

日本動物看護学会 これからの10年　桜井富士朗（日本動物看護学会 理事長）　1

報告

米国における動物看護師の現状について
水越美奈（日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 臨床部門 助教）　3

投稿論文

目次には、筆頭発表者だけを表記しています。

動物看護研究

短報　歯科処置における準備と注意点　三浦紫陽子（埼玉県・フジタ動物病院 動物看護師）　11

短報　大学病院における動物看護師の役割
田村浩美（北海道・帯広畜産大学附属家畜病院 動物看護師）　14

短報　教育現場としての動物病院のあり方を考える（その1）
－「獣医学部志望の高校1年生の1日体験」を受け入れて－
瀬戸晴代（広島県・西谷獣医科病院 動物看護師）　18

短報　教育現場としての動物病院のあり方を考える（その2）
－「動物看護学生の臨床実習」を受け入れて－
西谷孝子（広島県・西谷獣医科病院 動物看護師）　22

短報　周術期管理における看護計画の意義に関する検討
－高齢犬の断脚術を通して－
西谷孝子（広島県・西谷獣医科病院 動物看護師）　26

短報　腹腔内腫瘍をもつ犬の入院看護と看護サマリーの作成
西谷孝子（広島県・西谷獣医科病院 動物看護師）　30

短報　外来看護記録用紙作成に向けての検討
－臨床動物看護研究会におけるグループワーク－
遊座晶子（茨城県・つくば国際ペット専門学校 教諭、動物看護師）　34

短報　動物眼科二次診療施設における外来看護
－点眼指導の関わりを外来看護記録用紙の作成にて振り返る－
中井江梨子（東京都・どうぶつ眼科 Eye Vet 動物看護師）　39

原著論文　動物看護師とクライエントの視点による動物病院における対応のあり方
甲田菜穂子（東京農工大学 大学院共生科学技術研究院 環境資源共生科学部門 准教授）　44

Vol. 13 No. 1 ——— CONTENTS

動物看護研究（教育・研修）

話題提供 **山梨動物看護師勉強会「PRIDE(誇り) & CONFIDENCE(自信)」3 年間の報告**
高橋真由（山梨県・赤池ペットクリニック　動物看護師）　50

HAB（ヒューマン・アニマル・ボンド、人と動物の絆）研究

原著論文 **広島県下の私立幼稚園における動物飼育に関するアンケート調査**
三上崇徳（広島大学大学院 生物圏科学研究科 生物資源科学専攻 修士課程 2 年）　55

原著論文 **愛着のタイプ及びその度合から見た飼い主のペットの安楽死選択に関する意識**
ー大学生を対象にした調査データを基にー
杉田陽出（大阪商業大学 経済学部経済学科 准教授）　62

原著論文 **動物看護科学生の動物介在活動・療法に関する意識調査**
熊坂隆行（名桜大学 人間健康学部看護学科 講師）　75

原著論文 **統合失調症を中心とした慢性精神疾患患者の動物とのふれあいによる『気分』の変化に関する研究**
ー参加傾向、環境整備という観点から看護援助を検討するー
熊坂隆行（名桜大学 人間健康学部看護学科 講師）　82

動物看護専門学校生による発表　93

陶板浴装置の先天性腎不全症の犬への影響／松岡麻里
ケープペンギンの行動／我有俊哉　ゼブラフィッシュ（卵と稚魚）の発生の基本的な観察／山下亜莉沙
以上、福岡動物病院看護士学院 第三期生

【特集】私たちの動物看護観を語り合いましょう！　100
——— 2007 年秋 大阪「第 26 回例会」を誌上再録

動物看護師の いま と これから ——「日本動物看護学会認定動物看護師」6 名の声　112
提出された「看護レポート」（69 報）のテーマ一覧　115

本会会則・本会役員　116　投稿規定　120
第 8 回「動物看護師資格認定試験」実施概要　121　編集後記　122

行事報告につきまして

行事数の増加・大規模化に伴い、誌面スペースの都合から、本号に掲載できませんでした。

行事報告（開催告知も）は、学会ホームページで行っておりますので、こちらをご覧ください。 URL http://www.jsan.gr.jp

Nobivac®

劇 動物用医薬品　　[要指示医薬品]

犬用7種混合ワクチン

ノビバック DHPPi＋L

犬用5種混合ワクチン

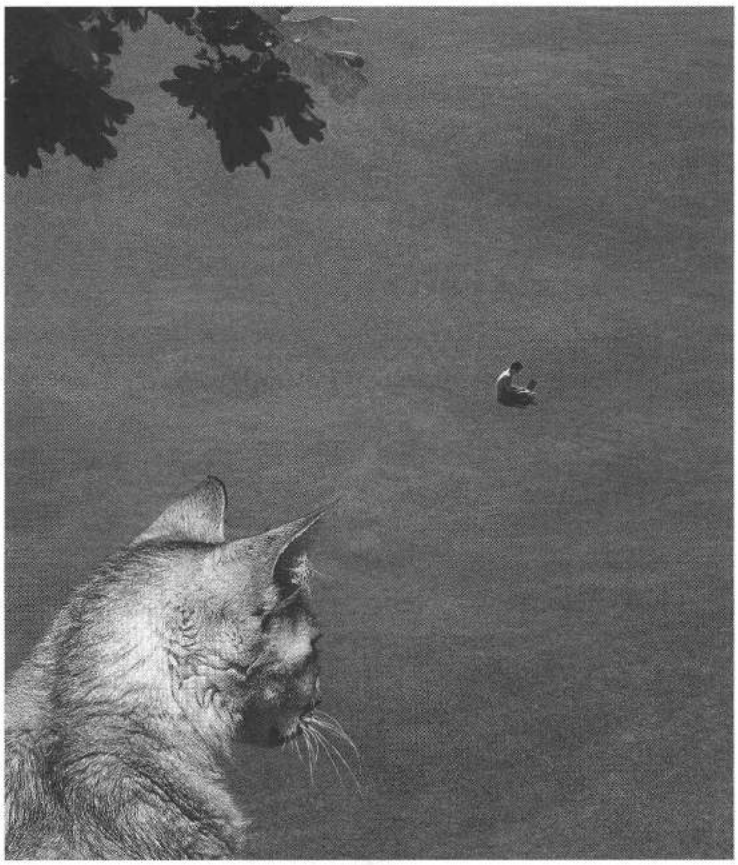
ノビバック DHPPi

犬用2種混合ワクチン

ノビバック PUPPY DP

犬レプトスピラ病ワクチン

ノビバック LEPTO



猫ウイルス性鼻気管炎

猫カリシウイルス感染症

猫汎白血球減少症

劇

猫３種混合生ワクチン

TRICAT

製造販売元 intervet 株式会社インターベット
茨城県かすみがうら市深谷1103

発売元 シェリング・プラウ アニマルヘルス株式会社
東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー33階

ノビバックに関する技術的なお問い合わせ
Nobivac® LINE フリーダイヤル 0120-807-220
（月～金　9:00～12:00　13:00～17:00　土日祝日を除く）

巻頭言

日本動物看護学会 これからの10年

日本動物看護学会 理事長
帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授
桜井富士朗

2008年7月、日本動物看護学会(以下 本学会)・第17回大会が日本獣医生命科学大学で開催されました。参加者は当初予定をはるかに超える260名にも及び、一時は立ち見の参加者も出るくらい超満員の状態でした。本大会をお引き受け下さいました福所秋雄大会長(日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 主任・基礎部門 教授)、会場をご提供ならびに特別講演でもお話しいただきました池本卯典学長はじめ、大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本学会は、1995年12月に設立されました。設立大会時のシンポジウム「ナイチンゲール看護は有効か」で掲げられた「学問としての動物看護学の確立」「動物看護師の職域の検討」「育成カリキュラムの策定とライセンス認定」の3つの検討課題に対して真剣に取り組むことが、わが国の動物看護学の将来につながると確信し歩みを進めてきました。

紆余曲折を経て、2002年に出版された書籍『動物看護学(総論・各論)』は、「学問としての動物看護学の確立」への"最初の回答"として、企画から数年がかりで完成されたものです。諸外国の訳本に頼らずわが国独自の教科書を持てたことは、わが国における動物看護学の社会的評価を高めることに貢献できたと思います。

相次ぐ増刷では、経済統計データや法律などを最新のものに差し替えながら、2008年現在でも、大学・専門学校など多くの教育機関で教科書採用されていることを光栄に感じています。

教科書作成により、育成カリキュラムに一定の回答を出しましたので、次に総力を挙げて取り組んだのは「ライセンス認定」でした。会長の諮問機関として動物看護師認定試験委員会を全国獣医系大学関係者・有識者で組織し(委員名は公表)、幾度も検討を重ね、将来そうなるべきである国家試験を想定し、「認定者が一定の学識や練達度を修得していることを、職場や社会に対して保証できる内容」であること、「認定基準の明瞭化・公開性」「運営面での公平性」「資格者に対する継続教育」など本委員会で設けた厳しい条件の下、2003年9月に第1回の動物看護師資格認定試験を開催いたしました。

本認定試験は、現職の意欲的な動物看護師に熱烈な支持を受けました。ここ数年の本学会大会の盛況さは、この認定試験の開始以降に本学会に加入した有資格者の活躍によって、もたらされていると言っても過言ではありません。厳しい条件を遵守して行った本認定試験が、全国的な動物看護師のネットワーク作りに貢献しているといえます。

※現在まで(第1〜7回)の受験者総数は1,965名、合格者総数は1,605名。第8回は2009年3月8日(日)に実施。

3つ目の「動物看護師の職域」の検討についてですが、2006年より日本獣医師会が「動物診療補助専門職検討委員会」を組織し、検討を重ねた結果、2009年1月に岩手県盛岡市で開催される日本獣医師会・学会年次大会において、「動物看護職全国協会(仮称)」が発足する運びとなりました。

本学会に所属し、演題発表や学会誌投稿で積極的に活動している動物看護師が、中心的な役割を果たしてくれることを期待しています。これで、学会(学術団体)と職能団体の2本柱ができることになります。これまでは頼りになる職能団体がありませんでしたので、本来は職能団体で扱うべき活動やテーマを、本学会活動の

中で取り上げてきた経緯があります。日頃から今道会長が、「本来学会は、学術活動に専念すべきである」と口にされていますが、「動物看護職全国協会(仮称)」の誕生は、本学会活動を見直し、限られた資金的・人的資本を「動物看護学の確立と発展」に集中できる良い機会と思われます。

なお、2008年7月開催の第14回総会では、学会規約の大幅改正が執行部より提案され承認されました。この1年余り本学会では、「規約改正委員会(渡辺茂委員長)」と「組織財政委員会(委員長は桜井)」を設け、これからの10年を見越した学会活動を想定して検討を重ねてきました。

学会発足当時は、実際に活動できる動物看護師が極端に少なく、会員規模も100名前後で運営することを前提にした学会規約でしたので、会員数が1,501名(2008年9月現在)の大所帯になった現在の学会を運営するには、不具合が生じておりました。

このたびの総会で、学会会則を改正すると共に人事も一新し、本学会の動物看護師資格認定試験を経て育ってきた動物看護師が多数名、常任理事・理事に就任されました。生後13年になる本学会ですが、財政的には苦労の連続で、現在でも苦しい台所事情であることは同様です。

そうした中でも本学会がここまで継続・発展できたのは、動物看護師、獣医師、業界の垣根を乗り越えて参加していただいた先生方、事務局のスタッフ、個人・企業のサポーターをはじめとする、皆様のお力の賜物と心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、これからの会務運営について、自らが実質的な主役を担っていただくことになる動物看護師の方々には、非力な私たちの学会では、何よりも「人が財産」であることの重さをかみしめて、これからの10年を乗り切っていただきたいと考えております。

◆報告◆

米国における動物看護師の現状について

日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 臨床部門 助教
水越美奈

はじめに

現在、全国の動物病院には獣医師の約 2 倍の動物医療補助職員、いわゆる動物看護師が勤務していると言われている。このように実際の現場では多くの看護職が活躍しているにもかかわらず、これらの職については動物看護師(士)、AHT、VT、アニテクなど統一された呼称もないのが現状である。また現在、動物看護に携わる人材を養成する学校としては、大学、短期大学、専門学校があり、さらには無認可の通信教育なども存在し、それらのなかには統一した教育プログラムも認定資格も存在しない。

2006 年 12 月に日本獣医師会において「動物診療補助専門職検討委員会」が設けられた。ここでは動物診療の質の確保と動物診療におけるチーム医療提供の確保、獣医療における動物看護職を含むパラメディカル(para-medical, para=補足する、従属する)の専門職のあり方(国家資格の創設等)の検討が行われ、平成 20 年日本獣医師会の学会年次大会において、動物看護専門職の資格制度の確立に向けた動物看護職全国協会(仮称)設立準備会が発足した。

米国では動物看護師認定資格の統一試験が存在する。統一試験の先達である米国における動物看護師の現状を知ることは、わが国の今後の動物看護師教育や公的資格に向けた資料になりうると考えられる。今回、米国において動物看護師養成のカリキュラムをもつ大学を訪問し、その教育やシステムについて視察、調査する機会を得たので報告する。

米国での動物看護師システム

米国では認定動物看護師と(認定されていない)動物看護師が混在する。認定看護師は全米統一の動物看護師試験(VTNE : Veterinary Technician National Examination)に合格したことを示している。この試験は獣医師の全米試験(National Examination)と同じ米国州獣医事局協会(American Association of Veterinary State Boards)[1] が管理している。試験は年 2 回(1 月と 6 月の第 3 金曜)行われ、4 択の選択問題が200問出題される。これらの試験は 4 時間で行われ、出題の割合も公表されている(**表 1**)。

この全米統一試験は、わが国でいうところの国家試験とはシステムが若干異なる。出願は各州で行われ、合格点も各州で異なる。受験生は自分が仕事に就く州で出願し、その州の認定を受ける。つまり全米で統一の試験を受けるが、その資格は州認定となる。そのためライセンスを取得した州と異なる州で仕事に就くことになった場合は、改めて受験し直す必要はないが、新しい州に申請を行ない、その免許(認定)を移動する必要がある。これは、米国では獣医師や動物看護師に関する法律が国ではなく州法で定められているためと思われる。カリフォルニア州やアイオワ州など、州によっては、全米統一試験ではなく独自に州試験(State Board)を設け、州試験の合格を求めているところもある。

また、認定動物看護師の名称も州によって異なり(**表 2**)、職務規定なども州によって異なっている。これらはすべて州法によって定められており、その内容はほとんどの州において、州政府のホームページ内にある州獣医事局(Veterinary Medical Board)のページ[2] で見ることができる。

表1　全米統一動物看護師試験（VTNE：Veterinary Technician National Examination）の内容

問題：200 問（選択肢問題）

1. 薬局、薬理	14%	28 問
2. 外科準備とアシスト	20%	40 問
3. 歯科	7%	14 問
4. 検査関係	16%	32 問
5. 動物看護学	20%	40 問
6. X 線、超音波など	8%	16 問
7. 麻酔	15%	30 問

※設問には小動物、大動物が含まれる。

表2　認定動物看護師の名称

LVT（Licensed Veterinary Technician）
―― アラスカ、ミシガン、ネブラスカ、ネバダ、ノースダコタ、オレゴンなど（米国の州名、以下同）
RVT（Registered Veterinary Technician）
―― カリフォルニア、ジョージア、インディアナ、カンザス、ミズーリ、ニューヨーク、ノースカロライナ、オハイオ、オークランド、サウスダコタ、テキサス、ワシントンなど
CVT（Certified Veterinary Technician）
―― コロラド、アイダホ、イリノイ、マサチューセッツ、ミネソタ、ミシシッピなど
Certified AHT（Certified Animal Health Technician）―― サウスカロライナ
Registered AT（Animal Technician）―― ケンタッキー
Certified VT（Veterinary Technician）―― ペンシルバニア
LVMT（Licensed Veterinary Medical Technician）―― テネシー

動物看護師の教育システム

この全米統一試験や州試験に出願するには、基本的には米国獣医師会（AVMA）が認可したプログラムをもつ学校を卒業する必要がある。学校やそのプログラムが認可を受けるには、決められたカリキュラム、教員、施設の規模が必要となり、それらは米国獣医師会の獣医看護師教育委員会（AVMA Committee on Veterinary Technician Education and Activities）[3] と教育評議会（AVMA Council on Education）によって決められている。

これらの認可プログラムは現在、全米とカナダに150 校あり、2 年制以上のプログラムになっている。これらのプログラムのうち 4 年制大学が 18 校、インターネットなどを用いた遠隔教育システムをもつプログラムが 9 校ある。認定プログラムの内容は米国獣医師会のホームページで確認することができる[4)5)]。

獣医学部がある大学では、パデュー大学[6] とミシガン州立大学[7] に動物看護師コースが設けられている。実務経験はあるが認定資格はない状態で働いている動物看護師に対する受験資格取得プログラムが用意されている学校も存在する。

認定取得後の更新制度としては、初年度は 1 年後、その後 3 年おきに継続教育の義務が課されており、米国獣医師会や米国動物病院協会（AAHA）などの学会において動物看護師向けの継続教育講座が設けられており、一定の継続教育単位（CEU：Continue Education Unit）を取得する必要がある。この単位などについても州により決められているようである[8]。

表3 Cal Poly Ponoma：動物看護コースカリキュラム

Required Core Course（必修）

Course（科目）	Units（単位数）
Orientation to the College of Agriculture　農学部のオリエンテーション	1
Orientation and Careers in AHS　コースのオリエンテーションとキャリア	2
Clinical Nutrition　臨床栄養学	5
Animal Science 1　動物科学 I	4
Companion Animal Care　コンパニオンアニマルケア	2
Companion Animal Nursing Skills　コンパニオンアニマルの看護技術	2
Animal Handling Restraint　ハンドリングと保定	4
Clinical Anatomy & Physiology for Vet Tech　動物看護師のための臨床解剖学と生理学	5
Veterinary Radiology & Ultrasound　獣医放射線学と超音波	4
Veterinary Terminology & Law　獣医専門用語と法律	3
Laboratory Procedures for Vet Tech　動物看護師のための検査学	2
Surgical Nursing Skills　外科看護技術	2
Clinical Pathology & Animal Diseases　臨床病理と動物の疾病	5
Clinical Biochemistry & Pharmacology　臨床生化学と薬理学	4
Work Experience in Animal Health Sciences　動物看護関連の職業経験	2
Clinical Externship　臨床エクスターンシップ	2
Externship in Animal Health Sciences 1　エクスターンシップ I	3
Externship in Animal Health Sciences 2　エクスターンシップ II	3
Animal Parasitology　動物寄生虫学	4
Lab Animal Management Rules & Regulations　実験動物管理の規則と法律	4
Critical Care, Advan Surgical Assit. & Aneth.　救急、手術補助、麻酔	4
Veterinary Economics and Hospital Management　獣医療経済と病院経営	3
Undergraduate Seminar　大学レベルセミナー	2
Or Development of Leadership Skills　リーダーシップスキル	(3)
Total units（総単位数）	**72-75**

Required Support Courses（必修のサポートコース）

Course（科目）	Units（単位数）
Computer Applications in Agriculture　農業におけるコンピューターの応用	4
College Chemistry　大学レベルの化学	4
Elements of Organic Chemistry　有機化学の基本	4
College Algebra　大学レベルの代数	4
Basic Microbiology　基礎微生物学	5
Statistics with Applications　統計学	4
General Chemistry　一般化学	4
Basic Biology　基礎生物学	5
Animal Industry & Society　動物関係産業と社会	4
Agriculture & the Modern World　農業と現代世界	4
Ethical Issues in Food, Agriculture & Apparel Industries　食料、農業、衣料産業における倫理問題	4
Drugs & Society　ドラッグと社会	4
Total Units（総単位数）	**50**

続く

Elective Support Courses（選択サポートコース）

Course——Science Track：Select 16 units（科目——理系コース 選択 16 単位）	Units（単位）
Genetics　遺伝学	4
or Genetics of Domestic Animals　あるいは家畜遺伝学	(4)
Biology of Cancer　癌の生物学	4
Cell & Molecular Biology　細胞、分子生物学	4
Neuroscience　神経科学	4
Molecular Biology Techniques　分子生物学技術	4
Medical Mycology　医療細菌学	3
Hematology　血液学	3
Vertebrate Zoology　脊椎動物の動物学	3
Animal Behavior　動物行動学	3
Histology　組織学	3
Herpetology　爬虫両性類学	2
Organic Chemistry　有機化学	3
Biochemistry　生化学	3
Course——Business Track－Select 16 Units（科目——経営コース 選択 16 単位）	**Units（単位）**
Principles of Economics　経済の原理	4
Managerial Accounting　管理会計	5
Management Information Systems　情報システムの管理	4
Legal Environment of Business　ビジネスの法律的環境	4
Food and Agribusiness Marketing　食料と農業ビジネスのマーケティング	4
or Principles of Marketing Management　あるいは マーケティング管理の原理	(4)
Data Management for Agribusiness　農業ビジネスに対するデータ管理	4
or Managerial Statistics　あるいは 経営統計	(4)
Operations Management for Agribusiness　農業ビジネスの運用管理	4
or Operations Management　あるいは 運用管理	(4)
Managing Agribusiness Organizations　農業ビジネス会社の管理	3
or Principles of Management　あるいは 経営の原理	(4)
Managerial Finance　経営財務	3
Agribusiness Personnel Management　農業ビジネスの労務管理	4
or Human Resources Management　あるいは 人的資源管理	(4)
Total Units（総単位数）	**16**

続く

動物看護師の教育プログラム

今回、視察訪問したカリフォルニア州立カリフォルニア工芸大学ポモナ校（California State Polytechnic University-Pomona）[9] のカリキュラムを見ると、基礎や臨床科目はもちろんのことマネージメントやマーケティングの科目が充実しているのがわかる（**表３**）。

これは認定動物看護師が単なる獣医師のアシスタント（補助）としてだけでなく、アソシエイト（チーム医療の一員であり、動物病院経営の一員）の役割がある、というということではないだろうか。これらに関する科目は、わが国での教育プラグラムでは欠けている部分であると思われるので、今後は必要であるかどうかも含め、多くの議論が必要になるだろう。

General Education Requirements（一般教養：必修）

Area（領域）	Units（単位）
Area A : Communication & Critical Thinking　コミュニケーションと批判的思考法 1.Written Communication　2. Oral Communication　3. Critical Thinking	12
Area B : Mathematics & Natural Sciences　数学と自然科学 1. Math/Quantitative Reasoning　2. Physical Science 3. Biological Science　4. Science & Technology Synthesis	16
Area C : Humanities　人文科学 1. Fine and Performing Art　2. Philosophy and Civilization 3. Literature and Foreign Language　4. Humanities Synthesis	16
Area D : Social Sciences　社会科学 1. US History, Constitution, American Ideals　2. History, Economics and Political Science 3. Sociology, Anthropology, Ethnic & Gender Studies　4. Social Science Synthesis	20
Area E : Lifelong Understanding & Self Development　生涯理解と自己啓発	4
Total units（総単位数）	68

卒業に必要な単位数：180

表4　動物看護師の学会（専門集団）

救急専門動物看護師学会（Academy of Veterinary Emergency Critical Care Technician: AVECCT）	http://avecct.org/
麻酔専門動物看護師学会（Academy of Veterinary Technician Anesthetists: AVTA）	http://www.avta-vts.org/
歯科専門動物看護師学会（Academy of Veterinary Dental Technician: AVDT）	http://www.avdt.us/
内科専門動物看護師学会（Academy of Internal Medicine for Veterinary Technicians: AIMVT）	http://www.aimvt.com/
行動専門動物看護師学会（Society of Veterinary Behavior Technicians: SVBT）	http://www.svbt.org/
馬専門動物看護師学会（The American Association of Equine Veterinary Technicians: AAEVT）	http://www.aaevt.org/

専門動物看護師資格

米国では獣医師にも専門医制度があるが、動物看護師においても同様に専門看護師制度が立ち上がり、専門分野で働く看護師も増えてきている。この専門動物看護師は VTS（Veterinary Technician Specialties）と呼ばれ、米国の動物看護師の協会である NAVTA（National Association of Veterinary Technician in America）[10] の中に各専門に分かれた看護師の学会（**表4**）において認定が行われている。現在のところ、すでに救急（Emergency Critical Care）、麻酔、歯科、内科（心臓病学、腫瘍学、小動物、大動物）、馬の専門看護師制度が存在し、つい最近、行動の専門看護師認定が認可された（**写真1**）。

動物看護師の職域

今回、視察訪問したカリフォルニア州立カリフォルニア工芸大学ポモナ校（California State Polytechnic University-Pomona）の卒業生の就職先としては、動物病院（小動物／小動物＋馬／馬）、ペットフード会社（営業職、技術職、飼い主からの電話相談）、血液や組織等の検査センター（検査担当）、検査機器会社（設置および手順等を動物病院スタッフに説明）、薬品会社（研究補助：研究者の作ったプロトコルの元に実際の実験を行う、MR：Medical Representative 医薬情報担当者）、実験動物を扱う研究所等（実験動物の管理、生産）が挙げられている。これらの職域の多くはカリフォルニア州では、州

Society of SVBT Veterinary Behavior Technicians

THE BEHAVIOR PERSPECTIVE

"Empowering the Veterinary Behavior Team Through Education"

Volume 7, Issue 4 Summer 2008

BOARD OF DIRECTORS 2007-2008

President
Kristen White, CVT
president@svbt.org

President-Elect
Amanda Eick-Miller, RVT, CPDT
presidentelect@svbt.org

Past President
Tara Lang, BS, RVT
pastpresident@svbt.org

Treasurer
Julie Urban, BA, LVT
treasurer@svbt.org

Recording Secretary
Shannon Trouba, LVT
recordingsecretary@svbt.org

Corresponding Secretary
Charlotte (Renee) Harris, RVT
correspondingsecretary@svbt.org

Members at Large
Lori Tyler-Ochsner, LVT
memberatlarge1@svbt.org

Monique Feyrecilde, LVT
memberatlarge2@svbt.org

ACVB Liaison
Andrew Luescher, DVM, PhD, DACVB

Advisory Panel
R.K. Anderson, DVM, DACVB
Wayne Hunthausen, DVM
Karen Overall, VMD, PhD, DACVB

Newsletter Editor
Sheri Church, LVT
vettech03@juno.com

scholarship@svbt.org
contactus@svbt.org

PRESIDENT'S MESSAGE

Time is flying by—I can't believe that this is my last president's message! It feels like a couple months ago that I was nominated president-elect, and yet two years have flown by. I hope to see many of you at the AVMA conference this July in New Orleans. We are having our annual meeting at a local restaurant on Bourbon Street this year and then our reception will be for dessert and drinks at the Marriott. You won't want to miss it (look for details on the website and inside the newsletter).

There are a lot of exciting things on the horizon for us including our own continuing education meeting and the Academy of Veterinary Behavior Technicians (AVBT). The way these things become a reality is due to our dedicated members. That being said, I encourage you to be involved in your organization—we are only as good as our members! There are roles for everyone from large to small; you don't have to serve on the board to help out. Small time commitments include serving on a committee. The state representatives committee still has a lot of holes in it. Check out the website—if there is a blank next to your state email me about representing your state! I know you all have read this from me in past president's messages, but this is how important I feel your involvement is!

With that being said, I am very excited about our incoming president Amanda Eick-Miller, RVT. I know she will do many things to further our organization. Tara Lang has been a great mentor for me and we are all sorry to see her leave the board, but if I know her she will still be a big part of the SVBT. I also want to extend my thanks to everyone on the board this year for all of their help and support: I certainly wouldn't have gotten as much done without each and every one of you!

Kristen White, CVT
SVBT President

STATE REPRESENTATIVES COMMITTEE

The SVBT State Representative committee is looking for people to represent their state for the SVBT. We would like to fill un-represented states. However, having more than one representative in a state is also a possibility. Qualified candidates must be an active professional or student member, have e-mail access, and a desire to enrich human-animal interactions by promoting scientifically based techniques of training, management, and behavior modification.

The purpose of the State Representative Committee is to:

- Solicit and write articles regarding behavior news of their state to be submitted to SVBT newsletter/publication committee on a quarterly basis.
- Watch/report behavior news of their state.
- Establish contacts with state and local technician organizations in order to:
  - Submit SVBT news releases supplied by the PR committee to State newsletters.
  - Supply SVBT brochures at state CE meetings.
  - Have www.SVBT.org posted as a link on state and local technician organization websites.

Don't let the job description scare you! Being a part of the State Representative Committee is a low time commitment way to be more active in our society!

Current SVBT State Representatives:

State or Province	Representative
Alberta, Canada	Leanne Barker
California	David Watts
Connecticut	Gayle DiMenna
Florida	Amanda Miller
Hawaii	Amy Igarashi
Illinois	Gail Wagner-Miller
Indiana	Pam Mahlie
Louisiana	Debbie Puppel
Massachusetts	Michelle Welch
New Jersey	Beth Klein
New York	Molly Mott, Marcia Ritchie
Pennsylvania	Lisa Berkenstock
Washington	Monique Feyrecilde

Please contact Kristen White, CVT at **kjkitty@verizon.net** if you would like to help support the SVBT by representing your state.

写真1　行動専門動物看護師学会（Society of Veterinary Behavior Technicians: SVBT）のニュースレター

※日本から会員になることは可能である。

法や条例により認定動物看護師の職域になっているため、ほとんど独占的な職域であるようだ。

大動物に対する動物看護師については、馬専門の動物病院に勤務する動物看護師がいる。豚や牛などの産業動物については臨床に関する職域はほとんどないが、ワクチンを製造する会社などに勤務し、牧場でワクチンを接種する業務に就く動物看護師は存在する。これは州法において、認定動物看護師がワクチン接種することが認められているからである。

認定動物看護師の待遇（給与）

視察をしたカリフォルニア州では、現在、資格がない動物看護師では、一般的に初任給は時給 8～10ドル、認定動物看護師では時給 17ドルからがほとんどであり、時給の上限は資格がない動物看護師では 25ドル、認定動物看護師では 33ドル程度であるとのことであった。

実際に働いている認定動物看護師にインタビューしたところ、これらの格差は良いところもあり悪いとこ

ろもあるとのことであった。認定看護師であるということで就職が有利になり、給与も高く支払われる一方、動物病院によっては、認定動物看護師は時給が高いために敬遠され、認定資格のない動物看護師のほうが雇われてしまうことがあるとのことである。特に小さな病院ではこのようなことが顕著であるとのことだったが、米国においてもまだまだ小規模経営の病院では認定看護師に対する認識が低いことが伺えた。米国動物看護師協会(NAVTA : the National Association of Veterinary Technicians in America)によると、2007 年での認定動物看護師の全米での平均給与は 36,120 ドル/年である[11]。

おわりに

動物看護職は獣医看護学に関する専門知識や技術も必要だが、飼い主や獣医師とのコミュニケーション力、物言えぬ動物たちの代弁者としての役割も担っている。また前述したように、動物看護師は獣医師のアシスタント(補助)としてだけでなく、アソシエイト(チーム医療の一員)となりうる役割がある。

そういう意味では、動物看護職を専門的な職としていくためには公的資格に発展していくことが重要だと思われるが、同様に教育カリキュラムの充実とそれらのカリキュラムを標準化していくことが重要であろう。

参考 URL／文献

1)米国州獣医事局協会(American Association of Veterinary State Boards) http://www.aavsb.org/

2)米国カリフォルニア州獣医事局(California Veterinary Medical Board) http://www.vmb.ca.gov/

3)米国獣医師会:獣医看護師教育委員会(AVMA Committee on Veterinary Technician Education and Activities (CVTEA)) http://www.avma.org/education/cvea/

4)米国獣医師会:動物看護師教育委員会が認定したプログラム (Programs accredited by the AVMA CVTEA) http://www.avma.org/education/cvea/about_cvtea.asp

5)米国獣医師会:動物看護師教育委員会が認定した遠隔学習プログラム (Distance learning programs in veterinary technology accredited by the AVMA CVTEA) http://www.avma.org/education/cvea/vettech_distance_learning.asp

6)パデュー大学 獣医学部 動物看護プログラム(Purdue University, School of Medicine, Veterinary Technology Program) http://www.vet.purdue.edu/vettech/

7)ミシガン州立大学 獣医学部 動物看護プログラム(Michigan State University, College of Veterinary Medicine, Veterinary Technology Program) http://www.cvm.msu.edu/vettech

8)ウィスコンシン州条例とライセンス局:動物看護師ー教育(State of Wisconsin Department of Regulation & Licensing / Veterinary Technician Education) http://drl.wi.gov/prof/vett/ceu.htm

9)カリフォルニア州立カリフォルニア工芸大学ポモナ校 農学部 動物看護プログラム(California State Polytechnic University-Pomona, College of Agriculture, Animal Health Technology Program) http://www.csupomona.edu/~academic/catalog/index.shtml

10)米国動物看護師協会(NAVTA:National Association of Veterinary Technician in America) http://www.navta.net/

11)NAVTA National Demographic Survey Summary, *The NAVTA Journal*, spring 2008 p17-21, 2008

／執筆者略歴／

水越美奈 (みずこし・みな)

日本獣医畜産大学卒業。獣医師。動物病院に 6 年間勤務後、行動治療を学ぶために渡米。渡米中にサンフランシスコ SPCA(動物虐待防止の非営利組織)などの愛護団体でボランティアも経験。帰国後、1999 年より P.E.T.S.(ペッツ)行動コンサルテーションズを主宰。犬と猫の行動カウンセリング、犬・猫の行動やしつけに関する講演を多数行う。犬のトレーナー／インストラクターの継続教育の重要性を痛感し、SPICE(Society for Pet-dog Instructors' Continuing Education)を 2000 年に設立。2007 年より現職。

(社)日本動物病院福祉協会(JAHA)公認家庭犬しつけインストラクター、同インストラクターコース講師、(財)日本盲導犬協会付設盲導犬訓練士学校講師、都市に暮らす人と家庭犬のためのしつけ教室 Canine Unlimited 顧問。日本身体障害者補助犬学会理事、ヒトと動物の関係学会評議員、比較心身症研究会幹事。優良家庭犬普及協会常任理事、同優良家庭犬試験ジャッジ。

投稿論文（計 14 報）　p11～92

日本動物看護学会は 1995 年（平成 7）年に発足し以来、＜学問としての動物看護学の進展＞＜動物看護師の職域拡大と地位確立＞を目的とした活動を行っている学術団体（学会）です。

学会とは何でしょうか。その定義をあらためて確認します。辞典には、「学者相互の連絡、研究の促進、知識や情報の交換、学術の振興をはかる協議などの事業を遂行するために、組織する団体」（広辞苑）とあります。

つまり日本動物看護学会とは、動物看護の発展をめざす会員の皆様が、積極的に集い、動物看護に関する研究結果を報告・考察し合うための、開かれた交流の場です。動物看護を研究する上で、わからないことがあって困った時、行き詰まった時など、本学会へ来て問題提起すれば、それについて一緒に考えてくれる人がいる――これが学会としての役割・使命です。

このための主要な手段が、＜大会での発表・報告＞＜学会誌への論文投稿＞といえます。＜大会での発表・報告＞は各開催に先立ち募集を行います。事前審査はありません。＜学会誌への論文投稿＞は、査読（さどく：識者による内容審査と疑問指摘による指導）後の「投稿者による修正・再提出→再審査」を経て掲載に至ります。本学会誌の査読は現状では、「落とすため」ではなく「よりよい内容で掲載するため」に行っています。

「問題意識や工夫事例などを織り込んだ動物看護報告」「動物看護や HAB 研究についての研究成果」などをまとめて、ぜひ投稿されてください。今号の投稿論文が、執筆方法やまとめ方の手本になると思われます（p120 に投稿規定を載せていますが、投稿方法の詳細は学会事務局までお問合せください）。

動物看護研究を発表・報告し合い、互いの課題や成果を共有すること――その積み重ねが、わが国の「動物看護学の確立」「動物看護師の地位向上」「動物医療の進展」をもたらすと思われます。本学会誌では、「ヒューマン・アニマル・ボンド（Human Animal Bond：HAB／人と動物の絆）」研究領域の投稿も受け付けています。

受理：2008年8月1日

短報

歯科処置における準備と注意点

三浦紫陽子[1)]、藤田理恵子[1)]、大谷美紀[1)]、佐藤亜也子[1)]、山田幸子[1)]、森みゆき[1)]、渡辺真由美[1)]、平田佳代子[1)]、小林由布子[1)]、桐生優[1)]、赤間愛子[1)]、佐藤千春[1)]、吉田雅代[1)]、関依子[1)]、眞下奈緒[1)]、引橋絵里香[1)]、富田奈緒美[1)] 宮川則子[1)]、藤田桂一[2)]

Preparation and notes on dental treatment

Shiyoko Miura, Rieko Fujita, Miki Otani, Ayako Sato, Sachiko Yamada, Miyuki Mori, Mayumi Watanabe, Kayoko Hirata, Yuko Kobayashi, Yu Kiryuu, Aiko Akama, Chiharu Sato, Masayo Yoshida, Yoriko Seki, Nao Mashimo, Erika Hikihashi, Naomi Tomita, Noriko Miyakawa, Keiichi Fujita

1) フジタ動物病院　動物看護師 ※下線は「本学会認定動物看護師」　2)フジタ動物病院　獣医師・院長

〒362-0074 埼玉県上尾市春日1丁目2番53号

はじめに

近年、歯科処置を希望される飼い主が増加してきている。動物の場合は人と異なり診察段階で口腔内を正確にみることは難しい。そのため、歯科処置を行う場合、動物に麻酔をかけた後でなければ適切な処置の内容が決められない場合が少なくない。

歯科処置においては、術者の指示に従い速やかに必要な器具を揃えることと処置を速やかに進めるために、獣医歯科学の知識や理解が看護師にも必要となってきている。

そこで、当院での歯科処置における準備とそれに伴う注意点について報告する。

1. 歯科室の準備

①処置台

洗浄水を多く使うため、処置台として大きなシンクを使用し、その上に柵状物と、体温の低下を防ぐ為の保温マットを設置する。さらに、マットの上に直接動物を乗せると身体が濡れることと低温やけどを引き起こすおそれがあるために、バスタオルを敷く。処置開始10～20分前には保温マットの電源を入れ、麻酔中の急激な体温低下にも対応できるようにしておく。また、水を多く使うので、こまめにタオル交換が出来るように予備のタオルを数枚用意する。

②麻酔の準備

・気管チューブ　・スタイレット　・開口器
・ポンプ(カフ用)　・輪ゴム　・キシロカインスプレー
・麻酔器　・人工呼吸器　・輸液ポンプ・心電計
・舌鉗子・アルコールスプレー　・呼吸マスク
・喉頭鏡　・SpO_2

当院では、口腔疾患以外の手術の際に、通常の気管内挿管は気管チューブを咬み切ってしまわないように、バイトブロックに気管チューブを通し紐で固定する。しかし、歯科処置の場合には、このように準備すると処置しにくくなるため、バイトブロックをはずして気管チューブを輪ゴムで動物に固定する。輪ゴムは患者の大きさにあわせ、きつくならないように注意する。

麻酔器は笑気ガスと酸素のチューブが接続されているか否かを確かめ、また電源の確認や麻酔薬(イソフルラン)量の補充を行う。人工呼吸器は電源の確認と接続後に気道内圧の確認を行い、処置中は適正圧力を維持する。

輸液ポンプはセットした日付を確認して必要であれば新しくセットする。輸液量も事前にわかる範囲で設定しておく。また、通常の手術の場合、経皮的酸素飽和度のモジュールは患者の舌に装着するが、歯科処置の場合、舌に装着すると処置しにくくなるため、後脚指間部に装着することが多い。ただし、指間部は外れやすいのでこまめに確認する。

アルコールスプレーは心電計の電極の部分にも使用するので、手の届く範囲に置く。

③X線撮影準備

・歯科用レントゲン装置　・歯科用レントゲンフィルム
・一液式現像器　・フィルム設置板
・フレキシブルフィルムホルダー　・鉛手袋

レントゲン装置は電源の確認と照射時間の確認を行っておく。

フィルムは普通・咬合・小児用の3タイプがあるが、撮影部位にあったタイプのものを用意しておく。現像液は一液式現像液を使用しているので、使用前には必ずワンプッシュして油等の混合がない様にしておく。

硬膜処理液は量が少なくなっていたり、ゴミなどが入っている場合は処置前に新しい液に交換しておく。

フィルム設置板やフレキシブルフィルムホルダー、鉛手袋は直接患者に触れるものなので常に清潔にしておくことが必要であり、患者が変わるたびに洗浄・消毒を行っておく。

④ユニット準備(電動器具)

・バキューム　・スリーウエイシリンジ
・高速タービン　・超音波スケーラー
・マイクロエンジン

ユニット本体は必要なノズル・排水タンク・給水タンクなどを取り付けておき、すぐに処置に入れるように電源はONの状態にしておく。

バキュームはユニット本体に吸い取った廃液を入れるタンクと連結しているので、タンク内の部位がはめてあるか否かを確認し、電源を入れた時に吸引の確認を自分の掌に当てて行う。

スリーウエイシリンジもバキューム同様に掌に当てて確認し、水、エアー、噴霧状物が排出できるか否か、高速タービン・マイクロエンジンはフットスイッチを入れたときに作動するか否かを確認する。

超音波スケーラーはスケーラーの部分をセットした後、フットスイッチとユニットの給水スイッチを入れて作動と排水を確認する。また、超音波スケーラーのみのユニットにも中性水をタンクに入れて、すぐに処置に入れるように電源をONにしておき、必ず作動・排水を確認する。

⑤シャーカステンの準備

当院の歯科室には壁掛けタイプの歯科用フィルム用のシャーカステンがあるが、この電源を入れて、内部の電球に異常がないかを確認する。異常があった場合には速やかに交換しておく。

⑥無影灯の準備

電源を入れて内部の電球にシャーカステン同様、処置準備の段階ですべての電球がつくか否かを確認し、電球が切れていれば事前に取り替えておく。

⑦術者・助手の準備

・術着　・帽子　・マスク　・グローブ　・眼鏡

術着・帽子・マスク・眼鏡は動物が変わる度に新しいものと交換することを原則とする。グローブは滅菌したグローブを術者のサイズを確認して用意しておく。

⑧その他

・エマージェンシーボックス　・デンタルチャート
・筆記用具　・カメラ

全身麻酔下での動物の状態が急変しても速やかに対処出来るように、必要な薬品類をまとめたボックスが常時歯科室に用意されているようにする。処置の準備の際には不足がないか確認・補充を必ず行う。

デンタルチャートに患者名・種類・処置日を記入しておく。このことにより、処置中に撮影したレントゲンの番号を記入したり、処置中のメモにも使用でき、処置後レントゲンの間違い防止や飼い主に伝えなければならない事等をカルテに記入する際に役に立つ。

2. 歯科処置の準備

歯科処置は大別すると三つの処置に分類される。それぞれの処置に必要な器具を示す。

①スケーリング・ルートプレーニング及びポリッシング

スケーリングとは歯肉縁上・縁下の歯垢・歯石除去を行うことである。ルートプレーニング及びポリッシングとは、スケーリングの後歯垢・歯石の再付着を遅らせる為に歯面を滑らかにする処置のことである。

使用器具等は以下のとおり。

・歯科用ミラー　・プローブ
・エキスプローラー　・ピンセット
・キュレット(数種類)
・ポリッシングブラシ、ラバーカップ
・研磨剤(荒研磨用・仕上げ用)　・ガーゼ
・歯科用抗生物質軟膏

②歯内療法

歯内療法とは生活歯を保存、あるいは失活歯に対しては、根管を充填材で封鎖することにより根尖周囲への感染を防ぐことを行うことである。

使用器具等は以下のとおり。

・スケーリング、ルートプレーニング、ポリッシング用器具
・ラウンドバー　・ラバーストッパー
・ファイル　・リーマー

・ペーパーポイント　・ガッタパーチャ
・スパチュラ　・紙練板　・マイクロブラシ
・プラガー　・スプレッダー　・ブローチ
・クレンザー
・水酸化カルシウム製剤(硬化型、粉末型、ノズルに入った型のもの)
・グラスアイオノマーセメント　・コンポジットレシン
・光重合器　・エッチング剤　・ボンディング剤
・生理食塩水　・次亜塩素酸ナトリウム水溶液
・その他

③歯周外科・口腔外科

抜歯、顎骨骨折、口鼻瘻管などの処置を行うこと。
使用器具は以下のとおり。

・スケーリング、ルートプレーニング及びポリッシング用器具　・エレベーター　・抜歯鉗子
・メス刃／メス柄　・糸付き縫合糸
・骨膜剥離子、粘膜剥離子　・把針器　・ピンセット

各処置に必要な器具は処置前にあらかじめ逆性石鹸液に浸しておく。ただ、器具はあまり長い時間溶液に浸しておくと損傷されるため、処置の 10～15 分位前から浸すようにしている。通常器具は紫外線消毒庫に保管している。

3. 歯科室の清掃

①歯科室内

歯科室は絶えず細菌で汚染されるため、室内は空気浄化装置を設置し、常に室内空気をクリーンな状態に保つようにしている。これを使用することで、動物のためだけでなく術者や助手にとってもよい環境を作ることが出来る。

また、動物の処置後、空気中の浮遊菌の除菌を行うために二酸化塩素(ゲル状)の噴霧を行っている。感染症動物で使用したタオルは、ペルオキソ一硫酸水素カリウム・塩化ナトリウム溶液に浸し 24 時間消毒後洗濯を行う。室内の床は掃除機をかけ、次亜塩溶液でモップがけをする。

②歯科室内機器の消毒

心電計・輸液ポンプ・レントゲン装置・処置台等、歯科室内の機器や使用した物はすべてアルコール消毒を行い所定の場所に設置する。歯科室内には多くの機器や使用器具があるため、常に整理整頓を心がけている。

感染症の動物の処置後の使用器具は畜舎・鶏舎用消毒薬を用いて消毒を行い、歯科室の入り口に日付・消毒開始時間・感染症名を書いた紙を貼っておく。

③歯科器具の消毒

器具に付いた血液や歯肉片をブラシで掃除した後、超音波洗浄器で洗浄する。自然乾燥後、紫外線消毒庫に保管する。感染症の動物で使用した器具は、専用のブラシで洗浄した後、オートクレーブやガス滅菌を行う。

④術衣・マスクの処理

原則として、術衣やマスク・帽子はディスポーサルのものを使用するので処置後は廃棄する。

4. 考察

動物における一般手術は全身麻酔下で行う。いかに麻酔時間を短くし、適切な処置を行うかが重要である。しかし、歯科処置の場合、事前に歯垢歯石除去のみの処置が予定されていた症例であっても抜歯や歯内治療が必要になることが少なくない。したがって、早急に、それぞれの処置に必要な器具機材を準備できなければならない。

当院では複数のスタッフが歯科処置前準備や歯科処置助手を行うので、必要最小限の器具とその名前などを書き込んだ写真を使用して準備チェックを行っている。薬品や備品等の管理は担当制を用いており、器具の不具合や不足品などがあった場合には早急に対処するようにしている。このことにより動物の負担を最小限にし、術者は処置に集中することが出来る。

おわりに

今回の報告を行うことで、多くの確認や見直すべき点のあることを改めて実感している。今後は再度チェックリストを見直して自らも学び、さらにスタッフ間での準備における不均衡をなくすように努めていきたいと考えている。

参考文献(引用を含む)

奥田綾子・網本昭輝・山縣純次・藤田桂一・横山滋・幅田功 著、日本小動物獣医師会 動物看護師委員会監修(2003)『動物看護学全書 13 動物看護のための小動物歯科学』ファームプレス

受理：2008年8月1日

短報

大学病院における動物看護師の役割

田村浩美（帯広畜産大学附属家畜病院　本学会認定動物看護師）

Roles of veterinary nurses at university animal hospital

Hiromi Tamura

〒080-8555 北海道帯広市稲田町西2線11番地

はじめに

動物看護師と言ってもその仕事内容は様々なものであり、その働く場所も幅広い。ここでは大学病院という枠に限り、通常思い浮かべるであろう開業医での動物看護師とどういった面で違いがあるのか、またどういったことに重きをおいて仕事を遂行していくべきなのか、獣医系大学附属病院で働く一動物看護師としてまとめることができたのでここに報告する。

筆者は一次診療として 4 年間、一般の動物病院（獣医師1名、動物看護師1名、動物看護師兼トリマー4名）にて経験を積み、その後、現在の大学病院に移って 3 年目である。それぞれ一次診療、二次診療を経験した立場として多角的に考察するとともに、開業医からの紹介症例を多く含む高度獣医療施設において、私たち動物看護師がどのような位置で何に重点を置いてその役割を果たすべきか、あわせて考察した。

1. 帯広畜産大学附属家畜病院の概要

本学の附属家畜病院では、臨床獣医学研究部門、大動物特殊疾病研究センターおよび畜産フィールド科学センター教員によって、一般外来患畜のほか、畜産フィールド科学センター患畜の診療をおこなっており、教育病院として診断・治療を通して獣医学ユニット所属学生、研究生などの臨床実習や学術研究が行われている。年間の取り扱い患者数を**表1**に示す。他大学と比較して、牛馬など大動物の占める割合が極めて高いのも大きな特色である。

さらに大動物の分野では、世界唯一の産業動物総合画像診断車を所有し、乳牛の消化管を主体とするX線透視検査や X 線撮影検査、超音波検査や心電心音図検査などを行うことが可能で、北海道各地の牛舎を巡回して乳牛の健康検査を実施している。車両の重量は約 18t、全長 12m で、牛を一頭ずつ後部から入れて検査を行う（**図1**）。

2. 帯広畜産大学附属家畜病院における小動物診療

本学の附属家畜病院での小動物診療は、外来の症例数のおよそ 8 割が犬である。残りの 2 割が猫、その他まれにウサギやチンチラなどのエキゾチック動物も来院することもある。疾患別では腫瘍性疾患、脊椎疾患、内分泌疾患が多くみられる。

また、本学のCT撮影装置は北海道十勝地域で唯一の装置であり、近医、さらには北見や日高など遠方からの依頼も多い。さらに超音波診断装置は他に類を見ない解像度に優れたものであり、他の検査だけでは診断がつきにくい疾患に関してもその力を発揮している。また腫瘍性疾患が多い為、必然的にホスピス医療も増え、そのケアも合わせて行っている。

小動物診療の分野では、診療治療学分野、予防獣医学分野の各教室単位でそれぞれの教員のもと、学部学生、大学院生が診療に参加している。動物看護師としてその日の外来の診療、入院患畜の看護、手術の補助などに加わる。特に外来の診療の際は、獣医師とオーナーとの間を取り持つ重要な役割を担い、数ある業務の中でも一番気が抜けない場面である。

区分	大中動物				小動物				計
	馬	牛	その他	小計	犬	猫	その他	小計	
患畜数	209	1551	65	1825	1945	461	12	2418	4243

表1　年間取扱患畜数（平成18年度）

a

b

図1　産業動物総合画像診断

3. 大学病院での動物看護師の役割

主な業務は診療の補助、獣医師のもとでの薬の調剤、各種検査業務、食事の指導、院内清掃、その他雑務全般である。ここで特記すべきことは、その他に学部学生の指導教育が含まれることである。学部学生は毎日の診療にオーナーの許可を得て、指導教官の下に参加し、実際の臨床現場を経験している。現場において動物の扱い方、飼い主の前での立ち居振る舞いなど、獣医学的なこと以外においても日々指導をしている。反対に獣医学という専門分野を学ぶ学生からは知識の面で教えられることも多く、お互い意思疎通を図るように努めている。

オーナー側からみると、大学附属病院ということで来院することの不安は、一般の病院以上にあるものだと考えている。例えば、治療方法、検査結果など大学教員である獣医師から説明を受ける際、その言葉がオーナーにとっては難しかったり、わかりにくかったりすることも時にはあるであろう。そんなときは説明を聞きながらオーナーの顔を見て、その方が本当に理解されているのかどうかを意識的に表情から読み取るようにしている。

診療室の中でそれらの説明は行われるが、私が補足説明や付け足しなどをする場合、必ず診療室の外へ出てロビーで腰を下ろし、同じ目線に立ち、お話をするように特に努めている。これはロビーへ出ることで獣医師にはなかなか聞きにくかったことなども動物看護師に対しては割合すんなりと出てくるという経験上からである。獣医師が気付かなかったり目の届かないところにこそ私たちは目を配るべきで、そういった面でも獣医師と飼い主を結ぶ架け橋となるべきなのではないかと考える。

また、二次診療施設ならではの高度医療機器を用いた検査の補助、更にはその管理も重要な業務の一つである。マニュアルにはないオーナーとの関係など、見えない部分での重要度・必要度がより求められる現場と言える。

もちろんそれだけではなく、実際に治療を受ける患者の QOL の向上も大きな役割である。そして二次診療施設として悪性腫瘍など予後が良くないことも告げないといけない。それら確定診断後のオーナーの気持ちのフォローなどは、なかでも特に見過ごせない場面である。

病院としては決して症例数が多いとは言えない。しかし反対に一頭一頭に対する診療時間が長く、その分、オーナーとのコミュニケーションも多く時間を取ることができる。そういった時間の中で少しでも動物の気持ちを落ち着かせ、オーナーの気持ちをいかに和ませられるか、そういった場面が少なくない今の現場でこそ、動物看護師の実力の発揮しどころではないかと考える。

4. 具体例－ある膵臓癌の猫の場合－

2007 年早春に経験した膵臓癌の猫の症例を、具体例で示す（**図2**）。

猫の経過を簡単に示す。2006 年 12 月慢性嘔吐のため近医より紹介を受ける。嘔吐は当院でも続き、食欲も停滞気味であった。超音波検査を行い、右前腹部に膵臓に連なると思われる低エコー性の塊状病変が確認された。同時に針吸引生検も行い、組織学的に悪性と思われる像が認められた。また膵臓は実質内に低エコー性の結節性病変が多数確認できた。入院治療を続けるも翌月には糖尿病を併発し、自力での採食は困難な為、中心静脈栄養に切り替えた。しかし治療の甲斐なく、3 月 5 日に死亡した。その後の剖検、病理検査の結果、膵臓癌と診断された。

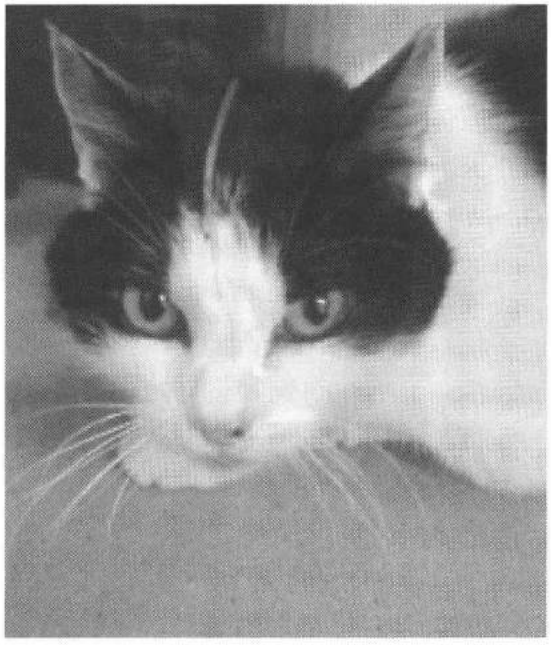


図2　膵臓癌の症例の猫
鼻から給仕用のカテーテルを入れている。

この猫のオーナーは初老の婦人で、性格は繊細でどちらかというと神経質な印象を受けた。こういった少し神経質な方への対応として、日常のしぐさやちょっとした変化など、入院中の状態は特に細かく伝えるように心がけていた。例えば、「今日は 2 口も自分からごはんを食べたんですよ」「今日はお水をたくさん飲みました」「今日は少し気分がよかったみたいでお腹をみせてくれましたよ」など気を付けていないとすぐに見落としてしまいそうなこと、昨日とは違うほんの少しのことでもメモに取り、面会に来られた際に 1 日の様子として伝えていた。このような少しの変化でも、オーナーにとっては知りたい情報であったと思う。また獣医師による治療経過や治療方法の説明のほかに、必ずロビーへ行き、少しでも理解不足かと感じたら、そのつど補足し噛み砕いて話をしていた。

実際にこういった重症例では、オーナーの気持ちが不安定で、私たち動物看護師はオーナーの考えも考慮しながら慎重に話をしなければならない。特に今回の症例は、このオーナーの母親が元々飼育していた猫で、更にこのオーナーは本来猫があまり好きではないという事情もあった。そのため話し合いながら治療を進めてはいたが、治療方針も一貫せず、本人だけではなかなか決断しにくい場面が多くあったようであった。玄関でお見送りする際、こちらに、今後のことをどうしたらよいのか意見を求めてくることもあった。そんなときは正直に私の意見を伝えていたが、決してそれは押し付けるようなものではなく、あくまで主導権はオーナー側にあるということを付け加えることが重要であった。

今回のこの症例は、ホスピス医療の中でも特に例外というべき症例であったかもしれない。結果的にこの猫は病院で死を迎えてしまったが、そのことを含めて今でもこのオーナーは治療方針など全てに納得していただいている。更には同居犬も当院に定期的に検診に来ている。今回はそんなオーナーの性格を考慮し、話し方を合わせ、かつ動物に関わるプロとして毅然とした態度で接するようにしていた。加えて年配の方であったので、言葉遣い、礼儀作法などいつも以上に気を付けていた。そういった細かい一つ一つの部分からも納得して預けて頂き、またそれが治療を受ける側としたら安心感を生むのではないかと考える。

5. まとめ－大学病院で働く動物看護師として－

一次診療施設においても日々のオーナーのフォローは大切な業務である。しかし大学病院と決定的に異なる点は、一次診療では患畜の多くが若齢でこれからの生活、ワクチンプログラム、しつけなどの前向きなアドバイスが多くを占めるということである。

大学病院においては多くが紹介症例で、しかも予後が良くない患畜が多く、嫌でも「死」を目の前にして話を進めていかないといけない。特にホスピス治療において、場合によっては患畜がまだ生きているうちから、オーナーの心のケアに力を注ぐ必要がある。そうすることで動物の亡くなった後に、治療に対しての満足感、理解度を得ることができ、更には少しでもペットロスを回避することができればと考える。そういったことも含め、大学病院ではオーナーの気持ちのフォローはもちろん、検査や診断結果の補足説明、どうしても待ち時間が長くなってしまう間の少しの気遣いなど細やかでかつ密接なコミュニケーションが求められる。

大学病院においてその役割で特筆すべきことは、その業務の中に学生の指導教育が含まれる点である。同じ部屋で診療態度を示すことで学生の意識を高め、命の現場であることを肌で感じてもらう。また診療以外でも普段からの生活態度、上級生になればこれから社会へ出る為の心構え、常識など日々口うるさく注意することも少なくない。特に6年生が就職活動で一般の開業医の先生のところへお邪魔する際は、失礼のないように指導している。

また重要業務として、更なる精査を行う場合に用いる高度獣医療機器の検査補助があるが、それを扱うには獣医

師はもとより動物看護師もより専門性が求められる。オーナーに対してきちんと説明ができるためにも、また自分自身がレベルアップしていくためにも更なる自己研鑽に日々努めていく必要がある。

おわりに

最後に以上を踏まえ、大学病院で働く動物看護師として、ホスピス医療の現場において、一人でも多くのオーナーが私の言葉で少しでも救われるように心のケアに一層努めていくこと、また日々の勉学に励むことはもちろん、積極的に学会やセミナーに参加し、自分の知識を広げると共に、他病院の動物看護師と積極的な意見交換の場を持つことを近い目標として掲げたい。

そして更なるステップアップを目指して日々仕事に打ち込み、自分にしかできない役割を早い段階で確立できればと考える。

受理：2008年9月10日

短報

教育現場としての動物病院のあり方を考える（その1）

ー「獣医学部志望の高校1年生の1日体験」を受け入れてー

瀬戸晴代[1)]、西谷孝子[2)]、西谷利文[3)]

Roles of a veterinary hospital as an educational site (Part One)

: On receiving "One-day experience of a high school freshman desiring to enter department of veterinary course"

Haruyo Seto, Takako Nishiya, Toshifumi Nishiya

1) 西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師　　2) 西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師・マネージャー

3) 西谷獣医科病院　獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上2016番1号

はじめに

動物病院の経営理念のひとつに社会的貢献がかかげられる。筆者らが働く動物病院では、4年前より地元の高等学校から「事業所1日体験学習」の要望があり、これを毎年1回受け入れている。

高校1年生の時に進路学習の一環として、学校を離れて実社会を体験することを通じて、自分の進路についての考えを深め、職業観の育成、進路、学習意識を高めることをねらいとして実施している。

受け入れ側の要望として、将来獣医師になりたいという夢をもった学生を1名限定としている。そして今後同じ職業の仲間になろうとしている人材への影響を考え、高校生の体験実習への指導目標や指導計画を立案し、実施している。

今回、当院においての1日体験実習をした学生1名の指導を振り返ることで、その学生にどのような刺激や影響を与え、進路を決定する上でのモチベーションとなったかを検討した。その結果、今後の教育現場としての動物病院のあり方や指導方法の示唆が得られたのでここに報告する。

1. 研究目的

獣医学部志望の高校1年生が、1日体験の病院実習を通して、実際に体験し感じたことを明らかにしてもらうことにより、今後の教育現場としての動物病院のあり方や指導方法の示唆を得る。

2. 研究方法

1)対象

当院にて「事業所1日体験学習」をした、私立中高一貫教育の進学校に通う獣医学部を目指す、高校1年生の男子1名(16歳)。

2)期間

平成16年11月10日の1日間。

3. 実習内容

1)実習の目標

①学生の実習目標

1. 動物病院の1日の流れを知ることができる。
2. 動物病院の役割を理解する。
3. 獣医師の職種内容を理解する。

②指導目標

1. 学生が実習目標を達成することができる。
2. 学生が実習に満足することができる。
3. 学生が緊張せず、感じよく実習することができる。

2)実習予定スケジュール

8:00

- 申し送り聴取・入院患畜の説明を受ける。指導スタッフ1名について実習する。
- 入院動物の看護援助を見学又は経験する。獣医師の回診を見学する。
- 本日の手術の準備を見学する。

9:00

- 外来診療における看護業務の見学又は経験をする。

・受付業務の見学又は経験をする。

12:00

・昼休憩。

13:00

・手術や手術看護業務を見学又は経験をする。

・看護業務(トリミングやフード管理、薬在庫管理、事務仕事など)を見学又は経験する。

15:30

・院長もしくはマネージャーが立ち会いのもと、本日の実習のまとめ、質疑応答、感想文。

16:00

・実習終了。

3)実習の進め方

①高校生実習(職種体験1日コース)のための、実習生用と指導者用の資料をそれぞれに用意する。

②実習生においては事前に面接を行い、資料に沿って説明を行う。スタッフには指導者用の資料を渡し、注意事項等を説明する。

③実習生には事前に、実習においての目的・目標を立てて作文を書いてきてもらう。当日それを踏まえて実際にスタッフ1名に付いて動物病院の1日の流れを中心に体験してもらい、そのあと感想文を書いてもらう。

④帰りにお土産として、いろいろなパンフレットや資料、動物を飼っていればそれに見合うサンプルフードなどを持ち帰ってもらう。

・実習生が多数であれば十分な指導や納得のいく実習ができないため、1日1名限定とする。

4. 結果

1)実習前の作文「実習に望むこと(目標・目的)」

執筆内容:基本的なところから獣医師という職業の裏側まで体験したい。具体的には、動物の毛の手入れや犬のしつけ教室、診察の見学、お客様との接し方、手術などを見学や体験をまじえて学びたい。そして、獣医師をしていてつらいことや苦労すること、楽しいことも知り、それらを受け入れた上で、獣医師という職業を熱を入れて目指したい。

2)実習中の様子

①実習生へのかかわり方(配慮した点)

本学会認定動物看護師1名がつき、実習生が緊張しないように、なるべくこちらから話し掛け、ひとつひとつの業務内容について分かり易いように説明した。

②実習生の様子

実習中は口数も少なく、質問などもほとんどなく、かなり緊張していた様子であった。診察見学中もなかなか手が出せず、端に立っていることが多かった。

しかし獣医師の説明や話を親身に聴き、手術も興味深く見学し、覚醒までの間は心配そうに患者の動物を見つめ、覚醒するとそっと体をなでて安堵の表情を浮かべるという場面もあった。

実習終了後にいろいろなパンフレットやおみやげを渡すと、うれしそうな表情をうかべ笑顔も見えた。

3)実習終了直後の実習生の感想文

執筆内容:今まで聞いて知ったことしかなかったのですが、今回、目の前で獣医師の職業を見て本当にためになりました。特に印象的だったのは手術見学です。目の前で見ると、好奇心もありましたがやはり少し不安な気持ちになりました。しかし見ているうちに不安はなくなり、手術が終わって、再びよろよろと動き出した犬を見たときは心から感動しました。いろいろな種類の犬や猫に出会え、病院の方たちはとても優しく色々と教えてもらい、説明してもらいました。本当にうれしかったです。この経験を生かし、これからはより多くの動物と触れ合い、勉強し、獣医師になりたいと思っています。今まで思っていたよりもはるかに難しくてしんどい職業であると感じましたが、それがこの職業のやりがいだということも感じました。機会があれば是非また来たい、しかし次にくる時は、獣医師としてまたこの病院に帰ってきたいと思いました。

4)学校で書いた実習生の感想文「体験学習を終えて」

執筆内容:今回の事業所体験を終えて、よりいっそう獣医師という職業が分かったような気がします。今までは獣医師という職業の外面の一部しか知らなかったのですが、今回の体験で中身までかなり見ることができたと思います。一番印象に残ったのが手術見学です。生で2時間も見ることができて、本当に感動の一言でした。その他にも往診に行ったり、診察を見たり、間近でいろいろな種類の犬に出会えたことも感動しました。病院の先生方はとても明るく優しく私に教えてくださいました。最後にはおみやげまでもいただきうれしくて、こんな楽しい体験をするということは予想をはるかに越えていました。もし私が獣医師になれたときには、今回の事業体験の感激が大きな力になっていると思います。この体験を通じて学生生活で

は味わえない真剣な大人の社会を実感し、自分も少しだけ大人になったような気がします。今度は獣医師の資格をとって研修医として行かせていただきたいと思っています。

5. 考察

1)「指導目標 1」について

職種体験の受け入れをした獣医学部志望の高校1年生の男子学生には、面接時に「実習に望むこと（実習でどのようなことを学びたいか、目標・目的）」という内容で作文を書いてきてもらった。それを踏まえて当日 1 日の体験実習を受けてもらい、終了後に感想文を書いてもらった。

実習にあたっては、職種体験ということで動物病院という現場やその役割を十分に理解してもらえるよう、動物看護師 1 名がつき、1 日指導を行った。

この実習生は、実習前の作文で学びたいこととして、「基本的なところから獣医師という職業の裏側まで体験したい」と書いていた。具体的には、動物の毛の手入れや犬のしつけ教室、診察の見学、お客様との接し方、手術の見学などが挙げられていた。そして、獣医師をしていてつらいことや苦労すること、楽しいことも知り、それらを知った上で、より獣医師という職業を目指したいという内容の目的・目標であった。

それらを考慮した上で、予定スケジュールに沿って 1 日指導にあたった。朝から犬舎のそうじや、入院動物の看護、そして診察中も見学だけではなく、できそうなことは実際に体験してもらい、獣医師やスタッフの接客の仕方や、手術も間近で見学をしてもらい、獣医師と共に往診にも同行してもらった。

その結果、普通では見ることのできない動物病院の裏側まで見て体験でき、1 日の仕事の流れや職種内容も理解できたと考える。実習後の感想文には、「今まで聞いて知ったことしかなかったのですが、今回、目の前で獣医師という職業を見て本当にためになりました」と書いている。学生の実習目標を達成できるようにするという「指導目標 1」は成し遂げられたと考える。

2)「指導目標 2」について

次に、「指導目標 2」では、十分な説明や対応ができるように、本学会認定動物看護師 1 名が個別で担当し、職種内容等について分かりやすく言葉を選びながら説明し、場合によっては獣医師が直接説明にあたり、職業としての大変さや楽しさ、やりがい等いろいろな話も直接してもらった。それにより獣医師という職業がより具体的に理解できたと考える。実習生は、「この経験を生かし、これからはより多くの動物と触れ合い、勉強し、獣医師になりたいと思っています。今まで思っていたよりもはるかに難しくてしんどい職業であると感じましたが、それがこの職業のやりがいだということも感じました」と書いている。

また、一番印象に残ったこととして手術見学が挙げられており、学校で書いた感想文には、「生で 2 時間も見ることができて、本当に感動の一言でした」と書いている。このことから、動物病院の役割を理解するという学生の実習目標も達成でき、実習内容にも満足できていたと考える。

松原[1] は青年期の心理的特長として、「精神的には自我にめざめ、人生の意義や目標を考えたり、社会のできごとにも関心が強くなったりしてくる」と述べている。

また馬場ら[2] は、「論理性の展開、抽象性への欲求、批判的傾向の強化というような知的傾向は、より高い世界へのあこがれをうみだしてくる。そして、身辺の日常的生活のいろいろな問題にぶつかり、経験を重ねていくうちに、青年は心に理想をいだくようになる」と述べている。

今まで自分が聞いたり見たりした知識の中での獣医師という職業へのあこがれを、実際に動物病院で見たり体験したり、獣医師よりいろいろな生きた話を直接聴くことで、より将来の目標をはっきり持つという動機付けになったと考えられる。

3)「指導目標 3」について

そして、実習生が緊張しないように感じのよい実習をするという「指導目標 3」では、初めての動物病院の診療現場であり、獣医師1名以外はすべて女性スタッフであるため、緊張で聞きたいことも聞けない可能性があると考えた。

そこでスタッフ全員がやさしく笑顔で接し、質問等がしやすい環境作りに努めた。また、実習終了後には病院のカレンダーやいろいろな資料、サンプルフード等のおみやげを持って帰ってもらうなど、心への配慮も行った。

その結果、午前中は口数も少なく、質問などもほとんどなく、かなり緊張していた様子であったが、午後からは少し表情も出てきて、自分から話をすることはなかったものの獣医師の話やスタッフの説明を親身に聴き、実習の終わりには笑顔も見られた。

実習生はその後、学校での感想文で、「病院の先生方はとても明るく優しく私に教えてくださいました。最後にはおみやげまでもいただきうれしくて、こんな楽しい体験を

するということは予想をはるかに越えていました」と書いている。緊張している実習生の精神面を考え、獣医師を含めたスタッフ全員がやさしく接することにより徐々に緊張もほぐれ、心に残る充実した実習が体験できたと考える。

これらのことから、職種体験 1 日コースの実習受け入れにあたっての指導計画や実習生へのかかわり方への配慮はよかったと考えられる。

松木[3]は、「青年期にある学生の発達段階を理解した上で、こまやかな配慮や優しい思いやりをもって学生の指導に当たらなければならない」と述べている。

16 歳という多感な時期に、興味のあることを実際に体験してみるということは、その本人の将来にも大きな影響を与えることになる。そこで、納得のいく実習を受けてもらうためには、実習前に目標を立ててきてもらい 1 日行動し、実習後には感想を書き 1 日を振り返ってもらうことの必要性と、受け入れ側はその体験を大切にするためにも、その対象の発達段階をも考慮した個別の指導やかかわり方が必要であり、そして動物病院は職種体験の場であると同時に、教育の現場でもあるのだということが明らかになった。感想文の最後は、「機会があれば是非また来たい、しかし次にくる時は、獣医師としてまたこの病院に帰ってきたい」という興味深い内容であった。

おわりに

当院にて 1 日職種体験学習を受けた過去 3 名の、その後の進路を高校側に問い合わせたところ、最初に受け入れをした 1 名以外の 2 名の学生においては、獣医学部を目指しているということであった。青年期という将来への不安や夢を抱えた時期に職種体験をすることが、将来の進路に大きな影響を与えるのだということが、あらためてよくわかった。

今後の課題としては、実習生が緊張して質問等ができないようであれば、こちらから積極的に聞きたいことがないか尋ねるようにしたり、スタッフ全員が指導者としてかかわれるように、指導計画をより具体的な内容にしたり、また実習内容や指導方法においても検討していきたいと思う。

引用・参考文献

1) 松原達哉(2003)「第1部　青年期の問題に対処するためのカウンセリング法の検討」『生活分析的カウンセリングの理論と技法』p2, 培風館

2) 馬場一雄ら編集(1986)「第 3 章　小児の成長発達」『小児看護学』p66～67, 医学書院

3) 松木光子監修(2003)『看護学臨地実習ハンドブック』p14, 全芳堂

受理：2008年9月10日

短報

教育現場としての動物病院のあり方を考える（その2）

ー「動物看護学生の臨床実習」を受け入れてー

西谷孝子[1)]、西谷利文[2)]

Roles of a veterinary hospital as an educational site (Part Two)

:On receiving "Clinical training for a student under animal nursing course"

Takako Nishiya, Toshifumi Nishiya

1）西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師・マネージャー　2）西谷獣医科病院　獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上2016番1号

はじめに

看護基礎教育において臨床実習は、看護実践能力を育成する重要な学習である。臨床実習の目的は、学生が学内で習得した"看護に必要な知識・技術・態度"を実際の場面に応用し、看護活動を展開する能力を養うことにある。

すなわち動物看護において臨床実習とは、実際の現場での患者動物や飼い主に対する具体的なケアやアプローチを通して看護の本質にせまり、自己の看護観を養う大切な機会である。それゆえ学生を受け入れる動物病院は、教育の現場として大変重要な役割を担っている。しかしながら、動物病院での実習指導における先行文献がないのが現状である。

筆者らが働く動物病院では、動物看護師及び動物看護学生の臨床実習として、対象の目的別に、職種体験・動物看護技術習得・動物看護過程・動物看護研究・動物看護管理の5つのコースの実習の受け入れをしている。

今回、動物看護技術習得の実習を受けた学生の記録物をふりかえり、臨床実習指導のあり方を分析した。その結果、今後の教育現場としての動物病院のあり方について、指導上の示唆を得られたので報告する。

1. 研究目的

動物看護技術習得の実習を受けた学生の記録物を分析し、今後の教育現場としての動物病院のあり方について、指導上の示唆を得る。

2. 当院における動物看護技術習得コースの実習の進め方

対象

動物看護師及び動物看護を学習している者

期間

3日間（事前に面接あり）

実習内容

①いくつかの動物看護技術を習得する。

②受け持ち患者動物を通して、看護を実践する。

進め方

①当院の1日の業務の流れを中心に、指導スタッフ（日本動物看護学会認定動物看護師）1名について実習する。

②1頭の入院患者動物を受け持ち、看護技術を見学又は経験する。

③記録物は必ずかかわったスタッフ全員が目を通し、コメントを入れる。

実習時間

①8～15時：臨床実習（休憩1時間）

②15～17時：記録物の整理と実習のフィードバック指導の時間

記録物

①本日の目標とふりかえり（本日の目標を評価し、実習の振り返りを記録する用紙）

②看護技術の経験記録（見学又は体験した看護技術を

1 項目選び、目的・手順・根拠そして看護技術の振り返りを記録する用紙)

③院内セミナーがあれば、レポート(セミナーの内容と今後に生かす自分の課題をレポートにする)

④実習終了後のアンケート(研修の内容、期間、費用、指導スタッフの指導内容、指導スタッフの態度、言葉づかい、その他意見などについて)

3. 臨床実習指導目標

次の 1～3 の達成とする。

1. 実習生が、実習中に体験できる看護技術を学ぶ。
2. 実習生が、受け持ちの看護記録を SOAP(※)で記入することができる。
3. 実習生が、自己の看護をふりかえることができ、今後の課題を見つける。

4. 方法

対象

・O 専門学校 ペットビジネス科 動物看護士コース(2 年課程)の 2 年生 1 名(19 歳 女性)

・平成 16 年 8 月 21 日に、当院の職種体験 1 日コースを体験している。

・他院にて 2 週間ほどの実習経験あり。

・地元での就職を希望している。当院のホームページを見て、向上心を持ちスキルアップを目指したく思い、実習を希望した。現在、愛玩飼養管理士 2 級の資格取得に向けて勉強している。

分析方法

3 日間の動物看護技術習得コース(平成 16 年 8 月 23、24、26 日)を実習した学生の記録物を、臨床実習指導目標に沿って分析する。

5. 結果及び考察

今回の実習は、当院の職種体験 1 日コースを体験済である看護学生であったため、当院の 1 日の流れをすでに把握した上で臨んだケースである。

3 日間という限られた実習期間の中、実習生が有意義な実習ができるように、事前に面接をして今回の実習の目的を明らかにし、あらかじめ目標を持って実習に望んでもらうようにした。実習時間の配分や記録物の説明、実習の内容についても事前に説明した。

実習場所となる病院側の準備としては、スタッフ全員が、実習生の目的や病院内での動きを把握するように促した。

また実習生は、日本動物看護学会認定動物看護師と一緒に行動してもらうようにし、看護援助の前後には必ず報告してもらうようにした。そして毎日の実習時間の最後の 2 時間は、スタッフルームにて、記録物の整理をするため指導者と一緒に実習を振り返る時間とした。

このように、臨床実習指導の目標を持って計画的にかかわるようにした。今回の実習生の記録物を振り返りながら、臨床実習指導の評価をして、今後に向けて検討していきたい。

「臨床実習指導の目標 1」について

この目標は、「実習生が、実習中に体験できる看護技術を学ぶ」としていた。毎日のフィードバックの時間に、看護技術の経験記録として、当日実践もしくは援助した看護技術を 1 項目あげてもらい、目的、手順、その根拠を書き出して記録する作業を指導者と一緒に行い、振り返りの感想を書いてもらった。

〈実習 1 日目〉

「7 歳の腎不全の猫の皮下補液」をあげていた。必要物品のところで、皮下補液用の針を「翼状針」と書き、加圧するバッグを「点滴ポンプ」と表現していたので、すぐに修正した。また、輸液をどうやって保温するのかなど、根拠の部分は、口頭で質問し、想起させながら、記録を書いてもらった。

「当日の看護技術のふりかえり」の欄では、「見ているようで見てない部分があった。聞きもしないで、自分で勝手にこれはこれだろうなとしてしまい、間違ったことを頭にいれていた。何をしているか、もう一度ふりかえることで正しい知識が頭に入るし、次の皮下補液があった場合用意もできるし、先の行動をよむことでスムーズに出来ると思います。もう一度見直したい」と書いていた。

「その日の振り返り」の欄でも、「皮下補液は自分の勘違いもあり、勉強不足でした。わからないことは積極的に質問しようと思います」とあった。かなり間違えて書いたことを反省し、自分の実習態度にまで及んで振り返っている。

〈実習 3 日目〉

「犬の避妊手術の看護(6 ヶ月 キャバリア)」について、記録用紙 2 枚にわたり、手順を細かくふりかえることができている。指導者側は、手術の前投薬の種類や作用を一緒

に調べ、宿題としていくつかの課題も提供した。

「その日の看護技術のふりかえり」の欄では、「避妊手術の流れを多少把握できた。よくある手術だと思うので、何度も見直そうと思います。麻酔は常に命の危険が伴っているので、患者である動物の様子やモニターで早く異常に気づけるようになりたいし、処置もできるようになりたい。また麻酔は覚せい時が一番危険なので、術後の看護も常に気を配り、飼い主さんのもとに帰るまで気を抜かないようにしたい。薬に関する知識も足りないので、よく使用するものは最低でも覚えよう。どうしてこの薬を使用するのか、作用、拮抗作用、効果などについても知ろう」と書いている。

1 日目の実習で、看護技術の手順を一つ一つ根拠と合わせてふりかえることによって、自分の観察力に気づき、また積極的に実習しようという意欲にもつながっている。3 日目では細かく手順をふりかえることもでき、また、自分にとってどのような知識が必要かもふりかえることができている。このことは、臨床実習の後に、必ず当日の実習の内容を指導者とフィードバックする時間を設け、実習目的にあった記録用紙によってふりかえることができていたことによるものと考える。ゆえに「臨床実習指導の目標 1」は達成したと考える。

また実習終了後のアンケートでは、「その他の意見感想」の欄に、「最後の1日の振り返りがとても勉強になりました」とあり、研修生にとっても有効な時間であったと考えられる。

キャスリーンら[1] は、「とくに、学生の行動レベルやニーズに合わせて行う指導、学生が臨床での振る舞いについて考えるような関わり、実践の場で看護職を観察する機会を提供すること、学生に対して適切な質問をすること、フィードバックをおこなうことなどは、学生の行動に強い影響を与えていた」と述べている。このように実習場所で、即座に自分の実習内容を振り返るかかわりが出来る時間を設けることは、効果的であることが明らかになった。

「臨床実習指導の目標 2」について

この目標は、「実習生が、受け持ちの看護記録を SOAP で記入できるようにすること」としていた。

実習期間中、受け持ち患者動物の入院看護記録をつけてもらった。学生は、観察した内容を一度自分のメモ帳に記入し、これを担当の動物看護師に報告して、指導を受けた後に記載した。「本日の振り返り」の欄には、「今日は初めて入院患者の受け持ちをさせていただきました。申し送り後、早速バイタルサインや様子などを観察しました。－中略－様子などのチェックは、看護記録を参考に細かいところまで観察するようにしました。しかし少し抜けている個所もあるので、そこは観察力が足りないのだと思いました。患者のためを思えば自然に細部まで目がいくと思います。このことを心掛けたい」と書いていた。

自分で患者動物に対する観察事項を考えて看護した内容を、現場の動物看護師からその場で指導を受けて修正し、自分の不十分なところに気づけている。下書きし、指導を受けて修正後に、看護記録にきちんと書くことができた。

今回の実習は、動物看護技術の習得という内容であったので、患者動物の全体像を把握し観察項目を明らかにすることまでは困難であると考えられる。その場で指導を受けて修正し記録できれば、目標は達成されていると考えられる。また、現場の看護記録が、学生にとってはよい観察のガイドラインとなっているようである。

キャスリーンら[2]は、観察は看護を実践するのに重要な技術とし、観察の指導として、「手本となる人を観察することはよい学習の機会である。他の人の技術を観察することで、学習者はその技術をどのように行えばよいのかイメージを作っていく。それが学習を導くことになる。それは、学生が看護実践活動を行う前に臨床の場でどのように観察すればよいのかを考える助けとなるからである」と述べている。

「臨床実習指導の目標 3」について

この目標は、「実習生が、自己の看護をふりかえることが出来、今後の課題を見つけることができる」としていた。

実習最終日の「本日の振り返り」の欄では、「自分は動物看護師としてまだまだ未熟ですが、患者を第一とする信念をもって、これからの将来に経験をいかしていきたい」と締めくくっていた。

また実習後のアンケートでは、実習内容について「満足」とあり、「動物看護師として、学校では学べなかった大切なことが分かりました」とあった。指導スタッフの指導内容についても「満足」とあり、「一つのことに対してすごく熱心で、丁寧に、深く教えていただきました」とあった。

また、今回の実習期間中にあった、院内の接遇セミナーに参加した後のレポートにも、「言葉づかいでも、相手に言われたことの裏にどんな意味も含まれているのか察して、立場をわきまえ、その場にあった言葉で話せるよう

になりたい。また、目配りで状況を判断し、相手を不安にさせないよう心掛けたい。選ばれる人を目指したい」と書いていた。このように多くの記録物の中に、将来自分の目標とする看護観を表現することができていた。目標は達成したと考えられる。

これらのことを考えると、以下の 4 点が効果的であることが明らかになった。

1. 学生の実習を受け入れる場合は、学生の実習の目的の内容を把握し、臨床の指導者を明らかにし、計画的に指導にかかわること。
2. 臨床実習において、学生自身が、どのような内容の実習を受けることを目的としているかを明らかにした上で、毎日の実習に臨むこと。
3. 臨床の現場が、自分たちの看護をきちんと記録に残していること。
4. 学習室において、指導者と本日の実習を振り返り、実習の内容を確認する時間を持つことは、効果的であること。

キャスリーンら[3]は、「臨床場面における指導者の適切な役割は、学生の能力を生かした十分な指導である。指導者は学生を学習に導き、支援し、刺激し、促進していく。イファンテによると、指導者は適切な学習活動をデザインし、その学習が体験できるように学生を導くことによって学習を促進しているのである」と述べている。

キャスリーンら[4]は臨床体験についても、「たとえば、指導者がある学生のグループの学生たちに外科手術の手順を観察する機会をあたえたとしよう。学生たちは手術室に入り、全員同時に同じ手術の場面を観察する。しかし、一人一人の学生は、それぞれ少しずつ違った体験をするはずである。指導者がレポートを書かせたり臨床のカンファレンスに参加するように求めたりする理由の一つは、学習活動の中から学生たちが何を学び取ったのかを把握することである」と述べている。

最後に、学生は今回の実習を終えた際の感想で、「今まで学校で習っていたことは獣医学であった。しかし実習では、習ったことにはほとんど意味がなく、動物看護師として本当に必要なのは看護学なのだと痛感しました。一番大事なことを忘れていたと思います」とあった。

臨床実習とは現在、動物病院と学生個人との間で成り立っている。しかし、できれば今後は、動物看護学生の臨床実習が看護教育カリキュラムの中に取り入れられることを願うものである。学校教育と臨床現場が連携して、理論と実践の両面から、学生がその学習段階に応じて、効果的に学べる環境が提供できればと考える。

おわりに

臨床の現場に研修生が来ることは、受け入れる側も大変新鮮な気持ちになる。普段、何気なく行っていることも、その根拠から説明しようとすると、自分自身が一つ一つの看護をよりよく理解していなければ、説明できない。「教えた相手ができるようになった時に、初めて、教えた側が技術を習得した」とよく言われるが、そのとおりだと思う。

今後も、スタッフ全員がよりよい教育現場の指導者となれるように意識し、日々の看護に取り組んでいきたい。

※SOAP：人医療の看護における主流な看護記録様式の一つ。SOAPのSは主観的データ(subjective data)、Oは客観的データ(objective data)、Aは情報収集とその分析(assessment)、Pは計画(plan)を意味する。これを用いて、患者のもつ問題を把握し、それを解決するために、どういった看護実践を行ったか、また、看護上の問題がどのように変化していったか、それらがどのような経過で解決されていったかなど、毎日の看護活動を記録する。

引用文献

1)キャスリーン・B・ゲイバーソン、マリリン H.オールマン(2002)『臨地実習のストラテジー』p54-55, 医学書院

2)上掲書p123

3)上掲書p3

4)上掲書p4

受理：2008年9月10日

短報

周術期管理における看護計画の意義に関する検討

ー高齢犬の断脚術を通してー

西谷孝子[1)]、瀬戸晴代[2)]、西谷利文[3)]

On meaning of nursing care plan under perioperative management

: Through leg amputation of an aged dog

Takako Nishiya, Haruyo Seto, Toshifumi Nishiya

1) 西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師・マネージャー　2) 西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師

3) 西谷獣医科病院　獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上2016番1号

はじめに

手術室での動物看護師の役割のひとつに、安全に手術を終えるように動物を管理することがあげられる。そのためには無菌的操作の徹底とともに、手術侵襲に対する生体の反応を十分に理解しておくことが重要となる。さらに、観察、判断、実行という一連の過程を、短時間に確実に、そしてスムーズに進めることで、安全な麻酔管理や円滑な手術の補助に努めることも重要である。

すでに当院では、入院動物の看護に対しては、記録用紙を用いて動物看護過程を文章で開示しながら実践している。このような作業は、リスクの高い周術期の管理では特に重要になると思われる。ウィーデンバック[1)]は、「看護婦が看護しているときに何を感じ、何を考えているかということは重要である。ー中略ー看護婦の考えたり、感じたりすることは、ほとんど目に見えてこないものであるにもかかわらず、看護実践の中で最も重要な意味をもつ部分である」と述べている。看護師が感じることや考えていることが看護の実践において重要ならば、あらゆる場面でそれを文章化することも必要と思われる。

今回、老齢のジャイアント・シュナウザーの断脚手術において、術前の受け入れから術後の報告までの看護計画を立案して、実践した結果、今後の周術期の看護における示唆を得たので報告する。

1. 研究目的

術前に、手術の受け入れから術後の報告までの看護計画を立案して、実践し、その意義を検討する。

2. 研究方法

1)症例研究

症例の概要

動物

犬(ジャイアント・シュナウザー) メス 12歳

性格

おとなしく従順、温厚・過去にショードッグとして活躍

既往歴

平成14年9月19日：子宮蓄膿症で卵巣子宮摘出術を実施。同手術時にみつかった乳腺の腫瘤2つ摘出(病理組織診断：血管肉腫)

平成18年12月27日：左後肢第4指の腫れが悪化

平成19年1月26日：左後肢第4指切除

現病歴

平成19年5月29日：右後肢第4指の腫れを一部切除し病理検査を実施

診断名

右後肢端に発生した扁平上皮癌

治療方針

右後肢の断脚

治療内容

除痛と根治(遠隔転移がない場合)を目的とした拡大腫

瘍切除(右後肢断脚術)

薬物

点滴:乳酸リンゲル液 + アンピシリンナトリウム、
塩酸モルヒネ

内服:テトラサイクリン系抗生剤

3. 看護上の問題点と看護計画

事前の情報をもとに評価し、手術中の看護上の問題点を考慮して、看護計画を手術前日に立案した。

1)看護上の問題点

①老齢犬の後肢断脚手術であるため、麻酔や手術による侵襲を受けやすい。

②麻酔や出血のよって循環動態が変わる恐れがある。

③飼い主の手術へ対する不安も大きい。

2)看護目標

①急変することなく手術が無事に終了する。

②手術中、安定した循環動態が保たれる。

③手術の前に飼い主が手術に対する不安を表現できる。

3)具体策

①手術、入院の受け入れを個室で 15 分ー30 分かけて行い、手術における気持ちを聞く。

②手術、入院の受け入れ時、必ず術前の血液検査、肺転移と心肺機能を評価するための胸部のレントゲン検査、鎮痛剤として麻薬(塩酸モルヒネ)の使用について飼い主に承諾を得る。

③手術前に急変に備えてエマージェンシーボックスの点検をしておく。

④直接介助と間接介助のスタッフを1名ずつとする。

⑤各モニター(ECG、血圧、脈拍数、体温、SpO2、麻酔ガス濃度、終末呼気炭酸ガス濃度)の観察

⑥輸液、麻酔の管理

⑦出血量のチェック

⑧検査データの把握

⑨麻酔前後に酸素吸入を行う。

⑩確実に覚醒した後、ケージに移動する。

⑪覚醒後手術の様子を速やかに飼主に報告する。

⑫できるだけ当日に獣医師から詳しい説明を受けてもらう。

4. 本症例における看護の実際

1)手術日までの経過

本症例の来院目的は、右後肢の指が腫れて時々肢を引きずるしぐさが見られるということであった。

レントゲン撮影により骨の破壊像が確認されたため、腫脹した指の一部を採取して病理組織検査に供したところ、結果扁平上皮癌と診断され、すでに患部の痛みは強く、除痛と根治を目的とした断脚手術を飼い主に勧めたところ、飼い主は「断脚した方がその子のためなら、お願いします」と手術をすることを決断された。

飼い主は壮年期のご夫婦で、診察も娘さんを含めてご家族全員で来院されていることも多く、経過治療中の投薬指示などもきちんと守ることが出来、理解力のある協力的な飼い主であると思われた。その後、手術の日程を決定し、手術当日に前日から絶食絶水で、来院していただいた。

2)手術当日:入院の受け入れ

手術当日、ご夫婦一緒に来院され、手術の受け入れを個室で約 30 分時間をかけておこなった。

まず、当日の調子を伺ったところ、飼い主から「元気は変わりないが、昨日は足の臭いがひどかった」ということだった。看護師より前日からの絶食は出来ている事の確認をとった。その後バイタルサインを測定し、術前の血液検査、胸部のレントゲン検査、麻薬(塩酸モルヒネ)を使用してもよいかなどを飼い主に確認をとり承諾してもらった。また、爪が長かったため、こちらから爪きりを促したところ、「短めにお願いします」ということであった。

その後は受け入れ用紙に沿って話を聞き入院となった。今回の手術や入院で心配な事はないか、気になる事はないかなども伺ったところ、飼い主からは「早く楽にしてあげたい」「日々、ひどくなるのを見ているのが辛い」などの気持ちをきくことができた。また、「(術前の検査で)肺転移があり、手術をしてもらえなかったらどうしよう」「転移があっても痛がっている足をとってほしい」と不安な気持ちも話されていた。

3)入院ケージの準備・術前検査・麻酔前の処置

まず大型犬だったため広めのケージを使用し、長布団タイプのクッションを敷き、脚にかかる負担を軽減した。

胸部のレントゲン検査は、大型犬だったため獣医師 1 名と看護師1名で保定し撮影したが、嫌がる様子は見られなかった。看護師よりレントゲン検査上、肺転移所見はなかったので手術をする旨を電話で伝えたところ、飼い主は

「それでは、よろしくお願いします」と答え安心した様子が伺えた。

血液検査の結果は、血漿コレステロール値が 265mg/dl とやや高めだったということ以外には、特に異常は認められなかった。その後、獣医師より麻薬を皮下注射で投薬、続いて点滴を実施した。

4)麻酔導入と術野の準備

術前の処置の終了直後より酸素化を始めた。その後、獣医師により麻酔導入され、すぐに気管内挿管を行い、イソフルレンと酸素の吸入で麻酔を維持した。その後、看護師が患者動物を左側臥位に固定し、各種モニターの装着、毛刈り、アルコールで清拭、ポビドンヨード液をスプレーし術野を消毒し、執刀開始の準備をした。

5)手術中の看護

今回の手術は、執刀獣医師1名、直接介助看護師 1 名で、麻酔記録や外回りを担当する間接介助の動物看護師 1 名で手術を開始した。今回の手術は、凝固切開装置等を用いたことにより、出血はほとんどみられなかった。術中の呼吸・循環動態は安定していた。創部へドレーンチューブを挿入して縫合し、手術は 1 時間 40 分で終了した。

6)手術直後(覚醒時)の看護

手術終了後、麻酔ガスの吸入を停止し、すぐに看護師により術野を清拭し、創部にゲンタマイシン軟膏をぬった。その後、モニターを装置したまま酸素吸入を続け、希望事項であった爪切りを行い、約 10 分後に抜管した。

抜管後もバイタルサインを確認しながら観察を続けた。頭を起こし、立ち上がろうとするようになり、覚醒が確認できたので、腰をバスタオルで支え、動物看護師 2 名でゆっくりとケージまで歩かせて移動させた。

その後、すぐに動物看護師より飼い主へ、手術が無事に終わったことと面会の時間を電話で伝えたところ、「わかりました。ありがとうございました」と安心した様子が伺えた。そして、手術の器具洗いと手術室の片付けを行った。

5. 考察

本症例の手術におけるプロセスの振り返りと、実施した看護計画の意義を評価する。

一般に老齢犬は、各臓器の異常や予備能力の減少等により、麻酔や手術の侵襲を受けやすいといわれている。今回の症例は、超大型犬で 12 歳という高齢であり、人間で例えると 84 歳といわれている。(三共ライフテックの資料より)。さらに、大型犬の後肢断脚という創部も大きく、時間がかかる手術であるため、麻酔や手術による侵襲を受けやすく、リスクの高い手術になると考えられた。

そこで看護上の問題点①として「高齢であるため、後肢断脚手術のため、予備能力の低下につながり、手術や麻酔による侵襲を受けやすい」、②として「麻酔の影響、後肢断脚手術による循環血液量の減少で血圧の変動を生じる恐れがある」をあげた。これらをふまえ、直接介助の看護師を配置し、スムーズに手術が行えるように配慮するとともに、看護師が、血圧、心拍数、脈泊数、SpO2 等を監視して、獣医師の指示のもと安全な麻酔管理に努めた。

執刀医が麻酔の責任を担う場合、執刀医との連携による看護師の麻酔管理補助はきわめて重要になると思われる。本症例は術中の呼吸・循環動態は安定しており、覚醒も速やかで、看護目標①②は達成することができた。今回の経験から、患者の特性をふまえて事前に看護計画を立て、想定される問題の回避に努めることは、着実に看護業務を遂行するうえで有効と思われた。

ハイリスク患者動物の手術では、飼い主の心のケアも重要な看護業務のひとつになると思われる。今回の手術は右後肢断脚という手術後の外見が、3 本足となり、飼い主が心の負担が大きい手術である。そこで看護上の問題点③として「高齢であり後肢断脚手術のため飼い主の手術へ対する不安がある」を、そして、看護目標③として「手術の前に飼い主が手術に対する不安を表現できる」をあげた。

一般にこの手術を受ける飼い主は、体の変化にともなう障害への恐れや死に対する恐れなどがあると思われるが、本症例の場合、「痛そうにしているのを見ているのがつらい。早く楽にしてほしい」などと、動物の苦痛を取り去ってほしいという希望が強く、前向きな姿勢を感じることができた。しかしながら、不安がないわけではないと察し、術前に約 30 分かけて手術と入院の受け入れを行い、親身になって飼い主の気持ちを聞くことに努めた。また、術後もできるだけ早く電話で経過を報告することに留意した。このような配慮も、飼い主の不安を解消するうえで有効であったと推察している。手術当日の術後も「興奮するから…」と患者との面会はひかえ、院長より手術の経過と結果のみ聞いて帰られた。患者に対する深い愛情を感じることができた。

今回、通常は頭で考えて行動していることを、あらためて手術における看護過程として、文章にして表現してみた。

看護目標は「急変することなく手術が無事終了する」となり、どの手術にもあてはまる一般的な目標となった。しかし、患者動物特有の情報を術前に収集し、解釈判断したうえで看護上の問題点をあげることで、その患者に対する看護の視点や方向性が明らかにできたと考えている。さらに、術中の看護計画を評価することで、その後の入院看護に必要な問題点が明らかにできると考えている。

6. まとめ

事前に手術をうける患者動物のリスクが把握できている場合、術前に術中の看護計画を立案することは有効であると考えられた。また、飼い主の心の負担を減らすうえでも、計画にもとづく細やかな配慮は重要と思われた。さらに、手術から入院へと移行する場合、術中の看護計画を再評価して、問題点をあげ、入院中の看護計画につなげることもできると考えている。

参考文献

1)アーネスティン・ウィーデンバック(1984)『臨床看護の本質－患者援助の技術－』p21～22, 現代社

受理：2008年9月10日

短報

腹腔内腫瘍をもつ犬の入院看護と看護サマリーの作成

西谷孝子[1)]、西谷利文[2)]

Nursing care in hospital of a dog with tumor in abdomen and making of nursing care summary

Takako Nishiya, Toshifumi Nishiya

1) 西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師・マネージャー　2) 西谷獣医科病院　獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上2016番1号

はじめに

看護情報として活用されるものの一つに看護記録がある。看護記録の役割には、看護上の判断資料としてケアに役立つ情報源となることが含まれる。そのために看護記録は、その動物を看護しなかった者が読んでも、状況やケアの内容、その結果などが理解できるように書かれていなければならない。看護記録の一つに、退院後、他の病院や地域で継続看護が必要な場合、入院中の看護の要約を表すものとして看護サマリーがある。

今回、他院から紹介された膣腫瘍のウェルシュ・コーギーが来院し、当院での入院後に腹腔内腫瘍がみつかり、開腹手術が行われた。手術後の継続治療は、紹介先の病院で受けることを飼い主は希望していた。そこで、看護計画を立案して看護を実践するとともに、退院時に看護サマリーを作成し、紹介先の病院に渡した。

この一連の動物看護過程と看護サマリーの作成を振り返った結果、今後の示唆を得たので報告する。

1. 研究目的

他院から紹介された腹腔内腫瘍の犬に対する動物看護過程と看護サマリーの作成を振り返り、今後の示唆を得る。

2. 研究方法

1)症例研究

症例の概要

動物

犬(ウェルシュ・コーギー) 雌 14歳4ヶ月

性格

よく吠え、元気あり

環境

他にコーギー2 頭を飼っており、死毛も多くついていることから、あまり手入れをされていない環境であると察する。

入院期間

平成18年6月14日ー6月17日

現病歴(来院後の経過)

平成18年6月14日：他院からの紹介で膣腫瘍切除のため入院

同年6月15日：腹腔内腫瘍による疼痛と食欲不振が発現

同年6月16日：試験開腹で切除できない腫瘍(肉腫)を確認

同年：退院後の通院は他院を希望する

診断名

膣ポリープと腹腔内腫瘍

治療方針

点滴治療、疼痛管理、試験開腹、手術後の管理

薬物

点滴：乳酸リンゲル液 ＋ ペニシリン系抗生剤

注射液：メロキシカム製剤

内服薬：エンロフロキシン

外用薬：創部へ硫酸ゲンタマイシン軟膏を塗布

3. 看護の実際(看護における問題点・目標・計画)

1)看護上の問題点

①高齢・起源不明な腹腔内腫瘍のため病状が急変する

可能性がある。
②腹腔内腫瘍による疼痛がある。
③飼い主の精神的不安が強くなる可能性がある。

2)看護目標

①急変せずに退院できる。
②疼痛による食欲不振がおこらない。
③飼い主が不安を表現できる。

3)観察項目

バイタルサインのチェック、意識レベルのチェック、点滴留置の確認、創部の腫れ・赤み、歯肉のチェック、食欲・元気の有無、疼痛の有無、排泄量の確認。

4)看護計画

・観察項目を観察ごとにチェックし、獣医師に報告する。
・創部の消毒をする。
・投薬と注射を確実に行う。
・退院の手紙を作成し、その時に飼い主の不安を聞く。
・看護サマリーを作成し、転院先に連絡する。
・転院先に様子を尋ねる。

4. 症例の経過と看護の実践

1)入院当日(来院)

他院からの紹介で「陰部から変なものが出ている」という主訴で来院される。膣腫瘍の疑いで入院となり、状態がよければ、次の日に手術することとなる。入院当日は、元気もあり、よく吠え、死毛が多くついていた。他に 2 頭コーギーを飼っている。体重 10.9 kg、体温 37.7℃、脈拍数 108/分、呼吸 54/分、ミクロフイラリア陰性、フィラリア抗原陰性。血液生化学検査にて、軽度の高コレステロール血症(285mg/dl)が認められた。また、胸部のレントゲン検査にて肺転移所見は認められなかった。

2)入院 2 日目

朝、膣ポリープが自然落下しており、横たわり、ぐったりとしていて元気がなかった。超音波検査にて、左側腹部背側に腫瘍と思われる所見が確認された。飼い主には、膣ポリープが自然脱落していた時点で連絡をし、来院してもらい、本日の手術の中止を説明した。状態がよくなれば、試験的開腹手術を必要とすることを獣医師が飼い主に説明した。鎮痛剤の皮下投与後、高栄養の缶詰をひとさじ食べはじめ、夕方には、自分で立ち上がることが可能となったため、翌日の手術を予定した。

3)入院 3 日目(開腹手術とスケーリング)

朝、入院ケージ内に排尿排便なし。ケージの中では我慢していると考え、外につれていくと排尿、排便があった。術前に、鎮痛剤を皮下注射し、手術に向かった。

手術の結果、卵巣腫瘍だと思われていたものは卵巣のう腫であった。子宮角にポリープがちぎれた出血跡があった。左側副腎領域に腫瘍が認められ、大網と癒着していた。癒着している腫瘍を部分切除し、病理検査に提出する(結果は約 10 日後に出る予定)。腫瘍は背側にあり、アプローチが難しく、リスクを考慮し、飼い主の希望もあり完全切除は断念した。また、歯肉の腫れは重度であり、手術後ブラッシングも行った。

4)入院 4 日目(退院)

創部の腫れや発赤はなく、創部を洗浄して、抗生剤軟膏を塗布するとともに、鎮痛剤の皮下投与、抗生剤の内服を開始した。高栄養の缶詰をすぐに完食し、嘔吐がないため、高齢犬用のドライフード 10 粒与えたところ、それもすぐに食べた。9 日後に再診を予定して、退院となる。退院時、手紙を作成し、自宅での過ごし方を説明した。

5)退院時の手紙

退院時の手紙の中で、退院後の過ごし方として、元気・食欲・創部の状態の確認、排便・排尿状態の確認をお願いした。また抜糸までは、他の犬と別に管理していただくようにお願いした。内服薬(抗生剤)を確実に飲ませて頂くこと、気になることはすぐにお電話を頂くこと、病理組織検査の結果が届いたら、こちらからご連絡することを伝えた。

6)退院後 3 日目

様子を伺う電話をしたところ、「普通にしています。食欲もかなりあり、階段をのぼったりしていて、痛いかどうかはよくわかりません」と言われる。その後、看護サマリーを作成する。

<u>看護サマリーの内容</u>

看護サマリーには、診断名、治療経過、看護経過として看護上の問題点・看護目標・入院中の経過、最後に残された問題を記載した。「残された問題」の欄には、「病気が完治しているわけでなく、今後状態が悪化する恐れは十分に考えられる。多頭飼育であること、死毛が多くつき、毛の手入れを怠っているところから考えると、飼い主自身が

早期発見が出来ない可能性が高いことが考えられる。継続し定期的に医療者側より様子を尋ねる方が効果的と考える。当院においては、獣医師が全面的に飼い主への説明と相談にのっていた。今後状態が悪くなり、動物の日常生活の援助が必要になったとき、看護師が相談相手となり、飼い主が不安を言葉として表出することが出来るように支援が必要である」と記した。

7)退院後9日

病理組織の結果が出たので、飼い主に電話をかけ、院長より悪性の肉腫の結果を報告してもらい、抗癌剤治療を含めた今後の治療管理について、検討してもらうことにした。飼い主より「元気です。近く受診します」と返事があった。

8)退院10日目

抜糸に来院され、飼い主より「このあとで、病院(紹介された他院)に行ってみます」と告げられた。看護サマリーを紹介先に電子メールで送るがうまくいかず、その2日後に手渡す結果となる。

9)転院先より情報

その後、この飼い主は、抗癌剤治療等による積極的な治療をしないことを選択し、何か悪い症状が出たときに安楽死を希望するという返事であった。受診もそれ以来ないとのことである。看護サマリーについては、「継続看護に利用する機会はなかったが、どのような看護をしていたか状況はよくわかった」との返事があった。

5. 考察

本症例では、飼い主は他院の紹介により当院に来院し、手術後は、当院で紹介した病院への通院を希望していた。当院を退院後、他院にて看護を継続する必要があると考えられたので、当院入院中に看護計画を立案して、看護を実践し、退院時に看護サマリーを作成することとした。

1)「看護目標1」について

看護上の問題点として第一に、高齢であること、起源不明な腹腔内腫瘍であるため症状が急変する恐れがあげられた。そこで「看護目標1」を「急変せずに退院できる」とし、いつでも様子が確認出来るように、入院ケージを診察室内とした。さらに血管を確保して点滴を行い、ケージ前を通るごとに、点滴維持が出来ているか、確認した。看護計画にしたがい、1日3回のバイタルサインや観察項目を確認して、看護記録に記載し、スタッフ全員が看護にかかわった。入院2日目の朝に膣ポリープが自然落下し、ぐったりとしたが、すぐに獣医師に報告し、必要な検査や鎮痛処置を速やかに行い、翌日手術を実施できた。術後、創部の腫れや発赤なく、食欲もあり、入院環境によるストレスも感じられなかった。状態が急変することなし予定通り退院できたので、第一の目標は達成することができた。

2)「看護目標2」について

入院2日目の朝、横たわりぐったりとし、食欲もなくなったが、鎮痛剤を投与すると、自力で立ち上がり食事もとることができたため、これらの症状は疼痛によるものと考えられた。そこで第2の看護上の問題点を腹腔内腫瘍による疼痛とし、「看護目標2」を「疼痛による食欲不振がない」とした。手術翌日にも、鎮痛剤を皮下投与し、食事もまず缶詰から与え、食欲を確認してからドライフードに変えるように工夫した。これらの看護を行う間、疼痛による食欲不振はみられなかったので、「看護目標2」も達成できた。

「看護目標1・2」を達成するための看護計画にもとづき、今後おこりうる問題に対してスタッフ全員が注意深く観察し、看護記録に残しながら看護を共有できたことは、本症例の看護において有用であったと考えられる。

杉野[1]は、「看護における観察は、そこにある事実(対象が表現している状態)をただありのままに見るだけではなく、そのなかから対象が援助してほしいと求めているニーズを知り、何を援助しなけばならないかという問題を認識することである。さらにその援助を行うために有効な情報を得ようという目的をもった観察なのである」と指摘している。

また松田[2]は、「個々の看護者が行った観察や行為あるいは体験を記録に表すことで、患者への認識が共通化され、継続的な看護援助を提供できる。また、個々の看護者が行い記録によって示された判断が適切であったかを検討し、一貫性のある客観的な判断から計画される看護援助が実施され、それによって提供される看護の質の保証につながる」と述べている。本症例の看護においても、看護の基本となる技術として、観察と記録報告の重要性を改めて認識することができた。

3)「看護目標3」について

第3の看護上の問題として、起源不明の腹腔内腫瘍(肉腫)であり、今後の治療方針も確立していない状況で

あったため、飼い主の精神的不安が強いことをあげた。そこで、「看護目標3」を「飼い主が不安を表現できる」とした。

この点については、退院時に院長が説明する際、飼い主の不安は十分表現できていたと思われたので、退院の時点では「看護目標 3」を達成できたと思われた。しかしながら、病理組織検査の結果、悪性度の高い腫瘍であることが判明し、引き続き飼い主に対する精神的な援助が必要と考えられた。そこで看護サマリーの中に、今後の状態悪化と飼い主の発見が遅れる可能性、定期的に様子を尋ねることの効果、そして飼い主が不安を表出できる支援の必要性を記載した。その後の追跡はできなかったものの、看護サマリーについては、「継続看護に利用する機会はなかったが、どのような看護をしていたか状況はよくわかった」と返事があった。継続看護に活用する記録にはならなかったが、当院の看護過程の詳細を伝達する手段としては有効であったと考えられる。

松田[3]は、看護サマリーについて「看護経過のまとめと今後の看護方針を簡潔に記載した記録であり、患者の退院時や病状の変化にともなう転棟時や他施設への転院時に作成し、看護援助の継続をめざすために活用される」と述べている。今後、転院先へ飼い主が何らかのかたちで相談、もしくは受診した際に活用していただけることを希望したい。

おわりに

今回、看護計画を立案しスタッフ全員が同じ思いで看護をしていくことの大切さを学んだ。そして、その思いを転院先に伝えることの大切さも学んだ。何より大変だったことは、自分の行った看護をこのように看護研究として表現することだった。動物看護をより深く理解していなければ難しいと感じた。これからは、動物看護とは何か日々実践の中で考えて行きたいと思う。

引用文献

1) 杉野佳江ら(2003)『13.基礎看護学 ②日常の生活と看護技術(第5版)』p18－19, 金原出版

2) 上掲書p40

3) 上掲書p38

受理：2008年9月10日

短報

外来看護記録用紙作成に向けての検討

ー臨床動物看護研究会におけるグループワークー

遊座晶子[1)]、西谷孝子[2)]

On meaning of making record papers for nursing care animal outpatients

:Group work activity at clinical animal nursing study group

1）つくば国際ペット専門学校　教諭、本学会認定動物看護師

2）西谷獣医科病院　マネージャー、本学会認定動物看護師

〒300-4353 茨城県つくば市沼田578番地 —— 住所は1)のみ記載

はじめに

動物達はペットから伴侶動物へとその扱いも変化し、人間の生活にはより身近なものとなってきた。それに伴い、飼主の関心も動物に対する様々なサービスへと向けられるようになり、動物医療もその中のひとつと捉えられている。

近年、動物病院を訪れる動物はその数も種類も増え、通院や在宅でのケアが必要になる場面が多く見られる。そのような中で、私達は動物医療チームとして、どのような場合であっても安定した、信頼のおける動物医療を提供することが大切となる。外来看護の役割は、診療や治療または指導を受けた患者動物と飼主が、その日のうちに自分の生活の場に戻り、得たケア内容を活かして飼主家族が生活調整を行なう過程への援助をすることである。

診療記録としてカルテがあるように、看護についてもその過程を記録に残すことが必要になってきていると考えられる。看護記録について、桐月ら[1)]は「誰に対して、何を目指して、どの方法を用いて、何を行うのかを看護師が事前に判断し、その考え方に基づいて直接的に実践した看護ケアの内容についてほかの看護師に伝え、個々の患者の変化に沿った一貫した看護を継続して実践するための看護情報である。この看護情報とは、患者の必要に応えるために、今後何を目指して、何を積極的に行い、何に留意したケアを継続して実施すればよいかを判断する根拠として活用されるものである」と述べている。

現在、動物看護学という学問は確立しておらず、臨床動物看護研究会では人の医療における看護を応用し、平成18年7月より5回にわたり入院看護記録の概念から記録方法までを学び、看護記録の重要性について学んできた。その中で、研究会参加者（以下、参加者）それぞれが外来看護について記録を残す必要性を感じたため、グループワークを導入し外来看護記録用紙の作成を試みることにした。

その結果、今回は外来看護記録用紙の作成には至らなかったが、グループワークの内容を振り返ることで、今後の外来看護記録用紙作成に向けての示唆が得られたので報告する。

目的

臨床動物看護研究会でのグループワークの内容を振り返り、今後、所属病院における外来看護記録用紙作成についての示唆を得る。

方法

グループワークを導入し、外来看護記録用紙の作成に向けて検討した内容を考察する。

1. グループワーク紹介

臨床動物看護研究会の第2期に参加した動物看護師および動物看護を学ぶ学生、計10名（**表1**）により、平成18年12月3日（日）、平成19年1月7日（日）の2回にわたり、臨床動物看護研究会開催後、1回1時間30分程度、計3時間程度の時間を用い、外来看護記録用紙作成に向けて検討した。但し、1回のみの参加者が3名いた。

2. 検討方法

今回の検討は、臨床動物看護研究会での入院看護記録の概念を基に、グループワークを導入し、外来看護記録用紙の作成に向けて、5つの事項について検討した（**表2**）。各個人の意見が十分反映できるように無作為に4名

表1　第2期 臨床動物看護研究会参加者の紹介

第2期 臨床動物看護研究会 参加者
動物病院勤務 動物看護師7名（勤務年数:14年目1名、9年目2名、7年目2名、5年目1名、2年目1名）
大学病院勤務 動物看護師1名（勤務年数:5年目）
専門学校勤務 動物看護師1名（臨床経験年数:9年，講師経験年数:3年目）
動物看護を学習している学生1名（短期大学3年次生）

表2　外来看護記録用紙作成に向けての検討事項

① 外来看護の役割とは何か（何を目的として行っているのか）
② 外来看護の対象は何か（誰を対象としているのか）
③ どのような業務をどのくらいの時間で行っているのか（業務の内容とかかる時間）
④ 外来看護記録を導入する目的や利点は何か
⑤ どのような内容を外来看護記録用紙に記載するべきか

ずつ2グループに分け、結果はグループによる偏った傾向はないと考え、意見はまとめて考察する。

結果

1. 外来看護記録用紙作成に向けての検討事項

①外来看護の役割とは何か（何を目的として行っているのか）

- 動物、飼主、地域の人々が安心し理解してもらえるよう持続的に援助する
- 飼主と獣医師の橋渡し
- 受付、電話の対応での病院の印象をいかに良くするか
- 動物が、安楽な状態でスムーズに治療や検査を受けられる環境を提供する
- 飼主の主体的な参加を促す

②外来看護の対象は何か（誰を対象としているのか）

- 動物、飼主、地域の人々（病院周辺、問題行動のある動物を抱えている人）
- 外来に訪れた動物と飼主、地域

③どのような業務をどのくらいの時間で行っているのか（業務の内容とかかる時間）

- 個々によっても、病院によっても違う
- 問診1～2分、5～7分
- 治療5～10分
- 診察から保定、検査、治療行為によりその都度違うが5分、10分、20分くらい
- 診断、手術以外のすべての業務
- 稟告をとりカルテに記入、バイタルサインの確認、保定、注射、皮下点滴、内服薬の準備、臨床検査、証明書発行、会計
- 必要に応じてしつけ、栄養、介護、美容などの相談
- 動物と飼主とのコミュニケーションに対する支援
- 時間は、病院の地域や形態によって異なるが、1時間以内が多い

④外来看護記録を導入する目的や利点は何か

- 看護をするという目的意識が深まる
- 自らの看護行為を見直すことができ、知識、技術力の向上が得られ、看護の振り返りができ、問題点、改善点が明らかになる
- いろいろな意見が出て看護のアイディアが増える
- 医療行為以外のマネージメントを、スタッフの誰が見ても分かるように記録することで共通認識が持て、飼主への支援、指導などを統一して行なう事が出来る
- 外来看護記録をとることで、次回の目標、看護計画を立

てることができる
・ポイントを絞って飼主への支援、指導が出来るため、診療時間の短縮ができる

⑤どのような内容を外来看護記録用紙に記載するべきか
・家族構成
・生活スタイル、居住環境
・動物の性格、クセ
・食べ物(好み、回数、フード量)
・看護ケア(計画)
・しつけの問題、直し方、経過
・問題だと思うこと(現状での問題点)
・飼主の要望(どうしたいか)
・飼主に出来ること(飼主が自宅で出来るケアのレベル)
・目標(中間と達成目標)
・実際に行った看護

2. 参加者の感想

グループワーク終了後、参加者に述べてもらった感想を3点に整理して記す。

①外来看護記録について
・看護記録をとることは、とても大切なことである
・カルテと同等の記録である
・記録をとることで、振り返りができ、何をしたのか確認することができる
・記録するにあたっては、簡便に記録が出来るよう、チェック型の部分と記述型の部分の両方が必要になる
・日々行った看護を、動物病院内でスタッフが統一して認識することは、次に来院されたときにスムーズに診察に入れ、飼主に不安を与えないために大切なことだと思う
・バックグラウンドが異なると、看護の視点も異なる
・引き続き外来看護記録を実際に導入できるかどうか研究を行っていきたい

②外来看護記録用紙作成上の問題点
・記入項目が多すぎると大変だという気持ちが先立ってしまう
・現実的に行うためには、動物看護師の努力のみならず、病院全体での協力体制、獣医師や飼主の理解が必要である

③グループワークについて
・多くの意見が出て、とても参考になる
・グループごとの意見をまとめるとなると、とても難しかった
・自分の伝えたいことがなかなか伝わらず、他の方の意見に感動ばかりしていた
・グループワークは、他の人との意見交換だけではなく、自分の意見をまとめることの大変さも学べる。また、言葉で伝えるトレーニングにもなる。これは動物看護師にとって大切で必要なことだと思った
・自身だけで外来看護記録について考えていた時は、単純に動物を中心にその QOL(Quality of Life:生活の質)の向上ばかりに気を取られていて、そこに潜む問題点に気付くまでに至らなかったが、グループワークを通して、問題点を発見することが出来た
・たくさんの人の意見を聞くことで、自分ひとりでの偏った考えに気付かされ、大変有意義な時間が持てた
・病院の枠を越え、このような場や機会が持てたことで、動物看護の向上や自分自身のスキルアップにもつながる
・病院ごとに求められることも必要なことも異なり、どこまでが共通していて、どこからが個人のことなのかがわからなかった

考察

今回の検討は、臨床動物看護研究会での入院看護記録の概念を基に、グループワークを導入しグループワーク内での外来看護記録用紙作成を目標に、まず検討事項5項目を明らかにするところから始めた。

【検討事項①——外来看護の役割とは何か】

検討事項①として、はじめに、参加者が特に外来看護の役割を考え、その中に看護の専門性があり、外来看護の特殊性があることに気付くことを意図するために「外来看護の役割とは何か」とした。

検討結果の「飼主の主体的な参加を促す」、「動物が、安楽な状態でスムーズに治療や検査を受けられる環境を提供する」、「飼主と獣医師の橋渡し」などから、参加者は現在行っている外来看護の場面を振り返っており、外来看護の特殊性、専門性について気付くまでは至らなかったと考える。

外来では、動物の療養の場が病院ではなく自宅であることから、それを支える飼い主家族の負担が大きいという特徴がある。そのため、動物や飼い主の不安を軽減し、安心して自宅で療養生活を送ることができるように援助していくことが、外来看護の大きな役割であると考えられる。看

護という職務について、井下ら[2]は、「看護という職務を考えるうえでは、患者との関係を第一義的に考えなければなりません。なぜなら、看護の主たる対象は疾病そのものではなく、患者が主体的に疾病と取り組めるよう、心身両面から患者を支援することだからです。そこでは疾病の克服という共通目標に向かって患者との関係が円滑に進むべく、看護師にはさまざまな配慮が期待されているのです」と述べている。参加者は、まだまだ実際の看護場面や行動に目を向けてしまい、看護独自の役割に気付いていないと考えられる。

【検討事項②——外来看護の対象は何か】

次に、参加者が常に看護の対象を意識し、その中で、飼主の訴えから始まる外来看護の対象の特殊性に気付き、また、飼主の訴えと動物の状態は必ずしも一致しないことに気付くことが重要と考え、検討事項②を「外来看護の対象は何か」とした。

参加者はここで、「動物・飼主」以外の周辺地域の人々までも対象として捉えるなど対象が絞りきれなかった。やはり、外来看護の役割を把握していないため、漠然と外来という言葉からイメージして対象を捉えていると考えられる。

つまり、動物が安心して自宅で療養生活を送ることが出来る援助をするためには、外来において単に動物の病気をみるだけではなく、動物・飼主の生活全体を支援するものとしての関わりが必要となる。

【検討事項③——どのような業務をどのくらいの時間で行っているのか】

更に、検討事項③「どのような業務をどのくらいの時間で行っているのか」を考えることで、参加者が実際の外来看護業務を時間の感覚で振り返り、看護記録を導入することが可能であるかについて気付き、看護が介入することで著しく対象の変化が期待できるもの、また、看護の介入を希望するものなど、症例を特定することで導入が可能となるというところに気付くことを目指した。

この検討では、参加者の誰一人として、看護記録の記入を前提にした意見を挙げられなかった。つまり、この場面では、外来看護記録導入に向けてという目的意識が薄くなり検討事項に素直にこたえ、所属場所が違うもの同士の情報交換の内容となった。この場面では、検討事項の問いかけを、「外来業務の中で看護記録を記載する時間が出来るか？」など、目的意識をもった内容にする方が効果的であったと考えられる。

【検討事項④——外来看護記録を導入する目的や利点は何か】

検討事項④「外来看護記録を導入する目的や利点は何か」は、参加者が実際に記録を導入する目的や利点を明らかにすることは、その評価の方法につながることを理解し、そして何より、よりよい看護につなげるためであることに気付くことを目的とした。

看護記録とは、看護者のみのための記録ではなく、看護対象である動物と飼主のための記録である必要があると考える。参加者の感想①の「看護記録をとることは、とても大切なことである」、「カルテと同等の記録である」、「記録をとることで、振り返りができ、何をしたのか確認することができる」、「日々、行った看護を動物病院内でスタッフが統一して認識することは、次に来院されたときにスムーズに診察に入れ、飼主に不安を与えないために大切なことだと思う」などからも、看護記録導入の目的や利点について十分理解していると考えられる。

看護における記録の意味について、井下ら[3]は、「第 1 に、法的な責任としての記録、第 2 に、継続した看護ケアのための記録、第3に、チームメンバーとの情報の共有化、ケア方針・方法の統一のための記録、第 4 に、看護ケアを評価し、変化や影響などかかわりの効果を記録、第 5 に、記録によって看護を実施する者の内的成長を促す」の 5 点を挙げている。これにより参加者は、看護記録がよりよい看護につながることを理解したと考える。

【検討事項⑤——どのような内容を外来看護記録用紙に記載するべきか】

検討事項①から④までを踏まえて、具体的に記載する事項を考えながらグループワーク内で実際の外来看護記録用紙の作成が達成できるよう、検討事項⑤「どのような内容を外来看護記録用紙に記載するべきか」とした。

ここでは、動物や飼主に注目した意見が多く見られる一方、記録様式やマネージメント等も含めた意見が見られた。これは、参加者の動物看護師としての経験年数によって考え方に差が生じたものと考えられる。また、参加者が実際に何らかの記録をとった経験の有無など、バックグラウンドが異なることで記録をとる目的や視点が異なったものと考えられる。

結果として、全ての意見をカバーしようとしたため、何を記載すべきなのかその対象が絞り切れず、記録項目を具

体的に挙げることが出来なかった。このことから、参加者が実際に看護記録記入について未経験であることが考えられる。また、参加者の感想②の「記入項目が多すぎると大変だという気持ちが先立ってしまう」、「現実的に行うためには、動物看護師の努力のみならず、病院全体での協力体制、獣医師や飼主の理解が必要である」などから、看護記録導入に向けて困難さが先だってしまっていることも明らかとなった。

最終的には、内容面、時間的制限、病院全体での協力体制、獣医師や飼主の理解など問題点も多く、このグループワーク内において実際の外来看護記録用紙の作成には至らなかった。しかし、検討の中から、まずは自分たちの病院にふさわしく、記入しやすいものを導入していくことが大切であるという方向性を持つことができた。看護記録を実践で活かすには共通のフォーマットではなく、個々の病院に見合った記録用紙が必要であるということを理解し、統一した考えを持つそれぞれの動物病院内でフォーマット化し、外来看護記録を残していくことが必要であるという共通認識を持ち、今後も引き続き実際の導入に向けての研究を続けていきたいと考える。

最後に、グループワークの導入は、個人や集団の抱える問題により効果的に対処できるよう援助する、という目的で行ったが、参加者の感想③の「グループの意見をまとめるとなると、とても難しかった」、「自分の伝えたいことがなかなか伝わらず、他の方の意見に感動ばかりしていた」、「病院ごとに求められることも必要なことも異なり、どこまでが共通していて、どこからが個人のことなのかがわからなかった」などから、経験やバックグラウンドが異なる者の意見調整は難しいということが理解できる。しかしながら「たくさんの人の意見を聞くことで、自分ひとりでの偏った考えに気付かされ、大変有意義な時間が持てた」、「病院の枠を越え、このような場や機会が持てたことで、動物看護の向上や自分自身のスキルアップにもつながる」、「グループワークは、他の人との意見交換だけではなく、自分の意見をまとめることの大変さも学べる」、「言葉で伝えるトレーニングにもなるため、動物看護師にとって大切で必要なことだと思った」という感想も得られた。これにより、ここでのグループワーク導入の有効性はあったと考える。

おわりに

金井[4]は、「患者に向けてなされている看護がいつでも看護であるためには、どの看護婦も同じ理念のもとに、同じ方式で看護を展開しなければならず、ここにも＜看護の視点の共有化＞という課題が横たわっています」と述べている。動物医療現場では、医療と看護、その両方向からの視点で対象をみることが必要であり、私達、動物看護師は「動物看護とは何か」を常に考え、日々の看護を振り返り、記録に残すことが今後ますます必要になるであろうと考える。

今回のグループワークでは、病院の枠を越え外来看護記録のフォーマット化を目指す仲間と共に、互いの疑問をぶつけ合い、率直な意見交換をしながら、共通認識を持つことや実践することの難しさに至るまで、多くのことを学んだ。今後も、より良い動物医療とチーム医療を目指し、自己研鑽を重ね動物看護の専門性を追究していきたいと思う。

引用文献

1) 桐月順子・足立昌子(2006)「実践的外来看護計画&外来看護記録記載事例集」『外来看護最前線 季刊誌 2006』別冊，p3，日総研出版

2) 井下千以子他(2004)『思考を育てる看護記録教育 グループ・インタビューの分析をもとに』p24，日本看護協会出版会

3) 井下千以子他(2004)『思考を育てる看護記録教育 グループ・インタビューの分析をもとに』p200～201，日本看護協会出版会

4) 金井一薫(1993)『ナイチンゲール看護論・入門－"看護であるものとないもの"を見わける眼』p187，現代社

受理：2008年9月1日

短報

動物眼科二次診療施設における外来看護

ー点眼指導の関わりを外来看護記録用紙の作成にて振り返るー

中井江梨子（どうぶつ眼科 Eye Vet　本学会認定動物看護師）

Nursing care for animal outpatients at the secondary clinic ophthalmology

:Task about eye-drops treatment; in relation with making of record papers on animal outpatients

Eriko Nakai

〒157-0066　東京都世田谷区成城2丁目36番8号306号室

はじめに

眼科看護の中には、患者への役割、家族への援助の役割がある。そして動物看護においては、治療管理や予防の一端を家族に委ねなければならない特徴から、家族への看護の重要性はより高いと言える。

当院は動物眼科専門の二次診療施設のため、患者や家族との関わりはホームドクターに比べれば限定的であるが、よりよい予後を得るために看護指導を行わなければならない。

今回、遠方から来院された症例に対し、初めて外来看護記録を作成し、動物看護過程を展開した結果、外来看護における動物眼科看護の役割についての示唆を得たので報告する。

1. 研究目的

両側の前ぶどう膜炎をもつトイプードルとその家族への点眼指導を振り返り、動物眼科看護の今後の関わり方の示唆を得る。

2. 研究方法

外来看護記録をつけ、家族との関わりを考察。

3. 症例紹介

3歳4ヶ月齢のトイプードル、未去勢雄。目をショボショボさせて開けにくそうということを主訴に1ヶ月前、富山県の主治医受診。両側前ぶどう膜炎と診断され、非ステロイド系消炎剤点眼液を処方されるが、自宅での点眼困難のために、何度か点眼通院していた。状態が改善しないことと、今後の予後のために今回の当院紹介となった。

当院へは、家族である30代男性①と、そのお母様と思われる60代女性②の2名で車にてご来院。普段、患者動物（以下患者と称する）を中心的にケアしているのは、来院者①とのこと。

問題点

1. ぶどう膜炎に対する点眼治療が受けられないため、眼痛がとれない。
2. 重度のぶどう膜炎のため、視覚を喪失する疾患に発展する可能性がある。
3. 家族が治療を自宅で行えない。

看護目標

1. 点眼治療が受けられ、眼痛が軽減する。
2. 次回診察時までに続発性疾患を発症していない。
3. 家族が自宅で治療を行える。

看護計画

1. 診療後に看護師が別室にて、家族の現状の受け止め方や今後のお考えを伺うために、来院者①②とお話をし、整理する。
2. 点眼指導と保定法指導を行い、家族に成功体験を持たせる。
3. 看護師は、終始家族の頑張りをねぎらう声がけと、説明や指導の後は「いかがですか？」「どう思われますか？」と伺い、家族が意見や感想を気軽に話せるよう心がける。
4. 診療日後に主治医もしくは自宅に連絡をし、点眼の具合、眼の様子を伺う。

看護計画2の点眼指導の内容

A. お話の後、引き続き看護師が点眼不可能な原因を探るため、来院者①②の承諾を得て、自宅での点眼時の状況を患者と共に再現して頂き、犬の様子、保定の様子を観察する。同時に家族に現状の解説と、お考えを伺う。
B. 看護師による観察と聴取の結果から、点眼不能な原因と思われる点を来院者①②に提示した後、一般的な点眼ポイントをプリントを見せながらお話する。
C. 自宅で点眼のための台使用の有無を伺い、そのどちらかに合った保定(ダッコ)の方法を看護師が実際にデモンストレーションし、解説する。
D. ひと通りの過程にて、犬が暴れる等の反応がなければ、再度看護師による保定下で、点眼役の家族に実際に点眼指導する。
E. 犬に怒る等の反応がみられなければ、保定役の家族に保定を実践して頂きながら、再度ポイントを伝える。
F. 保定役のご家族が点眼のポジションを取ることができたら、点眼役に点眼してもらう。

指導内容（図1）

・動物が慣れるまでは保定者、点眼者の2名で行う。
・ゆっくりと行動し、声を荒げたり、しかったりはしない。
・保定者は動物を無理のない姿勢に保ち、優しく声をかける。
・保定者が顔を斜め上に向かせたら、点眼者がボトルを視野の後ろから近付ける。
・点眼者が残った片手で上眼瞼を上げ、白目に1滴滴下する。
・すぐに褒めながらゆっくり解放してあげ、さらに褒める。

点眼指導過程Cのデモンストレーションと指導内容

a. ゆっくりと行動し、ダッコなど犬の落ち着く体勢から入る。
b. 犬の背面、側面を保定者にピッタリと付け、ゆっくりと撫でて褒めながら犬が落ち着くまで待つ。
c. 保定者の体と両腕で犬が逃げられない体勢を組めたら、片手をゆっくりと犬の胸から下顎へ移動させ、首を絞めないように顎を包んで斜め上 45 度位を向かせて止まる。
d. 2秒ほど止まれたらゆっくり解放しながら褒める。

補足：当院受診の一般的流れ

1. 主治医からの電話にて、予約をとる。
2. 主治医から家族に必要書類を渡して頂く。
3. 予約日時までに主治医より紹介状をFaxで受け取る。
4. 予約当日、家族と患者が来院され、問診表に記入頂き紹介状と問診表から、看護師が問診を行う。
5. 獣医師による診察、説明、必要な処置等があり、最後に看護師がご家族とお話を交えつつ、次回の予約をとる。
6. 主治医に当日電話し、後日書面にて報告する。

外来看護記録紹介（図2-ab）

一般的記入事項

日時、予約時間、記入者。

患者動物についての記入事項

名前、品種、毛色、性別、年齢、来院経緯、経過（主治医からの情報による）。

主治医病院についての記入事項

動物病院名、住所、担当獣医師。

来院者についての記入事項

氏名、推定年齢、性別、職業、患者動物との関係、複数来院者があるときはその関係、眼科来院前の主訴及び問題点。

来院中の記入事項

待合室、問診中の患者動物や来院者の様子、関わり、検査中や診察中の患者動物や来院者の様子、獣医師からの説明内容、問題点、外来中に看護師が行ったこと、それに対する様子、会話内容、考察、今後について。

4. 実践と結果

来院時の様子と関わり

来院者のお足元まで伺い、ご挨拶した後、当日の診療の流れと時間の了承を頂いた。遠方からの来院に対して慰労したところ、笑顔もみられ、夜中に出発され 6 時間かかったことなどを話された。

問診中の様子と関わり

混雑する待合の中、看護師が患者に手を出しても攻撃性はみられず。「とても可愛らしい子ですね」「緊張していますか？」と声がけすると、来院者①は「大丈夫か？」「こわいか？」と患者に話しかけていた。家族の経過認識と主治医の依頼書にずれはなく、自宅点眼ができないことに関しては両来院者とも笑いながら説明していた。

どうぶつ眼科

Eye Vet

Veterinary Ophthalmology Referral Services
Tokyo, Japan

点　眼　方　法（点眼液）

1．体全体を後ろから抱え込むようにしておさえ、片方の手で少し上を向かせます。

※　後ろから抱え込むようにすると、頭だけでなく体の動きも抑えられます。
※　嫌がるようなら、２人で行ってください。

2．もう片方の手で目薬を持ち、頭の方から近づけます。上のまぶたを少し引っ張り、白目の部分に上の方から薬を１滴だけ落とします。

※　点眼液を清潔に保つために、点眼をする際にはボトルの先がまつ毛やまぶたに触れないように注意してください。
※　点眼ピンを前から近づけると怖がってしまいます。見えないように頭の方から近づけてください。
※　点眼ボトルの１滴量は、通常２０～５０μlです。眼から溢れ出ない量は２０～３０μlなので、１回１滴で充分です。

3．溢れた薬をコットンなどで拭取ります。

※　私達人間と違って、犬や猫の眼の周りにはたくさんの毛が生えています。そのため、溢れた点眼薬が眼の周りに残りやすく、かぶれや脱毛の原因になってしまうことがあります。点眼後は眼の周りをコットンなどで拭取ってください。

※　複数点眼では、５分以上の間隔をあける。

・　点眼液の場合
２種類以上の点眼液を短い間隔で点眼した場合、先の点眼薬が洗い流されてしまい効果が妨げられます。点眼の間隔を必ず５分以上あけて下さい。

・　点眼液と眼軟膏の場合
眼軟膏は点眼液に比べ吸収が遅いので、点眼液を先に点眼します。間隔は５分以上あけてください。

041201

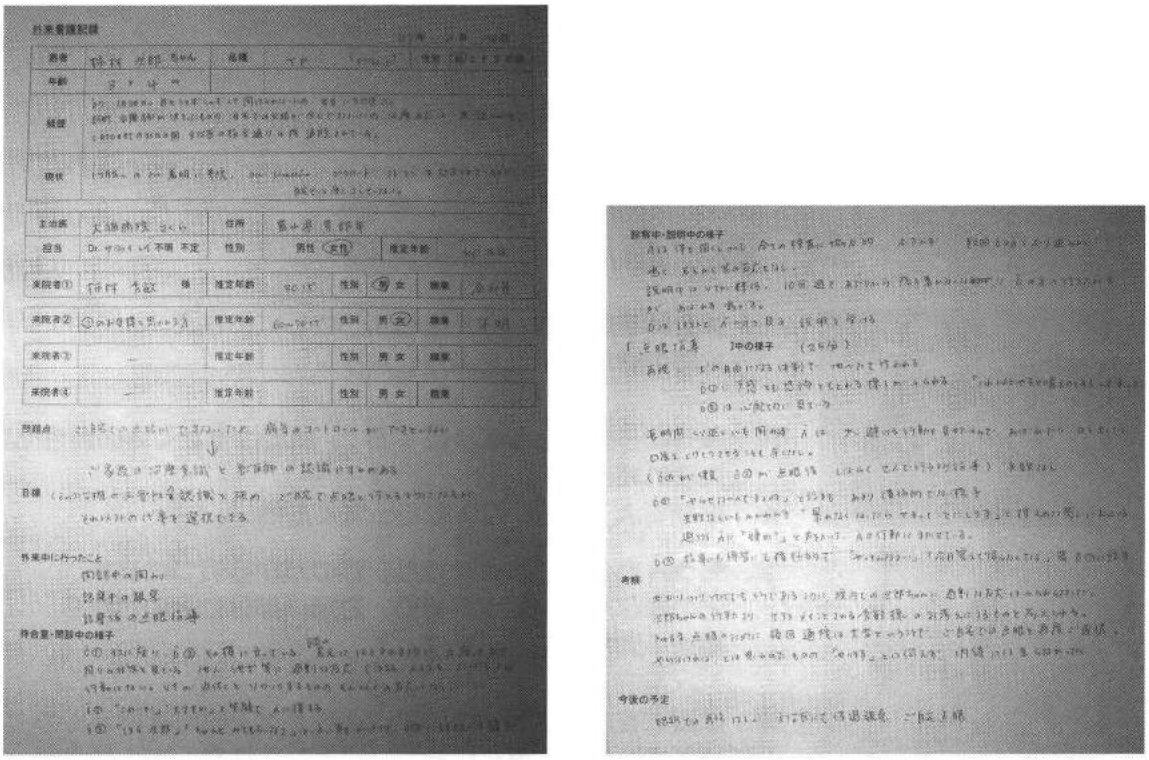
図１　指導内容

診察中・説明中の様子

患者は全ての検査に協力的で、点眼にも問題なく、震えや暴れる行動もみられなかった。

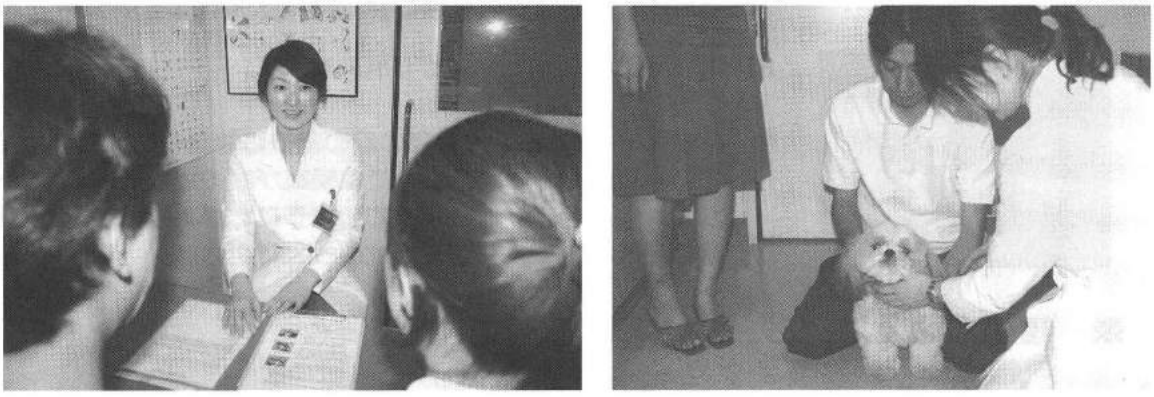
看護計画１の実践と結果（図３－ａ）

両来院者より診断や必要治療はよく分かったと伺えた。来院者①「だから点眼はしてやらにゃな」と困った様子で



a　　b

図2　外来看護記録（実際に記入した用紙）



a　　b

図3　来院者との応対の様子

「こいつがやらせないんだよね」と話された。

看護計画2の実践と結果（図3－b）

指導中、「今日やり方を覚えて帰らなきゃ」など積極的な発言のあった来院者②に対し、言動に積極性のない来院者①に、治療への嫌悪感や罪悪感を持っているかもしれないと思い、「かわいそうなことをしている気になっちゃいますね」と声がけをすると、「こいつ甘やかされてるから」と笑顔で生活の様子や食事のことなど詳細説明を聞くことができた。患者を大事にしている想いを受け止めつつ、病状の現状と予後の要点を伝えると、来院者①からも「そうだなぁ」と受け入れられた。

20 分に渡る指導中、患者に怒る、おびえるといった行動はみられなかった。「やらなきゃね」と言う来院者②に対し、来院者①は「暴れなくなったらやるってことで」という発言に留まった。

2 週間後主治医からの報告と再診検査結果から、眼痛は軽減し、続発性疾患は起きていないことが分かり、看護目標1.2.が達成されたことが明らかになった。1ヶ月後、主

治医より、「自宅で点眼を続けて下さっています。当院でも『できない』としか聞いていなかったが、どうやら点眼をする気がなかったようです」との報告を受けた。この結果から看護目標 3.を含め、すべての目標を達成したと考えられた。

5. 考察

今回の症例は主治医からの依頼書内容より、点眼指導の可能性があることと、治療選択肢に大きな変化がない可能性が伺えたため、家族の意志や想いを把握すべく、問診前からお帰りになるまでの関わりを積極的に持った。また一貫した観察と対応ができるよう、同一の看護師が対応した。

問題点 1 に対して、現在ある眼痛に対する看護目標を挙げた。眼痛の原因は検査結果より重度の前ぶどう膜炎が疑われた。人間では痛みにより開眼困難なこともあり、犬猫では症状が不明瞭だが、来院時にも羞明があり、1 ヶ月も経過していることから、疼痛は強いと考えた。確実に投与できれば、点眼治療で眼痛は軽減されると考えられた。

問題点 2 に対して、近い将来予想される、視覚障害への予防対応を看護目標に挙げた。他の眼疾患がなく両側に重度のぶどう膜炎がみられたことや、犬種、年齢から、免疫介在性や全身性疾患が疑われた。主治医からの臨床検査結果が報告され、炎症コントロールの難航が予想されたことから、続発性緑内障や網膜剥離を起こし視覚を脅かす可能性があったため、「次回診察時までに続発性疾患を発症していない」とした。

問題点 3 に対し、点眼通院は困難との訴えから、自宅点眼を行えることを看護目標に挙げ、点眼指導を行った。また家族の発言より、来院者①が治療に対し嫌悪感を持っていると判断し、治療意識や病識を確認しつつ、お気持ちを察する声がけを頻繁に行った。

結果として、自宅看護を中心的に行う来院者①からは、最後まで積極的な発言はなかったが、点眼は実行されていた。遠方から来院される時点で意識の高い飼い主であるが、当日の発言からだけでは結果は推し測れないことが理解できた。平井は「いかに治療を中断させないかは、疾患への理解、自己管理能力の有無にかかってくる。－中略－看護師は患者の社会的背景や疾患への理解度を把握し、信頼関係を確立し、個別性のある患者指導を行っていく」と述べている。今回、治療方針に格段の変更がない中、家族にとって治療意義をいかに理解して頂けるかが重要と考え、点眼指導を中心とした情報提供とご家族への直接指導をしたことは、点眼治療意識への働きかけの一端になったと考えられる。

また当院は、専門二次診療という高度医療や最終診断を求められる場であることを踏まえて、看護師はご家族の複雑な心情を察し、受け止める言動が必要である。最終的に家族の感想は聴取していないが、点眼治療の改善が見られたことが明らかになった。家族への介助方法の指導に関して、同様に平井は「家族は、患者の障害を受け入れられず、罪悪感や困惑のなかで介助をしてしまうということがおこりやすい。患者のできること、できないことを説明し、患者が自分でできたという体験がもてるような援助の仕方を指導する必要がある」とも述べている。

今回、診察後にご家族への点眼指導や、ご家族との話合いは、ご家族の治療への動機付けや点眼管理と続発性疾患予防に繋がったと考えられる。

治療の継続が困難な場合、診察とは画した状況での関わりをもつことで、飼い主の思いがどこにあるのか受け止める糸口になるという示唆が得られた。

おわりに

今回、外来看護記録を詳細に残すこと自体が当院では初めての試みであったため、戸惑いばかりが多かったが、記録に残すことで何度も振り返ることができ、その重要性を身をもって感じることができた。改良を加えながら記録症例を増やし、他病院との外来看護サマリーのやりとりへとつなげていきたい。

参考文献（引用を含む）

1) 大鹿哲郎・丸尾敏夫・平井明美 著(2008)『系統看護学講座 専門分野(17) 成人看護学(13) 眼（第11版）』p4～8, 医学書院

2) 大野 重昭・木下茂 編, 水流忠彦 編協力(1995)『標準眼科学(第6版)』p48, 医学書院

3) David Maggs・Paul Miller・Ron Ofri(1991)『Slatter's Fundamentals of Veterinary Ophthalmology (Second Edition)』p392, LIPPINCOTT WILLIAMS & WILKINS

受理：2008年8月10日

原著論文

動物看護師とクライエントの視点による動物病院における対応のあり方

甲田菜穂子[1)]、三家詩織[2)]

Opinions on the behaviors toward clients in animal hospitals from viewpoints of animal nurses and clients

Naoko Kouda, Shiori Mitsuya

1) 東京農工大学　大学院共生科学技術研究院　環境資源共生科学部門　准教授

2) 東京農工大学　大学院　研究生

〒183-8509 東京都府中市幸町3丁目5番8号

要約

動物病院におけるより良い対応を明らかにするため、動物病院と人医病院（以下、「病院」と記す）のクライエントへの対応について、動物系専門学校生を対象として質問紙調査を行った。さらに、動物看護師を対象として質問紙調査を行い、動物病院における対応についての認識を調べた。医療関係者のクライエントに対する対応は、対話性が最重要と考えられていた。動物看護師は動物病院について、対応の包括性や継続性に関しては付加価値としての対応とみなし、利便性・快適性と対話性が欠ければ不都合とみなす傾向があった。専門学校生は、動物病院に利便性・快適性や継続性はそれ程、求めなかったが、主訴以外の関連した診療や支援を行うという包括性や説明の充実をより求めていた。今後、対応の包括性の充実、すなわち人と動物の生活全般に渡る幅広い支援をより充実させ、インフォームド・コンセントが成立する関係を目指すことが望まれる。

はじめに

医療関係者のクライエントに対する対応の仕方は、医療の質に大きな影響を及ぼす。そのため、単にクライエントの疾病や傷害の治療にとどまらず、個々のクライエントの心理や置かれた環境条件を理解し、それに応じた適切な対応が取れるように、医療関係者を対象としたクライエントへの対応の仕方についての教育が重要視されるようになってきている（辰野ら, 1996; 長谷川ら, 1997; 藤田ら, 1998）。獣医療においても、動物病院のスタッフによるクライエント（飼い主）やその動物に対する対応の仕方は重要である。獣医療における接遇マナーに関する講習会が開催されたり、居心地良い待合室作りに関する調査研究も行われるようになってきている（木村ら, 2004）。人の医療が患者への対応が主であるのとは異なり、獣医療では飼い主と動物の双方に対する対応への配慮が求められるなど、獣医療独自の視点が必要である。とりわけ動物病院において、飼い主や動物に直接関わることの多い動物看護師の対応は、獣医療の質に大きな影響を及ぼすと想定される。

本研究では、動物病院におけるより良い対応を明らかにするために、動物病院と人医病院（以下、「病院」と記す）における良い対応と悪い対応について、クライエントはどのように捉えているか、専門学校生に対して質問紙調査を行った。さらに、動物看護師を対象として質問紙調査を行い、動物病院におけるクライエントにとっての良い対応と悪い対応について、動物看護師はどのように捉えているか、その認識はクライエントのものと異なるのか、動物看護業務の経験年数で違いはあるか調査した。

方法

病院と動物病院のクライエントとして、専門学校の動物学科生172名（平均18.65歳、標準偏差0.96）を対象とし、2002 年の授業中に無記名の質問紙調査を実施した。回答時間は、授業終了前 20 分間程度をあてた。学生には、それぞれA4用紙に、症状の重さや治療内容とは関係なく、動物病院利用時の獣医療関係者の対応と、病院利用時の医療関係者の対応で、「嬉しかったこと」、「嫌な思いをしたこと」について具体的な自由記述を求めた。事前の調査により、ほとんどの学生にペット飼育経験があったが、動物病院の利用経験者は病院の利用経験者より少ないこ

とを想定し、動物病院を利用したことがある人は、なるべく動物病院について回答するよう求めた。さらに、学生は医療者の対応についてあまり気に留めたことがない可能性も想定し、答えにくければ動物病院または病院どちらについて回答しても良く、また動物病院と病院の両方について回答しても良いとした。動物病院について回答した学生は84名、病院について回答した学生は99名、うち両方について回答した学生は 16 名であった。5 名の学生は、動物病院と病院の両方を利用経験がないか利用した記憶がないため回答不能であり、分析から除外した。

動物看護師に対しては、2004 年に日本動物看護学会に質問紙の郵送を依頼し、当学会所属の動物看護師に無記名の回答を返送するよう依頼した。回答が返送されて分析対象になったのは、149 名分であった(男性 2 名、女性147名、平均29.99歳、標準偏差6.29)。なお、質問紙郵送数は 439 部であったが、その中には既に退職して本人に質問紙が届かなかったり学生など、調査対象になり得ない人も相当数含まれており、正確な回収率は不明である。回答者の動物看護経験年数は、平均 7.12 年(標準偏差4.05)であった。経験年数が 5 年未満の 45 名を経験年数が短いグループ、10 年以上の 37 名を経験年数が長いグループとし、経験年数の長短による結果の比較を行った。

質問紙では、症状の重さや治療内容とは関係なく、獣医療関係者の対応で、「飼い主を嬉しい気持ちにさせると思うもの」、「飼い主に嫌な思いをさせると思うもの」について A4 用紙に具体的な自由記述を求めた。さらに、選択式で経験業務の種類を尋ねた。

結果の提示にあたっては、まず動物病院についての動物看護師と学生の回答に触れ、次に病院についての学生の回答に触れることにする。「嬉しい対応」を「良い対応」、「嫌な対応」を「悪い対応」とみなした。

結果

図 1 は、動物病院と病院について、動物看護師と学生が記入した対応についての事柄数の平均値と標準偏差を表している。自由記述の回答数は、内容が意味を持つ最小の単位に分け、回答者ごとに記入数を数えた。動物看護師は、学生よりも多く記入していた。動物看護師における無回答は良い対応で 2%、悪い対応で 5%であったのに対し、学生では動物病院について良い対応で26%、悪い対応で 50%、病院について良い対応で 32%、悪い対応で 58%と、動物看護師の 10 倍程の割合で「特にない」、「どこも対応は同じで取り立てて気づくことはない」といった回答が得られた。動物病院について、動物看護師における1名当たりの平均記入数は、良い対応は悪い対応より有意に多かった。学生においても動物病院については、良い対応は悪い対応より記述していたが、病院についての回答には、有意差が認められなかった。

対応に関する自由記述内容は、住民と歯科医が選ぶかかりつけ歯科医機能に関する木村ら(1998)と小松崎ら(1998)の研究を参考に、以下の5つに分類した。利便性・快適性(待ち時間が短い、時間外対応がある、病院が清潔、料金が安い、ドアの開閉・荷物の運搬介助がある、など)、包括性(他種診療、主訴以外のクライエントが気になるところの診療、飼育・生活指導、動物の扱い補助、ペットロス対応、など)、対話性(丁寧に説明、相談しやすい、親しみやすい、クライエントが治療の選択ができる、など)、継続性(継続的に対応してくれる、クライエントやその動物を熟知している、など)、専門性(専門性を持っている、クライエントやその動物を第 1 に考えて熱心に治療する、優れた技術がある、など)。

この対応内容別に、総回答者数に占める記述者の割合を算出した(**表 1**)。良い対応とは前述の 5 分類の例のような肯定的な対応であり、悪い対応とはこの 5 分類に関する対応の欠落など、否定的な内容の回答である。動物看護師では、良い対応、悪い対応ともに、対話性について86%以上の人に記述が見られ、5 分類中、最多であった。動物看護師において、対応の種類と良い対応と悪い対応に関する回答数の偏りは有意であった($\chi^2(4)=50.36$, $p<0.001$)。残差分析の結果、良い対応の方が悪い対応より記述が多かったのは、包括性と継続性であり、良い対応の方が悪い対応より記述が少なかったのは、利便性・快適性と対話性であった。専門性に関しては、有意差は見出せなかった。以降に述べる学生の結果は、いずれもサンプル数不足のため検定をかけることができなかった。

数値の大小について言及していくと、学生は動物病院、病院ともに対話性を最重視していた。動物病院においては、学生は動物看護師の回答傾向と比較して、利便性・快適性、継続性はそれ程、言及していなかったが、包括性については比較的多く言及した。学生は、動物病院に関しては包括性について良い対応の方が悪い対応より記述が多く、病院に関しては利便性・快適性、専門性について良い対応より悪い対応の記述が多かった。

次に、動物看護師と学生がともに最重視した対話性の中身を詳しく分析した。医療現場で求められるインフォームド・コンセントまたはクライエントによる治療の選択に関し

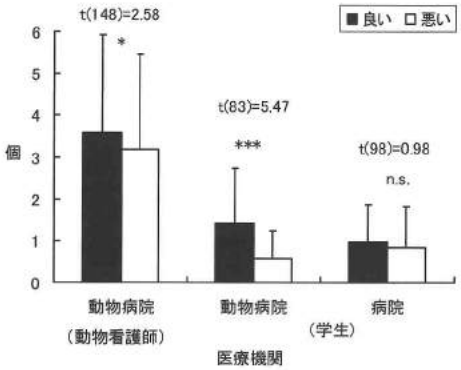


図１　動物病院と病院について動物看護師と学生が記入した事柄数の平均値と標準偏差
*p<0.05, ***p<0.001

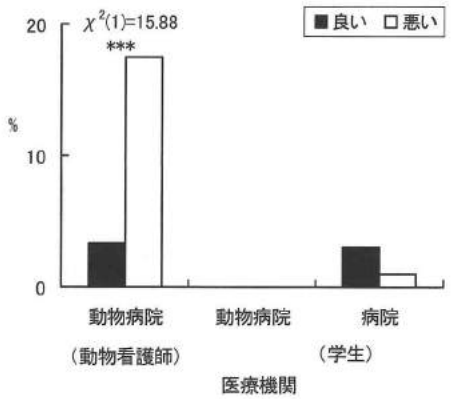


図２　インフォームド・コンセント、クライエントによる治療選択について動物看護師と学生が記入した割合（複数回答）
***p<0.001

表１　動物病院と病院について動物看護師と学生が記入した事柄の内容別割合（%、複数回答）
*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001（カイ二乗検定の残差分析）

		利便性・快適性	包括性	対話性	継続性	専門性
動物病院						
動物看護師	良い	19 **	15 **	86 *	40 ***	27
	悪い	31	3	90	7	34
学生	良い	7	20	58	5	15
	悪い	5	4	29	0	18
病院						
学生	良い	0	2	58	5	9
	悪い	15	1	33	1	23

表２　動物病院と病院について動物看護師と学生が記入した説明の内容別割合（%、複数回答）
*p<0.05（カイ二乗検定）

		検査	病状・現状	治療・看護・見通し	薬	飼い方・動物種・予防	料金	質問・相談への回答	その他
動物病院									
動物看護師	良い	1	6	11	3	2	1	13*	1
	悪い	1	5	11	3	1	3	5	2
学生	良い	0	7	1	6	8	0	10	1
	悪い	0	0	0	2	0	2	1	0
病院									
学生	良い	0	3	2	6	1	0	1	2
	悪い	0	1	0	0	1	0	1	0

ては、動物看護師も学生もあまり記述しなかった（**図２**）。動物看護師では、悪い対応では良い対応より指摘が有意に多かった。学生では、これらのことが病院に関しての記述でわずかに見られたのみであり、動物病院に関しては皆無であった。

インフォームド・コンセントにまで至らなくても、クライエントへの説明については比較的多く記述があった。動物病院に関しては、動物への説明や語りかけについての記述もあった。そこで、何についての説明かに触れていた回答のうち、その内容を分類した。**表２**は、動物病院と病院について動物看護師と学生が記入した説明内容の割合を表している。動物看護師では、今後の治療・看護・見通し、飼い主からの質問・相談への回答について記述することが比較的多かった。動物看護師による良い対応と悪い対応の記述割合を比較すると、質問・相談への回答は、良い対応の方が悪い対応よりも記述が多かった（$\chi^2(1)=4.93$）。

学生は、治療・看護・見通しについての説明は、動物看護師ほどは記述しなかった。一方、飼い方・動物種・予防についての説明は、動物看護師よりも学生は記述していた。学生は病院、動物病院ともに薬の説明について多く記述した。動物看護師の回答には見られなかったが、学生の回答には、薬の使用の説明だけでなく成分の説明も欲しいという記述や、良い対応として、カルテの開示を挙げた人もいた。学生に病院より動物病院についてよく記述されたものは、病状・現状、予防（飼い方・動物種）の説明、クライエントからの質問・相談への回答であった。

動物看護師の経験業務は、診療助手、受付、入院管理、手術助手、臨床検査、事務で 89%以上の回答者に経験があった。トリミング、しつけ・カウンセリングの経験は、5割程度であった。このうち、しつけ・カウンセリングは、動物看護5年未満の人より10年以上の人の方が、経験割合が高かった（$\chi^2(1)=6.79$, $p<0.01$）。その他の業務では、動物看護経験年数の長短で、経験の有無に有意差は見出せなかった。さらに、**図１**、**図２**、**表１**、**表２**の結果についても、動物看護経験年数の長短で有意な違いは見出せなかった。

考察

医療関係者のクライエントに対する対応は、動物病院については、サービスの提供者となる動物看護師もクライエントとしてサービスの受け手となる学生もともに、良い対応は悪い対応より記述されやすかった。病院に関しては、良い対応か悪い対応かは学生の記述量に有意な違いは見られなかった。

さらに学生は、動物病院についても病院についても、全般に記述量が少なかった。これらのことから、悪いことは心理的に言及しにくいこと、学生にとって医療機関は特に良くも悪くも捉えられていないが、動物病院は比較的良い印象を持たれているという可能性が考えられる。ただし学生の記述量の少なさから、方法論上の問題も指摘できる。学生の年齢が若く、医療を利用する経験や認識が不足していたのかもしれないし、授業中ではじっくり思い起こして回答する時間的な余裕がなかったのかもしれない。

そのような限界を念頭におきながら、今後、動物看護における実現可能性の高いより良い対応サービスの改善を考察する。

動物が主対象となる動物病院、人が対象となる病院にかかわらず、また動物看護師とクライエントという立場の違いにかかわらず、医療関係者のクライエントに対する対応は、対話性が何より重要と考えられていた。医療では、クライエントは何らかの苦痛、不安や問題を抱えて来院するため、クライエントのネガティブ感情を緩和できる対応の対話性は、他のサービス業より重視されなければならないだろう。対応の種類によって、良いと判断されるものと悪いと判断されるものの記述量が異なり、良い対応と悪い対応は必ずしも並行な関係にある訳ではなかった。あれば親切で良いが、なくてもクライエントにとって特に不都合とはみなされない対応や、あって当然であり、なければクライエントに不快な思いをさせるとみなされる対応があるといえる。

動物病院では、動物看護師は包括性や継続性は、良い対応の方が悪い対応より記述が多く、付加価値としての対応とみなす傾向があった。一方、利便性・快適性と対話性については、なければ不都合であるとみなす傾向があった。学生は動物病院に関して、利便性・快適性や継続性はそれ程、求めていなかったが、包括性は良い対応の方が悪い対応より記述が多く、付加価値としての対応とみなす傾向があった。また学生は、病院に関しては利便性・快適性と専門性は、なければ不都合であるとみなす傾向が見受けられた。

本研究と方法は同じでないが、歯科医療に求めることについても、歯科医とクライエントの間には見解の違いが認められた(木村ら, 1998; 小松崎ら, 1998)。歯科医が考える以上にクライエントは、歯科医院に対して利便性・快適性、対話性を求め、包括性、継続性、専門性は歯科医が考える程、求めていなかった。同じ医療でも、獣医療と歯科医療は種類が異なるため、直接、比較することに意味はないが、動物看護師の良い対応についての回答傾向は、歯科医院についてのクライエントの回答傾向と類似する部分があった。動物病院における対応について、学生と動物看護師の回答の比較からも、動物看護師は、飼い主のニーズを比較的よく理解していたこと言えるだろう。

本研究では、対応の内容を概念上、便宜的に 5 分類したが、医療現場ではそれぞれは相互に関連したものである。木村ら(2004)の動物病院における居心地の良い待合室についての調査によると、飼い主の約6割は、待ち時間の限度は30分以内と答えた。実際、場合によっては30分以上待たされることがあるにもかかわらず、同じ調査対象者の 8 割近くは、待つことに苦痛を感じていなかった。それは、待合室が明るい雰囲気で、スタッフの感じも良く、声かけもしてくれ、飼い主同士の関わりや、情報収集もできると飼い主が感じているため、待つことによる苦痛が和らげられているものと解釈できる。待ち時間の短縮は、本研究では利便性・快適性に分類される。来院から会計が済むまで、飼い主を院内に留め置くのではなく、一時外出ができるようにするなどの待ち合いシステムを変更するだけでなく、対話性に働きかけて、待ち時間にスタッフが声かけをしてクライエントを気遣い、クライエントから情報収集をし、待ち時間を長く感じさせないようにする方法もある。後者の場合は、その後の治療がスムーズに進み、さらに対話性の向上にもつながる利点がある。

学生による病院と動物病院の対応の比較から、動物病院では前述の包括性のみならず、説明(病状・現状、予防・飼い方・動物種、飼い主からの質問・相談回答)をより求めていた。それは、動物病院のクライエントは、自分のためではなく動物のために動物病院を利用しており、他者としての動物の状態をより詳しく知りたいこと、飼育動物に関する信頼性のある情報源・支援源が限られている現状では、そういったニーズを満たす場として動物病院を捉えていること、人の医療と比して獣医療の専門医は少ないことが理由として考えられる。

動物病院のクライエントのニーズをより満たすためには、対応の中の包括性の充実が提案できる。その理由の一つとして、包括性は、動物看護師と学生がともに付加価値としてみなしていたというように両者の見解が一致しているため、実効性が期待できる。そして包括性は、利便性・快適性のように、動物病院の一スタッフが改善に取り組むには困難である物理的、制度的な条件を克服しなくとも、個人が飼い主や動物への対応を変えるだけで改善される可能性もあり、現実的な課題でもある。これらのことから動物病院において、今後、人と動物の生活全般に渡る幅広い支援をより充実させて行っていくことが望まれる。

そして、インフォームド・コンセントができる医療関係者と利用者の関係を築くために、クライエント教育の必要性も示唆できる。本研究では、インフォームド・コンセントやクライエントによる治療の選択は、あまり多く指摘されなかった。それは、調査対象者が関わる医療現場では既に当然のこととして実施されており、あえて対象者の意識に上ら

なかったと解釈することもできるが、説明の必要性という観点からは、良い対応と悪い対応ともに記述がなされており、医療関係者とクライエントの関係が、インフォームド・コンセントに至る前の段階にとどまっている場合が多い可能性が考えられる。クライエント教育によって、動物看護師がより良いと考えている継続的に動物病院と関わることが、クライエントにとっても益があることが理解されるようになるだろう。

動物看護師の経験年数と経験業務の関係から、しつけ・カウンセリングという飼い主や動物との対話性がかなり重要視される業務を除き、動物看護師は比較的短期間で多様な業務を経験し、一人前になっていることが分かった。そのため、経験年数と回答傾向との間の関連が薄かったと考えられる。つまり、動物看護経験の長い人がより多くの記述をしたり、よりクライエントの意に沿った回答をしたりしている訳ではなかった。このことは、経験年数の長い動物看護師を対象とした、クライエント対応に関するスキルアップの研修の機会が不足している可能性も考えられる。

さらに、本研究と方法が異なるが、秋葉(1999)の報告と比較して、本研究の調査対象者である動物看護師は、経験年数も長くなり、様々な業務経験の割合も高まっていた。特に、しつけ・カウンセリングの経験者は、大幅に増加していた。日本動物看護学会が活動年数を重ね、当学会認定の動物看護師資格所持者が増加し、動物看護師養成講座も充実してくるなど当学会の発展に伴い、動物看護師の職場の現状や求められる能力も変化しているはずである。動物看護の分野が今後ますます発展できるように、定期的に実態調査を行い、必要な情報や研修の機会を提供していく必要性を感じる。

謝辞

本研究の実施にあたり、日本動物看護学会と会員の皆様にご支援とご協力をいただきましたことを感謝します。また本研究の一部は、2004 年度関西福祉科学大学共同研究費(代表:倉恒弘彦)より助成を受けました。

引用文献

1)秋葉亮子(1999)「動物看護士実態調査報告」『日本動物看護学会 第 8 回大会 要旨集』p4-6

2)藤田主一・園田雄次郎 編(1998)『医療と看護のための心理学』福村出版

3)長谷川浩編(1997)『系統看護学講座 別巻 14 人間関係論』医学書院

4)木村恵子・上平登母美・尾崎哲則・長田斉・小泉信雄・寺田薫(1998)「かかりつけ歯科医機能に関する研究:第一報 住民を対象としたアンケートとインタビューにおける機能項目と区分の検討」『口腔衛生学会雑誌』Vol.48 No.1, p152-154., 日本口腔衛生学会

5)木村満知子・藤田理恵子・大谷美紀・佐藤亜也子・斉藤亜紀江・深井麗子・野原宏実・新井陽子・山田幸子・松沢ふみ・児矢野早紀・庄子さとみ・宮川則子・藤田圭一(2004)「居心地の良い待合室作りをめざして」『Animal Nursing』Vol.9 No.1, p43-48, 日本動物看護学会

6)小松崎理香・本間敏道・田中英一・三ツ木浩・矢澤正人・尾崎哲則・長田斉(1998)「かかりつけ歯科医機能に関する研究:第二報 住民および歯科医師に対する意識調査」『口腔衛生学会雑誌』Vol.48 No.1, p 155-157, 日本口腔衛生学会

7)辰野千寿編(1996)『系統看護学講座 基礎 6 心理学』医学書院.

受理:2008年9月1日

話題提供

山梨動物看護師勉強会「PRIDE(誇り) & CONFIDENCE(自信)」3年間の報告

高橋真由(赤池ペットクリニック 本学会認定動物看護師、「PRIDE & CONFIDENCE」会長)

A report covering three years' activity at Yamanashi Veterinary Nurse Study Group named "PRIDE & CONFIDENCE"

Mayu Takahashi

〒400-0123 山梨県甲斐市島上条746番5号

はじめに

2004年2月22日、池袋サンシャインシティ文化会館で開催された日本動物看護学会・第15回例会において、自分達の仕事に対し自信と誇りが持てるように、『地方都市における動物看護師勉強会の立ち上げと今後の方向性について』の演題でこの勉強会について発表した。以降3年間の開催内容と運営方法について、ここに報告する。

関東ブロックの山梨県内からでも、首都圏で開催される勉強会に参加するには時間及び費用負担が大きいうえ、スタッフが 1〜2 名と少数な病院が多いため、残された者に業務のしわ寄せがくる事より、なかなか多くの勉強会に参加する事が出来ない現状であった。

この問題を解決するため、山梨動物看護師勉強会「PRIDE&CONFIDENCE」は各科目の専門家を講師に招き、県内の動物看護師が集まり知識や技術を高めるため月に 1 度勉強会を開催した。また、各病院スタッフ同士や協力企業との親睦を深めるため、納涼会と懇親会も毎年開催し、様々な方達との交流を深めている。

1. 私達の考える動物看護師

まず私達の考える動物看護師の担う業務は、いわゆる獣医助手、病院のお手伝いさんではなく人医療における看護師と同様に動物看護の部分を担う重要な職種であり、獣医学の基礎知識も習得した上で成り立つ動物看護という業務だと考えている。そのために、各分野の専門家から常に最新の講義を受ける機会が必要である。

2. 活動開始後の参加病院の増加

勉強会は合同セミナーを開催し 6 病院参加からのスタートだったが、勉強会の初期役員が、各病院の院長の理解と協力を得るため県内の動物病院を訪問し、勉強会の主旨を説明したり、また、初代会長による本学会誌への投稿記事を見たうえでの参加申し出もあり、2007年7月までに県内54病院中11病院と県内の大学生が参加し、毎回30人程が集まる勉強会となり皆で知識を高めている。

3. 3年間の活動実績

定例勉強会(CONFIDENCE・自信)と記念大会(ANNIVERSARY)の活動実績は**表1**の通りである。

2007月までに延べ36回の定例勉強会と3回の記念大会を開催し、参加人数も毎年増加し延べ1,040人が聴講した。更に納涼会や懇親会も毎年開催し毎回大勢が参加するため、様々な方と対話できるので皆の絆も深められている。

4. 運営方法

当勉強会は、動物病院スタッフ・動物看護師を会員としてその中から会長 1 名、副会長 2 名、参加病院の院長を相談役としている。

1 年間の活動費は、毎月の定例勉強会と納涼会、記念大会及び懇親会を含め、総額約90万円となる。この活動資金は、相談役からの年会費(1 病院当たりスタッフ数×¥5,000を目安)と、協力企業からの協賛金とその他の助

表1　活動実績：定例勉強会（CONFIDENCE・自信）および記念大会（ANNIVERSARY）

年月	定例会	演題	協力企業・団体など	参加病院数
2004年3月	プレセミナー	消毒法について	バイエルメディカル㈱	6病院
4月	CONFIDENCE 1	バランスの取れた食餌	マスターフーズリミテッド	8病院
5月	CONFIDENCE 2	犬と猫の犬糸状虫症	メリアルジャパン㈱	7病院
6月	CONFIDENCE 3	ノミ・ダニ予防法	メリアルジャパン㈱	7病院
7月	CONFIDENCE 4	アレルギー疾患用療法食	マスターフーズリミテッド	6病院
8月	納涼会	ビアテラスバーベキュー	企業4社参加	6病院
9月	CONFIDENCE 5	アトピーと食餌アレルギーの管理	アイムスジャパン㈱	6病院
10月	CONFIDENCE 6	食物アレルギーへの新しいアプローチ	日本ヒルズコルゲート㈱	5病院
11月	CONFIDENCE 7	尿石症と食餌管理	日本ヒルズコルゲート㈱	8病院
12月	CONFIDENCE 8	FLUTDの管理	アイムスジャパン㈱	8病院
2005年1月	CONFIDENCE 9	犬下部尿路疾患の管理	マスターフーズリミテッド	8病院
2月	CONFIDENCE 10	猫の慢性腎不全について	三共ライフテック㈱	9病院
3月	1st ANNIVERSARY	狂犬病について 犬猫の性成熟と性周期 犬の外耳炎管理	厚生労働省　健康局　結核感染症課 麻布大学　獣医学部　教授 日本全薬工業㈱	11病院
4月	CONFIDENCE 11	免疫とワクチン	共立製薬㈱	9病院
5月	CONFIDENCE 12	犬のフィラリア症	三共ライフテック㈱	10病院
6月	CONFIDENCE 13	Hill's食餌管理セミナー	日本ヒルズコルゲート㈱	8病院
7月	CONFIDENCE 14	ノミ・ダニのお話とフロントライン	メリアルジャパン㈱	7病院
8月	CONFIDENCE 15	鎮静・麻酔について	明治製菓㈱	10病院
	納涼会	焼肉大会	企業6社参加	8病院
9月	CONFIDENCE 16	生化学検査	富士フィルムメディカル㈱	10病院
10月	CONFIDENCE 17	ズーノーシスコントロールのすすめ	バイエルメディカル㈱	8病院
11月	CONFIDENCE 18	痛みの管理	ファイザー㈱	8病院
12月	CONFIDENCE 19	愛犬の年齢は家族の歴史です	明治製菓㈱	8病院
2006年1月	CONFIDENCE 20	眼の構造と眼疾患	千寿製薬㈱	7病院
2月	CONFIDENCE 21	犬と猫の体重管理	アイムスジャパン㈱	7病院
3月	2nd ANNIVERSARY	犬の僧帽弁閉鎖不全症 心疾患に対する食事管理 犬のしつけ方について	三共ライフテック㈱ マスターフーズリミテッド 山梨県動物愛護指導センター	10病院
4月	CONFIDENCE 22	ワクチンについて	㈱微生物化学研究所	9病院
5月	CONFIDENCE 23	犬糸状虫症（犬フィラリア症）	日本全薬工業㈱	7病院
6月	CONFIDENCE 24	アイムス　基礎栄養学	アイムスジャパン㈱	8病院
7月	CONFIDENCE 25	内部・外部寄生虫について	ファイザー㈱	8病院
8月	CONFIDENCE 26	皮膚トラブルのシャンプー療法セミナー	㈱ビルバックジャパン	8病院
	納涼会	焼肉大会	企業10社参加	8病院
9月	CONFIDENCE 27	皮膚疾患と薬用シャンプー	フジタ製薬㈱	8病院
10月	CONFIDENCE 28	内視鏡製品・検査について	㈱AVS	9病院

次ページへ続く

表1の続き

11月	CONFIDENCE 29	抗生物質の基礎	明治製菓㈱	8病院
12月	CONFIDENCE 30	内部寄生虫について	ﾊﾞｲｴﾙﾒﾃﾞｨｶﾙ㈱	8病院
2007年1月	CONFIDENCE 31	食物アレルギーと療法食	三共ﾗｲﾌﾃｯｸ㈱	7病院
2月	CONFIDENCE 32	泌尿器疾患と療法食	ﾏｽﾀｰﾌｰｽﾞﾘﾐﾃｯﾄﾞ	8病院
3月	3rd ANNIVERSARY	高齢犬の食事管理 愛犬の年齢は家族の歴史です 動物看護の本質を探る 入院動物の栄養管理 症例報告　看護過程をふまえた 舌断裂の猫の看護 症例報告　看護過程をふまえた 開放骨折の犬の看護	日本ﾋﾙｽﾞｺﾙｹﾞｰﾄ㈱ 明治製菓㈱ 西谷獣医科病院 日本ﾋﾙｽﾞｺﾙｹﾞｰﾄ㈱	9病院
4月	CONFIDENCE 33	狂犬病のはなし	㈱微生物化学研究所	9病院
5月	CONFIDENCE 34	犬のﾌｨﾗﾘｱ症	ﾉﾊﾞﾙﾃｨｽｱﾆﾏﾙﾍﾙｽ㈱	9病院
6月	CONFIDENCE 35	ﾊﾞﾗﾝｽの取れた食餌	ﾏｽﾀｰﾌｰｽﾞﾘﾐﾃｯﾄﾞ	7病院
7月	CONFIDENCE 36	乾性角結膜炎	ｼｪﾘﾝｸﾞﾌﾟﾗｳｱﾆﾏﾙﾍﾙｽ㈱	8病院

成でまかなっているため、スタッフの勉強会参加費は一切ない。勉強会場は甲府市内のホテルを年間予約し、企業の協力により経費負担の軽減を図っている。

5. 定例勉強会

毎月の勉強会前は、当日資料、講師のご経歴、会場予約の確認から始まる。各病院の午後の休診時間を目安に、毎月第1火曜日の午後1時から3時までの2時間で定例開催している(**図1**)。開催1週間前には参加病院に案内を送信し、その際に相談役に座長のお願いもしている。

司会と受付は、会長・副会長2名の3人が輪番で行い、座長も相談役に輪番でお願いしている。

6. 記念大会・懇親会

定例勉強会を1年間毎月開催できた区切りとして年度末の3月には記念大会を行い、2007年3月までに3回の盛大な記念大会を開催した(**図2**)。

記念大会は毎年、日本動物看護学会の今道友則会長、山梨県獣医師会の百田久光会長を来賓に招き、講師は、厚生労働省や山梨県庁の先生、麻布大学の教授、本学会理事の先生等に依頼する他、勉強会参加の動物看護師による症例報告や飼い主参加型セミナーを企画するなど、普段の定例勉強会では行えない事を企画している。

盛大な会を開催したいため、大会準備は半年ほど前から役員や相談役で話し合い、院内掲示用ポスターや飼い主用チラシの制作(**図3**)、協力企業との話し合いなど早い段階から準備にとりかかっている。

記念大会終了後は、親睦を深めるため懇親会も行っている(**図4**)。来賓の今道会長、百田会長ならびに講師の先生、相談役、協力企業の方々や看護師、トリマー、大学生など大勢が参加し、毎年盛大な懇親会となる。懇親会は、親睦がより深められるようテーブル席ではなく自由に行き来できるように立食としているが、なかでも今道会長のもとには先生とお話がしたく看護師や大学生が列になって集まり、本学会の話を伺いながらお酒を注いでいる光景が毎年見られる。このような機会は日頃から企業や学会とのお付き合いがないスタッフにはとても刺激的な事であり、参加者にとって大変有意義な会となる。

7. 納涼会

定例勉強会や記念大会の他に協力企業との絆を更に深めるため毎年8月に謝恩焼肉大会を開催し、現在まで

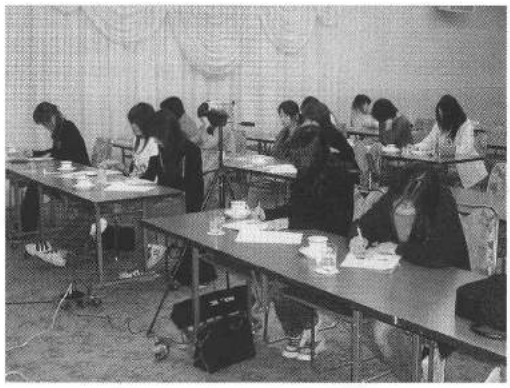
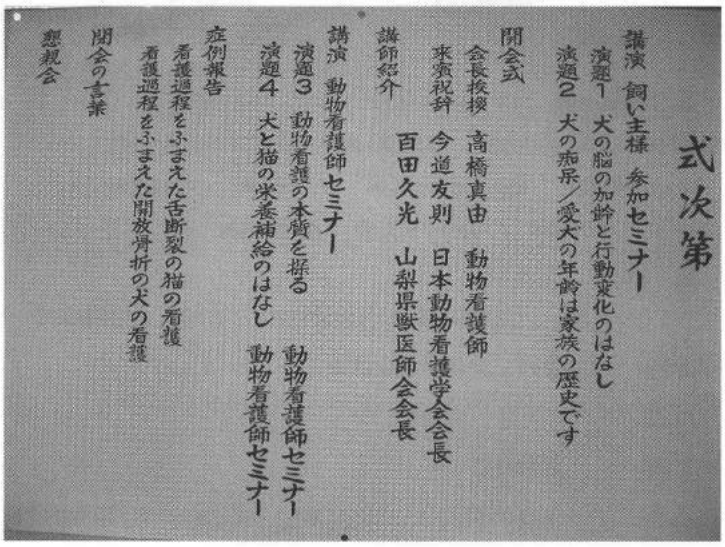


図1　定例勉強会の様子

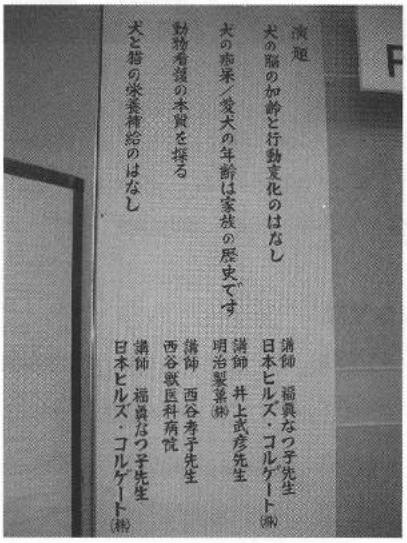
今道友則 日本動物看護学会会長

百田久光 山梨県獣医師会会長

本勉強会会長-投稿者-



当日の式次第



演題

図2　記念大会の様子

に3回の納涼会を開催した(**図5**)。

納涼会は会長挨拶、相談役挨拶から始まり乾杯の後、協力企業、相談役も含め参加者全員が簡単に自己紹介をして話しやすい環境を作っている。協力企業の方からは「日頃、獣医師の先生方と対話する機会はあっても看護師の皆様にご意見・ご要望を伺うチャンスはあまり多くないなかで、看護師の皆様との距離を縮める絶好の機会に恵まれました」と大変嬉しいお言葉を頂いている。

このような機会があれば、普段関わる事の少ない他院の先生やスタッフ、そして協力企業との相互の親睦を深めるきっかけとなり、普段の勉強会だけでは得る事のできない楽しみもあるので毎年とても大好評である。

2周年記念大会

3周年記念大会

図3　記念大会のポスター（左）とチラシ（右）

図4　懇親会の様子

図5　納涼会の様子

表2　協力企業一覧　五十音順・社名は一部当時

アイムスジャパン㈱	㈱オリンパス	共立製薬㈱	千寿製薬㈱	大日本住友製薬㈱	日本全薬工業㈱	日本ヒルズ・コルゲート㈱
ノバルティスアニマルヘルス㈱	バイエルメディカル㈱	㈱微生物化学研究所	ビルバックジャパン㈱	ファイザー㈱	フジタ製薬㈱	
富士フィルムメディカル㈱	豊前医科㈱	マスターフーズリミテッド	明治製菓㈱	メリアルジャパン㈱	森久保薬品㈱	

8. その他業務

その他の業務として、実績報告を行うため役員3人と相談役が集まり年1回の定期総会を開催し、年度末には役員による会計報告、またそれらを勉強会参加スタッフに周知させるため年2回の会報を発行している。会報には会長挨拶、相談役挨拶、協力企業からの一言、勉強会参加状況や今後の予定などを記載している。記念大会や懇親会、納涼会で撮影した写真は後日参加病院や協力企業に郵送している。写真を送ると大変喜ばれるため集合写真の他に、様々な人を撮るように心がけている。

9. 協力企業

協力企業は表の通りである(**表2**)。勉強会が発足してからの3年間で19社に協力していただき様々な講義を聴講し、私達看護師の知識の向上となった。誌面をお借りして改めてお礼申し上げます。

おわりに

毎日の業務において、飼い主様からの疑問はよく私達にも問いかけられる。飼い主様と動物が共に生活していく上で私達動物看護師は適切な情報提供や指導、また患畜のQOLの向上に務めるとても大切な役目を持った仕事である。私達は、動物看護師の集まる機会の少ない中で、このような勉強会を継続的に行っている。今後も動物看護師が積極的に集まり、みんなで知識・技術を高め、飼い主様に適切な情報提供をして向上心を持った看護師の集まる会にし、会の名の通り仕事に対し誇り(PRIDE)と自信(CONFIDENCE)を持っていきたいと考えている。

受理：2008年6月10日

原著論文

広島県下の私立幼稚園における動物飼育に関するアンケート調査

三上崇徳[1)]、木場有紀[2)]、堀見敏洋[3)]、森元真理[4)]、谷田創[5)]

Questionnaire on the care and handling of animals kept at private kindergarden in Hiroshima prefecture

Takanori Mikami, Yuki Koba, Toshihiro Horimi, Mari Morimoto, Hajime Tanida

1）広島大学大学院 生物圏科学研究科 生物資源科学専攻 修士課程2年

2）広島大学大学院 生物圏科学研究科 研究員

3）広島大学大学院 生物圏科学研究科 生物資源科学専攻 修士課程2年

4）広島大学大学院 生物圏科学研究科 生物資源科学専攻 修士課程1年

5）広島大学大学院 生物圏科学研究科 教授

〒739-8528 広島県東広島市鏡山1丁目1番1号

要約

広島県下の私立幼稚園の動物飼育の概要を把握するために、200園を対象としてアンケート調査を行った。回答が得られた112園中、動物を飼育している幼稚園は82園であった。アンケートでは動物の福祉を懸念する回答や、動物の福祉と教育の両立の困難さを示唆する回答も認められ、幼稚園での動物飼育をより良いものにするためにも、今後はこれらの問題解決を図っていくことが重要である。

KEY WORD：幼稚園、動物飼育、動物の福祉、アンケート調査、幼児教育

はじめに

近年、犯罪の低年齢化やいじめ問題などを背景に子どもの心の教育が注目され、幼児期における自然とのふれあいの重要性が指摘されている。それに伴い子どもにとって一番身近な自然である学校飼育動物に対する関心も高まり、現在までに数多くの研究が行われている[2,3,8)]。また、2001年に開催された第9回人と動物との関係に関する国際会議（以下 IAHAIO）では、学校教育における動物についてのリオ宣言[The IAHAIO Rio Declaration on pets in school]が発表された。リオ宣言では、子どもたちと接する動物が安全かつ健康で、教育現場に十分適応しており、動物福祉に則った適切な飼育管理が行われなければならないことを強調している。さらに宣言は、教育目標に「動物に限らず 学校の様々な教育カリキュラム全般において知識及び学習意欲を向上させること」「人間以外の生命に対しても尊敬の念と責任感を高めること」の二つを必ず含み、「それぞれの子どもの感情表現能力と参加状況を考慮して教育目標を立てること」を求めている[10)]。

これらの経緯を踏まえて、本研究室はこれまでに広島県下の幼稚園と全国の国立大学附属幼稚園を対象として飼育動物に関する基礎的情報収集を行ってきた。その結果、ほとんどの幼稚園には動物飼育施設が備わっていたが、IAHAIO のリオ宣言の基準に沿って動物介在教育（Animal Assisted Education：以下 AAE）を実施していくためには「幼稚園の動物飼育に関わる動物福祉プログラム」と「幼児を対象としたAAEプログラム」の開発が必要であることが明らかとなった[10)]。

そこで本調査では、幼稚園における動物の福祉に配慮した AAE プログラムの開発のための情報を収集することを目指して、広島県下の私立幼稚園を対象にアンケート調査を行った。

材料と方法

①調査対象：財団法人広島県私立幼稚園連盟に加盟する私立幼稚園200園とした。

②実施時期：2007年6月～2007年7月とした。

③調査方法：調査は全て郵送アンケートとした。アンケートの回答者は飼育担当教員、またはそれに相当する者とした。アンケートの概要を以下に記す。

【全ての幼稚園を対象とした質問】

・幼稚園における動物飼育の有無及び過去の飼育経験（選択式）

【過去に動物を飼育していた幼稚園、現在動物を飼育している幼稚園を対象とした質問】

・鳥インフルエンザの流行時に鳥類飼育をしていた場合の対応（自由記述式）

【過去に動物を飼育していた幼稚園のみを対象とした質問】

・飼育をやめた理由（自由記述式）

【現在、動物を飼育している幼稚園のみを対象とした質問】

・飼育している動物種（自由記述式）

※対象となる動物種は、哺乳類、鳥類、および先行研究において爬虫類の中で最も多く飼育されていたカメとした[10]。

・飼育に関する苦情の有無（自由記述式）
・動物飼育に関する悩み（自由記述式）
・動物の罹病時の対応（選択式）
・動物飼育で困ったときの助言者の有無（自由記述式）
・動物飼育の教育目的の有無（自由記述式）
・教育目的がある場合、目的達成のための具体的な取り組み（自由記述式）
・飼育動物に対する印象（自由記述式）

結果

①回収率及び飼育状況

112 園より回答が得られた（回収率 56.0%）。112 園中、現在動物を飼育している幼稚園は 82 園（73.2%）で、過去に飼育したことがある幼稚園は 16 園（14.3%）、全く飼育したことがない幼稚園は 14 園（12.5%）であった。

②飼育動物種

現在動物を飼育している 82 園では、21 種類の動物が飼育されていた。[ウサギ:67.1%]が最も多く、次いで[カメ:40.2%][インコ:40.2%][ニワトリ:19.5%（チャボ、ウコッケイ含む）]であった（**図 1**）。[クジャク:8.5%][ヤギ:4.9%][イヌ:2.4%][ヒツジ:1.2%]など比較的大型の動物も飼育されていた。また、個々の幼稚園における飼育動物の種類数は最多で 9 種類、最少で 1 種類であった。

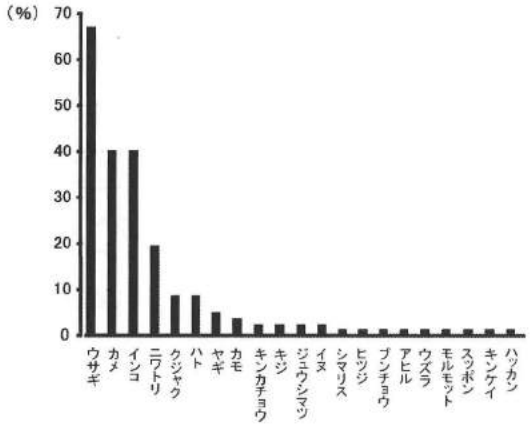


図1　飼育動物種（n=82, 複数回答）

※インコにはセキセイインコ、オカメインコの回答を含めた。
ニワトリにはウコッケイ、チャボの回答を含めた。
ハトにはクジャクバト、山鳩の回答を含めた。

③飼育をやめた理由

過去に飼育を行っていた 16 園において、飼育をやめた理由の多くは[長期休暇中の世話が困難:31.3%][ヘビやイタチなどによる被害:25.0%][人畜共通感染症への危惧:18.8%][飼育小屋の移転・撤去:18.8%]など、主として人間側の要因であった（**図 2**）。

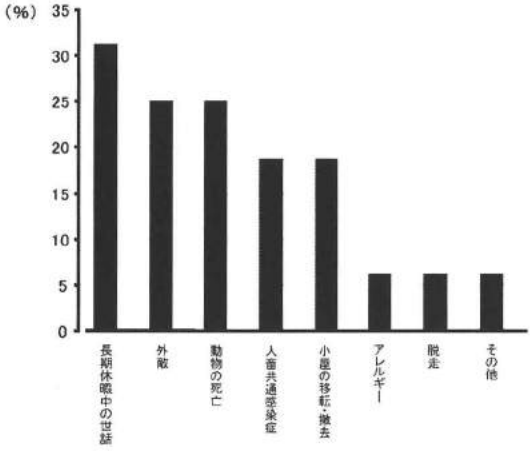


図2　飼育をやめた理由（n=16, 複数回答）

④鳥インフルエンザ流行時における対応

現在、および過去に動物を飼育していた 98 園中、51 園（52.0%）から回答が得られた。主な対応としては[子どもたちと鳥類とのふれあいの制限:33.3%]が最も多く、次いで[小屋の周囲をカバーで覆うなど小屋の改良:25.5%][手洗いとうがいの励行:19.6%]であった。少数ではあったが[飼育数を減らした:2.0%][飼育を中止した:2.0%]という回答もあった（**図 3**）。

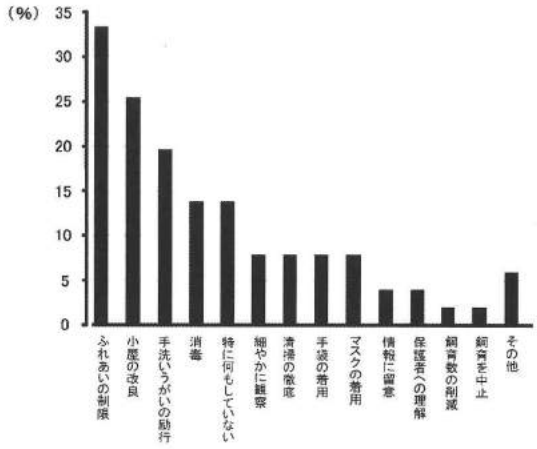


図3　鳥インフルエンザ流行時の対応

(n=51, 複数回答)

⑤飼育動物に関する苦情

82 園中 16 園(19.5%)がこれまでに苦情を経験したことがあると回答した(**図4**)。16 園中 15 園(93.8%)の苦情は近隣住民からのもので、それ以外は[保護者:6.2%]からであった。苦情の内容は[ニワトリ、クジャクなどの鳴き声:81.3%]が大半を占めていた(**図5**)。特に、クジャクを飼育している幼稚園の 42.9%が鳴き声に関する苦情を経験していることが明らかとなった。

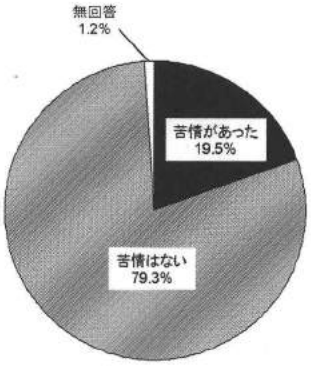


図4　飼育動物に関する苦情 (n=82)

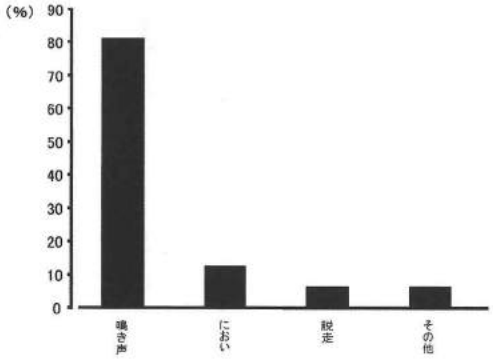


図5　苦情の内容 (n=16, 複数回答)

⑥動物飼育に関する悩み

悩みがあると回答したのは82園中27園(32.9%)で、[繁殖に関する悩み]が6園と最も多かった(**図6・7**)。6園中4園は[繁殖させたいが上手くいかない]、2園は[増えすぎて困る]というものであった。[増えすぎて困る]の2園は共にウサギに関してであったが、[繁殖させたいが上手くいかない]の4園はウサギ、インコ、ニワトリ、シマリスに関してであった。「幼児が乱暴に扱うことがあり、ウサギが神経質になる傾向がある」「夏の暑さ、冬の寒さなどを自分で訴えることのできない動物たちの健康状態、また気持ちを把握することの難しさを感じる」など、動物の福祉を考慮した回答もあった。

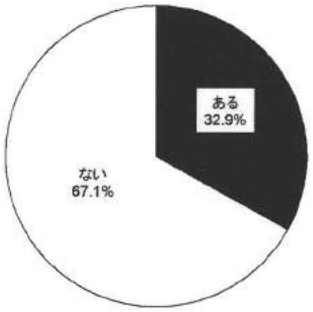


図6　動物飼育に関する悩み (n=82)

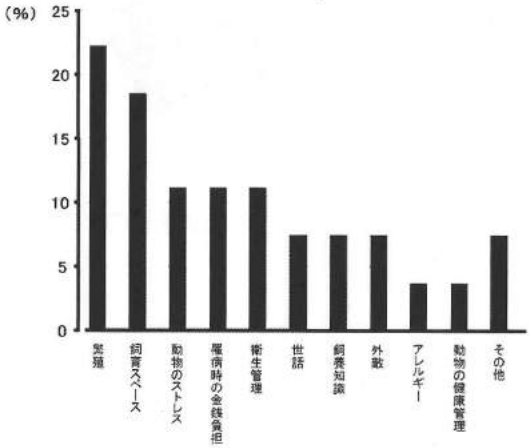


図7　動物飼育に関して困っている内容

(n=27, 複数回答)

⑦動物の罹病時の対応

82 園中 80 園(97.6%)より回答が得られ、68.3%が[動物病院に連れて行く]、23.2%が[病院には行かず園で様子を見る]と回答した(**図8**)。

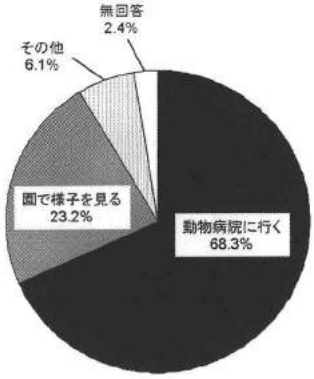


図８　動物の罹病時の対応（n=80）

⑧飼育で困ったときの助言者の存在

82 園中 79 園(96.3%)より回答が得られ、57.3%が[助言してくれる人がいる]と回答した(**図 9**)。助言者としては[獣医師:48.9%]が最も多く、次いで[動物園飼育員:19.1%][飼育に詳しい幼稚園の同僚:12.8%][ペットショップ店員:8.5%]となっていた(**図 10**)。

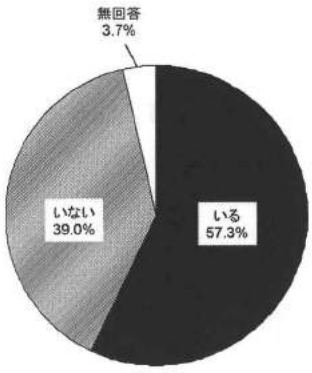


図９　飼育で困ったときの助言者の存在
（n=79）

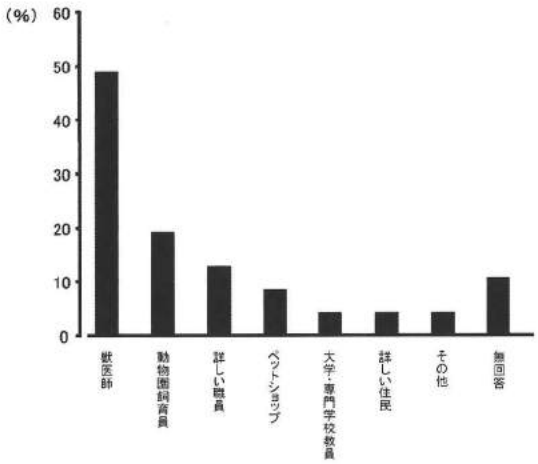


図 10　助言者の内容（n=47，複数回答）

⑨動物飼育の教育目的

教育目的があると回答したのは 82 園中 72 園(87.8%)であった。目的は[命の大切さを学ぶ:62.5%][心の成長:45.8%]といった心を育む教育に関する回答が大半を占めていた(**図 11**)。

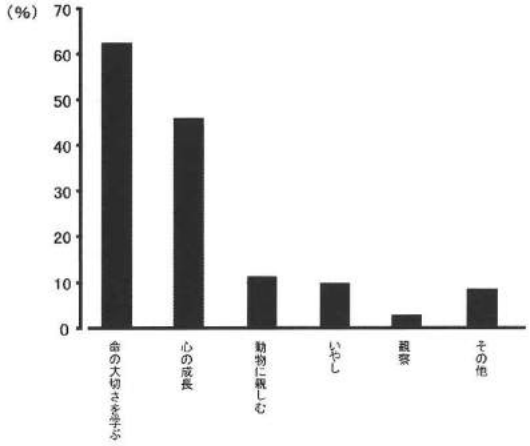


図 11　動物飼育の教育的目的（n=72，複数回答）

⑩教育目的達成のための具体的な取り組み

⑨で目的があると回答した幼稚園 72 園を対象に、目的達成のための具体的な取り組みについて質問したところ、53 園(73.6%)から回答が得られた。「餌を手から与える」「園庭に囲いを作ってふれあう機会を設ける」など積極的にふれあいの機会をもつという回答が最も多く(34.0%)、次いで「当番で餌を与える、掃除を手伝う」など世話をさせるという回答が多かった(28.3%)(**図 12**)。

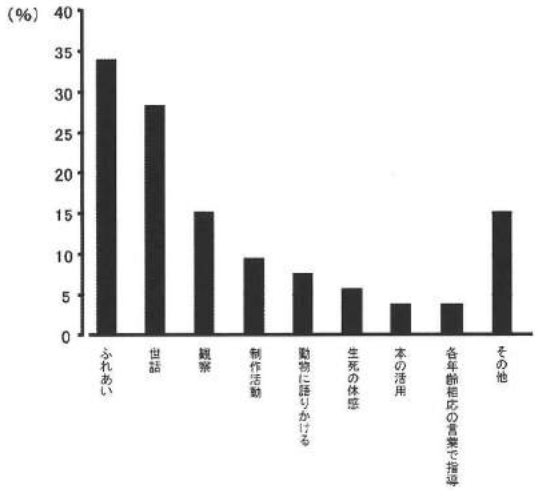


図 12　教育目的達成のための取り組み
（n=53，複数回答）

⑪飼育動物に対する印象

飼育動物に対する印象を自由記述式で質問した結果、82園中57園から回答が得られた。

この質問では、子どもにとって良い影響に関する回答(例:子どもの成長には生き物の存在は大切、子どもの優しさが培われる、子どもたちが喜んで様子を見ている、子どもが喜んでさわったり餌を与えたりしているのを見ると大切なことだと感じる)を[子ども+]、子どもへの悪影響を懸念する回答(例:感染症が心配でなかなかふれあう機会を増やせない)を[子ども−]、回答教員にとってポジティブな印象に関する回答(例:かわいい、癒される、身近にいて世話をしていると愛情を感じ可愛くてたまらない)を[教員+]、回答教員にとってネガティブな印象に関する回答(例:怖い、死んだときつらい)を[教員−]、動物飼育に関して前向きな回答(例:元気で長生きしてほしい、動物の体調の変動など人間と同じように気に掛かる、生き物なので責任を持って育てる)を[動物+]、動物の福祉を懸念する回答(例:動物が快適に過ごせているか疑問、小屋の環境が良くない、園児が幼いゆえ乱暴な扱いがたまにあり申し訳ない、命の大切さを伝えてくれる大切な動物だが家庭のペットと違いかわいそうな気がする)を[動物−]と分類し、それ以外を[その他]とした。

[子ども][教員]についてはプラスの回答(それぞれ33.3%、26.3%)がマイナスの回答(それぞれ 1.8%、3.5%)を上回っていた。一方、[動物]についてはマイナスの回答(12.3%)がプラスの回答(7.0%)を上回っていた(**図13**)。

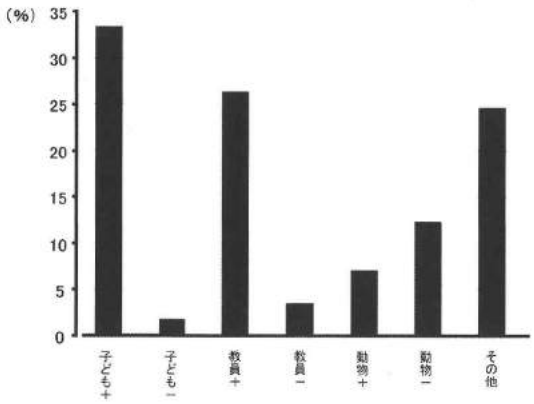


図13 飼育動物に対する印象
(n=57, 複数回答)

考察

回答のあった幼稚園の約 7 割が動物を飼育しており、全園の動物種は21種類におよんでいた。21種類という数字は過去の調査[10]に比べてやや少ないが、これは本調査ではアンケートの煩雑化を防ぐために、調査対象の動物種を限定したためと考えられる。哺乳類、鳥類は、中川[7]が「子どもたちをひきつけ有効な影響を与えるには、小型哺乳類や小鳥、チャボなどの愛玩用動物を飼育することが効果的だといえる」と指摘しており、またカメに関しては先行研究[10]において数多くの幼稚園で飼育されていたことより、AAE における役割が比較的大きいと考えたため、本調査の対象動物とした。

最も多く飼育されていたのはウサギで、これは本研究室の過去の調査やその他の学校飼育動物に関する論文でも同様の結果が報告されており、幼稚園におけるウサギの人気が持続していることが示唆された[4,9]。

鳥インフルエンザ対策に関しては、少数ではあるものの飼育を中止した園が認められた。また、人畜共通感染症への危惧から動物飼育を止めた園も 3 園認められた。子どもたちに対する安全対策と考えればやむを得ない処置かもしれないが、動物の飼育を教育の一環としてとらえた場合、教員が人畜共通感染症についての知識を持ち、動物飼育を継続できる適切な対策をとることが重要である。また、動物の罹病時に[病院には行かない]とする幼稚園は23.2%にも上ったが、子どもたちと動物双方のためにも、専門的な診療を速やかに受けることが今後望まれる。

幼稚園がこれまでに経験した飼育動物に関する苦情の多くはニワトリやクジャクの鳴き声であった。特にクジャクに関しては飼育している幼稚園の約半数が苦情を経験していた。インドクジャクの雄は深夜や早朝に鳴くがその鳴き声は甲高く、騒がしいので非常に評判が悪いが、マクジャクの鳴き声はインドクジャクの鳴き声よりは低く、落ち着きがあると言われている[12]。これらのことからクジャクやニワトリを飼育動物として導入する際には雌雄や種に留意する必要があると考えられる。また、クジャクやキンケイなどの展示・観賞用の動物に関しては幼稚園を含む学校などの教育施設で飼育するよりも動物園の活用を考えたほうが良いとの指摘もある[1]。さらに、動物飼育をやめた理由の多くは人間側の認識不足や感情などであったことを考慮すると、動物を導入する場合は住民や保護者の理解を含む様々な要素を慎重に検討して動物種を選定すべきであろう。

動物飼育に関する悩みで最も多かったのは繁殖につ

いてのものであった。繁殖に関する悩みについて、過去の調査では[繁殖の管理]が多くを占めていたが、今回の調査では[繁殖させたいが上手くいかない]が過半数を占めていた[10]。繁殖が上手くいかない原因としては親の性格や相性、年齢の他に病気や栄養不足、落ち着いて繁殖できる飼育環境が確保されていない可能性などが考えられ、繁殖計画を立てる際には動物の立場に立って繁殖しやすい環境を作る必要があると考えられる[6]。

学校での動物飼育体験が子どもに与える効果として、中川[7]は「愛する心の育成をはかる」「自分への肯定感・自尊心を培う」「生命尊重・責任感を培う」「謙虚さを知る」「協力する気持ちを養う」「人を思いやる心・共感を養う」「科学的視点を得る」「ハプニングへの対応力を高める」「マザリング効果」を挙げており、それらは特定の動物を世話しながら飼い続けて、動物への愛着が培われてこそ得られる効果であるとしている。

さらに 2001 年にブラジルのリオで開催された第 9 回 IAHAIO では、リオ宣言として動物介在教育実施ガイドラインが発表され、動物を教育に導入することによって教育効果を得ようとするならば、AAE に導入される動物が適正かつ安全に飼育されていることが必要条件であること、また明確な学習目標を設定しなければならないことが強調されている。

本調査では目的に関する質問で約 90%の 72 園が目的があると回答し、その内具体的な取り組みがあると回答したのは 53 園であった。取り組みの内容は、「積極的にふれあう機会を設ける」や「園児を飼育活動に参加させる」など具体的な回答がある一方で、取り組みについての回答の中には「具体的な取り組みは特にないが、生き物の存在自体が目的にかなっていると思う」という回答も存在した。

これに関して、谷田ら[11]は「我が国の現状を考えると西欧諸国で取り上げられている AAE のスタイルをそのまま導入する必要は必ずしもないように感じる。生き物を教育のサプリメントと考え、日々の生き物との関わりの中で自然に子どもを育てるというのが、我が国の伝統的な教育的手法であり、子どもたちが生き物を身近に感じることこそが今の社会に必要とされているのかもしれない」と指摘している。本来は具体的な指導計画を設定することが望ましいが、それが難しいとしても各幼稚園は生き物を飼育することの意味や意義、そして生き物に対してどのような立場をとるのかを最低限明確にする必要があると考えられる。

飼育動物の印象について、[子ども][教員]ではプラスの回答がマイナスの回答を上回っていたが、[動物]ではマイナスの回答がプラスの回答を上回っていた。[動物－]では、「子どもが幼いので乱暴な扱いがたまにある」「子どもの乱暴な扱いによりウサギが神経質になる傾向がある」など、動物の福祉と教育との両立の難しさを挙げた回答と、「予算の関係もあり、飼育舎がウサギにとって居心地の良い空間でない」「日当たりなどが悪く小屋の環境があまり良くないため、可哀想との思いがある」など、設備面の不十分さを挙げた回答が認められた。

では、[動物－]を解消するためにはどのような施策を行う必要があるだろうか。学校飼育動物に関する問題に長年携わっている中川獣医師[5]が「動物とのふれあいから、子どもたちに何かを学んで欲しいと思うなら、飼育が適切でなければならない。大人がその姿勢をきちんと見せることが、子どもたちに愛と思いやりと死を教えることにつながるのである」と指摘しているように、動物飼育によって教育効果を得ようとするならば、動物の福祉を念頭に置いて飼育しなければならない。また、人間と動物は言葉で通じ合えないために福祉的配慮は合理性に欠けた、独善的なものになってしまう危険性もあり、科学的根拠に基づいた動物に対する正しい知識を持つ必要がある[13]。

そこで、今後は本調査で得られたデータを基にさらに研究を進め、学校飼育動物の飼育状況の評価方法やストレスを軽減する方法、動物の福祉と教育を両立させる教育プログラムなどを検討することが必要であると考える。

謝辞

本調査を遂行するに当たり財団法人広島県私立幼稚園連盟、及び広島県下の私立幼稚園の皆様にご協力いただきました。ここに深く御礼を申し上げます。この研究は科学研究費補助金[基盤研究(c):18580269]および広島大学学部・附属学校共同研究機構の助成を受けて行いました。

参考文献 引用文献

1) 鳩貝太郎、中川美穂子 編(2003) 学校飼育動物と生命尊重の指導－学校で動物を飼う意義と適切な管理について再考する－:116-119:教育開発研究所

2) 早坂絵里、青山真人、杉田昭栄(2000) 小学校における飼育動物への教員と児童の意識。ヒトと動物の関係学会誌, 8:78-82:ヒトと動物の関係学会

3) 廣瀬由美、増澤康男(2005) 学校飼育動物を通して児童が学ぶもの－ヒトと動物の多様な関係を認識することの重要性－, ヒトと動物の関係学会誌, 15:84-88:ヒトと動物の関係学会

4) 石川学、大原佳世子、土井章三、居神憲男、高橋峰男、松田政明(2005) 学校等

における動物飼育の現状と問題点, 広島県獣医学会雑誌, 20:61-65:広島県獣医師会

5)中川美穂子(1999) 教育の現場と動物-① 学校飼育動物の現状, Relatio, 2 39-41:緑書房

6)中川美穂子 監(2000) 学校飼育動物のすべて－子供とゆとりある飼育を楽しむために－:65:株式会社ファームプレス

7)中川美穂子(2007) 小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4:53－65:お茶の水女子大学

8)中島由佳、中川美穂子、無藤隆、吉本恒幸、池田日佐子、小林道正(2007) 学年での動物飼育体験が子どもの動物への共感性および向社会的行動の発達に与える影響の検討, 動物飼育と教育, 6:43-46:全国学校飼育動物研究会

9)大和田一雄、朱宮正剛(2004) 学校飼育動物の現状－山形県におけるアンケート調査結果から－, 実験動物と環境, 12(1):64-67:実験動物環境研究会

10)谷田創、木場有紀(2004) 幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性,日獣会誌, 57(9):543-548:日本獣医師会

11)谷田創、木場有紀 編 (2004) 幼稚園における動物を通した教育のためのガイドブック:13-19、39-61:広島大学動物介在教育研究会

12)社団法人日本獣医師会(2000) 学校飼育動物の診療ハンドブック:90-91

13)上野吉一(2004) 動物の福祉はなぜ必要か－動物福祉の理論と実践－②心理学的幸福の確立とその方策としての、環境エンリッチメント, アニマル・ナーシング 9(1):63-68:日本動物看護学会

受理：2008年8月5日

原著論文

愛着のタイプ及びその度合から見た飼い主のペットの安楽死選択に関する意識

ー大学生を対象にした調査データを基にー

杉田陽出（大阪商業大学 経済学部経済学科 准教授）

Owners' Perception of Pets As Seen in the Relationship Between the Type and the Degree of Attachment to Pets and Decision-Making on Euthanasia of Pets: Using Data on College Students

Hizuru Sugita

〒577-8505 大阪府東大阪市御厨栄町4丁目1番10号

Abstract

This study examines the relationship between the type and the degree of owners' attachment to pets and their decision-making on euthanasia of pets that are seriously injured or suffering from terminal illness. By conducting factor analysis with college students, attachment to pets was classified into two types: "friend substituting" and "perceived animal characteristics." The degree of each attachment was compared between respondents who approve of euthanasia and those who oppose euthanasia. The results show that the degree of friend substituting is higher but the degree of perceived animal characteristics is lower for male respondents who oppose euthanasia than for those who approve of euthanasia. That is, for males, the degree of friend substituting is proportional to opposition to euthanasia, while the degree of perceived animal characteristics is proportional to approval of euthanasia. For females, on the other hand, neither the type nor the degree of attachment influences their decision-making on euthanasia. Regardless of the type and the degree of attachment, females tend to oppose euthanasia. In addition, the type of attachment that relates to decision-making on euthanasia was found to vary depending on what kind of pets respondents chose as their closest pets.

Keywords: perception of pets, attachment to pets, decision-making on euthanasia of pets, college students

1. はじめに

1-1 調査目的

獣医師を対象にしたKogure & Yamazaki（1990）の調査では、イギリス人に比べて日本人は動物の安楽死処置に消極的であるという結果が報告されている。この調査は特に健康な動物の安楽死処置に関する獣医師の意識に着目していると考えられるが、イギリスを含めた欧米の獣医師と日本の獣医師の安楽死に関する意識の違いについては、この調査報告のみならず、動物の安楽死に関する獣医師会の規定のあり方や研究の数にも反映されている。

アメリカやオーストラリアの獣医師会では、安楽死の処置方法をはじめ、どのような場合に安楽死を行うべきか、処置を行う過程で獣医師や病院スタッフが留意すべきこと、さらには飼い主とのコミュニケーションの図り方に至るまで、詳細に規定されたガイドラインが存在する（e.g., American Veterinary Medical Association, 2007; Veterinary Practitioners Registration Board of Victoria, 2006）。また、これらの点については、獣医師会のガイドライン以外にも、多くの文献や論文にまとめられている（e.g., Cornell et al., 2007; Hart et al., 1990; Hetts & Lagoni, 1990; Katcher & Rosenberg, 1979; Kay et al., 1988; Lagoni & Butler, 1994）。さらに、ペットの安楽死が飼い主に及ぼす影響に関する研究も多数見受けられる。例えば、飼い主にとってペットの安楽死を決断するのは困難であるが、自然死を選んだ飼い主よりも安楽死を選んだ飼い主の方がペットへの愛着が強く、ペットの死後に経験する罪悪感や悲嘆の程度

が軽い(Cowles, 1985; McCutcheon & Fleming, 2002; Quackenbush & Glickman, 1984)といった研究結果は、欧米社会におけるペットの安楽死についての見解やペットロス要因の一端を示している。

これに対して、社団法人日本獣医師会(2004)の「小動物医療の指針」では、安楽死に関する記述はわずかにとどめられている。動物処分方法関係専門委員会(1996)による「動物の処分に関する指針の解説」では、安楽死の対象動物を分類し、それぞれの処分方法について記載しているものの、前述した海外のガイドラインに比べると、網羅する項目の多様性や内容の具体性という点では及ばない。また、日本においてもペットロスの問題が注目されつつあり、安楽死との関係について言及する論文はあるが(e.g., 新島, 2006)、飼い主のペットの安楽死選択やその影響を主眼に置いた実証的研究は未だ少ないといえよう。この点から見ると、欧米に比べて日本では、ペットの安楽死に関して、積極的に取り上げ論議すべき研究テーマといった位置付けはされていない観がある。

動物や自然を人間の支配下に置くユダヤ・キリスト教の思想に対して、動物や自然と人間の間に明確な境界線を引くことを控える仏教や神道の影響という観点からしばしば説明されるのであるが(Knight, 2003; 林, 1999; 矢野, 2004)、欧米人に比べて、日本人は動物を殺す行為に消極的あるいは否定的な傾向があるといわれる。獣医師が動物の安楽死処置に対して消極的な傾向がある点のみならず、安楽死に関する記述や研究が少ない点についても、このような日本の文化的背景が一つの要因として働いているものと推察される。しかしながら、獣医療の発達に伴い、ペットの平均寿命が延びたといわれる一方で、治療を続けても回復の見込みがないと診断された終末期のペットをどうするのかということは、獣医師だけでなく飼い主にとっても現実的な問題であり、医療費や介護負担などの点からも、安楽死を選択肢の一つとして考えざるをえない場合がある。そして、このような場合、たとえペットを現在の苦痛から解放するためであったとしても、動物を人為的に死に至らしめる行為を否定的にとらえる文化であれば、安楽死選択を検討し決断を下す過程、あるいは安楽死を選択し行った後において、飼い主により大きな葛藤や苦悩が生じる可能性があると考えられる。

前述したように、海外の研究では、ペットへの愛着の強さやペットを自然死させたか安楽死させたかによって、飼い主の罪悪感や悲嘆の程度が異なることが報告されている(Carmack, 1986; Cowles, 1985; McCutcheon & Fleming, 2002; Quackenbush & Glickman, 1984)。ペット飼育への関心が高まり、ペットに強い愛着を持つ飼い主が増加する日本においても、ペットがどのような死に方をし、飼い主がその死に納得できているかどうかが、その後の飼い主の心理状態に影響するであろうことは否定できない。飼い主のペットの安楽死に関する意識について究明することは、日本人のペット観に関する理解を深めるだけでなく、飼い主が抱える葛藤やペットロス問題の解明に役立つ情報を提供し、ペットの終末期医療をめぐる獣医師や病院スタッフと飼い主の相互作用をより円滑に行う指針を示す手がかりとなるのではないだろうか。このような観点から、本研究は、日本人の安楽死に関する意識研究の一環として、大学生を対象に行ったアンケート調査のデータを用いて、ペットへの愛着のタイプ及びその度合とペットの安楽死選択に関する意識の関係について検証している。

1-2 ペットの安楽死

調査方法の説明に入る前に、本研究におけるペットの安楽死とペットへの愛着の定義について確認しておきたい。まず、ここではペットの安楽死について述べる。

「動物の処分に関する指針の解説」(動物処分方法関係専門委員会, 1996)では、安楽死は「苦痛のない状態で死を誘致する行為」であり、“化学的又は物理的方法により、できる限り処分動物に苦痛を与えない方法を用いて、当該動物を意識の喪失状態にし、心機能又は肺機能を非可逆的に停止させる”(p.13)ことと規定している。さらに、安楽死処置について次のように記している:

> この指針でいう処分において最も重要な点は、できるだけ速やかに動物を意識の喪失状態にし、その後、致死のための処置を施すことである。
>
> 具体的には、処分動物を穏やかに扱い、原則として動物を意識の喪失下で致死させる処置を施すべきである。動物を意識の喪失状態にするためにも、麻酔注射以上の苦痛を動物に与えない注意が必要である。(p.17)

ここでいう苦痛とは、肉体的苦痛だけでなく、苦悩や恐怖、不安、うつ状態などを含めた精神的苦痛を指し、動物も人と同様の苦痛を感じるという前提のもと、処置過程における対象動物の苦痛の除去や意識の喪失を強調している。

同解説(動物処分方法関係専門委員会, 1996)の「愛がん動物(一般)」の項目によると、殺処分の対象には、飼育者が動物の飼育を継続することが不可能になった場合や、“病気、事故などにより動物の健康回復の見込みがなく、苦痛を伴う病状が継続しており、動物にとって安楽死処置

を行うことが妥当と判断される場合”(p.19)が挙げられている。本研究では、健康な動物を死に至らしめる場合を含む前者ではなく、後者の状況下にあるペットの安楽死に焦点をあてている。

1-3 ペットへの愛着

多くの研究において、飼い主とペットの関係を論じる際、愛着という概念が用いられている(e.g., Albert & Bulcroft, 1988; Stallones et at., 1990; Cowles, 1985; McCutcheon & Fleming, 2002; Quackenbush & Glickman, 1984; Voith, 1985)。ボウルビィ(2000)によると、愛着とは子ども、特に乳幼児と親あるいは特定の母性的人物の間に生じる強い結びつきを指す。子どもは保護や安心を求めて愛着対象である親との近接状態を維持しようとし、距離が離れると不安や怒り、悲しみを感じて親を引き戻そうとする。この、親に対する子どもの愛着行動は年齢と共に弱まり、青年期に入ると他のものに対して愛着行動を示すようになる。このように、子どもの成長と共に愛着対象は変わるものの、人の愛着行動は一生続く。

この愛着理論について、Weiss(1982, 1991)は、成人期の愛着行動は幼児期の愛着行動が発展したものであり、成人期と幼児期の愛着関係にはその特徴に共通点があるとしながらも、異なる側面も見られると指摘する。例えば、幼児期の愛着対象は自分より強く知恵のある者なのに対して、成人期の愛着対象は必ずしもそうではなく、自立していない、養育の必要がある子どもに対して愛着を持つこともある。この見解からは、その行動パターンが幼い子どもに似ているペット(Voith, 1985)も愛着対象になる可能性が示唆される。これを裏付けるように、Sable(1991, 1995)は、人が他者との社会的関係を求める理由の一つとして挙げられる愛着を得ること(Weiss, 1974)は、ペットとの関係においても可能であるという考えを示し、またペットとの別離や喪失は分離不安や悲嘆を引き起こすことから、ペットも愛着対象になると述べている。本研究においても、ペットは飼い主の愛着対象になるという見地から、飼い主とペットの関係を表す指標として、飼い主のペットに対する愛着に着目した。

さらに、今回の研究を進めるうえで、飼い主がペットに持つ愛着は一つではなく、様々なタイプに分類されることにも言及しておきたい。Johnson et al.(1992)が飼い主のペットへの愛着を測るスケールを用いて実施した調査では、分析の結果、愛着に関して3つの因子が抽出され、それぞれの因子は「general attachment(一般的愛着)」、「people substituting(人の代替)」、「animal rights/animal welfare(動物の権利/福祉)」と名付けられている。これに倣い、本研究においても、アンケート調査で回収されたデータを分析し、ペットへの愛着のタイプを分類している。

2. 調査方法

2-1 アンケート調査と回答者

本研究では、2005 年6月～7月に関西地域の5大学において、英語の講義時間を利用して実施したアンケート調査の回収データを用いている[1]。アンケート調査票には、性別や年齢、家族構成などの回答者の基本属性に関する設問項目に加えて、ペット飼育経験、飼育しているペットの種類、ペットの世話の頻度、一日にペットと過ごす時間、ペット飼育に関する意見を問う設問項目、さらにペットへの愛着に関する設問項目とペットから得られる癒しに関する設問項目が含まれている。この調査の回答者数は384 人(男性224 人、女性160 人)、その平均年齢は19.25歳である。

2-2 ペットの安楽死に関する設問

ペットの安楽死に関する設問「獣医師から不治のケガや病気にかかっているペットの安楽死を提案された場合、飼い主はそれに従ったほうがよい」は、調査票のペット飼育に関する意見を問う設問項目に含まれている。このペット飼育に関する意見を問う設問項目は、ペット飼育経験の有無に関わらず、回答者全員に尋ねており、各項目に「そう思う(＝1)」、「どちらかというとそう思う(＝2)」、「どちらかというとそう思わない(＝3)」、「そう思わない(＝4)」の4つの選択肢が与えられている。また、ペットの安楽死に関する設問については、ペットの安楽死にあまりなじみがないであろうと思われる大学生の回答者を念頭に置き、「不治のケガや病気にかかっているペット」、さらに「獣医師から安楽死を提案された場合」という条件を設定し、それに従った方がよいかどうかを尋ねた設問文を作成した。

2-3 ペットへの愛着に関する設問

調査票では、ペットへの愛着を測る尺度として Johnson et al.(1992)の LAPS スケールを用い、現在ペットを飼育している、あるいは過去にペットを飼育していた経験がある回答者に対して、最も親しみを感じている(いた)ペットを想定して回答するよう指示している。LAPS スケールは 23 項目から構成されており、各項目には「Strongly Agree」、「Somewhat Agree」、「Somewhat Disagree」、「Strongly

Disagree」の4つの選択肢が用いられている。しかし、今回のアンケート調査では、回答者が日本人であることを考慮し、日本の調査で用いられることの多い「そう思う(=1)」、「どちらかというとそう思う(=2)」、「どちらかというとそう思わない(=3)」、「そう思わない(=4)」の選択肢を用いた。

2-4 分析とその対象者

本研究では、まず、ペットの安楽死に関する設問で得られた回答を基に、回答者全体及び現在のペット飼育者のペットの安楽死選択に関する賛否の割合について、回答者の基本属性要因やペット飼育に関する要因との関連性という点から明らかにしている。次に、LAPSスケール23項目の回答について因子分析を行い、ペットに対する愛着のタイプを分類したうえで、各愛着のタイプの度合とペットの安楽死選択に関する賛否の関係について調べている。

ペットへの愛着に関する一連の分析においては、現在ペットを飼育している回答者のみを対象にしている。調査票では過去にペットを飼育していた経験がある回答者にも LAPS スケールに回答するよう指示しているが、過去の飼育経験者については、どの種類のペットをいつ飼育していたか明らかでなく、LAPS スケールに回答するうえで記憶の曖昧さが懸念される。よって、ペット飼育経験が一度もない回答者と共に、過去の飼育経験者を分析対象者から除外することにした。一方、大学生である回答者の中には、実家から離れて一人暮らしをしている者もおり、「現在の住居ではペットを飼っていないが、実家で飼っている」という意味で、現在ペットを飼育していると回答した者が複数含まれていると考えられる。このような回答者については、実家から離れている年数を考慮しても、設問に対する回答の具体性という点ではさほど影響はないであろうと判断し、分析対象者に含めることにした。

3. 分析結果

3-1 ペット飼育率

アンケート調査の回答者384人(男性224人、女性160人)の内、「現在ペットを飼っている」のは188人(男性114、女性74人)であり、無回答者を除いた全体におけるペット飼育の割合は 49.5%である [2]。「以前にペットを飼っていたことはあるが現在は飼っていない」のは 89 人(男性 41人、女性48人)で23.4%、「今まで一度もペットを飼ったことがない」のは103人(男性68人、女性35人)で27.1%である。現在のペット飼育者にそのペットの種類(複数回答)を尋ねた設問の回答によると、男女共に犬を飼っている割合が最も多い(**図1**参照)。また、最も親しみを感じているペットの種類を尋ねた設問の回答においても、男女共に犬を選んだ割合が最も多い(**図2**参照)。

3-2 ペットの安楽死選択に関する賛否の割合

3-2-1 回答者全体

まず、現在のペット飼育者とそうでない者を含めた、回答者全体のペットの安楽死選択に関する賛否の割合について見ておきたい。回答者全体を対象としたペットの安楽死に関する設問の回答を見ると(**図3**参照)、「どちらかというとそう思わない」の割合が最も多く、次いで「どちらかというとそう思う」の割合が多くなっている。「そう思う」と「そうは思わない」は共に10%台と少ない傾向がある。

調査票のペット飼育に関する意見を問う設問項目の中でも、特にペットの安楽死に関する設問は、与えられた4つの選択肢の内、「そう思う」と「そうは思わない」の両端2つの選択肢よりも、「どちらかというとそう思う」と「どちらかというとそう思わない」の中央2つの選択肢に回答が集中する傾向が見られる。これについては、回答者の年齢的な要因を含め、安楽死についての知識がないことや実際にそのような場に遭遇した経験が少ないこと、また動物を人為的に死に至らしめることに対する倫理的な迷いなどの影響が推測されるのであるが、いずれにしても、安楽死選択の判断が回答者にとって簡単ではないことを示しているといえよう。この点を考慮すると、飼い主の安楽死選択に関する意識について調査を進めていくうえで、「どちらかというと」の表現が付いた選択肢を選択した回答者とそうでない両端の選択肢を選択した回答者を分類し、その比較も併せて分析を行うことが望ましいかと思われる。しかしながら、4つの選択肢カテゴリで回答者を分類した場合、以降の分析過程において各カテゴリの回答者数が非常に少なくなり、分析を行うことが困難になる。よって、本研究では、「そう思う」と「どちらかというとそう思う」を「賛成」、「そう思わない」と「どちらかというとそう思わない」を「反対」というように回答を二極化し、ペットの安楽死を選択することに賛成か反対かを論点にした。

回答を二極化した結果、賛成の割合は 47.3%、反対の割合は52.7%で、賛成よりも反対の割合が多いものの、両者の差は際立って大きいとはいえない。回答者の性別やペット飼育経験の有無別に見た場合も(**表1**参照)、各カテゴリにおける賛否の割合に大きな差は見られず、また各カテゴリ間で比較した場合も、賛否それぞれの割合に大きな変化は見られない。

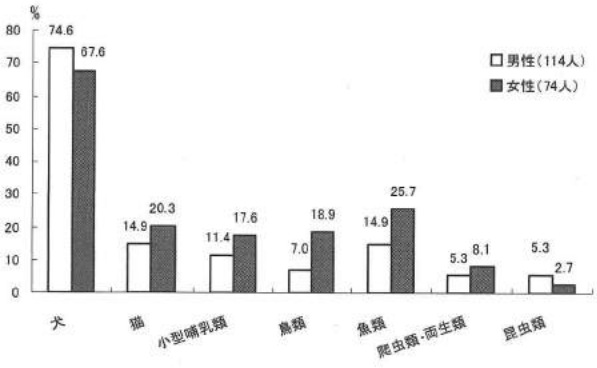


図1　飼育しているペットの種類（複数回答）

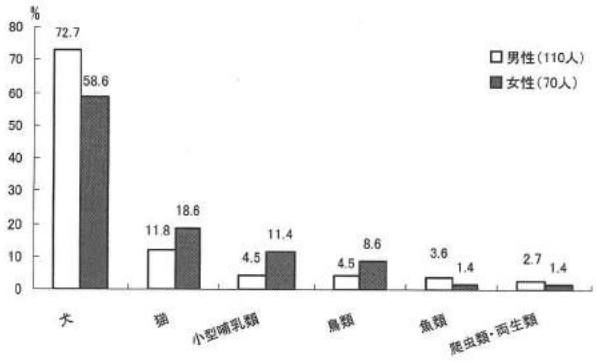


図2　最も親しみを感じているペットの種類

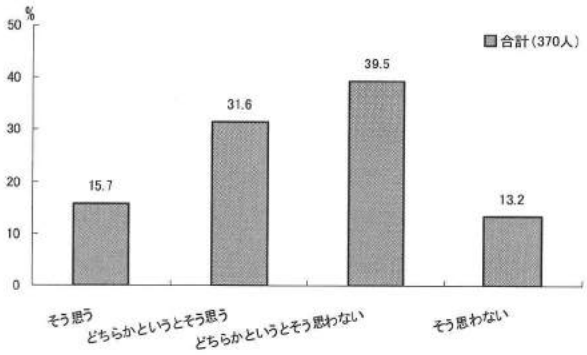


図3　獣医師から安楽死を勧められた場合は従ったほうがよい

表1　回答者全体の安楽死選択の賛否の割合

		賛成	反対	合計	
性別	男性	107 人 49.1%	111 人 50.9%	218 人 100%	
	女性	68 人 44.7%	84 人 55.3%	152 人 100%	
	合計	175 人 47.3%	195 人 52.7%	370 人 100%	グッドマンとクラスカルの γ=0.087
飼育経験	現在飼っている	83 人 46.6%	95 人 53.4%	178 人 100%	
	以前飼っていた	39 人 45.9%	46 人 54.1%	85 人 100%	
	飼ったことはない	51 人 49.5%	52 人 50.5%	103 人 100%	
	合計	173 人 47.3%	193 人 52.7%	366 人 100%	グッドマンとクラスカルの γ=-0.035

表2　現在ペットを飼育している回答者の安楽死選択の賛否

		賛成	反対	合計	
性別	男性	52 人 47.7%	57 人 52.3%	109 人 100%	
	女性	31 人 44.9%	38 人 55.1%	69 人 100%	
	合計	83 人 46.6%	95 人 53.4%	178 人 100%	グッドマンとクラスカルの γ=0.056
最も親しみを感じているペットの種類	犬	54 人 47.0%	61 人 53.0%	115 人 100%	
	犬以外	26 人 45.6%	31 人 54.4%	57 人 100%	
	合計	80 人 46.5%	92 人 53.5%	172 人 100%	グッドマンとクラスカルの γ=0.027
世話の頻度	ほぼ毎日	22 人 42.3%	30 人 57.7%	52 人 100%	
	週に数回～月に数回	35 人 45.5%	42 人 54.5%	77 人 100%	
	年に数回～全くしない	22 人 56.4%	17 人 43.6%	39 人 100%	
	合計	79 人 47.0%	89 人 53.0%	168 人 100%	グッドマンとクラスカルの γ=-0.164
一日に過ごす時間	0～30 分未満	23 人 53.5%	20 人 46.5%	43 人 100%	
	30 分～2 時間未満	29 人 49.2%	30 人 50.8%	59 人 100%	
	2 時間以上	24 人 38.1%	39 人 61.9%	63 人 100%	
	合計	76 人 46.1%	89 人 53.9%	165 人 100%	グッドマンとクラスカルの γ=0.209

3-2-2 現在のペット飼育者

次に、現在のペット飼育者のみを対象にして、安楽死選択に関する賛否の割合について見てみる。現在のペット飼育者の賛成と反対の割合はそれぞれ 46.6%と 53.4%であり、回答者全体で見た場合と同様、賛成よりも反対の割合が多いものの、両者間の差は目立って大きいとはいえない。また、この賛否の割合を回答者の性別で比較した場合も(**表2**参照)、男女共に賛否の割合には同じような傾向があり、性別による意識の差はほとんど見られない。

調査票では、ペットの安楽死に関する設問を回答するにあたって、最も親しみを感じているペットを想定するよう指示はしていない。しかし、設問の性質上、回答者は自分にとって身近なペットを想定して回答する可能性も考えられる。そこで、回答者が最も親しみを感じているペットの種類を「犬」と「犬以外」に分け、それぞれについて賛否の割合を算出した。その結果を見ると(**表2**参照)、犬を選んだ回答者と犬以外を選んだ回答者の賛否の割合は、共に賛成よりも反対の割合が多い傾向があり、回答者の性別で

表3　ペットへの愛着に関する因子分析の結果

	第1因子:友人の代替的愛着	第2因子:コミュニケーションツール的愛着	第3因子:ペットの特性に基づく愛着	共通性
第1因子:友人の代替的愛着				
ペットは親友	0.859	0.146	0.106	0.771
ペットは最高の友	0.812	0.288	0.226	0.792
ペットは友達以上の存在	0.724	0.187	0.124	0.574
ペットは友達	0.707	0.159	0.182	0.558
ペットの世話のためならどんなことでもする	0.604	0.335	0.241	0.535
ペットにも家族と同じ 権利や特権があるべき	0.549	0.179	0.123	0.348
第2因子:コミュニケーションツール的愛着				
ペットの写真を人に見せるのが楽しい	0.245	0.769	0.230	0.704
ペットのことを人に話す	0.344	0.761	0.067	0.702
第3因子:ペットの特性に基づく愛着				
忠実なのでペットが好き	0.173	0.065	0.769	0.626
他人に対する感情はペットに影響される	0.252	0.134	0.591	0.431
評価しないのでペットが好き	0.042	0.077	0.485	0.243
因子寄与	3.360	1.507	1.418	
因子寄与率	30.547%	13.696%	12.887%	

比較した場合と同じく、両者間に安楽死選択に関する意識の差は見られない。

調査票の設問項目には、回答者が現在飼育している各種類のペットについて、ペットの世話の頻度と一日にペットと過ごす時間を尋ねたものが含まれている。日本版総合的社会調査データを用いた杉田(2002)の分析によると、飼い主のペットへの愛着の強さと世話を含むペットと過ごす時間の長さには正の相関関係が見られる。このことから、一日にペットと過ごす時間、さらにペットの世話の頻度は、ペットへの愛着の度合と関連性があることが推定される。そこで、回答者が最も親しみを感じているペットについて、ペットへの愛着の代りに、その世話の頻度と一日に過ごす時間をそれぞれ複数のカテゴリに分類し、各カテゴリについて安楽死選択に関する賛否の割合を算出してみた(**表2**参照)。

まず、世話の頻度については、「世話をほぼ毎日する」でペットの安楽死選択に賛成よりも反対の割合が多い。「週に数回～月に数回する」では、その賛否の割合に「世話をほぼ毎日する」と大きな差は見られないものの、わずかに賛成の割合が増加し、反対の割合が減少する様子が窺われる。「年に数回～全くしない」では、「週に数回～月に数回する」と比べて、賛否それぞれの割合に 10%以上の増減が見られると同時に、他の2つのカテゴリとは反対に、反対よりも賛成の割合が多くなっている。すなわち、ペットの世話の頻度が多い場合は安楽死選択に賛成よりも反対の割合が多いが、ペットの世話の頻度が少なくなるに伴い、賛成の割合が増加し反対の割合が減少する。そして、結果的に賛否の割合が逆転する現象が見られる。

次に、一日にペットと過ごす時間については、「0～30分」でペットの安楽死選択に反対の割合よりも賛成の割合が多い。「30 分～2時間未満」では、「0～30 分」と比べて賛否それぞれの割合に大きな差は見られないものの、賛成と反対の割合の差はより小さくなり、両者がほぼ半々の割合になっている。ペットと過ごす時間が「2時間以上」になると、「30 分～2時間未満」と比べて賛否それぞれの割合に 10%以上の増減が見られ、反対の割合が賛成の割合に比べてかなり多くなる。この結果からは、ペットと過ごす時間が短い場合は安楽死選択に賛成よりも反対の割合が少ないが、ペットと過ごす時間が長くなるに伴い、賛成の割合が減少する一方で反対の割合が増加し、最終的には安楽死選択に賛成よりも反対の割合がかなり多くなる現象が見られる。

以上の2つの変数、すなわちペットの世話の頻度と一日にペットと過ごす時間に関する結果から、普段のペットとの関わりの度合と飼い主の安楽死選択に関する意識に関連性があることがわかる。ペットとの関わりが多いほど安楽死選択に反対し、ペットとの関わりが少ないほど賛成する傾向があるという結果は、間接的にではあるが、ペットへの愛着の強さに比例して安楽死選択に反対の意見が増えることを示している。次節では、実際に飼い主のペットへの愛着の度合と安楽死選択に関する賛否の関係について検証していく。

3-3 ペットへの愛着のタイプ及びその度合とペットの安楽死選択に関する賛否

3-3-1 ペットへの愛着のタイプ

現在のペット飼育者のペットへの愛着のタイプを分類するため、アンケート調査で得られたペットへの愛着を測るLAPSスケール23項目の回答について因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。この時、LAPSスケール23項目中、肯定的な内容を示す21項目の選択肢の値を反転している。1つの因子について因子負荷が0.40以上であり、かつ2因子にまたがって0.40以上にならない項目を選出しつつ、3度回転を繰り返した結果、3つの因子が抽出された(**表3**参照)[3]。

本研究では、分析の結果得られた各因子に含まれる項目の内容及びその因子負荷量を基に、それぞれの因子を次のように名付けた。まず、第1因子に含まれる上位4つの項目は、いずれもペットを友人あるいはそれ以上の存在に喩えている。下位2つの項目からは、ペットを家族同様の存在ととらえているとも考えられるが、調査対象者の年齢及び因子負荷の大きさを考慮し、この因子を「友人の代替的愛着」とした。次に、第2因子に含まれる項目は2つと少ないが、両項目ともペットが他者との相互作用の媒介手段になっていることを表している。よって、この因子を「コミュニケーションツール的愛着」とした。最後に、第3因子に含まれる項目は、「忠実である」や「評価しない」など、人とは異なる動物ならではの特性に着目した項目が並んでいると考えられる。また、2つ目の項目「人に対する私の感情は、その人が私のペットにどう反応するかによく影響される」は、人と種を異にする動物に対する他者の反応を基準にして、相手への感情が決まるかどうかを尋ねている。よって、この因子を「動物の特性に基づく愛着」とした。

ペットへの愛着のタイプ及びその度合がペットの安楽死選択に関する賛否とどのような関係にあるのか検証するにあたり、以上の各因子を愛着尺度として用いることにした。ただし、2項目からなる第2因子は尺度としては不十分であると思われるため、今回の分析からは除くことにした。残り2つの各因子の信頼性をクローンバックのα係数を用いて検定したところ、第1因子である「友人の代替的愛着」6項目のα係数は0.89、第3因子である「動物の特性に基づく愛着」3項目のα係数は0.67と高い一貫性が見られた。この結果に基づき、2つの因子に含まれる各項目の選択肢の数値を合計したものをそれぞれ、友人の代替的愛着尺度(n=171, Range=29.63～67.75)、動物の特性に基づく愛着尺度(n=173, Range=35.95～77.78)として用いることにした[4]。

以上のように、因子分析の結果、現在のペット飼育者のペットへの愛着は、友人の代替的愛着と動物の特性に基づく愛着に分類された。次項からは、2つの愛着のタイプそれぞれについて、安楽死選択に賛成の回答者と反対の回答者の平均値を現在のペット飼育者全体を対象に比較した後、男女別、そして最も親しみを感じているペットの種類別に比較する。本研究に用いたデータは無作為抽出による標本から回収されたものではないが、各愛着の平均値を比較する際には、有意水準10%に設定したT検定の分析結果を参考値としている。

3-3-2 飼育者全体

まず、現在のペット飼育者全体について見た場合(**図4**参照)、友人の代替的愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値は高い[$t(163)=-2.70$, $p<.01$]。動物の特性に基づく愛着については、反対に、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値は低い[$t(164)=1.74$, $p=.085$]。言い換えると、友人の代替的愛着については、その度合が強い回答者は安楽死選択に反対し、その度合が弱い回答者は安楽死に賛成する傾向が見られる。一方、ペットの特性に基づく愛着については、その度合が強い回答者は安楽死選択に賛成し、その度合が弱い回答者は安楽死に反対する傾向が見られる。

3-3-3 飼育者の性別

次に、現在のペット飼育者を男女別に分けて見ていく。男性では(**図5**参照)、友人の代替的愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値は高い[$t(101)=-3.03$, $p<.01$]。動物の特性に基づく愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対

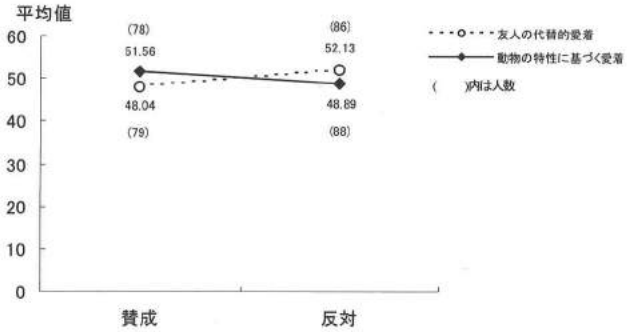


図4　ペット飼育者の愛着の平均値

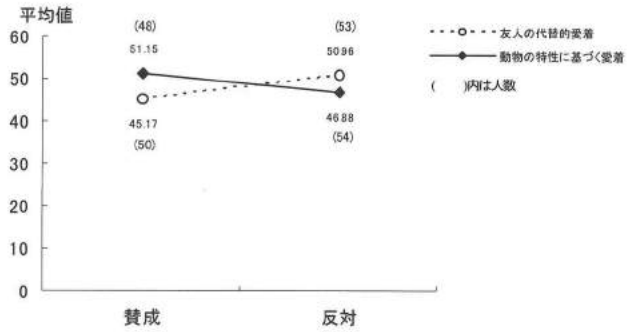


図5　男性の愛着の平均値

の回答者の平均値は低い[t(100)=2.11, p<.05]。女性では(**図6**参照)、友人の代替的愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値はわずかに高いとはいうものの、その差は男性に比べてかなり小さく、明確な差があるとまではいえない [t(60)=−0.46, ns]。そして、動物の特性に基づく愛着については、安楽死選択に賛成の回答者と反対の回答者の平均値にほとんど差は見られない[t(62)=0.06, ns]。

以上の結果から、男性では、現在のペット飼育者全体を対象にした場合と同様、友人の代替的愛着の度合が強い回答者は安楽死選択に反対し、その度合が弱い回答者は安楽死に賛成する傾向が見られる。一方、動物の特性に基づく愛着の度合が強い回答者は安楽死選択に賛成し、その度合が弱い回答者は安楽死に反対する傾向が見られる。これに対して、女性では、友人の代替的愛着についても、動物の特性に基づく愛着についても、安楽死選択に賛成の回答者と反対の回答者の平均値にほとんど差はなく、ペットへの愛着のタイプ及びその度合と安楽死選択に関する賛否に関連性は見られない。

3-3-4 飼育者が最も親しみを感じているペットの種類別

さらに、現在のペット飼育者を最も親しみを感じているペットが犬である者と犬以外の者に分類し、各愛着のタイプの平均値を比較した結果について見てみる。最も親しみを感じているペットが犬である場合(**図7**参照)、友人の代替的愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値は高い[t(110)=−2.33, p<.05]。動物の特性に基づく愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値はやや低いものの、明確な差は見られない [t(111)=0.94, ns]。最も親しみを感じているペットが犬以外の場合(**図8**参照)、友人の代替的愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値は高いものの、差

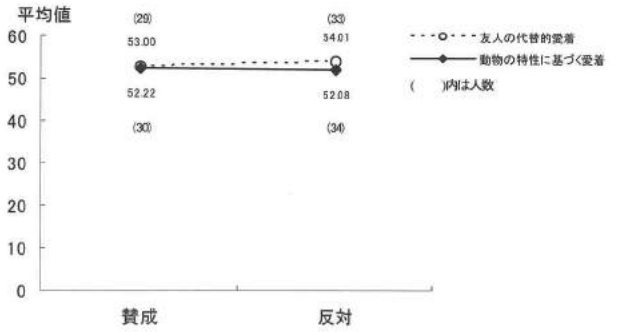


図6　女性の愛着の平均値

があるとまではいえない[t(51)=−1.35, ns]。動物の特性に基づく愛着については、安楽死選択に賛成の回答者に比べて反対の回答者の平均値は低い [t(51)=1.82, p=.077]。

これらの結果をまとめると、最も親しみを感じているペットが犬の場合、友人の代替的愛着の度合が強い回答者は安楽死選択に反対し、その度合が弱い回答者は安楽死に賛成する傾向が見られる。しかし、動物の特性に基づく愛着については、その度合と安楽死選択に関する賛否に明確な関連性は見られない。一方、最も親しみを感じているペットが犬以外の場合、友人の代替的愛着については、その度合と安楽死選択に関する賛否に関連性は見られないが、動物の特性に基づく愛着については、その度合が強い回答者は安楽死選択に賛成し、その度合が弱い回答者は反対する傾向が見られる。

以上が、ペットへの愛着のタイプ及びその度合とペットの安楽死選択に関する賛否の関係についての分析結果である。この結果について、前節で述べたペットの安楽死選択に関する賛否の割合の分析結果と共に、次章で考察を加えていきたい。

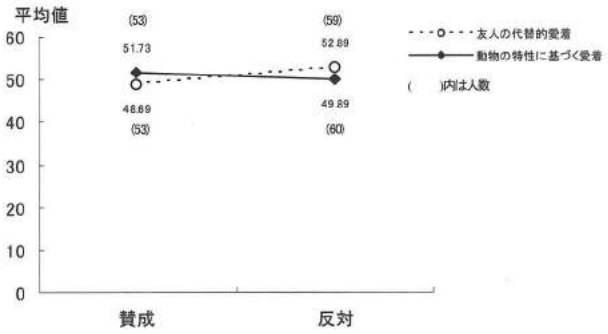


図7　犬を選択した回答者の愛着の平均値

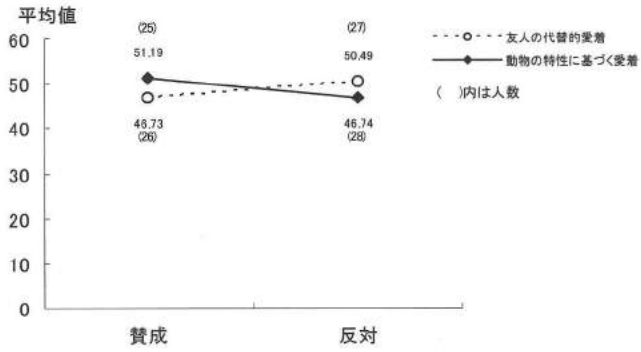


図8　犬以外を選択した回答者の愛着の平均値

4. 考察

4-1 ペットの安楽死選択に関する賛否の割合

「獣医師から不治のケガや病気にかかっているペットの安楽死を提案された場合、飼い主はそれに従ったほうがよい」という意見に対する回答者全体の反応は、賛成よりも反対の割合が多い傾向があるとはいうものの、その割合の差はさほど大きいというものではなかった。この結果は、不治のケガや病気にかかっているペットに対して、獣医師から安楽死を提案された場合、安楽死選択に反対する者が少なくない一方で、賛成する者も決して少なくはないことを示している。今回実施したアンケート調査の対象者は、平均年齢19.25歳の大学生であり、親しい者との死別経験の有無や死生観、あるいは宗教観などが成人とは異なり、それによって安楽死選択に関する意識も異なる可能性が考えられる。よって、本研究で得られた結果が日本人全体の意識傾向であるとはいえないまでも、今回の調査対象者である 19 歳前後の大学生の見解としては、ペットの安楽死選択に関する意見はほぼ2分され、肯定的であるともいえない代わりに必ずしも否定的であるともいえない。そして、この傾向は回答者の性別やペット飼育経験の有無に関わらず見られ、この2つの要因が安楽死選択に関する意識と関連している様子は確認されなかった。

また、現在のペット飼育者に限ってペットの安楽死選択に関する賛否の割合を見た場合も、回答者全体で見た場合と同様に、賛成よりも反対の割合が多いものの、その割合にさほど大きな差は見られなかった。さらに、現在のペット飼育者の安楽死選択に関する賛否には、その性別や最も親しみを感じているペットの種類による明確な違いも観察されなかった。海外では、飼い主の性別や飼育しているペットの種類によって、ペットの死後における飼い主の反応が異なることを示す研究結果が報告されているが(McCutcheon & Fleming, 2002; Planchon & Templer, 1996; Stallones, 1994)、本研究の分析結果では、これらの要因が飼い主の安楽死選択の判断と関連性がある様子を窺うことはできない。

一方、ペットへの愛着の強さと比例すると考えられる、ペットの世話の頻度や一日にペットと過ごす時間の長さで見た場合、回答者のペットとの関わりの度合が安楽死選択に関する賛否の割合と関連性がある様子が観察された。飼い主の性別や最も親しみを感じているペットの種類よりも、実際にどれだけペットと接しているかが飼い主の安楽死選択の判断に影響している。そして、ペットとの関わりが少ない飼い主は安楽死に賛成する傾向があるものの、ペットとの関わりが多い飼い主は、たとえペットが不治のケガや病気にかかっていたとしても、また獣医師から安楽死を提案されたとしても、安楽死に反対する傾向があるということである。

ペットと関わる時間の長さとペットへの愛着の強さは比例する(杉田, 2002)。これを踏まえると、ペットと頻繁に接している飼い主ほど安楽死選択に反対し、あまり接していない飼い主ほど賛成する傾向があるという上記の結果から、飼い主のペットへの愛着の強さが安楽死選択に反対の意見に結びつくことが予想される。ところが、次節で論じる、ペットへの愛着のタイプおよびその度合とペットの安楽死選択に関する賛否の関係について分析した結果は、この予想が必ずしも正しくないことを示すものになった。

4-2 ペットへの愛着のタイプ及びその度合とペットの安楽死選択に関する賛否

本研究では、現在のペット飼育者のペットへの愛着は、友人の代替的愛着と動物の特性に基づく愛着に分類された。それぞれの愛着について平均値を比較したところ、友人の代替的愛着については、安楽死選択に賛成の回答者よりも反対の回答者の平均値が高く、これに対して、動

物の特性に基づく愛着については、安楽死に反対の回答者よりも賛成の回答者の平均値が高い。つまり、友人の代替的愛着の度合が強い飼い主は安楽死選択に反対するが、動物の特性に基づく愛着の度合が強い飼い主は安楽死選択に賛成する傾向があるといえる。ペットへの愛着の度合は飼い主の安楽死選択の判断に影響するものの、ペットへの愛着の強さが必ずしも安楽死選択に反対の意見に結びつくとは限らず、愛着のタイプによっては、その度合の強さに比例して安楽死選択に賛成する傾向が見られるのである。

愛着のタイプによって飼い主の安楽死選択に関する意識が異なるという結果から、飼い主がペットをどのような存在ととらえているかという点が、その安楽死選択の判断に影響していることが示唆される。友人の代替的愛着の度合が強いということは、ペットが飼い主にとって友人の代替役割を持つ傾向があることを意味し、動物の特性に基づく愛着の度合が強いということは、飼い主が人とは異なる動物としてのペットの特性を認めていると解釈できる。このように解釈すると、ペットを人と同一化して見る傾向があるかどうかが、飼い主の安楽死選択に関する意識に影響しているといえるのではないだろうか。友人の代替的愛着の度合が強い場合には安楽死選択に反対する傾向があるという結果から考えて、ペットを人と同一化あるいは擬人化する傾向が強いことが、安楽死を決断しなければならない状況において、飼い主の葛藤要因の一つになると推察される。これに対して、動物の特性に基づく愛着の度合が強い飼い主は安楽死に賛成する傾向があるという結果からは、ペットは人とは違うと認識していることが、安楽死を決断あるいは容認しやすい要因の一つになると推測される。

4-3 飼育者の性別

現在のペット飼育者を性別で分類して分析を行った結果、上記の傾向、すなわち友人の代替的愛着の度合の強さは安楽死選択に反対の意見に結びつき、動物の特性に基づく愛着の度合の強さは安楽死選択に賛成の意見に結びつくという傾向は、女性よりも男性に顕著であることが判明した。愛着のタイプ別にその平均値と安楽死選択に関する賛否の関係を分析したところ、男性ではペット飼育者全体を対象にした場合と同様の結果が得られた。しかし、女性については、安楽死選択に賛成の回答者と反対の回答者では、2つの愛着のタイプ共にその平均値に差は見られず、ペットへの愛着のタイプ及びその度合がペットの安楽死選択に関する意識に影響している様子を窺うことはできなかった。この結果からは、ペットを安楽死させるかどうかについて考える場合、男性ではそのペットに対して持っている愛着のタイプとその度合によって意見が違ってくるが、女性ではペットへの愛着のタイプやその度合に関わらず、安楽死選択に賛成するよりも反対する割合が多くなる傾向があるという見方ができよう。

一般的に女性は男性よりもペットに対する愛着が強いことが指摘されており(Johnson et al., 1992; McCutcheon & Fleming, 2002; Robertson et al., 2004)、本研究における現在のペット飼育者についても、友人の代替的愛着[男性47.78＜女性53.72, $t(169)=-3.91$, $p<.001$]と動物の特性に基づく愛着[男性48.80＜女性51.90, $t(171)=-2.01$, $p<.05$]の平均値は共に、男性よりも女性の方が高い。今回の研究では、女性の安楽死選択の判断に影響する要因は明らかではない。しかし、男性よりもペットへの愛着が強い女性について、ペットへの愛着と安楽死選択に関する賛否に関連性が見られないという結果が導かれたことは興味深く、今後の研究において注目すべき点であろう。

4-4 飼育者が最も親しみを感じているペットの種類別

現在のペット飼育者が最も親しみを感じているペットの種類別で比較した結果、選択したペットの種類によって、ペットへの愛着のタイプ及びその度合とペットの安楽死選択に関する賛否の関係に違いが見られることが判明した。最も親しみを感じているペットに犬を選んだ回答者については、友人の代替的愛着の度合が強い場合には安楽死選択に反対する傾向があることから、この愛着のタイプは安楽死選択の判断に影響していると考えられる。しかし、動物の特性に基づく愛着については、安楽死選択に賛成の回答者と反対の回答者ではその平均値に差はなく、この愛着のタイプが安楽死選択の判断に影響しているとはいえない。最も親しみを感じているペットに犬以外を選んだ回答者については、犬を選んだ回答者とは反対に、動物の特性に基づく愛着の度合が強い場合に安楽死選択に賛成する傾向がある一方で、友人の代替的愛着の度合と安楽死選択の判断に明確な関連性は見られない。

先に見た、現在のペット飼育者の安楽死選択に関する賛否の割合についての分析結果では、その性別で見た場合と同様、最も親しみを感じているペットの種類と安楽死選択の判断に明確な関連性は見られなかった。しかし、ここに愛着という要因が加わると、安楽死の対象になるペットの種類によって飼い主の判断が異なってくることが暗示される。例えば、猫や他の種類のペットに比べて、犬

は飼い主の愛着が強く、擬人化される傾向があるといわれている(Albert & Bulcroft, 1988; Johnson et al., 1992)。友人の代替的愛着の強さが安楽死選択に反対する要因になるという今回の結果からは、犬に愛着を持ちかつ擬人化傾向が強い飼い主にとって、その犬の安楽死の決断はより困難になることが予想される。これに対して、犬よりも擬人化される傾向が少なく、また動物の特性に基づく愛着の度合の強さが安楽死選択に賛成する要因になるという点で、犬以外のペットに愛着を持つ飼い主にとって、その安楽死は受け入れやすいかもしれない。

4-5 今後の研究課題

今回の研究においては以上のような結果が得られたが、同時に次のような課題点が挙げられる。まず、今回のアンケート調査で用いた調査票では、回答者である大学生が今までペットの安楽死を経験したことがあるのか、あるいはそのような判断をしなければならない場面に遭遇したことがあるのかを尋ねていない。このような経験の有無により、ペットの安楽死をどれだけ現実的にとらえて設問に回答しているかに差が生じると共に、安楽死選択に関する意識が違ってくることが推測される。次に、調査票にあるペットの安楽死に関する設問は、ペットが不治のケガや病気にかかっている状態であるという仮定のもとに、獣医師の安楽死の提案に従うかどうかを尋ねている。この設問文には、不治のケガや病気という記述はあるが、ペットが現在苦痛を感じている、あるいは末期状態にあるといった表現は含まれていない。これらの表現を加えることによって、回答の分布に変化が生じる可能性も考えられる。また、設問は獣医師の提案に従うかどうかを尋ねる形式になっており、飼い主自らが安楽死選択の決断を下すというよりも、獣医師の意見に同意できるかどうかを問うものである。この場合、獣医師や病院スタッフの説明や対応のあり方、さらには飼い主と獣医師、あるいは病院スタッフの間に信頼関係が築かれているかどうかといった要因も、飼い主の安楽死選択の判断に影響することが考えられる。今後研究を進めていくうえで、ここで挙げた要因が飼い主の安楽死選択の判断にどう影響するのか検証する必要があろう。

5. 結び

本研究では、飼い主のペットに対する愛着のタイプ及びその度合という観点から、大学生のペットの安楽死選択に関する意識を調査した。その結果、不治のケガや病気にかかっているペットの安楽死選択に関する賛否の割合は、賛成よりも反対意見が多いもののほぼ2分されること、飼い主の性別やペット飼育経験よりも、日常どれだけペットと接しているかが飼い主の安楽死選択に関する賛否に影響すること、ペットへの愛着のタイプやその度合によって飼い主の安楽死選択の判断が異なること、そしてこの傾向は特に男性に顕著に見られ、女性ではペットへの愛着のタイプ及びその度合は安楽死選択の判断に影響しないこと、また最も親しみを感じているペットの種類によって、飼い主の安楽死選択の判断に影響する愛着のタイプは異なることが判明した。本研究は大学生を対象に行った試行的な調査に基づくものであるため、以上の結果をもって日本人のペットの安楽死に関する意識傾向であると結論付けることはできない。しかし、若い世代のペットの安楽死に関する意識について、何らかの示唆を得ることができたのではないかと考える。日本人のペットの安楽死に関する意識についてさらに詳しい知見を得るため、調査対象者の抽出方法並びに前述した課題点を今後の研究課題とし、より多面的に研究を行っていきたいと考える。

注

1) このアンケート調査を行うにあたっては、関西福祉大学社会福祉学部・山本勝巳准教授、神戸学院大学経営学部・山本誠子准教授、クイーンズランド工科大学ビジネス学部・ジェニファー・バートレット講師、松浦典子氏に多大なご協力を頂いた。以上4名に対し、ここに謹んで謝意を表する。

2) 今回分析に用いられた調査データは、ペットに関する意識の日豪比較調査の予備調査として行われたものの一部である。そのため、調査対象者は大学生に限定されており、その選択方法も無作為抽出によるものではない。したがって、回答者のペット飼育の割合などについては、内閣府大臣官房政府広報室(2003)の全国調査の結果とは異なると考えられる。

3) Johnson et al. (1992)が行った調査では、因子分析の結果3つの因子が抽出され、それぞれの因子は「general attachment(一般的愛着)」、「people substituting(人の代替)」、「animal rights/animal welfare(動物の権利/福祉)」と名付けられている。本研究においても3つの因子が抽出されたものの、その内容は先行研究とは異なるものであった。例えば、今回の分析結果における第1因子に含まれる「ペットは最高の友だと思う」、「ペットは友達だと思う」の項目は、先行研究では「一般的愛着因子」に含まれており、「ペットは親友だと思う」、「私にとってペットは友達以上の存在である」の項目は「人の代替因子」に含まれている。また、「ペットの世話のためならどんなことでもするだろう」、「ペットにも家族と同じ権利や特権があるべきだと思う」は「動物の権利/福祉因子」に含まれている。しかし、無作為抽出による電話調査を行った先行研究に対して、本研究では調査対象者を様々な年齢層から無作為に抽出したわけではなく、またその数も少ない。よって、今回の分析結果と先行研究の分析結果が異なる点に関しては、ここで比較検討することは差し控えたい。

4) 2つの尺度は含まれる項目数が異なるため、その合計値に大きな違いが見られる。よって、以降の分析においては、各愛着のタイプの度合の差異をよりわかりやすくするため、それぞれの尺度の合計値を平均値 50、標準偏差値 10 の得点に標準化している。

引用文献

Albert, A., & Bulcroft, K. (1988). Pets, families, and the life course. Journal of Marriage and the Family, 50, 543-552.

American Veterinary Medical Association. (2007). AVMA guidelines on euthanasia [On-line]. Available: http://www.avma.org/issues/animal_welfare/euthanasia.pdf.

ボウルビィ, J. (2000). 母子関係の理論 I 愛着行動. 東京: 岩崎学術出版社.

Carmack, B. J. (1986). When companion animals die: Caring for clients in their time of sorrow. Veterinary Medicine, 81 (4), 311-314.

Cornell, K. K., Brandt, J. C., & Bonvicine, K. A. (2007). 獣医臨床に必要なコミュニケーション. 東京: インターズー.

Cowles, K. V. (1985). The death of a pet: Human response to the breaking of the bond. In Sussman, M. B. (Ed.), Pets and the Family (pp. 135-148). New York: The Haworth Press.

動物処分方法関係専門委員会(編). (1996). 動物の処分方法に関する指針の解説. 東京: 社団法人日本獣医師会.

Hart, L. A., Hart, B. L., & Mader, B. (1990). Humane euthanasia and companion animal death: Caring for the animal, the client, and the veterinarian. Journal of American Veterinary Medical Association, 197 (10), 1292-1299.

林良博. (1999). 検証アニマルセラピー. 東京: 講談社.

Hetts, S., & Lagoni, L. (1990). The owner of the pet with cancer. Veterinary Clinics of North America: Small Animal Practice, 20 (4), 879-896.

Johnson, T. P., Garrity, T. F., & Stallones, L. (1992). Psychometric evaluation of the Lexington Attachment to Pets Scale (LAPS). Anthrozoös, 5 (3), 160-175.

Katcher. A. H., & Rosenberg, M. A. (1979). Euthanasia and the management of the client's grief. Compendium on Continuing Education, 1 (12), 887-890.

Kay, W. J., Cohen, S. P., Fudein, C. E., Kutscher, A. H., Nieburg, H. A., Grey, R. E., & Osman, M. M. (Eds.). (1988). Euthanasia of the companion animal: The impact of pet owners, veterinarians and society. Philadelphia: The Charles Press, Publishers.

Knight, J. (2003). Waiting for wolves in Japan: An anthropological study of people-wildlife relations. Oxford: Oxford University Press.

Kogure, N. & Yamazaki, K. (1990). Attitudes to animal euthanasia in Japan: A brief review of cultural influences. Anthrozoös, 3 (3), 151-154.

McCutcheon, K. A., & Fleming, S. J. (2002). Grief resulting from euthanasia and natural death of companion animals. OMEGA, 44 (2), 169-188.

Lagoni, L., & Butler, C. (1994). Facilitating companion animal death. Small Animal, 70-76.

内閣府大臣官房政府広報室. (2003). 月間世論調査 動物愛護. 月間世論調査, 35.

新島典子. (2006). 飼主の死生観と亡きペットの存在感:「家族同様」の対象を亡くすとは. 死生学研究, 春号, 165-188.

Planchon, L., & Templer, D. (1996). The correlates of grief after death of a pet. Anthrozoös, 9 (2/3), 107-113.

Quackenbush, J. E., & Glickman, L. (1984). Helping people to adjust to the death of a pet. Health Social Work, 9, 42-48.

Robertson, J. C., Gallivan, J., & MacIntyre, P. D. (2004). Sex differences in the antecedents of animal use attitudes. Anthrozoös, 17 (4), 306-319.

Sable, P. (1991). Attachment, loss of spouse, and grief in elderly adults. OMEGA, 23, 129-142.

Sable, P. (1995). Pets, attachment, and well-being across the life cycle. Social Work, 40, 334-341.

社団法人日本獣医師会獣医師道委員会. (2004). 小動物医療の指針 [On-line]. Available: http://nichiju.lin.go.jp/chikai/pdf/2-1.pdf.

Stallones, L., Johnson, T. P., Garrity, T. F., & Marx, M. B. (1990). Quality of attachment to companion animals among U.S. adults 21 to 64 years of age. Anthrozoös, 3 (3), 171-176.

Stallones, L. (1994). Pet loss and mental health. Anthrozoös, 7 (1), 43-54.

杉田陽出. (2002). 日本人のペットの飼育時間に影響を及ぼす要因について: 飼育者の属性を中心として. 大阪商業大学論集, 126, 51-64.

Veterinary Practitioners Registration Board of Victoria. (2006). Guidelines [On-line]. Available: http://www.vetboard.vic.gov.au/docs/full.pdf.

Voith, V. L. (1985). Attachment of people to companion animals. Veterinary Clinics of North America: Small Animal Practice, 15, 289-295.

Weiss, R. S. (1974). The provisions of social relationships. In Z. Rubin (Ed.), Doing unto others (pp. 17-26), New Jersey: Prentice Hall.

Weiss, R. S. (1982). Attachment in adult life. In C. M. Parkes & J. Stevenson-Hinde (Eds.), The place of attachment in human behavior (pp. 171-184). New York; Basic Books.

Weiss, R. S. (1991). The attachment bond in childhood and adulthood. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), Attachment across the life cycle (pp. 66-76). New York: Tavistock/Routledge.

矢野智司. (2004). 動物絵本をめぐる冒険. 東京: 勁草書房.

受理：2008年7月3日

原著論文

動物看護科学生の動物介在活動・療法に関する意識調査

熊坂隆行[1]、升秀夫[2]、田村真美[3]、伊藤弥紗[3]、光石智子[3]、長谷川由希恵[4]、恩田絵里[4]、臼井明子[4]、行木ユキ江[4]、菅野裕子[3]、安西みづ穂[4]、青山涼子[4]、藤森美紀[4]、矢口里子[4]、渡邊ちあき[4]、坂本敏[4]、片岡三佳[5]、山田好秋[6]

Animal nursing student awareness survey

Takayuki Kumasaka, Hideo Masu, Mami Tamura, Misa Ito, Tomoko Mitsuishi, Yukie Hasegawa, Eri Onta, Akiko Usui, Yukie Namiki, Yuko Kanno, Mizuho Anzai, Ryoko Aoyama, Miki Fujimori, Satoko Yaguchi, Chiaki Watanabe, Satoshi Sakamoto, Mika Kataoka, Yoshiaki Yamada

1）名桜大学 人間健康学部看護学科
2）筑波大学大学院 人間総合科学研究科
3）元 学校法人 中央工学校 中央動物専門学校
4）学校法人 中央工学校 中央動物専門学校
5）岐阜県立看護大学
6）新潟大学大学院 医歯学総合研究科

1）〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220番1号　住所は1)のみ記載

要約

動物介在活動・療法に関する学生の「意識」を調査した。今回対象となった学生は、動物介在活動・療法に関し、認識は高く、ヒトに対するプラス効果があるということは実感していることがわかった。しかし、講義や実習だけでは興味がもてないこと、動物介在活動・療法への参加機会が少ないこと、短期間の参加では対象者の変化について実感することができなかったこと、様々な動物側への負担などから今ひとつ動物介在活動・療法に関し、理解が示されていないことが今回の調査で明らかとなった。

Abstract

Animal nursing student awareness of animal-assisted activities and therapy was investigated. The students in the present study were aware of animal-assisted activities and therapy and recognized their positive impacts on humans. However, the study clarified that lectures and practical exercises were not sufficient to build students' interest, that students did not have many opportunities to participate in animal-assisted activities and therapy, that changes in students were not brought about through short-term participation, and that the students did not quite fully understand the stress put on various animals through animal-assisted activities and therapy.

【キーワード】
- 動物看護学生（Animal nursing student）
- 動物介在活動・療法（animal-assisted activities and therapy）
- 意識（awareness）

Ⅰ．はじめに

近年の少子高齢化と社会福祉構造の変化に伴い、高齢者や障害者の介護・福祉系施設への入所や療養型病院への入院が急増している。この急激な社会変化に対応するため、高齢者や独居療養者の生活の質（Quality of Life；QOL）の向上が求められるようになった。その対策の一つとして、福祉施設や病院では、動物とのふれあい活動が盛んに行われるようになった。

現代社会は、ヒトからヒトが安らぎを得ることは、難しい時代であると示唆される一面がある。この社会変化に伴い、伴侶動物との生活が重視されるようになった[1)2)]。これに照らし合わせ、2000年12月1日に、法律の施行から26年余りが経過した「動物の愛護及び管理に関する法律」の改正がなされた。本法改正の主旨は、イヌやネコ等のペット動物は、愛玩動物ではなく、家族の一員であり、人生の伴侶であると定義している[3)]。これに応じるため、動物の医療においても、ヒトの医療と同じように、看護師の重要性が高まり、動物看護師養成の専門学校、短大、大学の開校または、コースの新設が急増した。カリキュラムでは、「動物介在活動実習」も開講されるようになった。実習の目的は、

動物看護を学んでいくなかで、ヒトと動物の関係を学び、ヒトと動物のコミュニケーション能力などを身につけ、公衆衛生に広く貢献できる、動物介在の手続きと心得を学ぶことである。動物介在活動によって動物は、なんらかの負担(ストレスなど)[4]を生じるため、この実習は、動物看護師の業務上、重要な学習に位置づけられる。

国立情報学研究所が提供する論文情報ナビゲータ「CiNii」を使用し、キーワード「動物介在」で検索したところ、2008年5月19日までに127件の報告があった。また、「動物介在」「学生」で検索したところ、4件の報告があったが、「意識調査」を含めて検索したところ、報告はなかった。動物介在に関して、介在における対象者の変化や影響を報告している論文、介在する動物のストレスなどに関する論文は多くあるが、介在を行うスタッフに関する影響や変化を報告する論文はほとんどなく、まして、動物介在活動実習を行う予定である学生の意識に関しては明らかにされていない。

動物介在を行う場合、動物介在について理解があるスタッフの協力が得られることが重要であり、学生の実習においても同様の理解が求められる。動物介在を行うスタッフに対する意識調査はされていないことから、今回、動物介在活動実習を行う予定である学生に対して、動物介在活動・療法についての認識、興味、経験や考えについての意識調査を行った。

Ⅱ. 方法

1. 対象者

東京都北区にある動物看護師養成学校に在籍する学生

2. 調査期間

2005年7月

3. 調査方法・内容

無記名回答を採用した留置質問紙調査を実施した。動物介在に関して、介在における対象者の変化や影響を報告している論文、介在する動物のストレスなどに関する論文は多くあるが、介在を行うスタッフに関する影響や変化を報告する論文はほとんどなく、まして、動物介在活動実習を行う予定である学生の意識に関しては明らかにされていない。動物介在を行う場合、動物介在について理解があるスタッフの協力が得られることが重要であり、学生の実習においても同様の理解が求められる。動物介在を行うスタッフに対する意識調査はされていないことから、動物介在活動実習を行う予定である学生の動物介在活動・療法についての認識、興味、経験や考えについて焦点を当て、独自に質問紙を作成した。

1) 対象者の基本的属性:(1)年齢の1項目で実数記入での回答を求め、(2)性別の1項目で選択肢での回答を求めた。
2) 動物介在活動・療法について:(1)動物介在活動・療法に関する認識、(2)動物介在活動・療法への興味、(3)動物介在活動・療法へ参加経験の3項目で、選択肢での回答を求めた。
3) 動物介在活動・療法の考え:(1)ヒトへのプラスの効果の有無、(2)プラスの効果の内容、(3)今後の動物介在活動・療法への参加希望、(4)動物介在活動・療法における問題点、動物に関するエピソードの4項目で、選択肢および(4)は自由記載での回答を求めた。

4. 分析方法

本研究では、質問に対して単純集計を行った後、学年別に「認識」「興味」「参加経験」「参加希望」の4項目間で、クロス表を作成し、カイ2乗検定を行った。また、動物介在活動・療法に「参加経験がある学生」「参加経験がない学生」別に「認識」「興味」「参加希望」の3項目間で、クロス表を作成し、カイ2乗検定を行った。選択科目ではあるが、2年次に動物介在実習があり、それまで動物介在に関する講義や演習を受講していること、1年次よりも動物への関心が高まったり、また、さまざまな活動に参加することで、いろいろな情報が得る機会が多くなったりすると考えられたことから、学年別、参加経験別に集計・分析を行った。分析にはSPSS 11.5J for Windowsを用いた。自由記載については整理してまとめた。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査の趣旨・内容について十分に説明し、調査目的、調査への協力は自由意志であり、拒否することや途中で中断できること、データは全体として統計処理をするため個人が特定されないこと、調査結果は研究目的以外には使用しないこと、学会・論文発表の公表などについて説明し、協力の同意の得られた学生のみを対象とした。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の概要

今回協力が得られた学生は、181 名(1 年 88 名、2 年 93 名) であり、全員女性であった。1 年 88 名の平均年齢は 18.5(±1.0)歳、2 年 93 名は 19.6(±1.1)歳で、181 名全体の平均年齢は 19.1(±1.2)歳であった。

2. 質問紙調査結果

1)1年

- 「動物介在活動・療法を知っているか」という質問に対して"知っている"と回答した学生は 75.0%であり、"知っていない"と回答した学生は 25.0%であった(**表1**)。
- 「動物介在活動・療法に興味があるか」という質問に対して"ある"と回答した学生は 80.7%であり、"ない"と回答した学生は 1.1%、"どちらともいえない"は 17.1%であった(**表1**)。
- 「動物介在活動・療法に参加したことがあるか」という質問に対して"ある"と回答した学生は 3.4%であり、"ない"と回答した学生は 95.5%であった(**表1**)。
- 「動物介在活動・療法はヒトにプラスの効果をもたらすか」という質問に対して"もたらす"と回答した学生は 66.7%であった(**表2**)。
- 「どのような効果をもたらすか」という質問に対して"リラックスやくつろぎ"があげられた(**表2**)。
- 「動物介在活動・療法に今後、参加したいと思うか」という質問に対して"思う"と回答した学生は 23.9%であり、"どちらとも思えない"は 19.3%であった。無回答が 56.8%であった(**表2**)。
- 「動物介在活動・療法における問題点」として、"アレルギー""参加動物の教育" "動物へのストレス"があげられた。

2)2年

- 「動物介在活動・療法を知っているか」という質問に対して"知っている"と回答した学生は 94.6%であり、"知っていない"と回答した学生は 5.4%であった(**表3**)。
- 「動物介在活動・療法に興味があるか」という質問に対して"ある"と回答した学生は 37.6%であり、"ない"と回答した学生は 18.3%、"どちらともいえない"は 44.1%であった(**表3**)。
- 「動物介在活動・療法に参加したことがあるか」という質問に対して"ある"と回答した学生は 36.6%であり、"ない"と回答した学生は 63.4%であった(**表3**)。
- 「動物介在活動・療法はヒトにプラスの効果をもたらすか」という質問に対して"もたらす"と回答した学生は 91.2%であった(**表4**)。「どのような効果をもたらすか」という質問に対して"感情が豊かになる"が 48.4%、"リラックスやくつろぎ"が 32.3%、"言語が活性化される"が 12.9%、"行動範囲が広がる"が 3.2%であった(**表4**)。
- 「動物介在活動・療法に今後、参加したいと思うか」という質問に対して"思う"と回答した学生は 12.9%であり、"思わない"が 10.7%、"どちらとも思えない"は 45.2%であった。無回答が 31.2%であった(**表4**)。
- 「動物介在活動・療法における問題点」として、"感染症""動物へのストレス""環境を整えること""動物嫌いなヒトへの配慮""実施側の対象者への接し方"があげられた。また、動物に関するエピソードについて、"祖父は亡くなってしまったが、癌を患いながらも、イヌがそばにいたおかげで延命した""自分が落ち込んでいる時などに飼っているイヌと接することで癒される"があげられた。

3.「認識」「興味」「参加経験」「参加希望」の項目の関連

1)1年

カイ2乗検定の結果、

(1)「認識」と「興味」の間に有意な関連が認められた。すなわち、動物介在活動・療法を「知っている」と回答した学生は、そうでない学生よりも動物介在活動・療法に「興味がある」と回答する割合が有意に多かった($\chi^2[2]=11.0$, $p<0.004$)(**表5**)。

(2)「認識」と「参加経験」との間には有意な関連が認められなかった($\chi^2[1]=1.0$, n.s.)。

(3)「認識」と「参加希望」の間に有意な関連が認められた。すなわち、動物介在活動・療法を「知っている」と回答した学生は、そうでない学生よりも動物介在活動・療法に「参加したい」と回答する割合が有意に多かった($\chi^2[1]=4.8$, $p<0.03$)(**表6**)。

(4)「興味」と「参加経験」との間には有意な関連が認められなかった($\chi^2[2]=1.5$, n.s.)。

(5)「興味」と「参加希望」の間に有意な関連が認められた。($\chi^2[2]=6.3$, $p<0.04$)(**表7**)。

(6)「参加経験」と「参加希望」との間には有意な関連が認められなかった($\chi^2[1]=2.8$, n.s.)。

2)2年

カイ2乗検定の結果、

(1)「認識」と「興味」の間には有意な関連が認められなかった($\chi^2[2]=0.7$, n.s.)。

表1　動物介在活動・療法について（1年）

認識	人数(人)	構成比(%)
知っている	66	75.0
知っていない	22	25.0
合計	88	100.0
興味	人数(人)	構成比(%)
ある	71	80.7
ない	1	1.1
どちらともいえない	15	17.1
無回答	1	1.1
合計	88	100.0
参加経験	人数(人)	構成比(%)
ある	3	3.4
ない	84	95.5
無回答	1	1.1
合計	88	100.0

表2　動物介在活動・療法の考え（1年）

ヒトにプラスの効果をもたらすか（参加経験があると回答した学生のみ）	人数(人)	構成比(%)
もたらす	2	66.7
無回答	1	33.3
合計	3	100.0
どのような効果をもたらすか（効果をもたらすと回答した学生のみ）	人数(人)	構成比(%)
リラックスやくつろぎなど	2	100.0
合計	2	100.0
動物介在活動・療法に参加したと思うか	人数(人)	構成比(%)
思う	21	23.9
どちらともいえない	17	19.3
無回答	50	56.8
合計	88	100.0

(2)「認識」と「参加経験」との間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[1]=0.6$, n.s.）。

(3)「認識」と「参加希望」の間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=1.1$, n.s.）。

(4)「興味」と「参加経験」との間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=1.1$, n.s.）。

(5)「興味」と「参加希望」の間に有意な関連が認められた。（$\chi^2[4]=45.5$, $p<0.0001$）（**表8**）。

(6)「参加経験」と「参加希望」との間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=0.7$, n.s.）。

3）参加経験がある学生

カイ2乗検定の結果、

(1)「認識」と「興味」の間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=1.4$, n.s.）。

(2)「認識」と「参加希望」の間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=0.6$, n.s.）。

表３　動物介在活動・療法について（２年）

認識	人数(人)	構成比(%)
知っている	88	94.6
知っていない	5	5.4
合計	93	100.0
興味	人数(人)	構成比(%)
ある	35	37.6
ない	17	18.3
どちらともいえない	41	44.1
合計	93	100.0
参加経験	人数(人)	構成比(%)
ある	34	36.6
ない	59	63.4
合計	93	100.0

表４　動物介在の考え（２年）

ヒトにプラスの効果をもたらすか（参加経験があると回答した学生のみ）	人数(人)	構成比(%)
もたらす	31	91.2
どちらともいえない	3	8.8
合計	34	100.0
どのような効果をもたらすか（効果をもたらすと回答した学生のみ）	人数(人)	構成比(%)
リラックスやくつろぎ	10	32.3
行動範囲が広がる	1	3.2
感情が豊かになる	15	48.4
言語の活性化	4	12.9
その他	1	3.2
合計	31	100.0
動物介在活動・療法に参加したいと思うか	人数(人)	構成比(%)
思う	12	12.9
思わない	10	10.7
どちらともいえない	42	45.2
無回答	29	31.2
合計	93	100.0

4）参加経験がない学生

カイ２乗検定の結果、

(1)「認識」と「興味」の間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=1.5$, n.s.）。

(2)「認識」と「参加希望」の間には有意な関連が認められなかった（$\chi^2[2]=1.3$, n.s.）。

Ⅳ. 考察

学生の動物介在活動・療法に関する認識は、1 年生が 75%、2 年生においては 94.6%と高いことが示された。2 年生の認識が 1 年生より高かった理由として、選択科目ではあるが、2 年次に動物介在実習があり、講義や演習を受講していたこと、1 年次よりも動物への関心が高まり、さまざまな情報を得る機会が多くなったことなどが関係している と

表５　１年「認識」と「興味」のクロス表

認識	興味			合計
	ある	ない	どちらともいえない	
知っている	58 (89.2)	0 (0.0)	7 (10.8)	65 (100.0)
知っていない	13 (59.1)	1 (4.5)	8 (36.4)	22 (100.0)
合計	71 (81.6)	1 (1.1)	15 (17.2)	87 (100.0)

下段括弧内は%　$\chi 2=11.0$　$p<0.004$

表６　１年「認識」と「参加希望」のクロス表

認識	参加希望		合計
	ある	どちらともいえない	
知っている	16 (69.6)	7 (30.4)	23 (100.0)
知っていない	5 (33.3)	10 (66.7)	15 (100.0)
合計	21 (55.3)	17 (44.7)	38 (100.0)

下段括弧内は%　$\chi 2=4.8$　$p<0.03$

表７　１年「興味」と「参加の希望」のクロス表

興味	参加希望		合計
	ある	どちらともいえない	
ある	17 (68.0)	8 (32.0)	25 (100.0)
ない	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
どちらともいえない	3 (27.3)	8 (72.7)	11 (100.0)
合計	20 (54.1)	17 (45.9)	37 (100.0)

下段括弧内は%　$\chi 2=6.3$　$p<0.04$

表８　２年「興味」と「参加希望」のクロス表

興味	参加希望			合計
	ある	ない	どちらともいえない	
ある	12 (46.2)	1 (3.8)	13 (50.0)	26 (100.0)
ない	0 (0.0)	8 (61.5)	5 (38.5)	13 (100.0)
どちらともいえない	0 (0.0)	1 (4.0)	24 (96.0)	25 (100.0)
合計	12 (18.8)	10 (15.6)	42 (65.6)	64 (100.0)

下段括弧内は%　$\chi 2=45.5$　$p<0.0001$

考えられた。

興味の有無に関して、興味があると回答した学生は、1年生が80.7%と高かったが、2年生は37.6%と低い数値を示した。2年生の興味が低値を示した理由として、"動物へのストレス"という動物介在活動・療法を行う上での問題点が自由記載欄に書かれていた。2年生は「どちらともいえない」という回答が 44.1%と多かったが、実際に活動を行い、動物看護という視点から、動物への負担を考え、このような結果になったと考えられた。

参加経験に関して「参加したことがある」と回答した学生は、1年生が3.4%と低く、2年生は36.6%であった。これは2 年次に動物介在実習があり、実際に実習を行った学生が含まれていることが関係していると考えられた。

動物介在活動・療法はヒトにプラスの効果をもたらすかに関して、動物介在活動・療法に参加経験がある学生に質問した。1年生は、参加した学生が3人と少なかったが、2 名が"リラックスやくつろぎなど"のプラスの効果をもたらすと考えていた。2 年生は 34 名が今までに動物介在活動・療法に参加したことがあり、31 名が"感情が豊かになる""リラックスやくつろぎなど""言語の活性化""行動範囲が広がる"のプラスの効果をもたらすと考えていた。このことから、参加し、実際に対象者への効果を見ることにより、動物がヒトになんらかのプラスの効果をもたらすという実感が強くもてると考えられた。

動物介在活動・療法に今後、参加したいと思うかに関して、無回答の割合が、1年生が約5割、2年生が約3割と多かった。回答した1年生は、参加したくないという学生がいなく、どちらともいえないという学生も多かったことから、今後、講義や実習を受講していく中で、何らかの気持ちの変化が見られると考えられた。2 年生においては、参加したことがある学生が 34 名おり、今後、参加希望の学生が12名と減少した。これは、動物看護を学んでいる視点から、動物介在活動・療法による動物へのストレスなどを考慮している学生もいるのではないかと考えられた。動物介在活動・療法を行っている研究者にとって、動物看護という視点からの意見は重要であり、このような考えをもつ動物看護師が、動物介在活動・療法のスタッフとなることで、より、動物にもヒトにもプラスになる動物介在活動・療法が実施できると考えられた。

「認識」「興味」「参加経験」「参加希望」の関連について、1年生において、動物介在活動・療法を知っている学生は活動や療法に「興味がある」「参加希望がある」という結果になった。興味と参加希望について、1年生、2年生とも有意差がみられたが、「どちらともいえない」という回答が多く、興味がある学生は参加希望があるとは言えない結果となった。特に 2 年生については、動物看護関連の授業を受講していること、実際に参加し、動物看護的な立場から、客観的に判断した場合、"動物へのストレス"など、活動や療法のマイナスの部分を考慮し、参加希望が少なかった、どちらともいえないという人数が多かったためこのような結果になったと考えられた。参加経験と他との関連については、参加経験者が少なかったことも関係し、有意差がみられなかったと考えられた。

動物看護科学生は動物介在活動・療法に関し、認識は高く、ヒトに対するプラス効果があるということは実感していることがわかった。しかし、講義や実習だけでは興味がもてないこと、動物介在活動・療法への参加機会が少ないこと、短期間の参加では対象者の変化について実感することができなかったこと、様々な動物側への負担などから今ひとつ動物介在活動・療法に関し、理解が示されていないことが今回の調査で明らかとなった。

V. 本研究の限界と今後の課題

本調査は、動物介在活動実習が開講している東京都内にある動物看護師養成学校1施設のみで行ったものであり、実習前に動物介在活動・療法についての講義や演習、勉強会の必要性の有無を確認するために行ったものである。今後は、全国の動物看護師養成学校に在籍する学生の動物介在活動・療法についての認識、興味、経験や考えについて調査し、動物介在活動実習が介在対象者にとっても、学生にとってもよりよい効果が得られるための検討を行う上で活用していきたい。

謝辞

本研究にご協力いただきました東京都にある動物看護師養成学校の学生の皆様に深謝いたします。

引用文献

1)横山章光:アニマルセラピーとは何か.日本放送出版協会,39-71,1996.

2)林良博:検証アニマルセラピー.講談社,15-59,1999.

3)環境省ホームページ:

http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/amend_law/gaiyo.html(2006.2.21 確認)

4)田丸政男、戸塚裕久:補完・代替療法 アニマルセラピー. 金芳堂,22-23,2006.

受理：2008年2月15日

原著論文

統合失調症を中心とした慢性精神疾患患者の動物とのふれあいによる『気分』の変化に関する研究

ー参加傾向、環境整備という観点から看護援助を検討するー

熊坂隆行[1]、山田好秋[2]、升秀夫[3]、纐纈富久[4]、小窪和博[5]

Effects of animal assisted activity on the mood of patients with chronic mental disorders

: an investigation of nursing techniques from the viewpoints of patient participation, and environmental improvement

Takayuki Kumasaka, Yoshiaki Yamada, Hideo Masu, Tomihisa Kouketsu, Kazuhiro Kokubo

1）名桜大学 人間健康学部看護学科　2）新潟大学大学院 医歯学総合研究科

3）筑波大学大学院 人間総合科学研究科　4）医療法人 仁誠会 大湫病院　5）岐阜県 飛騨保健所

1）〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220番1号　住所は1)のみ記載

要約

精神科・神経科病院に動物（イヌ）を導入した。今回、「動物が好き」「入院前に飼育経験がある」「入院前、飼育していた動物はイヌ」という、イヌとのふれあいに参加した、統合失調症を中心とした慢性精神疾患患者の要因が明らかとなった。また、イヌとのふれあいによる気分の変化をフェイススケールにて測定し、「快」の効果が得られた。動物とのふれあいを希望する患者に動物とのふれあいを実施することで、恐怖や不安の軽減、精神活動の活発化、意欲の向上などが得られる可能性が考えられた。動物とのふれあいは、慢性精神疾患患者へ心理社会的アプローチとして有効であり、「動物がいる入院環境を整えること」は患者の本質に係わる看護援助であると考えられた。

Abstract

Dogs were brought in to a psychiatric and neurological hospital. The present study clarified whether patients with chronic mental disorders, in particular schizophrenia, who participated in animal assisted activity were the following: "animal lovers", "had pets before hospitalization" or "had dogs before hospitalization". Furthermore, changes in mood resulting from contact with the dogs were measured using the face scale, and the results showed that the animal assisted activity was "pleasurable". The present findings suggest that allowing patients to be in contact with animals, if they choose to, alleviates fear and anxiety, activates mental activities and improves their mental status. Therefore, animal assisted activity is an effective sociopsychological approach to treating patients with chronic mental disorders and establishing a system that allows inpatients to come in contacts with animal and is a nursing technique that affects the core of patient care.

【キーワード】

・動物ふれあい　(contact with animal)
・患者の気分の変化　(change in patient mood)
・看護援助　(nursing technique)

Ⅰ．目的

現在、精神看護の対象者の大半が統合失調症と言われている。統合失調症とは、「思春期から成人期にかけて発症し、特徴的な思考障害、自我障害、およびそれに伴う行動異常を示し、多くは慢性的に経過し、自発性や対人接触が低下し、社会生活に困難をきたす疾患」であり、

さまざまな研究がされているが、現段階では、明らかな原因と認められるのは発見されていない[1]。

わが国の精神医療・保健行政は癲狂院の設立規定(1874年)が始まりとされており、治療においても伝統的治療から近代的治療へと発展を遂げている。現代の西洋医学の中心となる治療技法は物理化学的アプローチであり、併せて心理社会的アプローチが統合的に用いられている。その心理社会的アプローチの生物療法の中にペット療法、動物療法、動物介在療法が位置づけられている。この療法は、生き物とのかかわりを利用したもので、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めることを目的とした療法である[2)3)]。

これらの療法は、多くの専門職や協働するチーム医療の中で行うが、療法を行う場合、24時間、患者の入院環境を整え、患者の状況を把握し、看守っている看護師の役割が非常に大きい。患者の価値観の多様性を理解し、患者の気持ちに寄り添っていくために、それぞれの過去の生活観念に目を向ける必要がある。患者がどのような人物なのかをイメージしていくために、① どのようなことが好きなのか、② どのような趣味や特技をもっているのかなどの情報を集め、それらのことが患者にとって、いかなる意味をもつのかを考えていくべきである[1]。

現代は、ヒト同士のコミュニケーションから安らぎを得ることが難しい時代とされている[4]。この社会状況下で「ヒトと動物の絆」が重視され、ヒトが飼育し共に暮らしてきた歴史が長い動物との生活が注目されるようになった。

欧米の病院や医療施設では、ペットと面会することや同居を許可する病院が一般的に存在し、動物を介在した治療が盛んに行われ、報告されている。文献データベース「CINAHL」を使用し、キーワード「Pet Therapy」で検索したところ、2005年3月までに229件の報告があった。その対象者は、精神疾患の患者、小児、高齢者(特に認知症の高齢者)、障害者、ターミナル期の患者等であり、介在する動物はイヌやネコ、ウマ、イルカ等であった。精神科病院に入院する患者において、動物とのふれあいにより、落ち着きや意欲の向上が得られるなどの報告もされている[5)6)]。これらは、専門家が動物介在プログラムを計画し、患者の身体的・精神的・社会的な面の向上に用いられている。

日本国内の介護・福祉系施設では、ボランティアによる動物との「ふれあい」を目的とした、動物介在活動(Animal Assisted Activity:AAA)が盛んに行われている[7)8)]。しかし、医師の治療プログラムに基づき精神や機能治療を目的とした、動物介在療法(Animal Assisted Therapy:AAT)は、一般的な治療法として用いられない現状にある。その理由は、① 動物が保有する人獣共通感染症やアレルギーへの懸念、② ヒトへの攻撃等の事故による損傷への懸念、③実際に病院で行った伴侶動物との面会や同居、ふれあい活動の報告が少ないこと、④ 日本における動物介在の活動や治療は獣医療関係の専門家が行っていることが多く、病院スタッフ(AATを行う場合は特に医師)の理解と技術がないこと、⑤ 患者と病院スタッフに対する動物に関する認識、要望等の調査が行われていないこと、⑥ 保険適用外の治療行為であるため患者側の経費負担が莫大であり、ボランティア活動に依存せざるを得ないなどの問題点を抱え、普及への道は閉ざされたままである。

我々は、動物がいる入院環境を整えることも看護ケアのひとつであると考え、保健師助産師看護師法第5条、第37条に定められる「医師の指示がなくてもなし得る療養上の世話」という看護独自の業務として、動物とのふれあい、伴侶動物との面会や同居を推進してきた。本研究では、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めること[2)]を目的とし、精神科病院において、慢性精神疾患患者に有効とされている動物を用いたアプローチを行い、参加する患者の傾向とそのときの「気分」の変化を探った。

Ⅱ. 方法

本研究は、岐阜県のアニマルセラピー推進事業の一環として、統合失調症を中心とした慢性精神疾患患者にイヌとのふれあいを実施し、「気分」の変化を探った。

調査対象とした病院は、イヌとのふれあいを希望する岐阜県内の精神科・神経科を有するA病院である。調査は2004年9月15日(第1回目)と、2005年3月3日(第2回目)に実施した。「ヒトと動物のふれあい」は、日本国民への周知が浸透しつつある段階にあり、伴侶動物との面会を可能とする医療施設も増える傾向にある。調査対象とした病院においても患者と動物とのふれあい実施の実績があるが、第1回目の実施状況把握、事故などの不慮のアクシデントがないよう慎重に準備を行ったことから、第2回目の実施まで、6ヶ月を要した。

対象者は、統合失調症、人格障害、てんかん性精神病、アルコール依存症、躁うつ病、心因反応を有し、イヌとのふれあいを希望する患者で、研究への協力の同

意が得られた33名である。

第2回目のふれあいについては、第1回目のふれあいに賛同し、再びふれあいたいとの希望があり、協力の同意が得られた患者9名である。

今回2回ふれあいを行った理由としては、第1回目と第2回目の患者への効果の相違点の把握、動物介在看護の継続への意義の確認を得ることを目的としたためである。

参加・見学については、ふれあい開始時の気分で患者本人に判断してもらうこととした。

ふれあうイヌとハンドラーは病院や介護・福祉系施設で動物とのふれあい活動を行うボランティア団体の協力を得た。イヌ1頭に対しハンドラー1名の構成で、ラブラドール3頭(男性ハンドラー1名、女性ハンドラー2名)、シーズー(女性ハンドラー)、ヨークシャテリア(女性ハンドラー)、ダックスフンド(女性ハンドラー)、フレンチブルドッグ(女性ハンドラー)、スピッツ(女性ハンドラー)、柴犬(女性ハンドラー)、雑種(女性ハンドラー)の合計10頭のイヌと10名のハンドラーが参加した。今回のふれあいには、専門獣医師が健康診断・適正検査を行い、患者とのふれあいに問題がないと診断したイヌが参加した。

ハンドラーの注視を得ながら、15分～20分のふれあいを2回実施した。2回の実施の間には、5～10分間の休憩を入れた。

調査は、まず、イヌとのふれあいを希望する患者の基本的属性を調べた。カルテから、① 性別 ② 年齢 ③ 疾患名 ④ 現在の状態 ⑤ 入院日 ⑥ 入院までの経過 ⑦ 既往歴の有無 ⑧ 日常生活動作の状態 ⑨ 入院生活状況について、情報を収集した。また、対象者の動物に対する意識を調べるため、① 動物の好き嫌い(1. 好き 2. どちらともいえない 3. 嫌い) ② 動物の飼育暦(1. ある 2. ない) ③ 飼育していた年数 ④ 飼育していた動物の種類(1. イヌ 2. ネコ 3. その他)について患者本人から聞き取り調査を行った。

イヌとのふれあいを行い、患者への負担が少なく、簡単で言葉を必要とせず、患者の状態を把握する方法として看護の現場で頻繁に活用されているフェイス・スケール、今回は信頼性と妥当性のあるLorish & Maisiak (1986)らによるフェイス・スケール[9]を用いて動物とのふれあい「活動前」と「活動後」の気分を調べた。このフェイス・スケールは、20個の顔のイラストで構成されている。20個の顔は極めて苦痛を感じている様子の顔から、中立的な顔を中心に、極めて喜びを感じている顔の順に並べられている。被験者はその中で、今の自分の気分を最も良く表していると思うイラストを示すよう求められる。この尺度は、数値が小さいほど快の気分を示すことになっているが、論文の記載が煩雑になるため、数値を逆転させ、数値が大きいほど快の気分を示すようにした。得られたデータは平均値ならびに標準偏差を求め、SPSS 11.5J for Windows版を用いて、① 対応のあるt検定、② 独立したt検定を行った。

倫理的配慮については、研究趣旨と調査方法等について説明書を用い、十分な説明を本人に行い、同意を得てから実施した。

Ⅲ. 結果

<第1回目(2004年9月15日)のふれあい活動から>

1. 対象者の概要

調査研究への協力が得られた患者は男性 17 名、女性 16 名の合計 33 名であった。男性の平均年齢は 55.94(SD=9.58)歳、女性の平均年齢は 53.38(SD=9.91)歳で、全体の平均年齢は 54.70(SD=9.82)歳であった。年齢区分は、40 歳以下(成人期[10])が 3 名(9.09%)、41～65 歳(壮年期[10])が 27 名(81.82%)、66 歳～75 歳(前期高齢期[10])が 3 名(9.09%)であった。

疾患別の区分では、統合失調症が 25 名(75.76%)で最も多く、てんかん性精神病とアルコール依存症がそれぞれ 2 名(各 6.06%)、その他として人格障害、躁うつ病、外傷後脳器質性神経障害、心因反応がそれぞれ 1 名(各 3.03%)であった。初回入院からの年数は、平均 24.61(±13.57)年であり、最高が 41.50 年、最低が 0.25 年で入退院を繰り返している対象者がほとんどであった。

日常生活動作(Activities of Daily Living ;ADL)について、1 名の患者が入浴で一部介助を要したが、その他は全員、歩行、排泄、食事、入浴、脱着とも自立していた。入院中の生活状況は、①自分自身でできることもあるが、できないことも多く、日常生活の中で部分的な介助を繰り返して働きかけなければならない患者[11]は 2 名、②自分自身のことは大体できるが、自主的な行動に問題が残されている患者[11]は 24 名、③自主的な行動はかなりとれるが、社会適応には問題が残されている患者[11]は 7 名であった。

動物の好き嫌いについて「好きである」と回答した患者は 25 名(75.76%)で、「嫌いである」と回答した患者は 2 名(6.06%)、「どちらともいえない」は 6 名(18.18%)であった。入院前の動物飼育経験の有無について「飼育経験があ

る」と回答した患者は 29 名(87.88%)で、「飼育経験がない」と回答した患者は4名(12.12%)であった。現在も家庭で飼育中、または入院前、飼育したことのある動物の種類について「イヌ」が 23 名で最も多く、「ネコ」が 10 名、無回答が 8 名であった(複数回答あり)。

イヌとのふれあいが始まり、普段は受け身の患者が、自発的に「イヌに近づこう」「イヌにさわろう」という姿勢がみられた。

2. 動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較

個々のフェイス・スケール評価では、33名中19名が「活動前」より「活動後」に"快"となり、7名は、ふれあい活動前後において変化がなかった。参加者 2 名(女性)、見学者 5 名(男性 3 名、女性 2 名)については、「活動前」より「活動後」に"不快"となった。

対象者 33 名全体の平均は、活動前が 13.70(±4.40)であり、活動後が 15.94(±4.14)で活動前後間に有意差が認められ(t[32]=−2.37,P<0.05)、また、参加者平均においても活動前後間で有意差が認められた(t[18]=−2.72,P<0.01)。しかし、男性平均、女性平均、見学者平均では有意差は認められなかった(**表1**)。

33 名のうち、参加した患者は 19 名(男性:7 名、女性 12 名)いたが、そのうち、男性 7 名のフェイス・スケール評価の平均は、参加前が 12.57(±5.65)、参加後が 18.14(±1.77)で活動前後間で有意差が認められた(t[6]=−2.43,P<0.05)が、女性 12 名の結果から得られた数値平均での有意差は認められなかった。また、見学者においては、男性、女性ともに有意差は認められなかった(**表2**)。

3.「好き嫌い別」「飼育経験別」「飼育動物種別」における動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較 (表3)

「好き嫌い別」において、動物が「好き」と回答した 25 名の患者のフェイス・スケール評価の平均は、活動前が 14.48(±4.42)、活動後が 16.68(±3.49)で活動前後間で有意差が認められた(t[24]=−2.25,P<0.05)。しかし、「嫌い」「どちらともいえない」では有意差は認められなかった。性別に比較した結果、男性、女性ともに「好き」「嫌い」「どちらともいえない」について有意差は認められなかった。参加・見学別に比較した結果、動物が「好き」と回答した参加者の平均の活動前後間で有意差が認められた(t[17]=−2.43,P<0.05)。一方、見学者については有意差は認められなかった。

「飼育経験別」において、動物の飼育経験が「ある」と回答した 29 名の患者の平均は、活動前が 13.93(±4.36)、活動後が 16.48(±3.67)で活動前後間で有意差が認められた(t[28]=−2.85,P<0.01)。飼育経験「なし」の対象者では有意差は認められなかった。性別に比較した結果、動物の飼育経験「ある」と回答した男性の平均の活動前後間で有意差が認められ(t[13]=−2.61,P<0.05)、女性では有意差が認められなかった。参加・見学別に比較した結果、動物の飼育経験が「ある」と回答した参加者の平均の活動前後間で有意差が認められた(t[18]=−2.72,P<0.01)。見学者については有意差は認められなかった。

「飼育動物種別」において、入院前、飼育していた動物が「イヌ」と回答した 23 名の患者の平均は、活動前が 14.30(±3.86)、活動後が 16.61(±3.53)で活動前後間で有意差が認められた(t[22]=−2.82,P<0.01)。飼育経験動物が「ネコ」では有意差は認められなかった。性別に比較した結果、男性、女性ともに有意差は認められなかった。参加・見学別に比較した結果、「イヌ」を飼育していたと回答した参加者の平均の活動前後間で有意差が認められた(t[16]=−3.37,P<0.01)。見学者については、有意差は認められなかった。

4. 動物ふれあい活動「前」の「性別」「参加・見学別」のフェイス・スケール評価の比較と動物ふれあい活動「後」の「性別」「参加・見学別」のフェイス・スケール評価の比較

動物とふれあい活動前のフェイス・スケールの評価の平均は、男性(17 名)が 12.94(±4.67)、女性(16 名)が 14.50(±4.08)であり、性別間で有意差は認められなかった(**表4**)。また、男性の参加者と見学者、女性の参加者と見学者、参加者の男性と女性、見学者の男性と女性の比較結果についても有意差は認められなかった(**表5・6**)。

男性と女性の活動後のフェイス・スケールの評価の比較(**表 4**)、男性の参加者と見学者、女性の参加者と見学者、参加者の男性と女性、見学者の男性と女性の比較を行ったが、いずれも有意差は認められなかった(**表5・6**)。

<第2回目(2005年3月3日)のふれあい活動から>

5. 対象者の概要

第 2 回目の調査研究への協力が得られた患者は、第 1 回目(2004 年 9 月 15 日)に参加・見学した男性 5 名、女性

表１　動物ふれあい活動前後のフェイス・スケール評価比較
(2004年9月15日)(平均値±標準偏差)

	前	後	t値
男性(17名)	12.94±4.67	15.65±4.58	−1.71
女性(16名)	14.50±4.08	16.25±3.73	−1.69
参加(19名)	13.95±4.68	17.21±2.74	−2.72 **
見学(14名)	13.36±4.13	14.21±5.12	−0.57
全体(33名)	13.70±4.40	15.94±4.14	−2.37 *

* p<0.05　** p<0.01

表２　参加・見学別における性別の動物ふれあい活動前後のフェイス・スケール評価比較
(2004年9月15日)(平均値±標準偏差)

参加(19名)	参加前	参加後	t値
男性(7名)	12.57±5.65	18.14±1.77	−2.43 *
女性(12名)	14.75±4.07	16.67±3.11	−1.52
見学(14名)	見学前	見学後	t値
男性(10名)	13.20±4.16	13.90±5.20	−0.35
女性(4名)	13.75±4.65	15.00±5.60	−0.65

* p<0.05

表３　好き嫌い・飼育経験・飼育動物種別における動物ふれあい活動前後のフェイス・スケール評価比較
(2004年9月15日)(平均値±標準偏差)

好き嫌い	前	後	t値
好き(25名)	14.48±4.42	16.68±3.49	−2.25 *
嫌い(2名)	9.00±0.00	14.00±4.24	−1.67
どちらともいえない(6名)	12.00±3.85	13.50±6.03	−0.45
飼育経験	前	後	t値
ある(29名)	13.93±4.36	16.48±3.67	−2.85 **
なし(4名)	12.00±4.97	12.00±5.77	−0.00
飼育動物種	前	後	t値
イ　ヌ(23名)	14.30±3.86	16.61±3.53	−2.82 **
ネ　コ(2名)	19.00±1.41	16.50±3.54	0.71
無回答(8名)	10.63±4.63	13.88±5.57	−1.06

* p<0.05　** p<0.01

表４　動物ふれあい活動の前と後の性別のフェイス・スケール評価比較
(2004年9月15日)(平均値±標準偏差)

	男性(17名)	女性(16名)	t値
前	12.94±4.67	14.50±4.08	−1.02
後	15.65±4.58	16.25±3.73	−0.41

表５　動物ふれあい活動の前と後の参加・見学のフェイス・スケール評価比較
(2004年9月15日)(平均値±標準偏差)

男性(17名)	参加(7名)	見学(10名)	t値
前	12.57±5.65	13.20±4.16	-0.27
後	18.14±1.77	13.90±5.20	2.06
女性(16名)	参加(12名)	見学(4名)	t値
前	14.75±4.07	13.75±4.65	0.41
後	16.67±3.11	15.00±5.60	0.76

表６　動物ふれあい活動の前と後の性別のフェイス・スケール評価比較
(2004年9月15日)(平均値±標準偏差)

参加(19名)	男性(7名)	女性(12名)	t値
参加前	12.57±5.65	14.75±4.07	-0.98
参加後	18.14±1.77	16.67±3.11	1.32
見学(14名)	男性(10名)	女性(4名)	t値
見学前	13.20±4.16	13.75±4.65	-0.22
見学後	13.90±5.20	15.00±5.60	-0.35

表７　動物ふれあい活動前後のフェイス・スケール評価比較
(2005年3月3日)(平均値±標準偏差)

	前	後	t値
男性(5名)	12.80±4.09	19.00±1.00	-3.89 *
女性(4名)	15.25±3.59	19.25±0.50	-2.53
全体(9名)	13.89±3.86	19.11±0.78	-4.63 **

* $p<0.05$　** $p<0.01$

表8　第１回目と第２回目の両方に参加した９名の動物ふれあい活動前後のフェイス・スケール評価比較
(平均値±標準偏差)

	第1回目(2004年9月15日)			第2回目(2005年3月3日)		
	前	後	t値	前	後	t値
男性(5名)	10.40±5.03	18.20±1.64	-3.00 *	12.80±4.09	19.00±1.00	-3.89 *
女性(4名)	15.75±3.86	16.75±3.78	-1.73	15.25±3.59	19.25±0.50	-2.53
全体(9名)	12.78±5.12	17.56±2.70	-2.61 *	13.89±3.86	19.11±0.78	-4.63 **

* $p<0.05$　** $p<0.01$

4名の合計9名であり、平均年齢は58.67(SD=6.99)歳であった。

年齢区分は、41～65歳(壮年期)が7名(77.78%)、66歳～75歳(前期高齢期)が2名(22.22%)であった。疾患別の区分では、統合失調症が8名(88.89%)で、外傷後脳器質性神経障害が1名(11.11%)であった。初回入院からの年数は、平均27.29(±12.79)年であり、最高が40.42年、最低が2.42年で入退院を繰り返している対象者がほとんどであった。入院日数の分布は、2年以上10年以下が3名(33.33%)、11年以上20年以下が2名(22.22%)、21年以上が4名(44.44%)であった。

ADLについて、1名の患者が入浴で一部介助を要したが、その他は全員、歩行、排泄、食事、入浴、脱着で自立していた。入院中の生活状況については、①自分自身でできることもあるができないことが多く、日常生活の中で部分的な介助を繰り返して働きかけなければならない患者1名と、②自分自身のことは大体できるが、自主的な行動に問題が残されている患者8名であった。

9名全員が、動物の好き嫌いについて「好きである」と回答し、動物飼育経験の有無について「飼育経験がある」と回答した。自宅で飼育中または飼育したことのある動物種について「イヌ」が58.33%、「ネコ」が25.00%、無回答が16.67%であった。

今回、ふれあいへの参加とふれあいの見学については、全員はふれあいに参加した。この集団は、第1回目のふれあいでは、8名がふれあいに参加し、1名がふれあいを見学していた。

6. 動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較（表7）

対象者個々のフェイス・スケール評価結果は、8名が「活動前」より「活動後」に"快"となった。1名は、ふれあい活動前後において変化がなかった。9名全体の平均は、活動前が13.89(±3.86)であり、活動後が19.11(±0.78)で有意差が認められ($t[8]=-4.63, P<0.01$)、また、男性平均においても有意差が認められた($t[5]=-3.89, P<0.05$)。しかし、女性平均では有意差は認められなかった。

7. 「好き嫌い別」「飼育経験別」「飼育動物種別」における動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較

9名全員が「動物が好き」、「動物の飼育経験がある」と回答し、活動前後間で有意差が認められた($t[8]=-4.63, P<0.01$)。また、「動物が好き」「動物の飼育経験がある」と回答した男性の平均で有意差が認められた($t[4]=-3.89, P<0.05$)。女性では有意差は認められなかった。「飼育動物種別」においては、入院前、飼育していた動物が「イヌ」と回答した7名の平均は、活動前が15.14(±3.29)、活動後が19.29(±0.76)となり、活動前後間で有意差が認められた($t[6]=-3.92, P<0.01$)。性別に比較した結果、男性、女性ともに有意差は認められなかった。

8. 動物ふれあい活動「前」の「性別」のフェイス・スケール評価の比較と動物ふれあい活動「後」の「性別」のフェイス・スケール評価の比較

動物のふれあい活動前のフェイス・スケールの評価の平均は、男性が12.80(±4.09)、女性が15.25(±3.59)で性別間に有意差は認められなかった。動物のふれあい活動後のフェイス・スケールの評価の平均は、男性が19.00(±1.00)、女性が19.25(±0.50)で、活動前同様、性別間に有意差は認められなかった。

＜第1回目と第2回目のフェイス・スケール評価の比較から＞

9. 第2回目のふれあい活動に参加した9名の第1回目活動時のフェイス・ケール評価との比較（表8）

第1回目、第2回目の両方に参加された患者9名のふれあい活動「前」と「後」におけるフェイス・スケール評価の平均は、第1回目、第2回目ともに活動前後間で有意差が認められた。しかし、男女別に見てみると、男性5名の活動前後間では有意差が認められたが、女性4名においては有意差は認められなかった。

Ⅳ. 考察

＜第1回目(2004年9月15日)のふれあい活動から＞

1. 対象者について(事前調査より)

動物とのふれあいに参加した患者は、40歳代から60歳代が大半を占めた。この世代は体力の低下、生理機能など、加齢による変化がみられる。また、老年期への過渡期にあたる充実期とされ、家庭では家族の生活を支え、会社では重責な職務に就く者も増える傾向がある。

ヒトは生存・発達の欲求に従い、なにかしらの目的をもち、それを達成するために他者と協力しながら生活している[12]。目的が達成されると満足感が生じ、心も安定しているが、なんらかの理由で目的の進行が妨げられたり、批判されたり、せかされたり、周囲の人々から嫌わ

れると、悲しみや怒り、不安などの感情が生じ、心の安定が揺り動かされる[12]。このとき防衛機制が働くが、否定的な反応が起こってしまった場合、環境への適応が困難となり、人格の統一性や一貫性が失われ生活破綻をまねくこともある[12]。このような不適応の状況から、不眠や食欲不振など、身体症状を示す心の病が発症すると考えられている[12]。統合失調症の発症は20歳前後に最も多く、35歳までに発症する例が多い[12]。この調査研究での対象者も、35歳までに発症した長期入院患者が大半を占めた。症状として、幻覚・妄想状態(陽性症状)を呈し、意欲の低下と感情の不調和、思考過程や自我意識の障害(陰性症状)が主立った特徴であった[12]。治療と看護は、薬物による行動変化の期待、人間の心理的な側面を注視し、行動を変化させる指導、行動そのものに目を向け変化を促す矯正が行われている[12]。幻覚や妄想状態に対し薬物投与にて患者の恐怖感や不安感を軽減し、落ち着きが取り戻せるような環境を提供する必要がある。統合失調症の治療と看護には、患者の個性尊重と、病状の多様性への対応が必要とされる。動物とのふれあいは、心のリフレッシュとリラックスが得られるヒトも多いことから、動物が好きな慢性精神疾患患者への治療と看護として、有効なサービスと考えられる[3]。動物とのふれあいは治療行為とは異なり、レクリエーション感覚があることで患者に受け入れやすい。レクリエーション効果は休息による人間性回復や意欲の向上が得られる。動物とのふれあいは患者の精神活動を活発にし、長い入院生活によって生じるホスピタリズムを防ぐ目的を果たすと期待されている。動物とのふれあいにより、同じ目的をもった集まりが構成されることにより人間関係が生じ、集団心理療法の場として有効な方法であると考えられている[12]。長期にわたる闘病入院生活により、自主的な行動回復の遅れと、社会適応に支障をきたす患者も多いことから、社会復帰への取りくみ効果が期待できる。

この調査で動物とのふれあいに参加し、または見学した約75%の患者が動物は好きだと回答した。ふれあいに参加した患者に限ると、約95%が動物は好きと回答していた。そのうちの約90%が入院前に動物の飼育経験があり、ふれあいに参加した患者の全員が、なんらかのかたちで動物の飼育経験があった。患者らが飼育していた動物の種類は、約70%がイヌを飼育していたと答えている。イヌとのふれあいに参加、または、見学を希望した患者は、自分自身を取り巻く社会資源の中で、抱えている問題を解決することができず、長期間の精神疾患を患い、長期入院生活の中で、自主的な行動に問題が残ってしまったり、社会適応がうまくいかなかったりしていた。その中の出来事として、患者自身に興味があるイヌとのふれあいに参加されたことは、ふれあいになんらかの効果を求めていると考えられた。

成人期、または壮年期である統合失調症患者にも自分自身の思考がある。動物が嫌いであるとか、動物を飼育したことがない患者は、動物とのふれあいに求めるものはないと考えたのではないかと思われた。一方、動物とのふれあいに参加、または見学の必要があると考えた患者は、「動物が好き」「入院前に飼育経験がある」「入院前に飼育していた動物がイヌである」共通する面を持ち合わせていた。慢性精神疾患患者の動物に対する信頼感が示されたものと考えられた。

2名の男性患者から「動物は嫌いである」との回答があった。この患者2名は、動物とのふれあいには参加せず、動物とふれあいをする仲間の様子を見学していた。うち1名は、入院前に5年間に渡るイヌの飼育経験があり、もう1名は、動物の飼育経験はなかった。動物とのふれあいを見学した後にフェイス・スケール評価を試みたところ、2名ともに快となる結果を得た。慢性精神疾患患者でも「動物は嫌いである」と言いつつも、患者自身からふれあいに参加したい希望が湧くのではないかと思われ、慢性精神疾患患者も動物とのふれあいに興味を抱き、ふれあいに参加することでなんらかの快の影響が得られる可能性があると考えられた。

2. 動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較から

病院ではさまざまな心理社会的アプローチが行われており、今回の動物とのふれあいもそのひとつである。この活動の評価を短時間で評価できる指標にフェイス・スケールがある。フェイス・スケール評価は、ふれあい活動の直前、直後で行った。直前の患者は「今日はこれから、動物とのふれあいをする」という意識、期待感が高まっていると考えられる。このことから、ふれあい活動の前のフェイス・スケール評価においても“快”となると考えられ、先行研究同様[13]、今回もこのような傾向がみられた。33 名中 19 名はふれあい活動後に“快”となり、ふれあい活動前後において変化がなかった患者 7 名についても評価は 11 以上であったため、ふれあい活動前からふれあいをするという意識、期待感が高まっていたと考えられる。また、参加者2

名が参加後に不快となったが、2 名とも参加前も参加後もフェイス・スケール評価が11以上であった。この2名から、参加後に「楽しくて少し疲れてしまった。」「普段、生活しているときよりも気分がいい。」と訴えがあったことから、参加後にフェイス・スケール評価では不快となったが、なんらかの快の効果が得られたと考えられる。このようなことから、フェイス・スケール評価で見学後に不快となった見学者 5 名を除いて、今回の動物のふれあいは、快の効果を及ぼしたと考えられた。

性別においては、効果の差はほとんどなかったが、参加者に高い快の効果を及ぼした。今回の参加者は、見学者よりも“動物が好き”“入院前、動物を飼育していた”“入院前、飼育していた動物はイヌ”という傾向があったことから、今後このような活動を行う上で、「動物の好き嫌い」「入院前の動物飼育経験」「入院前、飼育していた動物の種類」といった対象者の情報を得、施すことは、動物とのふれあいを希望し、これらの要因がある患者においては、より快の効果を得ることとなり、対象者の恐怖感や不安感を軽減し、落ち着きが取り戻せるような環境つくりをすること、人間性の回復や意欲の向上を導き出すこと、患者の精神活動を活発化すること、長い入院生活によって生じるホスピタリズムを防ぐといった看護の本質的な目的に到達すると考えられた。

3.「好き嫌い別」「飼育経験別」「飼育動物種別」における動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較から

動物とのふれあいは「動物が好き」と回答した患者25名に快の効果を及ぼした。しかし、好き嫌い別の性別では大きな差はみられなかったが、好き嫌い別の参加・見学別では、「動物が好きで参加にした患者」に特に高い快の効果を及ぼした。動物が嫌いと回答した患者 2 名は活動を見学したが見学前より見学後に快の効果がみられた。今回は「動物が嫌いで参加した患者」がいなく、比較はできないが、この結果から“動物が好きで参加する患者”に快の効果を得られる可能性が高いと考えられる。動物が嫌いで見学した患者2名においても見学後に快の効果が得られたことから、今後は、嫌いになった理由を明らかにし、ふれあい方法を検討することで、嫌いな対象者においても快の効果が期待できると考えられた。

「入院前、動物の飼育経験がある」と回答した患者 29 名に快の効果を及ぼした。また、飼育経験別の性別では入院前、動物を飼育した経験のある男性に高い快の効果を及ぼした。女性においては有意差はみられなかったが、快の効果がみられた。また、飼育経験別の参加・見学別では入院前、動物の飼育した経験があり、参加した患者で快の効果がみられたことから、「入院前、動物の飼育経験があり、参加」する患者に、快の効果を及ぼす可能性が高いと考えられた。

「入院前、飼育していた動物がイヌ」と回答した患者 23 名で快の効果がみられた。特に入院前、飼育していた動物がイヌであり、参加した患者に快の効果がみられたことから、「患者が入院前、飼育していた動物種、または、飼育していた動物とのふれあいに参加」することが快の効果を得られる可能性が高いと考えられた。

4. 動物ふれあい活動「前」における「性別」「参加・見学別」のフェイス・スケール評価の比較と動物ふれあい活動「後」における「性別」「参加・見学別」のフェイス・スケール評価の比較から

フェイス・スケール評価については、前記したとおり、ふれあい活動直前、直後で行っている。直前の患者は「今日はこれから、動物とふれあいをする」という意識、期待感が高まっていると考えられる。このことから、フェイス・ケール評価において、ふれあい前も普段の生活より快になることが考えられ、ここで得られたデータからもそれが伺える。ふれあい活動前の患者の状態は、性別や参加・見学に関係なく、フェイス・スケール評価の平均は 12.57～14.75 であった。評価は 11 以上であり、動物とふれあい活動をするという意識、期待感がふれあい活動をする前より、快の気分を生じていたと考えられた。

ふれあい活動後の患者のフェイス・スケール評価の平均は、ふれあい活動前よりも低く、13.90～18.14 であった。これは、活動前の意識、期待感が実現されたことによって、より快の気分を生じたと考えられた。

＜第 2 回目（2005 年 3 月 3 日）のふれあい活動から＞

第 1 回目の実施状況把握、事故などの不慮のアクシデントがないよう慎重に準備を行ったことから、第2回目の実施までに6ヶ月を要した。その間に、第1回目のふれあいに参加した患者が退院をしたことから、第 1 回目に参加し、第 2 回目に協力の同意が得られたのは患者 9 名であった。

5. 動物ふれあい活動「前」と「後」のフェイス・スケール評価の比較から

今回、9名中8名はふれあい活動後に快の気分となり、ふれあい活動前後において変化がなかった患者においても活動前と活動後がともに“20”であり、快の効果が見られていた。男女別に比較すると、男性平均で快の気分となり、有意差がみられた。女性では有意差はみられなかったが、個別データでは快の気分となった。

6.「好き嫌い別」「飼育経験別」「飼育動物種別」における動物ふれあい活動「前」と「後」におけるフェイス・スケール評価の比較から

「動物が好き」「入院前、動物の飼育経験がある」「入院前、飼育していた動物がイヌ」と回答した患者全体に快の効果を及ぼした。また、性別では動物が好きな男性、入院前、動物の飼育経験があった男性に高い快の効果を及ぼしたが、今回は対象者数が少ないため、特に男性に効果があったと結論することはできない。第1回目同様、「動物が好き」「入院前、動物の飼育経験がある」対象者に「患者が入院前、飼育していた動物種、または、飼育していた動物とのふれあい」を実施することで、よりいっそうの快の効果が期待できると考えられた。

7. 動物ふれあい活動「前」における「性別」のフェイス・スケール評価の比較と動物ふれあい活動「後」における「性別」のフェイス・スケール評価の比較から

ふれあい活動前の患者の状態は、第1回目同様、フェイス・スケール評価は男性平均が12.80、女性平均が15.25で11以上であり、動物とふれあい活動をするという意識、期待感がふれあい活動をする前より、快の気分を生じていたと考えられた。ふれあい活動後の患者の状態は、第1回目が男性平均が15.65、女性平均が16.25に対し、今回は男性が19.00、女性が19.25と第1回目より快の効果を及ぼしていることから、この活動は継続することにより、より快の効果を得られる可能性が考えられた。

＜第1回目と第2回目の比較から＞

8. 第2回目活動に参加した9名の第1回目活動時のフェイス・スケール評価の比較から

第1回目においては、9名中8名がふれあい活動に参加し、1名が見学した。第2回目においては、9名全員がふれあい活動に参加した。第1回目、第2回目とも個人全員が参加後に快の気分を生じ、また、男性においてはより高い快の効果が得られた。女性においても高い快の気分は生じなかったが、活動前よりは快の効果を得られた。また、第1回目より、第2回目のフェイス・スケール評価のほうが快であることから、この活動を継続することにより、より快の効果を期待できる可能性が考えられた。

9. 全体を通して

統合失調症など慢性精神疾患は、単一の因子で発病するのではないとされている。ひとりひとりの患者の発症には、種々の要因が関与し、またそれぞれの要因においても異なる複数の因子が関与しているといわれている。そのため治療は個人個人に合わせて計画し、実施されなければならない。物理化学的アプローチ、心理社会的アプローチ、さらに、職業復帰療法を個々の患者に合わせてうまく組み合わせることが、患者の社会復帰とQOL向上のためには不可欠である[2]。そのためにも患者を24時間看守り、患者の入院環境を整えている看護師の役割が大きい。その看護師の役割は、連続する患者との相互のかかわりを通して、患者が積極的に現在の問題の取り組み、生活をより満足できる状態にしていくのを援助することである[12]。

今回、患者は、この動物とのふれあいになんらかの効果を求め、参加・見学した。そして、このアプローチを必要としている患者の傾向と、そのアプローチによる患者の気分の変化が明らかとなった。多くの専門職や協働するチーム医療の中で、心理社会的アプローチは実施するが、入院生活の援助をしている看護師において、環境整備は看護援助の重要なひとつであり、動物が好きな慢性精神疾患患者において、「動物がいる入院環境を整えること」は、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めること[2]に繋がると考えられた。

V. 結論

①動物とのふれあいに参加、または見学の必要があると自ら考えた慢性精神疾患患者は、「動物が好き」「入院前に飼育経験がある」「入院前に飼育していた動物がイヌである」という共通する面を持ち合わせていた。

②慢性精神疾患患者における、動物とのふれあいによる気分の変化が明らかとなり、「快の効果」を及ぼすことが期待できると考えられた。

③「動物の好き嫌い」「入院前の動物飼育経験」「入院前、飼育していた動物の種類」といった対象者の情報を得、動物とのふれあいを施すことは、動物とのふれあいを

希望し、これらの共通する面がある患者においては、より快の効果を得ることとなり、対象者の恐怖感や不安感を軽減し、落ち着きが取り戻せるような環境つくりをすること、人間性の回復や意欲の向上を導き出すこと、患者の精神活動を活発化すること、長い入院生活によって生じるホスピタリズムを防ぐといった看護の本質的な目的[12]に到達すると考えられた。

④動物とのふれあいは、慢性精神疾患患者へ心理社会的アプローチとして有効であり、「動物がいる入院環境を整えること」は重要な看護援助のひとつであると考えられた。

Ⅵ. 研究の限界

本研究は、1病院における研究結果であり、今回の結果のみでは、動物とのふれあいが慢性精神疾患患者に対して有効であると断定することは困難である。今後も、対象者に関する条件をさらに詳細に設定して研究を重ねていく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました岐阜県A病院で闘病生活をおくられている患者様に感謝を申し上げます。

引用文献

1) 坂田三允(2005):統合失調症・気分障害をもつ人の生活と看護ケア, 中央法規出版, 19-167

2) 樋口輝彦監修(2004):統合失調症, 新興医学出版社, 1-52

3) 坂田三允編(2005):精神看護エクスペール 精神看護と関連技法, 中山書店, 2-155

4) 横山章光(1998):アニマルセラピーとは何か, 日本放送出版協会, 12-382

5) Zisselman MH, Rovner BW, Shmuely Y, Ferrie P(1996):A Pet Therapy Intervention With Geriatric Psychiatry Inpatients, The American Journal of Occupational Therapy, 50(1), 47-51

6) Kovacs,Z.,Kis,R.et al(2004):Animal-assisted therapy for middle-aged schizophrenic patients living in a social institution. A pilot study, Clinical Rehabilitation, 18(5), 483-486

7) 箕浦とき子, 新田静江(1998):特別養護老人ホーム入所高齢者に対する「動物との触れ合い活動」の健康への影響, 第6回「健康文化」研究助成論文集, 129-135

8) 金森雅夫, 鈴木みずえ, 山本清美, 神田政宏, 松井由美, 小嶋永実, 竹内志保美, 大城一(2001):痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究, 日本老年医学会雑誌, 38(5), 659-664

9) Lorish CD, Maisiak R(1986): The Face Scale: A brief, nonverbal method for assessing patient mood, Arthritis and Rheumatism, 29(7), 906-909

10) 佐藤登美編(2003):新体系看護学 第16巻 基礎看護学① 看護学概論, メヂカルフレンド社, 106-158

11) 社団法人 日本精神科看護技術協会(1996):精神科看護度, 社団法人 日本精神科看護技術協会

12) 坂田三允(2000):[シリーズ]生活をささえる看護 心を病む人の看護, 中央法規出版株式会社, 8-79

13) 熊坂隆行, 升秀夫, 向宇希, 岩志津子, 中西正美, 佐藤登美, 山田好秋(2005):動物のいる環境づくりの一指標;－動物との触れ合いによる老人保健施設入所者の「行動」と「気分」に関する研究－, 癒しの環境, 10(3), 61－68

動物看護専門学校生による発表

p９３～９９

今号では、掲載希望のあった３報を掲載いたします。学生の皆さんならではの“意欲的な視点”が注目されます。
発表者の皆さんが、今後いっそう研究を進められることを期待するものです。

※査読は経ておりません。

陶板浴装置の先天性腎不全症の犬への影響

松岡麻里（福岡動物病院看護士学院　第三期生）

１．目的

抗酸化工法とは、醗酵型土壌菌・焼成珪藻土を塗装して、シックハウスを防止したりする工法で会田伸一（バーバリアンズ社）が開発したもので、建築物だけではなくポリエステルに混入したクッション・セラミックス・ワックス・クリーム・プラスチックバケツ・瓶の中敷・石鹸・粉石鹸・ポリエチレン袋などにも加工されています。効能としては、揮発性有機物質の分解除去・結露やカビの防止・動物臭やタバコの臭いの消臭・帯電防止・ダニなどの寄生虫をよせつけなくなるなどの報告があります。

当学院では４歳11ヶ月齢になる先天性腎不全症の雌のラブラドールレトリバーを飼育しており、定期的に血液性状をモニターしています。血中の BUN 値は 100～150mg/dl を示し、クレアチニン（Cre）値は 4.7～5.5 mg/dl の範囲内を推移しています。この状況の改善をはかる一つの試みとして、抗酸化工法による陶板浴装置（加温室）を試験的に学院の教室内に造成し、これに犬を入れて血液性状の変化、とくに腎機能に関係する指標をみることにしました。

２．材料と方法

先天性腎不全症の４歳 11 ヶ月齢の雌ラブラドールレトリバー（体重 22kg）に対し、陶板浴の効果の有無を判定するため、入浴前と入浴中・休止中と再入浴中に分けた場合での血液性状の変化を比較測定しました。

実験用飼育室はサーモスタット付きの抗酸化工法による陶板浴装置（**写真１**）で、床面に陶板が敷き詰めてあり、加温室の大きさは 120×120×150cm です。

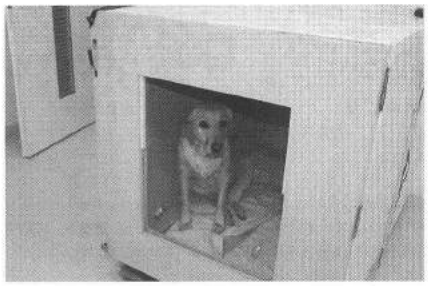


写真１　陶板浴装置の加温室内で動物を加温中

全面を密閉すると犬も人間も息苦しいので、加温室内の奥に換気扇（**写真２**）、前面にアクリル製の開閉できる窓がとりつけてあり、この中にイヌ単独又は、試験者同伴で毎回 15～20 分入りました。室温は 41.5℃に設定しましたが、内部の温度は 36～37℃でした。

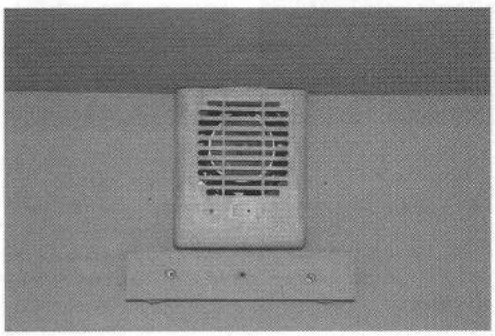


写真２　抗酸化工法の加温室内の排気ファン

採血は毎週１回 2ml を採取し、血液中の赤血球（RBC）・ヘモグロビン（HGB）・ヘマトクリット（HCT）・血中尿素窒素（BUN）・クレアチニン（Cre）を比較測定し、採取した血液で塗抹をひき、ギムザ染色しました。

次に、先天性腎不全症の腎臓機能異常の原因を探求する目的で、正常な腎臓（ビーグル）とエコー像で形態学的な違いがあるか比較してみました。

３．結果

血液性状と血漿成分の変化を入浴前・入浴中・休止中・再入浴中にまとめたのが、**表１** です。以下、各項目ごとにグラフで示します（**図１～５**）。

表１　血液性状と血漿成分の変化

	血液		血漿成分		
	RBC(10⁴/μL)	HGB (g/dL)	HCT(%)	BUN (mg/dl)	Cre (mg/dl)
入浴前	366	9	25.6	127	5.5
	304	7.4	20.6	104	5.2
	312	7.3	21.3	108	5.3
入浴中	333	7.9	22.9	102	5.1
	363	8.7	24.8	166	5.4
	421	9.9	28.1	173	5.5
休止中	460	11	31.2	159	5.4
	418	9.7	28.6	125	5.1
	293	7.1	19.9	101	4.7
再入浴中	239	5.9	16.1	105	5.2
	320	7.9	22.6	102	4.9
	328	8.2	23	101	4.9

他の検査項目である、白血球（WBC）・平均赤血球容積（MCV）・平均ヘモグロビン量（MCH）・平均赤血球濃度（MCHC）・血小板数（PLT）・血糖（Glu）・総コレステロール（T-Cho）・総ビリルビン（T-Bil）・グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ（GOT）・グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ（GPT）・ナトリウム（Na）・カリウム（K）・クロール（Cl）などは、特に変化がみられませんでした。

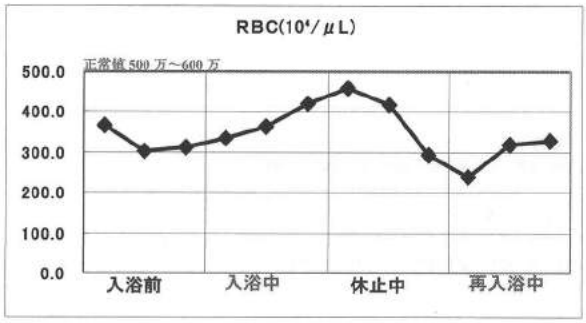


図１　赤血球（RBC）の変化

犬の赤血球（RBC）の正常値は500万～600万10^4/μLですが、今回の腎不全症のラブラドールレトリバーでは300万～400万10^4/μLで貧血状態でした。入浴前は貧血がひどく、入浴すると増加する傾向がみられました。表の推移は１週間ごとに示しています。入浴効果は１週間程持続し、休止して２週間目には数値が下がりました（**図１**）。

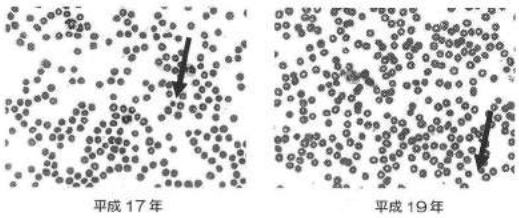


写真３　血液塗抹写真の比較

学院に来た当初の血液塗抹写真と、現在の塗抹写真で赤血球を比較してみました。２年前とくらべても、あまり変化はなく大小不同の赤血球が存在しました（**写真３**、写真内矢印）。骨髄の造血能力をみる目的で、網状赤血球も染めてみました。網状赤血球の数は少なく、造血能力が低いことが解りました。

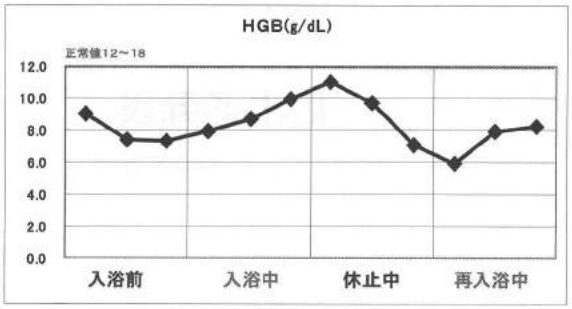


図２：ヘモグロビン（HGB）の変化

ヘモグロビン（HGB）値は、赤血球と同様正常範囲（12~18g/dl）以下ではありますが、入浴すると上がり、休止すると下がる傾向を示しました（**図２**）。こちらも入浴効果は１週間程持続しました。

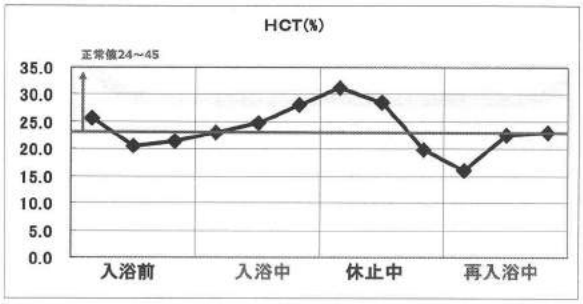


図３：ヘマトクリット（HCT）の変化

ヘマトクリット（HCT）値も同様に、入浴すると上がり、休止すると下がりました（**図３**）。こちらも入浴効果は、１週間程持続しました。

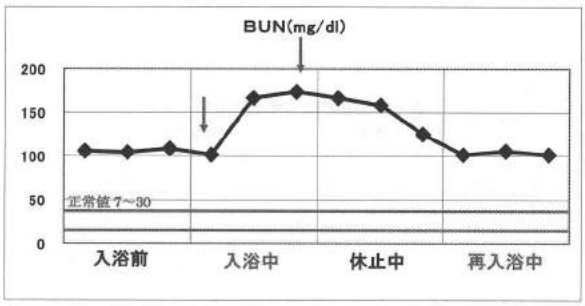


図４：血中尿素窒素（BUN）の変化

血中尿素窒素（BUN）値は正常値7～30mg/dlですが、入浴中は100～170 mg/dlと高値（矢印）で腎不全の状態でした（**図４**）。

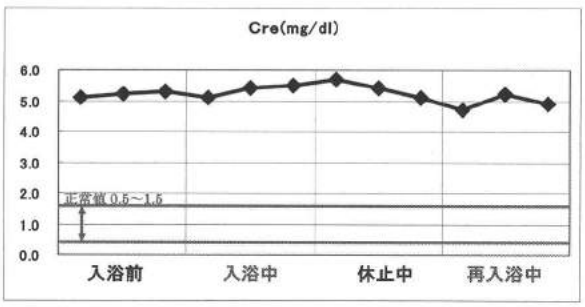


図５：クレアチニン（Cre）の変化

クレアチニン（Cre）値も同様に正常範囲以上でしたが、入浴前と後であまり変化が見られませんでした（**図５**）。

赤血球数・ヘマトクリット値は陶板浴入浴中に明らかに増加しており、貧血気味のこの犬にとっては良い結果と言えました。

抗酸化工法による消臭効果は、多少感じられました。

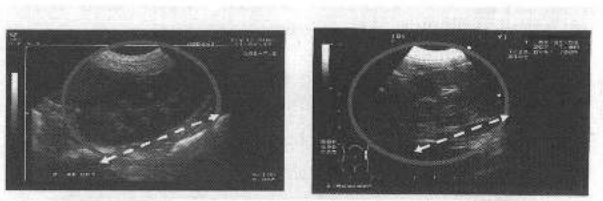


写真４　正常な腎臓との比較（エコー像）

上はビーグル
（雄・３歳３ヶ月・体重11.9kg・長径4.6cm）

上はラブラドールレトリバー
（雌・４歳11ヶ月・体重22kg・長径4.5cm）

腎臓の形態学的な違いを見るためにエコー像をとってみると、体重は約10kg程度大きいのに、ラブラドールレトリバーの腎臓の方が小さく、正常例と比較して皮質と髄質の境界と腎臓周囲が不鮮明でした（**写真４**）。

４．考察

当初、陶板浴による温熱療法による効果を想定していましたが、装置は41～42℃になっているものの、室内は32～34℃位で暑い夏の日はこの程度の温度は戸外でも浴びているので、冬季は別として温熱効果とは言えませんでした。貧血の改善効果の理由はよく解りませんが、醗酵土壌菌や珪藻土などによる効用が赤血球数・ヘマトクリット値の増加に何らかの形で効いたと思われます。

陶板浴装置は除湿効果もあり、実験後に喉が渇くので陶板浴の効果を高めるために、抗酸化溶液配合バケツに１日入れておいた水を飲まそうとしましたが、特に好んで飲む傾向はみられませんでした。

陶板浴装置の今後の改良点としては、中に入って犬と一緒に居るには狭すぎる（天井に頭がつかえる）ので、大型化するかむしろ犬用の寝袋や、テントのようにかぶせるタイプにすることが考えられます。

謝辞：動物用簡易陶板浴装置の設計と設置は、エイムデザイン研究所の野瀬敏弘氏によるものです。

参考文献

１）安保徹 著『体温免疫力ー安保徹の新理論！ー』ナツメ社、2004年
２）菅原努 執筆「私の仮説：がん幹細胞とハイパーサーミア」
――『環境と健康』Vol.20 No.3 AUTUMN 2007年より
３）『抗酸化工法によるいきいき健康回復住宅づくり』日建新聞社、2006年

ケープペンギンの行動

我有俊哉（福岡動物病院看護士学院　第三期生）

1．目的

2005年10月に当学院に3羽のケープペンギンが来てから、第23回 日本動物看護学会例会(2006年2月）で、ペンギンの食事、衛生、換羽、行動学などを報告した。今回、その後飼育状態を観察した結果、以下の項目で違いが見られたので報告する。

（1）水槽内での活動について：
ペンギンの飼育を始めた当初より明らかに水泳時間が減っており、その原因を調べた。

（2）鏡を置いてみる：
鏡に映る姿を自分と認識できるか否か、またどのような行動を示すか調べた。

（3）換羽周期：
当学院のペンギンたちの換羽周期が一定であるのか、換羽時の摂食量に違いはあるか、個体毎にばらつきがあるか否か調べた。

（4）繁殖周期：
当学院のペンギンたちの繁殖周期及び繁殖行動について調べた。

（5）1秒間に羽を動かす回数と体重の関係を表す対数グラフについて：
東京大学准教授（佐藤克文先生）が、海洋生物について発見した体のサイズとひれを動かす回数の対数グラフの結果が、当学院のペンギンたちにおいてもあてはまるかどうか調べた。

2．材料と方法

ケープペンギンは4歳♂♀不詳2羽（通称：アイス3.65kg・チェルシー3.52kg）、18歳♂1羽（通称：ピンキー3.57kg）を用いた。

飼育室の室温は平均22℃、水温20℃で飼育、飼料は小アジを1羽あたり100～150gを1日2回与えた。

3．結果

（1）水槽内の活動について

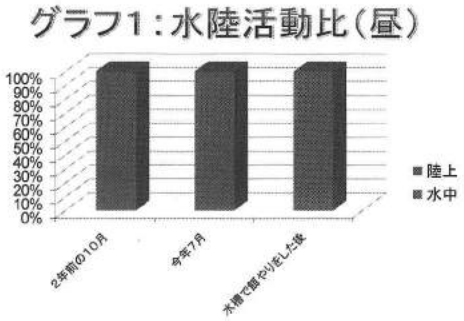
グラフ1は、当学院のケープペンギンの水槽内と陸上の活動時間（昼）の比率を表したものである。

2年前の10月には約20%の割合で水槽内において活動していたが、今年7月にはその比率が約4%にまで減少していた。

理由を考えてみた結果、餌のやり方に問題があるのではないか、という結論にいたった。ペンギンを購入した八景島水族館では展示館で飼育していた為、水中で餌を与える機会が多かったとの事であるが、当学院では陸上で与えていたからだ。

そこで約2ヶ月間野生のペンギンと同様に水槽内で餌を与えてみた。その結果、活動時間は約12%にまで増加した。

このことから餌の与え方が、水槽内の活動時間に大きく関係していることが考えられた。



（2）鏡を置いてみる

当学院では**写真1**の様な飼育施設でペンギンを飼育している。矢印の場所に鏡を設置して、反応を観察した。

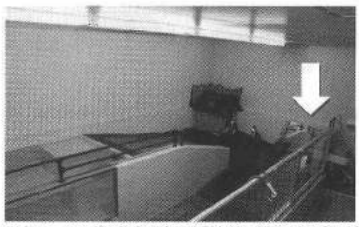


写真1　ペンギン飼育室内の全景と鏡の設置場所（矢印）

すると、鏡をじっと見つめたり（**写真2**）、鏡の裏を覗き込んだり（**写真3・4**）していた。しかし、自分より高い位置（**写真5**）や水中（**写真6**）にある鏡には興味を示さなかった。

鏡を2～3週間置いていた場合や、いったん鏡を失くして再度置いた場合でも、全く同様の行動を示すことから、ペンギンたちは鏡に映る姿を自分とは認識していないようだった。仲間として意識しているのかもしれない。

写真2　鏡の像を見つめている。

写真3　鏡の裏を覗いている。

写真4　鏡の向こう側を覗いている。

写真5　高い位置に鏡を置いている。

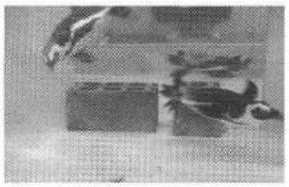


写真6　水中に鏡を置くと鏡像には無関心。

（3）換羽周期

グラフ2は当学院のケープペンギンたちの換羽周期を示したものである。このグラフから、当学院のケープペンギンは季節にかかわらず、9～12ヶ月の周期で換羽するようだとわかった。

グラフ3～5はペンギンの換羽期間の摂食量について各個体ごとにまとめたものである。

まずアイス（4歳 ♂♀不詳）のグラフ3は換羽期間に入る前摂食量が大幅に増加し、換羽期間に入ると激減している。そして換羽の完了とともに、通常時の量まで回復していっている。しかし、3回目の換羽期間では、換羽中に摂食量が増加する傾向が見られた。

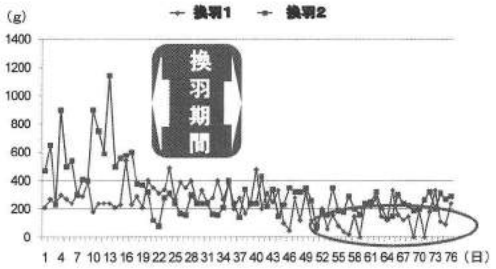
つぎにピンキー（18歳 ♂）のグラフ4では、換羽前たしかに摂食量は増加したが、換羽期間の摂食量はほとんど減少せず、なぜか約1ヶ月後に摂食量が減少した時期があった（赤丸楕円形で囲んだ部位）。

グラフ5のチェルシー（4歳 ♂♀不詳）では、書籍や文献で報告されているような最もきれいな摂食量を示すグラフを示した。基本的にアイスと同じ様なグラフなのだが、1回目に関しては換羽期間中の食欲は完全に廃絶した。

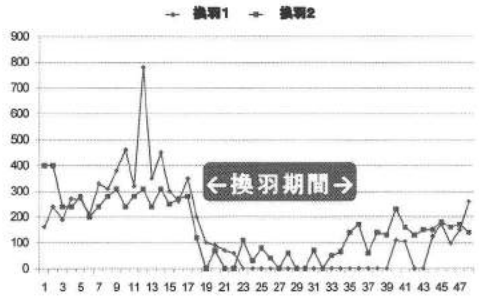
これらのことから、当学院のケープペンギンの換羽期間の摂食量には個体差があることがわかった。

グラフ3:アイス(4歳 ♂♀不詳)の摂食量

グラフ4:ピンキー(18歳 ♂)摂食量



グラフ5:チェルシー(4歳 ♂♀不詳)の摂食量



(4) 繁殖周期

当学院ではペンギンを約2年前に入荷してから、ピンキーとチェルシーのペアで、今日までに3回交尾行動を確認している(**写真7**)。

また、発情時に枝を飼育室内に置いておくと、それらを小屋に持ち帰り巣作りをするが過去三回とも産卵することはなかった。その理由に関しては不明であるが、擬卵を与えると、過去に繁殖の経験があるピンキー(♂)はそれを抱卵(**写真8** 写真内右下の丸囲み部分)したりした。しかしながら、産卵・排卵経験のないチェルシー(♂♀不詳)は抱卵しなかった。

写真7 交尾行動

写真8 営巣行動及び抱卵行動

また、グラフ6は交尾を確認できた3回をグラフにしたものだが、これから考察すると、当学院のケープペンギンの繁殖周期は不定期で季節性もないようである。

グラフ6:繁殖周期

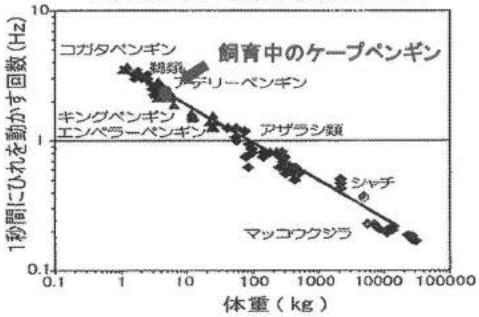
(5) 1秒間に羽を動かす回数と体重の関係を表す対数グラフについて

グラフ7は東大准教授により発表された、1秒間に羽(ひれ)を動かす回数と体重の関係を表す対数グラフである。このグラフ上に各動物の1秒間に羽(ひれ)を動かす回数と体重を点にとると、ほぼ一直線上に並ぶという。これが当学院のケープペンギンにもあてはまるか検証してみた。

その結果、ペンギンの体重は約3.6kgで、一秒間に羽を動かす回数は約2.7回で見事にあてはまった(グラフ7内、矢印下の丸)。

したがって、当学院のケープペンギンも東大准教授の対数グラフにあてはまることが分かった。

グラフ7:海生哺乳類と海鳥類の体のサイズと1秒間にひれを動かす回数の関係



4. 考察

(1) 水槽内で泳ぐ時間の比率は、餌のやり方で変化する。従って、先祖から受け継がれた水中で餌を捕食するという遺伝子の現れではないと考えられる。

(2) 鏡を長期間設置した場合や、一旦撤去して再度設置した場合にも、鏡の裏を覗く様な行動を示すことから、鏡に映る姿を自分とは認識していないようである。

(3) 換羽周期・期間には個体それぞれで特徴があり、換羽期間前後の摂食量も、個体及び換羽回数ごとに変化が見られた。

(4) 繁殖周期は不定期で、営巣行動は行うが、産卵まで至っていない原因は不明である。今後、産卵の環境作りに力を注ぎたい。

(5) 1秒間に羽を動かす回数と体重の関係を表す対数グラフにおいて、当学院のペンギンでもグラフの線上にあてはまる結果が得られた。

以上のようにケープペンギンは個体差が大きいが、今後もこれらの点に気を付けて観察し、研究を続けていきたい。

参考文献

1) ピエール・シュパンタン 著、青柳晶宏 訳
『ペンギンは何を語り合っているか－彼らの行動と進化の研究－』どうぶつ社、1996年

2) ジョン・スパークス、トニー・ソーパー 著、青柳晶宏・上田共 訳
『ペンギンになった不思議な鳥』どうぶつ社、1989年

3) ボーリン・ライリー 著、青柳晶宏 訳『ペンギン ハンドブック』どうぶつ社、1996年

4) 青柳晶宏 著『ペンギンたちの不思議な生活－海中飛翔・恋・子育て・ペンギン語……－』講談社ブルーバックス、1997年

5) 上田一生 著『ペンギンの世界』岩波新書、2001年

6) いとう良一 著、佐藤克文 監修
『やっぱりペンギンは飛んでいる!!－拝啓、ホントに「鳥」ですか?－』技術評論社、2007年

7) 佐藤克文著『ペンギンもクジラも秒速2メートルで泳ぐ－ハイテク海洋動物学への招待－』光文社新書、2007年

ゼブラフィッシュ（卵と稚魚）の発生の基本的な観察

山下亜莉沙（福岡動物病院看護士学院　第三期生）

1．目的

発生遺伝学等で大きく役立っているゼブラフィッシュで、ゼブラフィッシュの稚魚のアトラスはすでに記載があります。しかしながら、出産（孵化）直後のものは少ないようです。また、全身の縦断面について観察した報告も少ないようです。魚類の飼育方法や採卵の方法をはじめ基本的な技術を学び、発生学の理解を深めることを目的としました。

2．材料と方法

ゼブラフィッシュのオス、メス各５匹を近隣の熱帯魚販売店より購入しました。 51×30×26ｃｍの水槽で、25℃に保温し、濾過器、採卵器（**図１**）を使用しました。餌は市販のもの（ネオンテトラ　グッピー・エンゼルフィッシュのエサ）を水面にまばらに散らばる程度の量、朝・夕与えました。

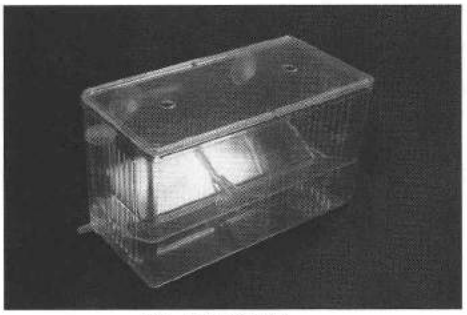


図１　使用した採卵器

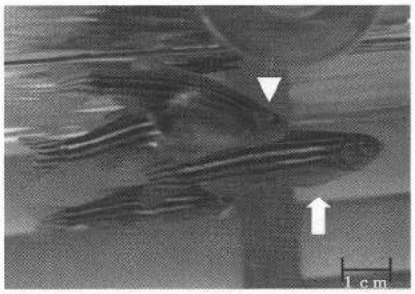


図２　ゼブラフィッシュの成魚

矢印がオスで、矢頭（逆三角形）がメス。メスは腹部が膨らんでいて、容易に区別がつきます。

ゼブラフィッシュについて

ゼブラフィッシュは、コイ目コイ科ダニオ属でインド原産の小型熱帯魚類です。産卵数が 100～200 個と採卵しやすく、孵化日数が 2～3 日で、発生期間を通して胚が透明であり、発生が見やすいといった特徴を持っています。また、母体外で受精・発生、24 時間で器官形成をほぼ終えるなど発生が速い、哺乳類と類似の器官・組織を備えている、といった特徴も持っています。

オスは小さく、淡い色をして金色の４本の縞模様が目立ちます（**図２**、図内矢印）。メスは大きく黒っぽい体色で、腹が膨らんで太く見えます（**図２**、図内矢頭-逆三角形-）。メダカに近い魚で飼育も容易です。

方法について

●採卵方法

成魚が卵を食べるので採卵器（**図２**）の仕切り板の上の部分に成魚を入れます。卵は下の部分に落ち成魚は食べることができません。産卵後、採卵をして別の水槽で育てています。

●観察方法

産まれた卵を採り出し、ホルマリンで固定後、採卵直後の卵については、実体顕微鏡で概形を確認し、写真撮影しました。組織切片は、ゼラチンで包埋した後に、パラフィン（蝋のようなもの）で再包埋し、ミクロトーム（カッターのようなもの）で厚さ 5～8 μmに薄切し、脱パラフィン（蝋をとかし去る）後にヘマトキシリンエオジン染色をして、常法により顕微鏡観察後、写真撮影しました。

3．結果

次の写真は、卵発生の実体顕微鏡像です。

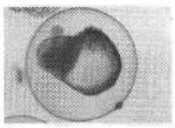


図3：受精後 2.75 時間

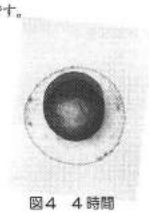


図4　４時間

図5　6.5 時間

受精後 2.75 時間では桑実胚（**図3**）で、4 時間では、卵黄を取り囲んで魚胚ができてきているのがわかります（**図4**）。

6.5 時間・9 時間の卵では、魚胚がはっきりしてきていますが、まだどちらが頭でどちらが尾かはっきりしていません（**図5・6**）。

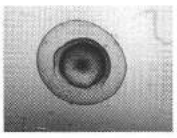


図6　９時間

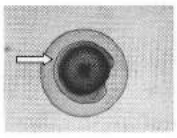


図7　12 時間

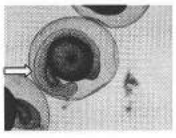


図8　20 時間

12 時間の卵では頭と尾がはっきりして、体節（矢印）も明瞭に区別できます（**図7**）。

20 時間と 40 時間の卵では、体節（**図8**　図内矢印）・メラニン色素（**図9**　図内矢頭-逆三角形-）が共にはっきりしてきています。

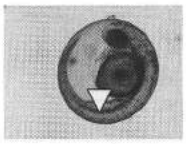


図9　４０時間

図10　４８時間

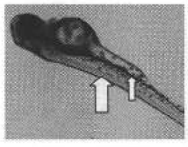


図11　７２時間

４８、７２時間の卵では皮下と体節にそってメラニン色素がみられます。矢印はメラニン色素を示しています（**図１０・１１**）。

次に、尾ビレのメラニン色素胞の分布と発達について観察すると、

図１２　孵化後１日

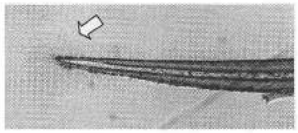


図１３　孵化後３日

孵化後１日目は尾ビレにふくらみがありませんが（**図１２**）、３日目になるとふくらんできています（**図１３**　図内矢印）。メラニン色素は皮下、脊髄にそって少しありますが尾ビレにはまだ見られません。

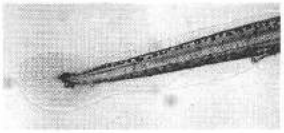


図１４　孵化後５日

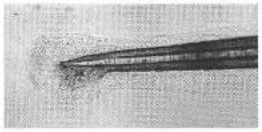


図１５　孵化後７日

孵化後５日目になるとメラニン色素が尾ビレの根本に集まってきており（**図１４**）、７日目には尾ビレの中まで広がってきています（**図１５**）。

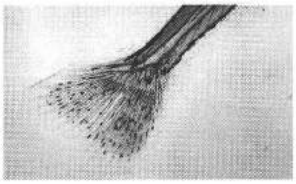


図１６　孵化後１４日

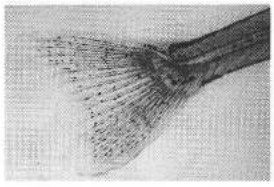


図１７　孵化後２０日

孵化後 14 日になると、徐々に尾ビレの先の方にメラニン色素が広がってきていることがわかります（**図１６**）。20 日目では、メラニン色素が横紋状に分布しています（**図１７**）。

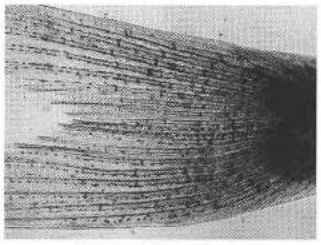


図18　孵化後50日

孵化後50日目になると、メラニン色素は、尾ビレの中に均等に広がってきていることがわかります（**図18**）。

次に、ゼブラフィッシュの組織像を観察しました。

図19（a、b、c、d）は、同一個体の水平断の連続切片です。孵化後20日のヘマトキシリンエオジン染色です。眼・脳・脊髄などの配置がよくわかります。

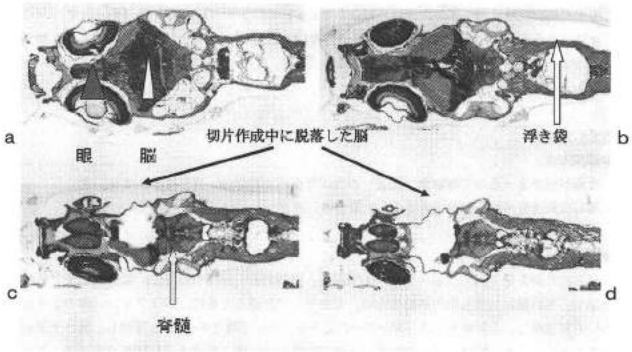


図19　孵化後20日の水平断の連続切片（a，b，c，d）

図20（a、b、c、d）は、矢状断の連続切片です。孵化後20日のヘマトキシリンエオジン染色です。眼・腸・エラ・肝臓などの配置が確認できます。

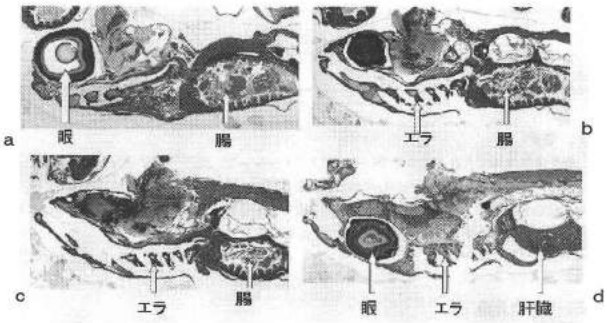


図20　孵化後20日の矢状断の連続切片（a，b，c，d）

図21（a、b）は、孵化後20日の縦断面とその拡大像です。眼・エラ・肝膵の位置がよくわかります。魚では肝臓と膵臓の組織が混在しています。肝膵は一部の魚類特有のものです。

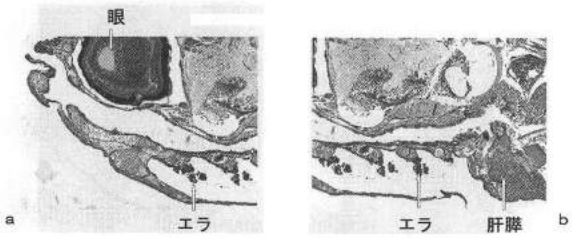


図21：孵化後20日の縦断面、拡大像（a，b）

図22・23では、肝膵と腸がわかります。

図22　孵化後20日の縦断面、拡大像

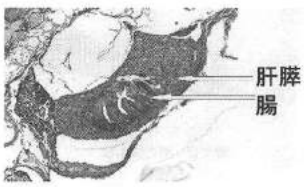


図23　孵化後20日の縦断面、拡大像

図24は、孵化後50日の縦断面とその拡大像です。眼・エラともに発達しています。20日では見られなかった二次サイ弁がわかります（図24内 矢印エラ）。

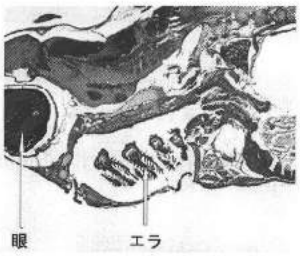


図24　孵化後50日の縦断面、拡大像

図25（a、b）は、孵化後20日の横断面とその拡大像です。浮き袋と肝膵がわかります。

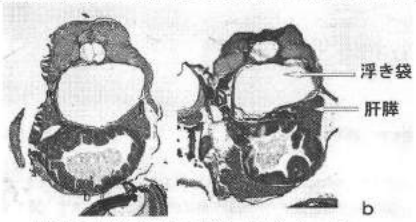


図25　孵化後20日の横断面、拡大像（a，b）

各臓器の拡大像を観察しました。

図26は、孵化後20日で、**図27**は孵化後60日の網膜の拡大像です。各層ともに、20日から60日と少しずつ発達しているのがわかります。

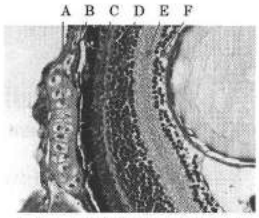


図26　孵化後20日、網膜拡大像

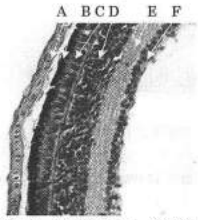


図27　孵化後60日、網膜拡大像

A：骨　B：色素層　C：視細胞層
D：外顆粒層　E：外網状層　F：内顆粒層

図28は孵化後20日のエラで、**図29**は孵化後60日のエラの拡大像です。20日の拡大像では二次サイ弁がほとんど見られませんが、60日の拡大像では葉状に多数並び、発達していることがはっきりとわかります。

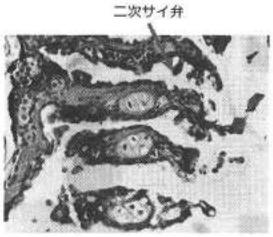


図28　孵化後20日、エラ拡大像

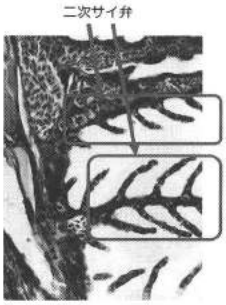


図29　孵化後60日、エラ拡大像

図30は孵化後20日の腸・肝膵臓の拡大像で、**図31**は孵化後60日の腸・肝膵臓の拡大像です。コイ科魚類は胃を二次的に失った無胃魚と呼ばれ、それが確認できます。また、コイ科の魚で肝臓内に膵臓が入り込む、肝膵臓も確認できます。20日から60日にかけて、細胞組織がはっきりしてきており、発達しているのがわかります。

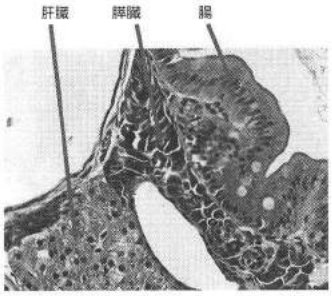


図30　孵化後20日、腸・肝臓・膵臓拡大像

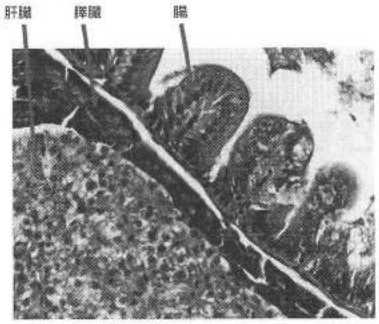


図31　孵化後60日、腸・肝臓・膵臓拡大像

4．考察

実体顕微鏡像により、受精直後の卵発生の経過や、孵化後の成長に伴う尾ビレのメラニン色素胞の分布と発達、組織像による各器官の発達の経過を連続切片で確認することができました。

今後は、顕微鏡による各臓器の発生過程をより詳細に観察していきたいと思っています。今後も組織像をもっと増やし、また、可能であれば、電子顕微鏡による観察も行いたいと思います。

謝辞：日常的に、ゼブラフィッシュの飼育に協力してくださっている学院の生徒の皆様に、心からお礼申し上げます。

参考文献

1．Ralf Dahm「appendix 2：Atlas of embryonic stages of development in the zebrafish (p219-236) in 『Zebrafish：A Practical Approach』 edited by Christiane Nusslein-Volhard and Ralf Dahm, Oxford University Press, 2002
2．武田洋幸・岡本仁・成瀬清・堀寛 編
『小型魚類研究の新展開－脊椎動物の発生·遺伝·進化の理解をめざして－』
共立出版、2002年
3．武田洋幸・相賀裕美子 共著
『発生遺伝学－脊椎動物のからだと器官のなりたち－』東京大学出版会、2007年
4．『Developmental Biology 〈8th edition〉』 by Scott F. Gilbert, p325-326, Sinauer Associate, Inc, 2006
5．日本動物学会 監修、浅島誠・武田洋幸 共編
『シリーズ 21世紀の動物科学5　発生』p76-80、培風館、2007年
6．畑井喜司雄・宗宮弘明・渡邉翼 共著 『魚病学』学窓社、1998年

2007年秋 大阪

第26回例会を誌上再録

【特集】私たちの動物看護観を語り合いましょう！

――「動物看護師の役割」と「動物看護学の確立」を考える前に、確かめ合いたいこと――

2007年11月17日(土)、第26回例会が大阪国際会議場(グランキューブ大阪)で開かれました（第28回 動物臨床医学会年次大会の会場にて）。前半ではパネラーによる「私の動物看護観」の発表が、後半では、発表を受けてパネルディスカッションが行われました。ここでは、前半の内容を誌上再録いたします。

（学会ホームページには掲載していません）

●企画趣旨 と 開催を終えて●

「他者の動物看護観を聴くことが、あすの自分の“意欲と可能性”につながる」

ファシリテーター（進行促進者）

西谷孝子さん

（広島県・西谷獣医科病院

本学会認定動物看護師、現・本学会副理事長）

このテーマを考えた理由からお話ししたいと思います。私は、人医療の看護や看護教育の仕事をしていました。その後、動物看護師に転職して 10 年を迎えます。転職した当時は、人の看護と動物看護との違いを模索しているような状態でした。しかしその中で、自分が勉強してきたことを動物看護の中に活かそうと思い始め、自分自身の動物看護に対する思いを院内教育で話し続けていました。

そして 2006 年より、日本動物看護学会の後援を受けて、「臨床動物看護臨床研究会」を開催することができました。ここでは動物病院の枠を越えて、当院で行っている院内教育の内容をそのまま、他院の動物看護師の皆さんと共有することができました。また2007年には、日本動物病院福祉協会(JAHA)のVTセミナー講師をさせていただき、団体の枠を越えて、多くの動物看護師の皆さんに私の考えをお伝えする機会を得ることができ、大変感謝しております。

●

JAHAのVTセミナー会場では、「私もかつて人の看護師をしており、いまは動物看護師をしています」と挨拶に来てくださった方がいました。私のセミナーを聴いて、こんなに頑張っている動物看護師がいることに興奮したと話しておられました。

そのとき思いました。どんなにいろいろなセミナーを受け、それを実践したとしても、それは自分だけの世界であって、つねに悩み、迷いつづけることでしょう。同じ職業に就いている仲間と思いを共有することができれば、どんなに仕事の励みとなることでしょうか。動物看護師自身がどのような思いで働いているのか、それぞれの動物看護観を聴く機会が必要であると感じました。

動物看護観とは、動物看護に対する思いです。それは、学習で得た知識、経験を通して学んだこと、自分の生きざまなどを通してつくられるもので、固定的なものではなくつねに流動的であり、自分の看護の原動力になるものだと思っています。

●

もう一つ思うのは、これからのことです。動物看護職の「動物医療における位置づけ」や「社会における役割や地位」は、今後大きく変化することが予想されています。これに対応する

には、動物看護師自身が「専門職業人としての意識を強く持ち、動物看護に対する思いをしっかり持つこと」が必要と思われます。つまり、自分のしている仕事はどういう仕事なのか、この仕事を知らない人にもきちんと説明できることが求められるのです。私たちは、誰を対象に動物看護をするのか？ 学問としての定義づけさえない今だからこそ、動物病院で働いている私たちが、動物看護とはこういうことだと証明していかなければならないのではと考えています。

今回は、第一線で活躍されている動物看護師の方々に、ご自分の動物看護観をお話しいただきました。何よりうれしかったのは、皆様から本当に快くパネラー参加を承諾していただけたことです。

●

パネラーの皆様からは、「なぜ動物看護師になったのか？」「動物看護師になった動機や思い」「動物看護師としての経歴やその当時の思い」「いま考える動物看護についての思い」など、具体的なエピソードも含めて、ご自分の動物看護観を述べていただきました。

一人一人の半生の中から発表される言葉は重く、思いが込められており、ファシリテーター（進行促進者）であることを忘れ、感動し、勇気づけられる思いがしました。どうして、他者の動物看護観が自分の心にひびくのか？ それはきっと、他者の思いを聴きながら、自分自身の可能性をも指し示してもらっているからではないかと感じています。会場の皆さんの中にも、そう感じた方がいらっしゃるのではないかと考えています。

パネラーの方々は、今回の発表が、自分の動物看護について振り返るよいきっかけになったと述べておられました。仕事が忙しい中での発表準備はさぞかし大変だったと思います。その中でも、一つ一つの経験から学びを得る姿は素晴らしいと言えるでしょう。こうした方々と同じ職業に就いていることを誇りにさえ感じます。

パネラーの方々は、今後の動物看護の業界に大きな影響力を与える皆さんであると思います。ますます動物看護職が楽しみな職業となりました。今後もいろいろな方々の動物看護観を聴いていきたいと思っています。

●パネラー6名による 私の動物看護観●

阿部令子さん

（京都府・アニマルサポートオフィス ミーチョ

本学会認定動物看護師、現・本学会理事）

動物看護師になった動機や思い

おそらく皆様と同じだとは思うのですが、私も小さい頃から動物が大好きで、ずっと「動物関係の仕事」をしたいと思っていました。しかし、その当時の私の中では、「動物関係の仕事＝獣医さん もしくは 飼育員」であり、身近なイヌやネコと触れ合えるとなると、獣医師しか考えられなくて最初は獣医師を目指していました。しかし、いろいろあって獣医師になるのはあきらめました。

そんなとき、家庭教師から初めて「獣医看護師」という名称を聞き、「動物にかかわれる仕事ならばやってみたい」という思いから専門学校に通い始めました。

動物看護師としての経歴やその当時の思い

専門学校を卒業後、講師として来られていた先輩動物看護師に誘われる形で、京都にある動物病院に就職し、そこで7年半という時間を過ごしました。

私はその病院で、動物看護師の存在を認め、診断、治療方針の決定、執刀以外の多くの重要な仕事を信頼して任せてくれる獣医師と、しっかりと自分の意見や考えを持って仕事をされている先輩と出会いました。動物看護師は「ただの助手にすぎない」と思っていた私は、ショックを受けつつも、本当に様々な体験や勉強をさせていただきました。その人脈と経験は、いまでも私の大切な財産のうちの一つです。現在の私があるのは、あの病院で出会った方々、過ごした時間のおかげであると心底思っています。

勤め始めた当時の私は、就職できた病院が動物たちや飼い主さんに与える影響力の大きさに、ただ単純に感動し、そんな病院の一員になれたことがうれしくて、「ここに骨を埋める！」とまでの思いを抱いていました。「チーフ」という役割をいただいてからは、以前にも増して、「どうやったら全体がうまくまとまるのか」などといった院内の調整を行うことで精一杯になっていきました。

しかし、それらを続けるうちに、自分のしている仕事に対して何とも言えない「違和感」を感じるようになり、28 歳で退職し

ていまに至ります。

病院を退職して丸 5 年がすぎました。病院を退職後、専門学校で非常勤講師を務めるかたわら、いままでの経験を活かし、「家庭での看護」の中心である飼主さんのお役に立ちたいと、自身で「アニマルサポートオフィス・ミーチョ」を立ち上げました。

その活動の中で、本当に多くの、そしてすばらしい方々との出会いがあり、その方々の意見や考え、されていることを聞くに連れ、私は「いままで何をしていたのか？」と思うことの連続でした。それらは病院に閉じこもって院内しか見ていなかった私にとっては、本当に新しい知識や意見でした。

これまでの自分に情けなさを感じつつも、おかげさまでいまは、病院で感じていた自身の仕事に関する「違和感」が何だったのかが、具体的な形で判りつつあります。その一つに、私たちの職業の名称にもなっている「動物看護」についての考えがあります。

いま考える、動物看護についての思い

私は、動物看護師自身が「そもそも看護とはなにか」を理解した上で仕事を行うことが、大切ではないかと考えるようになりました。そして動物看護師という仕事には、一つの事柄を多面的に見る能力も必要であると思うようにもなりました。そのためには何歳になっても、どんなことにも興味を持ち、積極的に見聞きすること、素直に吸収する姿勢が必要なのだと考えるに至っています。

私がこのように考えられるようになったのは、動物看護師という仕事を、病院を離れて飼主の視点も交えながら客観的に見た上で、様々なお話を聞かせていただいた結果です。

以前の私は、病院の“生き字引”になること、手早く検査ができること、タイミングよく助手をこなすこと、獣医師の会話に当たり前のように参加できる知識を持つことで、動物看護師として一人前に「仕事をこなしている」と思っていました。

たしかにこれらのことは、働き始めて早いうちに身につけなくてはならない、仕事を行う上で必要なものです。しかし、私たちの仕事はそれで終わりではないと、いまの私は思います。動物看護は「動物とその飼主に日々寄り添い、より良い結果にたどり着けるように援助を行うことである」と知りました。

看護とは、看護をする人間の経験によってできることが変わり、より多くの経験を持つ看護者のほうが、より深い看護ができるのだということも判りました。一通りの作業と少しの知識を身につけただけで、仕事ができているつもりになっていたことこそが、自分の仕事を理解していなかった証拠であると、いまでは思います。「動物看護」は本当に奥が深く、少しの経験や知識を重ねただけで、できるようなものではなかったのです。

自分が考える将来の姿や動物看護師の姿

だからこそ私は、これからの動物看護師は人医療の看護師と同じように、もっと「看護」を専門に行う存在になってほしいと思っています。そうなるためには、積極的に自身のレベルアップを図ること、もっと動物看護師同士のつながりを持ち世の中の動きに敏感になること、日々の仕事の中で得た看護の知識をお互いに共有して「動物看護」を作り上げた上で制度を動かす覚悟、が必要であると考えます。

おそらくいま、この会場にお見えの動物看護師の方々は、様々な知識を得て自身のレベルアップを図っておられると思います。でもこの場を、必要な知識を得るためだけの場とするのは、あまりにもったいないのではないでしょうか。ぜひ、久しぶりに会った友人・知人と、自分たちの日頃の思いを語り合うきっかけの場にもしていただきたいと思います。

動物看護師を世の中にアピールするためには、まず、様々な団体・病院の枠をこえて、私たちが思いを一つに団結しなくては！ と思うのです。私自身も病院を辞めて講師をしている中で、現場の経験が増えないことに焦りを感じたこともありましたが、「病院にいない動物看護師だからこそできること」をするべきだと思うようになっています。

いまここで、皆と意見交換したいこと

最後に、「専門学校に求めること」「新人に求めること」について皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思います。

講師をしている立場からは、各院によって検査の順序や手術の準備、ほか技術的なことに違いがある以上、学校では、ビジネスマナーなどの基本的なことはもちろんのこと、しっかりとした基礎知識と「看護とは何か」といったような「動物看護師としての気構え・心構え」を中心に学生に伝え、自分の仕事に誇りを持って、少しのことではあきらめない人材を育ててゆくべきではないかと思っています。

（例会を終えて）

今回のシンポジウムは私にとって、とても有意義かつ刺激的な体験でした。こうした場に加えていただき心から感謝しています。

シンポジウムを通して、私はあらためて、これから先のことをもっと真剣に、積極的に考えないといけないと心底から思いました。これまでも自分なりに考えてきたつもりでした。しかし、今回感じたことは、一人だけで考えるのではなく(もちろん、他力本願にならず一人で考えることも大切ですが)、もっと私たち動物看護師がことあるごとに集まって「自分たちは本来どうあるべきなのか？」を話し合い、意見交換を行い、一つの目標に到達できるよう、できるこ

とから努力していくべきではないか、ということです。

専門学校での教育も、授業を受け持つ個々の講師が「理想の動物看護師像」を把握し、一丸となって学生の教育に当たらなければならないと感じます。自分の仕事に誇りと信念を持てる新人を世に送り出さなければ、何も変わらないのではないか… そのために、動物看護師として講師として自分には何が出来るのか… とにかく私も、私にできることを、周囲の皆様の協力をお借りしながらやっていくつもりです！

﨑山法子さん

（奈良県・王寺動物病院

本学会認定動物看護師、現・本学会理事）

こんなことを言ってはおどろかれるかも知れませんし、不謹慎なと思われるかも知れませんが、私の場合は、ただ何となく皆が進学するから、「まぁ将来、少しは役に立つかなぁ･･･」という思いで家政科の短大に進学しました。

そんな私ですから、卒業間近になっても就職活動すらしていませんでした。しばらく家事手伝いでもやろうと思っていたのです。しかし人並みに就職活動も経験してみるか･･･ と軽い気持ちで就職情報誌を手に取りました。そして王寺動物病院の求人が目にとまりました。このときの私は、動物看護師がどのような仕事なのか、まったく理解していませんでした。単に、動物の世話をするんだろうなぁと漠然と考えていました。

1996年に王寺動物病院に就職してから11年たちました（例会当時）。現在は取締役の任にも就いています。親族でもない一従業員の私が経営に加わることは、大変重い責任と不安を抱えたということになります。とまどいもありますが、いまは期待に応えたいと思っています。

当院の院長は動物看護師に対して大変理解がありました。そうした恵まれた環境だったからこそ、「看護とは何か？ 動物看護師とはどういう存在なのか？」をいつも考えることができたのだと思います。院長とも、将来の動物看護師のあり方について真剣に語り合い、たくさんのチャンスをいただきました。私は大切に厳しく育てられ、よい信頼関係を築くことができたと思っています。

正直言って、長年勤めていると辞めてしまいたくなることもありました。しかし、いまも動物看護師という仕事を続けられています。なぜ辞めなかったのか？ それは、期待されそれに応えるよろこびを知ったこと、王寺動物病院が好きだということ、そしてスタッフを守っていくことを、院長と約束したからだと思います。院長に出会わなければ、動物看護師を続けていなかったといっても過言ではないと思っています。

他にも家族や、つらいときも明るく誠実に働くスタッフたちなど、様々な方々に支えられたからこそ、いまがあるのだと思っています。同時に、本学会の行事や勉強会に参加することで、すばらしい仲間と出会うことができました。その仲間たちとともに、将来の私たちのあり方を考えながら進んでいることも、自分の看護観に大きくかかわっていると思います。

また、8月に第一子を出産しました。これまで以上に大変になると思いますが、それでもこれからも、この仕事を続けていこうと思います。仕事を続けることも、人の上に立つことも、子育ても、私には大切な人生経験であり、私の看護観に大きく影響すると思っています。

動物看護師という仕事はバランスが大切です。気持ちだけでも、技術だけでも、経験だけでも、ましてや知識だけでも、そしてそのどれかが欠けてもできない仕事だと考えています。

例えば、自分が心のバランスを崩したり“ボタンを掛け違えて”しまったりすると、動物や飼主が傷つき悲しむのです。そして自分や仲間を責めてしまうと、信頼し合えなくて、チーム医療が成り立たないという現実につながります。

私は、つらい思いをした動物や飼主さんのことが特に深く記憶に残り、忘れられません。胃捻転で状態が悪く、緊急処置をしたけれども救えなかったワンちゃん･･･ お礼なんてふさわしくないような力及ばずの私たちに、泣きながら「ありがとう」と何度も言ってくれた飼主さん･･･ 余命が少ない腎不全の猫ちゃんを前に、獣医師の先生とは気丈に話をされていたのに、私の目を見て涙された飼主さん･･･ てんかん発作の重責状態のワンちゃんが命を落とし、飼主さんから怒りをぶつけられ涙した私を見て、肩を落とし帰って行かれた後ろ姿。そして毎日お花を持ってお家に伺っても許してもらえなかったこと･･･。

あるとき、信頼関係が築けず病院を転々としていた飼主さんが来院され、動物がやっと快方に向かい始めました。しかし状態が急変し最愛のワンちゃんを亡くされ、後日お話に来られたときに、「あなたの存在は私たちにとって救いでした。このままの気持ちでずっと動物看護師を続けてください」と言っていただけたこと･･･ いずれも、飼主さんと通じ合えた瞬間だったと思っています。しかし私は、この動物や飼主さんたちに何ができただろうか？ といまも考えてしまいます。

私たちの仕事はつらく厳しいことの方が多いのですが、ほ

んの少しの喜びが忘れられないからこそ、続けられるのだと思っています。動物は何を望んでいるのか？ 私たちは動物たちの声を聞かなくてはなりません。また、私たちはつねに飼主さんの気持ちの側に立たなくてはなりません。

しかし、私たち動物看護師は医療従事者であり、獣医師のパートナーでなくてはなりません。獣医師の先生方、私たちを真に必要としてくださっていますか？ どこまで業務ができれば信頼していただけるでしょうか？ どうなればパートナーだと認めていただけるでしょうか？ 前述した動物や飼主さんたちが、なぜ心に残るのか・・・ 振り返れば倫理的にも論理的にも、自分の心の声に応えられていなかったときに後悔が残り、十分な応対ができていなかったのではないかと思います。

また看護には、自分の人生観が必要なことも身をもって知りました。まったく同じ看護は存在しません。看護には“絶対”も“終わり”も“正しい答え”もないと思っています。今日より明日の方がよりよい看護を行いたい、誰に対しても誠実でありたい、そして、どんな問題にもチャンスもとらえて、看護にあたりたいと思っています。その場に満足してしまったら、動物看護師として終わってしまうような気がしてなりません。

私は「動物看護師という仕事は何なのか？ そして動物看護師は、動物にとって、飼主にとって、獣医師にとって、どういう存在なのか？」について、真の意味で理解し合いたいと思います。

理解されるには、まず自立することが大切です。現状では、ただ一方的に、希望や願いを述べているだけにすぎません。「理解できないままで、獣医師の先生のいうことを聞いているだけ？ 知識が足りないから、とりあえず言われたことだけやっておけばいい？」 —— このままでは、いつまでたっても信頼してもらえず、誰かに手を引いてもらわなくてはなりません。

胸を張って「私はこう考える」「私はこう思う」と論理的根拠を示しながらものが言えるように、しっかり勉強して、知識や経験を増やす努力しなくてはなりません。そして、私たちの行った看護や新しい見解を、本学会の場などで共有することで、動物に飼主に対して、質の良い看護・医療が提供できるようになるのではないかと考えています。この痕跡を残すことにより、私たちが自立でき、真に理解され、受け入れられていくものと信じています。

これらを積み重ねながら、一人一人が病院やこの業界にとってかけがえのない存在、価値のある存在になることで、動物看護師という仕事を一生続けたいと思え、また一生続けられる仕事になっていくと考えています。

動物看護師には、動物看護師にしかできない仕事があります。獣医師には獣医師の仕事があります。ベテランにはベテランの使命があり、新人には新人の役目があります。いま各々が、その役割を果たせているでしょうか？

私たちの未来はまだ決まっていません。私たち次第でどのようにも変えることができます。このまま変わらずにいることも、逆に衰退することもできるのです。これから先は自分たちで創るのです。皆さんも考えてください。私たちがこれから歩むべき道について、自分たちで考えて迷い悩まなければ、意味がないでしょう。

（例会を終えて）

「私の動物看護観」を発表したことにより、新たな発見と振り返り、そして、自分を含めた動物看護師の未来像を描く事ができました。また、仲間の動物看護観にも触れることができ、共にこの道を歩んでいる事に勇気づけられました。まだまだ茨の道が続くのでしょうけれど、自分たちの未来を信じ、進むことを諦めないことが必要ではないかと改めて考えさせられました。

動物看護師という仕事に誇りを持ち、誰からも認めてもらえるように、日々を積み重ねていきたいと思います。普段、自分の行っている看護や信念を表現することは、考えていたより難しく、未熟な私にとって大変勉強になる発表となりました。

竹中晶子さん
（東京都・赤坂動物病院 JAHA 認定 1 級 VT）

私は大卒後一般企業に入社し、いわゆる OL となりました。平凡な日が続いている中で、一緒に暮らしていた犬が病気になり、自ら排尿することができず圧迫排尿をさせなければならなくなり、獣医師からケアの方法について教えていただきました。しかし何一つうまく実践できず、毎日朝晩通院した経験がありました。一生携わっていける仕事につきたい、かつ医療関係の仕事に従事したい、そして何より人と動物が好きであることから、動物看護師という職業を選びました。

私の現在の業務内容は次のとおりです——動物看護師本来の業務である、入院・外来動物の治療補助・看護・食事管理・グルーミング・予防などのマネージメント、しつけ指導、手

術器具の準備や麻酔管理など／獣医師のサポート役（診療補助）／クライアントと獣医師のかけはし役／近隣の集合住宅におけるペット講習会の開催、ウエルネスケア・しつけ・マナーの指導など（往診補助やペットシッターも含む）／レスキュー動物のアダプション（順応のための訓練および家族としての縁結び）／院内業務の改善およびマニュアル作成による院内業務の向上／後輩の動物看護師の指導／輸血のドナーやボランティアで活躍してくれる院内動物たちのケア／伴侶動物の社会活動（CAPP活動）への参加およびサポート。

CAPP活動とは、社団法人日本動物病院福祉協会の主催により、獣医学・医学を通じて人の健康と福祉と教育に貢献するボランティア活動です。CAPP 活動に参加する動物看護師の役割としては、以下が挙げられます——クライアントの中から適任者及び動物の選び出しや参加の呼びかけ、参加までの手順やサポート／飼主としてのマナー指導／ボランティアさんの養成サポート／担当獣医師のサポート役として活動前の参加動物の身体チェック／活動中のストレスサインを見分け、動物自身のケアやサポート／引退時期の相談に応じること、引退後のサポート／動物と別れた飼主のペットロス予防のためのサポート（ボランティア活動やしつけ教室へのお誘い、次の命を預かっていただくためのサポートなど）。

●

私は自分がこの職に就く前、動物看護師の仕事とは獣医師のサポートをし、直接、動物看護のみを行うことだと思っていました。しかしいまは、クライアントと動物双方の看護・マネージメント・サポートを行い、クライアントと接することで多くの感動を得ることができ、かつ伴侶動物医療を通して社会貢献ができる職業であると考えています。

そのためには、次のことが必要と考えています——看護知識や技術・話術・一般常識などの多くのことを学び、自分の知識として、向上していくこと／動物の看護にあたり、診療補助や検査や手術補助などをこなし、獣医師のサポートをしていくこと／クライアントへのマネージメントやサポートができ、クライアントから信頼されること。

●

ここで、私が動物看護師の仕事を通じて心に残っている、2つのエピソードについてお話ししたいと思います。

その 1——以前の病院で外耳炎の治療を受けたとき、とても嫌な思いをしてしまった経験があって病院嫌いになってしまい、クライアントも動物病院嫌いになってしまった 15 歳の柴犬がいました。このクライアントの方と集合住宅のレクチャーで知り合い、お話ししたところ、動物病院の重要性を理解していただき来院されることになりました。まずは動物病院に慣れることを目標として、お散歩ついでに来ていただき、ごほうびをあげるだけのことを繰り返し行いました。しばらくすると、ごほうびを食べ、病院によろこんで入っていく“わが子”を見て、クライアントも安心され、その後治療が可能になり、15 歳で初めて爪切りや狂犬病の注射を行うことができました。

その 2——あるクライアントの方から、こうしたコメントをいただくことができました——「家族しか知らないような、動物の細かい仕草を把握されていて、また私たち飼主のこともよく把握された上で、多くのケアをしていただけました。どうもありがとうございました」。こうしたコメントをいただけたことは、とても大きな励みになりました。感激につながり、看護を通じて動物とクライアント、そして社会に対して貢献できたという価値観、そして動物看護をやりとげた成果を、痛感することができました。

●

将来の動物看護師については、次のことが必要だと思います——動物だけではなく、クライアントも含めて看護を行う動物看護師になること／獣医師の診療補助を、さらには検査や手術補助などの業務を行うプロフェッショナルになること／動物看護学を確立させ、動物看護師の重要性を社会に認識させること／将来設計ができ、家族などを養えるような自立できる職業であること。そのため、社会や家庭、伴侶医療において必須になっている動物看護師は、最短距離で国家資格となることが急務になっていると私は考えます。

動物の看護はもちろん、看護を通して動物と飼主が幸せになることで、良い家族ができ、安全で平和な社会を作るお手伝いができる職業であると思います。動物看護師の仕事を通して、多くのことを考え、感じることができることは、とても幸せだと思っています。そして何より、自分自身をなごませてくれる、励ましてくれる存在（動物たち）が身近にいてくれる、素晴らしい職業だと思います。

（例会を終えて）

自分の看護観について、あらためて見つめ直し、考え、発表したのはとても充実したことであり、さらに他のパネラーの発表を聴講し、動物看護師の仕事の領域の広さを再認識し、各々の立場と場面で様々な体験をしていることを学び、視野を広げることができました。今後ますます、人の社会に家庭に、大切な役割を担っている動物たちを看護することの重みを実感しました。

また会場からの意見を聞いて、仲間である動物看護師が仕事の悩みを抱えこんでいることが多いことを感じました。私たちは自分を大切にし、研鑽することでよい動物看護ができ、多くの家族を幸せにすることができます。動物看護師はそれができる職業です。クライアントのケアだけでなく動物看護師同士のケア（コミュニケーション）も必要だと実感しました。

一つずつ解決していかなければなりませんが、参加することで得るものも

多く、よい体験をさせていただきました。動物看護師の重要性が社会に認識され、働きやすい職業となるよう、今後も努力してまいります。

富永良子さん
（大阪府・ネオ・ベッツ VR センター
本学会認定動物看護師、
JAHA 認定 1 級 VT）

私は小さい頃から動物が大好きで、小学生の頃から獣医師になるのが夢でした。20 年近く前ですから、動物看護師の存在はあまり知られておらず、“動物好き イコール 獣医師”というイメージがあったからだと思います。高校生の頃、動物看護師という仕事を知り、獣医師より自分に向いていると思いこの道に進むことにしました。

山口県の高校を卒業後、大阪ペピイ動物看護専門学校に入学しました。同校卒業後は鶴見緑地動物病院に勤めました。同院が 1 次診療から 1.5 次診療、そして 2 次診療と変化していき、2005 年 10 月よりネオ・ベッツ VR センターに勤務しています。約 3 年前から看護士長という立場になり、いま動物看護師 9 年目です（例会当時）。

専門学校時代は、決して真面目な生徒ではありませんでした。動物のことならがんばれると思って進んだ道だったのに、一人暮らしで はめを外しすぎてしまったのか、2 年生の時は遅刻・欠席が多くなり、担任の先生から「これ以上遅刻・欠席したら卒業させない」として誓約書を書かされましたこともありました。いまとなってはよい思い出で、その先生からは「あなたがこんなに長く動物看護師を続けているなんて・・・ いちばん早く辞めると思っていたわ（笑）」と言われます。また、興味を持ちにくい科目は追試を受けることもありました。

いま思えば、もっといろいろと勉強しておけばよかったと思いますし、学費を出してもらった親に申し訳ないことをしたと思っています。その分、いま大変な思いをしていますが、本気でやる気になったときがやり時なんだ・・・ とも思っています。初めの頃は 3 年働いたら辞めて実家に帰ろうと考えていました。腰かけ程度にしか思っていなかったのかもしれません。

動物看護師 3 年目に、病院が 1 次診療から、CT 撮影を行うことのできる 1.5 次診療の病院に変化することになりました。この環境の変化が、動物看護師を続けるよいきっかけになったと思います。とりあえず、もう少し続けてみようと思いました。

この頃は飼主さんに与える印象をあまり考えておらず、髪の毛は茶髪で、仕事中も長い髪の毛はくくるより下ろしているほうがかっこいいと思っていました。自分の興味はしつけ関連のことにあり、JAHA（社団法人日本動物病院福祉協会）のしつけインストラクター養成講座を受講したり、パピーパーティなどを開催したりすることに燃えていました。

そして、おととしにネオ・ベッツ VR センターが開院して、2 次診療にかかわるようになりました。飼主さん、主治医さん、VR センターで連携を作って患者さんの治療にあたるため、まずは主治医の先生が窓口になり、予約を入れていただきます。

2 次診療になっていままでと変わったのは、獣医師がクライアントであるということです。そのため以前に比べて、自分をより厳しい目でみられるようになったと思います。

この 2 年間でいちばん変化したことは、身だしなみに対する意識です。自分の満足しか考えられなかったのが、クライアントの満足が自分の満足につながるようになりました。また以前に比べて、より高い向上心を持てるようになったと思います。セミナーや学会に出席する機会も増えました。看護士長の立場になり、本当にたくさんのことを学ぶ機会が増え成長していると思います。いちばんおどろいていることは、自分がいま、こうやって大勢の皆さんの前で話をする立場になっていることでしょうか。

現在の私の看護観やこだわりのきっかけになっているのは、動物看護師 5 年目の時に担当した患者さんとそのご家族のことです。患者さんは、ララちゃんという 10 歳のゴールデンレトリバーの女の子でした。ララちゃんは、脾臓腫瘍と脳腫瘍の疾患を持つ患者さんでした。ご家族は 40 代後半のご夫婦でお子さんがいらっしゃらないお二人でしたが、お二人にとってララちゃんの存在はとても大きなものでした。

ララちゃんの状態はあまり良くなく、ほとんど寝たきりに近い状態でした。診療が忙しいある日の面会時、寝起きのララちゃんの口の中からヨダレと一緒に、食べた缶詰フードが出てきたことがありました。食事後には口をきれいにふき、面会前には必ず再チェックしていたつもりでした。面会に来られたときはご家族とできる限り話をし、コミュニケーションもとれていたと思います。しかし、ララちゃんの口からフードが出てきたことはご家族にとってとてもショックなことだったと、ララちゃんが亡くなった後に教えてくださいました。

自宅では毎日歯磨きをするなど清潔に保とうと努められていたため、これがペットロスを重くした要因の一つになってしまったことが、大きな後悔となりました。

ララちゃんご家族とのかかわりから私が学んだことは、ご家族にとってはそのとき目にするものがすべてであるので、私たちの側が忙しいことなどは理由にならないということです。私たちが満足と考えても、それがご家族にとっては不十分なこともあるので、神経質なくらいに意識しても、ご家族にとって過剰になることはないのではないかと思いました。

現在は、多少お待たせしても、動物たちができるだけきれいな状態で面会してもらうように努めています。印象は後々残るものなので、できるだけよいものにするべきと思います。

看護はマニュアル通りでは不十分だと思います。ここ数年で、飼主にとって動物は、いままで以上に家族の一員になっています。今後は、より細やかな看護が求められ、独自の方法を模索していく必要があります。自分が感じたことはどんどん実践してみることが、患者さんの自然治癒力アップにつながり、看護の楽しさを感じることができると思います。

そのために私は、ナイチンゲールが唱える「手当て」の気持ちを大切にしています。道具がなくても、痛むところに手を当ててさすってあげることはできる——この気持ちはすばらしいと思います。

そして、自分の行った看護を記録に残して後で振り返ることができるようにしておくことで、次はもっとよい看護を提供することができます。当院でも動物看護師が看護記録をつけていますが、まだまだ未熟なものです。本当に少しずつですが、動物看護師の努力でよいものに変わっていっています。

将来、動物看護師を続けたいと思う人がふえることを願っています。そのためには仕事内容に満足でき、福利厚生などもしっかりしている必要があると思います。勤務する病院側の理解や、尊敬できる獣医師と共に仕事ができるかどうかなども、大きく影響してくると思います。腰かけではなくずっと続けたいという思いが、動物看護師の今後に欠かせないと思います。

具体的なことは、いまは身近なことでしか考えられませんが、2 次診療病院である当院での将来像は、動物看護師も整形外科、眼科、脳神経外科、内科などの科ごとに別れて、より深く専門的に特化していくことです。手術を担当する者、CT・MRI 検査の撮影を行う者、看護を徹底して行う者など、分野わけすることで、より深く知識を得ることができ、質の向上にもつながると思われます。

極端に言えば、獣医師が行う「診断・手術・処方」以外のことは動物看護師が行えると思います。そのためには大勢の動物看護師が必要でしょう。男性の動物看護師も家族を養っていけるくらいの給与をもらえるようになることも、必要ではないかと考えています。こうしたことを実現するためには、動物看護師として本気で生きていこうと思う気持ちが必要です。私もそう思えるまで時間はかかりましたし、迷うときもありますが、本気の心がないとよい仕事はできないと分かりました。

休日はセミナーに出席したり、チームで老人ホームを訪問させてもらったりしています。動物看護師の仕事だけではなく、他にもいろいろなことをやることで人間性を磨くことが、よりよい看護にもつながっていくように思います。これからも視野を広くもっていきたいと思います。

（例会を終えて）

パネルディスカッション「私たちの動物看護観を語り合いましょう！」のパネラーとして、お声をかけていただいたとき、「なんて素敵なテーマだ！」と思いました。自分の心の中で考えていても、なかなか人に伝えることのない自分の動物看護観を、大勢の人の前で話し語り合えるなんて… いままでにない素晴らしい企画だと思いました。

人前で話すのはとても緊張することですが、これからの動物看護師にとって、自分の思いを人に伝えるのは何より大切だと思います。私自身、今回のような機会がないと、自分の動物看護観を形にすることはなかったかもしれません。あらためて、現在の自分の動物看護観の原点を思い出しました。

また、一人ではなく他のパネラーの方々と一緒だったので、とても心強く安心できました。自分より経験豊かな方々とお話ができ、私の動物看護観はさらに広がりました。動物病院の中に閉じこもっていてはできない経験です。今後も団体の枠を超えて、いろいろな仲間と出会いたいと強く感じました！

中井江梨子さん
（東京都・どうぶつ眼科 Eye Vet
本学会認定動物看護師、現・本学会理事）

いま私が看護をするときに基本となっていることは、相手の「楽」を探すことです。どうしたら相手が少しでも「楽」になれるのかを考えます。当たり前のことかもしれませんが、目の前の業務や自分の感情を優先して、意外にも、これができていないことに気づいていませんでした。

もちろん「楽」になるだけでは解決しないことが多いのですが、「楽」になったり、期待がかなったり、うれしくなったり、安心したりといった感情は、いろいろなことへのエネルギーになると思うからです。それがほんの些細なことでも、思わぬエネルギーになることもあり、その積み重ねがとても大切だと思う

のです。

とても緊張して体をこわばらせている犬には、“犬の側から匂いをかぎにくる機会をつくって待ってみる”“猫が入院する時は、多少場所を取っても寝床とトイレを持ってきてもらう”など、可能な範囲から始めても、手がかりをつかめるとどんどん出てくることもあります。それが自己満足や思い込みにならないためにも、記録に残し、犬猫の習性や心理をもっと勉強していくことで、より幅広く「楽」にしてあげることができそうです。

●

それから家族(飼い主)の存在です。家族あっての動物の幸せですから、もちろん家族の「楽」も探ります。ところが人の「楽」はなかなか簡単にはいきません。複雑な感情や状況もありますので、飼主様には、いろいろなことに対してご納得やご理解をいただく必要があります。病気や治療のことはもちろんですが、食事のこと、トイレのこと、ケアのことなど様々です。

ご説明やご指導をしても、それをご理解いただけなかったりするのは、問題があるからなのですが、それにはいろいろな背景があり、皆様それぞれの感情が根底にはあります。“自分も忙しいのに犬にこんなに手がかかるとは思っていなかった”“ドッグフードだけではかわいそうだから肉やジャーキーも毎日あげている”“簡単に治るもんだと思っていたら、何だかいろいろありそうで、とまどいや葛藤があるから治療になかなか踏み切れない”など様々だと思います。

そんな時に、相手が大変だと思っていそうであれば、「お忙しいのに困りましたね」とか、葛藤していそうなら「かわいそうな気になりますね」とか、間違ったことでもよかれと思っておられるのであれば「試行錯誤されているんですね」などと、感じたことを単純にまずお伝えしてみることにしています。

例外はありますが、相手に共感することで少しでも楽になっていただけると思うのです。すると、話を聞く余裕ができたり、指示通りにやってみる気になったり、自分の都合を少し変更してみる気になってくださったり・・・ それが結果として、動物側の「楽」につながってくれるのだと思っています。

●

いままでは、いかに飼主に正しく有益な情報を提示できるか、説得できるかということに一生懸命になってしまっていました。もちろんそういった知識や技術も持っていなくてはなりませんから、勉強することはこの先も尽きることはないのですが、ただそれだけでは押し付けや自己満足なのではないか、と気づかされました。

いくら知識や技術があっても、いくら正論であっても、抱えた問題はそう単純ではないことが多いようです。病院という限られた場所と状況下で、相手の抱えた問題や感情を少しでも多く察知するためには、自分の五感すべてを相手に向けている必要があります。そんな当たり前とも思えることなのに、日々の業務や忙しさの中で、相手を分かった気になってこちらの言い分を押しつけてしまったり、獣医師の指示だけ聞いて、考えたり感じたりすることを知らない間に避けてしまっていたのだと、以前の自分を振り返りました。

獣医学の知識と技術を身につけることが向上することだと錯覚し、逆に獣医師に指導や指示をしたりする立場になってからは、動物看護師でありながら、仕事の中心が検査や診断・治療になってしまっていたからだと思います。動物や飼主の力になりたくてなった動物看護師だったのに、相手のためと言いながら、見ていたのは自分のことだったのかもしれません。

人は、自分のことは自分が一番よく分かっていると思っています。たしかに性格や、趣味・行動パターンなど表面にあらわれやすいところではそうだと思います。ただし、無意識のうちに起こってくる自分の感情や気持ちの裏側までを、冷静に見つめ分析できる人はそういないと思います。

多くの飼主の方々も同様です。それができるためには、勉強や訓練が必要なのでしょう。ましてストレスやショックや、困った状況下におかれれば、なおさらです。自分のことも理解しきれないのに、誰かを癒そうだなんて簡単なことではないですし、飼主の大半は年上ですから、自分より人生経験も見聞も広い方々です。しかし、動物病院は助けを求めに来られる場所なのです。

●

当院に、飼い始めたときから両眼の網膜剥離で眼の見えないヨーキーが来院されていました。飼主は70歳前後のご夫婦で、犬を飼うのは初めてでいらっしゃいました。

網膜剥離は視覚を奪うだけではなく、続発性緑内障など先々の問題をはらんでいます。このご夫婦も犬も、初めてだらけの生活の中に様々な課題を抱えたわけです。その子をショップへ返してしまわれるかなと思いましたが、接し方やトイレのしつけ・お散歩の仕方など、指導できることは行い、ときには一緒に考え話し合ってきました。

1 歳を過ぎたころ、硝子体内シリコンボール義眼という、いわゆる義眼の手術を経て、いまではもう 3 歳近くなります。その飼主ご夫婦が、あるときにこう話されました――「先日、この子には無理かもしれないと思っていた公園デビューもでき、犬友達もできました。私たちは“普通の犬との生活”というものを知りませんが、この子との生活はとても楽しくて、眼が見えないことを忘れるほどです。生活に支障を感じることはありません」「そのつどお話を聞いてくださったこと。そして入院中、動

物看護師の方になついている姿を見て勇気が持てました」と言ってくださいました。

動物との生活は本来、私たち人間の生活を豊かにしてくれるものです。この飼主ご夫婦も、この子の目が見えるようにならなくても、この子との生活はかけがえのないものだと実感してくださり、そのことが本当にうれしかったです。

たしかに動物も人も、生きている以上、病気になったりケガをしたりといったこと以外にも、自分の予想外のことや、思い通りに行かないことばかりです。問題に直面したとき、出てくる反応は人それぞれですが、誰かが問題を取り除いてくれたり、救ってくれたりするわけではなく、いろいろな助けは借りますが、結局は自分で受け入れたり、乗り越えることでしか道は開けません。

そんなとき、私たち動物看護師のたった一言、ささいな行動で、相手の力がプラスにもマイナスにもなるのなら、小さくてもたくさんのプラスになっていただくために、相手の「楽」をこれからも探し続けようと思います。

（例会を終えて）

きょうは、「"獣医師と真剣に話し合ったこと"が述べられていたが、自分はそれほど、動物看護師と真剣に向き合う獣医師に出会ったことがない」というお声や、「新卒・現職動物看護師の待遇改善のためにも、国家資格化をどう思うか」というご質問もあり、共に協力すべき獣医師との関係や、獣医師の方々の獣医療に対する考え方・動物病院の現状など、抱える問題の深さが感じられました。

これからも、自らの動物看護を振り返りながら、動物やご家族と向き合っていくことで、まわりの人々や病院の意識や行動にも変化を与えられるよう、着実に一つずつ頑張ろうとあらためて思います。そして、動物看護に従事する楽しさや奥深さ、動物看護という仕事の素晴らしさを皆さんと共有していければと思います。加えて、動物看護師の本来の目的やあり方について、動物看護師間で共通認識を持つことが大切と認識しました。

遊座晶子さん

（茨城県・つくば国際ペット専門学校 教諭

本学会認定動物看護師、現・本学会常任理事）

私は文系の短大を卒業した後、某大手電機メーカー内に7年間勤務していました。最初の5年間は来客と電話が大変多い部門に在籍していたので、言葉遣いや来客応対についての指導をたっぷりと受けました。残りの2年間は電力試験を行う施設にいましたが、海外の電力会社などからのお客様もあったので、休憩時間にお茶を出す程度ですが多少の英会話力も必要でした。いま思うと、この会社員時代の『様々な人への接し方』から学んだことが、現在の基礎になっていると感じています。

その後、約10年間の動物病院勤務などを経て現在に至ります。動物看護師歴は14年目です。7年間勤めた会社を退職して、「さぁ、これから何を始めようか？」「特別やりたいこともなく、特技も何もない私に何が出来るだろうか？」——そんなことを考えていました。

その頃、関心を持っていたことといえば、高齢になってきた愛犬"太郎"の健康管理についてくらいでした。子供の頃から昆虫やら金魚やら小鳥など、何かしらの生きものが身のまわりにはいましたが、特別に動物が好きだと思ったことはありません。しかし、高校生のときから家族に加わった愛犬は、姉弟のような子供のような特別な存在でした。

そんなことを考えているときにタイミングよく、愛犬の主治医の先生のところで求人募集をしていることを知り、早速応募しました。「すでに採用者が決まってしまった」と一度は断られましたが、「どうしても！ という気持ちがあったら1ヵ月後にもう一度連絡してみて」とのことだったので、1ヶ月間待ってから再度連絡をしたところ、働かせていただけることになりました。

先生に後日、「1ヶ月後に・・・」と言われた理由を尋ねたところ、会社員時代の経験や主婦だということが魅力だったからとのことでした。ちなみに主婦の魅力とは「様々な人間関係を経験しており、忍耐強いこと」だそうです。

そのようにして、半ば無理やり勤め始めたわけですが、太郎はその3ヵ月後に亡くなりました。初めて「生きものの死」に直面しパニックに陥りました。異変に気づくのが遅かった自分への怒り、悔しさ、情けなさなどを強く感じ、しばらくの間は、愛犬の死を受け止めることができませんでした。

勤務3ヶ月目でいわゆるペットロスというものを体験した訳ですが、ひとりの飼主として、愛する動物を失ったときの『心の変化』を知ることができたのです。悲しみを分かち合える人間が必要だということを、早いうちに学ぶことができました。このときの学びを言葉にして表現するならば、『動物と飼主と共に、日々の喜びや悲しみを分かち合うことができる人が必要であり、それは動物看護師の役割でもある』ということです。

この愛犬の死をきっかけに、動物看護師になりたいという思いがさらに強くなりました。もっときちんと勉強して、私と同じような思いを抱いている飼主や、動物たちの役に立ちたい。そう

思いだしてからは、動物医療の知識を得るために、勤務医の先生に講師になっていただき、月に 1 度の勉強会を開いたり、製薬会社の方やフードメーカーの方を講師にお招きして勉強会を開いたり・・・ 様々な方々の協力を得て勉強する機会を持てたことは、いま考えても、とても幸せなことだったと思います。

●

その後、動物病院で働きながら、茨城県内のトリミングスクールで2年間、非常勤講師を務めました。その頃の私は、『動物看護師は獣医師の指示を的確にこなすことこそが重要な役割だ』『獣医師の先回りをして動き回るのが仕事だ』と思っていました。しかしその後、臨床現場を離れると同時に現在の専門学校に勤務していますが、この頃から、『ホントの看護って何だろう？』という疑問と少々の不安が頭を過ぎるようになりました。

現在、動物看護についての統一した教育カリキュラムはありません。各校が独自のカリキュラムで指導しているというのが現状です。それだけに、何をどのように指導するべきか？について日々考えています。これから動物看護師をめざそうという学生の指導にあたるということは、やりがいもありますが責任は重く、またとても難しい仕事です。もちろん、自分がしっかり理解していなければ何も伝えられないし、伝わりません。

●

そんなときにタイミングよく、『臨床動物看護研究会』のことを知ったのです。ファシリテーター（協働促進者）である西谷孝子さん（本学会認定動物看護師、現・本学会副理事長）が主宰されている自主勉強会です（本学会後援）。それまで、それなりに仕事をこなしてきたつもりでいたので、勉強会ってどんなことするのかな？ と期待に胸を膨らませていたのですが・・・ まず初回で衝撃を受けました。

それまでにも動物看護師向けのセミナーには参加してきましたが、こんな体験は初めてでした。何が衝撃的だったか？それについては、今後機会があれば皆さんご自身で体験することをお勧めします！ 皆さんも一緒に動物看護を学びませんか?! 私はこの研究会に参加し学んだことで、今後の仕事についての方向性が見えてきたと感じています。

動物看護というものは専門性の高い職業です。言葉を話さない動物と、複雑な心を持つ人間とを相手にする職業なのです。そのことを自覚して、自分達の言葉で表現していく必要があります。他人任せでは、もうどこへも進んで行けない、そういう時期にきています。自分自身が時代の流れを作る、という考えを持たなければならないのだと考えています。

●

私が 30 歳を過ぎた頃、院長から「何歳まで受付に出るつもりなの？」と言われ、奥に引っ込んで様子を伺っていると、そこには、新人の受付対応に少々キレ気味の院長の姿が・・・そして「何で新人に受付をやらせているんだ！」と、怒りの矛先（ほこさき）がこちらに向いたことがありました。院長が、受付は若い子がいいって言うから引っ込んだのに・・・（笑）。

でもこの一件で、院長にも解っていただけたようです。飼主さんと接するには、様々な状況に対応できる能力が必要です。これはやはり経験の上に成り立つものだと思いますので、専門学校を卒業したての 20 歳の新人と、その後様々な人生を積み上げてきた 30 代の私とでは、違いがあるのは当然のことです。しかし、ただ年齢を重ねればよいというものでもなく、経験を肥やしにするだけの力が備わっていなければならない、ということも忘れてはいけません。

●

私は、動物と飼主がよろこぶ姿を見るのが好きです。それを目標において看護を実践してきました。たしかに、私が得てきた経験や知識は、これまでの多くのかかわりの中で私が授かったものです。しかし、自分だけのものにして溜め込んでいると、ただの自己満足で終わってしまいます。

「経験知は発展させていくことで、意味のあるものになる」ということを研究会を通しても学びました。それぞれの経験知を共有するためには、それを明文化する（文章化する）ことが必要です。文字にすることで、自分の経験を振り返り、かつ客観的にみることもできます。また、それを人に伝える（情報を共有する）ことで、それを知った人が自分の看護にその情報を積み重ね、レベルアップした看護へとつながって行きます。それが、動物看護全体の発展につながるのではないでしょうか？

私は現在、多くの学生（未来の動物看護師）の育成にかかわることで、その先にいる多くの動物や飼主とかかわることになると考えています。学生たちが動物看護師となったとき、彼らの行動や言葉を介して、私の思いは必ず伝わっていくはずだと信じています。そのためにも、できるだけ多くのことを学び伝えていくことが、私のいまの役割だと考えています。「ひとりができること」は、ほんの小さなことです。

いまこそ動物看護師全体が一つとなり、動物看護とは何なのか？ を追究していく時期なのだと思います。皆さんは、何のために動物看護師という仕事をしていますか？

●

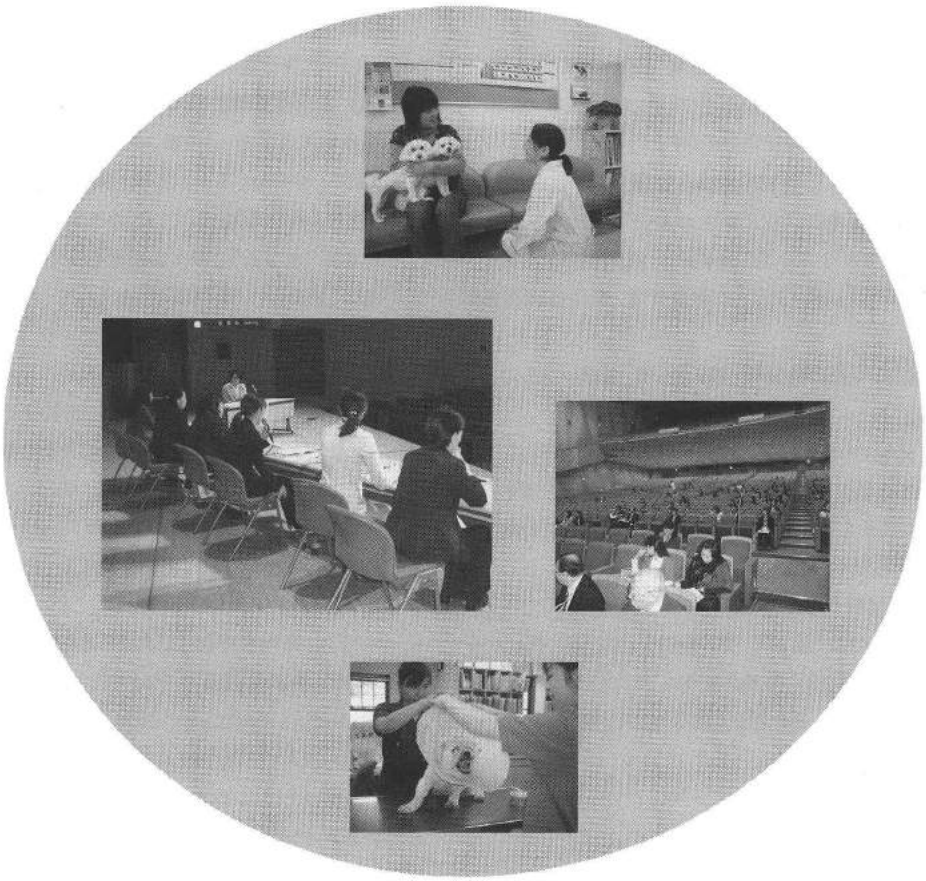
動物看護師をめざした頃、自分の愛犬のことや自分の気持ちだけを考えていた私も、昨年夏、2頭目の愛犬“ココア”を見送ることになりました。たまたま家に居て看取り役になった父

に、私が最初にかけた言葉が「ありがとう。お世話になりました」でした。正直なところ、このような思いやりの言葉が自分の口から最初に出てくるとは思いませんでした。太郎が亡くなったときの自分とは大違いで、本当に驚きました。

この職業に就いて、たくさんの出会いと別れを経験するうちに、知らず知らずのうちに成長させてもらっていたんだなぁと、あらためて感じ、こんなにも成長させてくれる職業にはなかなか出会えないのではないか、とも思っています。この職業に出会えて、そしていま、ここで皆さんと出会えたことに感謝し、後に続く人たちの道標となれるよう、日々自己研鑽に励みます。

敬称略・五十音順

誌上再録にあたり、ファシリテーターとパネラーの皆様よりご協力をいただきました。
御礼申し上げます。 事務局



共に あしたを考えたい！

動物看護師の いま と これから

—「日本動物看護学会認定動物看護師」6名の声—

動物看護師の方は、ご自分の考えと比べてみてください。
それ以外の方は、動物看護師の声をお聴きくだされば幸いです。

学会ホームページ（認定試験の項目）にも同じものを載せています。

齋藤みちるさん

（神奈川県・七里ガ浜ペットクリニック
本学会認定動物看護師、本学会理事）

Q1 日本動物看護学会主催の「動物看護師資格認定試験」を受験した理由

自身の動物看護知識、技術を深める目的からです。主観のみならず、客観的にも動物看護師と認識されるため、学術団体である日本動物看護学会の認定試験を受験しました。

Q2 勤務先病院での現在の業務内容 ※獣医師指導の下

外来、入院動物の看護、獣医師の診療・手術補助、麻酔モニタリング管理、環境整備、飼い主への説明・指導、病院経営・経理、スタッフ管理、実習看護学生への指導などです。

Q3 動物看護師としての自分の信念と目標

- 何よりもまず患者動物の QOL（編注：クオリティ・オブ・ライフ、生活の質）を第一に考えること。その動物にとっての幸福を考え、天寿が全う出来るように、飼い主と共に健康管理、生活環境整備の手助けをする。
- 人生生涯勉強。つねに勉強・研究を怠らず、看護レベルの向上をめざす。
- 「どのような経験でも無駄になることは一つもない。好奇心を失わず何事にも挑戦を続け、あらゆる分野において自分の見識を深めていく。人間的成長を続けると同時に動物看護師としての自分も高めていきたい」と考えています。

Q4 他の動物看護師へのメッセージ

動物看護師が専門職であるという自覚を持って仕事に携わり、日々看護研究、模索を続けながら情報を共有し、共に日本の動物看護の確立を目指しましょう。いつも動物と人間へ向けて、愛情いっぱいの動物看護師でありたいですね！

◆

崎山法子さん

（奈良県・王寺動物病院
本学会認定動物看護師、本学会理事）

Q1 日本動物看護学会主催の「動物看護師資格認定試験」を受験した理由

私自身、動物看護師として十数年働いていますが、動物看護師認定（証）が、あってもなくても困ったことが一度もありませんでした。ですから、認定（証）はあまり必要のないものだと思っていました。しかし、様々な場所で活動をするようになり、「一定の基準を満たしている動物看護師」という証明がない自分を恥ずかしく思ったからです。動物看護師認定を受けるにあたり、日々の業務に追われるだけでなく、仕事の日々の振り返りや、再勉強するきっかけが出来ました。その結果認定をいただき、私は動物看護師であるという自信と誇りを持つことができたと思います。

Q2 勤務先病院での現在の業務内容 ※獣医師指導の下

動物看護師として一般業務（主に入院／外来動物看護・救急対応・各種検査・麻酔管理・手術助手・受付・備品管理・雑務など、獣医師の仕事以外全て）も行いますが、取締役として動物病院の経営にも参画します。また、動物看護師主任という立場的にも、スタッフの指導や業務管理が多くなってきたのが実際です。その他として、学会への研究発表も行っています。

Q3 動物看護師としての自分の信念と目標

動物看護師という仕事にプロとして誇りを持ち、いかなる場合も他者に対し、愛情深く日々の仕事に臨みたいと思っています。そして、女性も男性も動物看護師という仕事を生涯の仕事と出来るようになることが目標です。また、様々な過程を経て動物看護師という職業が社会的にも認められ、待遇改善されることを期待しています。

Q4 他の動物看護師へのメッセージ

この仕事は、「これが出来れば良い、ここまでできたから十分」の仕事ではありません。一生涯、学びの必要な仕事です。そこには、飼い主、動物、医療スタッフが密接に絡みあっています。専門的知識を持ち、人として医療従事者として、そのバランスをとるのが動物看護師の仕事ではないでしょうか。とても辛いことや、困難なことも多いけれど、命を支えるという素晴らしい仕事につけたことに喜びを感じていただきたいと思います。

現在、動物看護師はこれから進むべき道を考える時期に直面しています。動物看護師という仕事に誇りを持つためには何が必要か、どうなればどうすれば、なくてはならない存在になれるのか、一人一人が自覚し考えていただきたいと思います。また、動物医療に携わっている方すべてに、これからの動物看護師の未来がかかっています。どうか忘れないでください。未来は自分たちでつかむものです。

◆

瀬戸晴代さん

（広島県・西谷獣医科病院
本学会認定動物看護師）

Q1 日本動物看護学会主催の「動物看護師資格認定試験」を受験した理由

学問としての動物看護学の進展と、動物看護師の職域拡大と地位確立を提唱されている、本学会の動物看護師資格認定試験というこ

とで、どんな試験内容なのか大変興味がありましたし、勤務先の上司と一緒に受験してみようということになりました。

受験するにあたり改めて勉強し直すことにより、自分の持っている知識や技術の確認となり、また苦手な分野や不足している点も再認識することができ、動物看護師としての自分自身のレベルアップを図るためにもよい機会と思い受験しました。

Q2 勤務先病院での現在の業務内容 ※獣医師指導の下

受付・会計業務、診療補助・保定、調剤、術前血液検査、レントゲン検査、入院動物の看護・管理、麻酔管理や間接・直接介助、手術の器具等の準備や片付け、術後管理、医薬品やフード等の在庫管理ホテル業務の管理、トリミング業務、しつけ教室、新人指導などです。

Q3 動物看護師としての自分の信念と目標

大切な家族の一員である動物たちが病んで、不安な思いで来院される飼い主様の気持ちに寄り添える、また、健康や回復の喜びを飼い主様と共に共感できる動物看護師でありたいと思っています。動物看護師として、いま自分に何ができるかを常に考えながら、獣医師と協力し合い、お互いの専門性を生かしたチーム医療の実現を目指しています。

Q4 他の動物看護師へのメッセージ

動物看護師は、今や専門的な知識や技術が求められる職種ですし、飼い主と動物、 獣医師それぞれの立場を理解・尊重した上で、それらの間を取り持つ重要な役割を担っているため大変なことも多く、また大好きな動物の死に直面するという場面もあり、精神的にも肉体的にもつらいこともあると思います。しかし、それ以上に楽しいことやうれしいことも多く、人間的にも成長できるやりがいのある仕事だと思いますので、ぜひあきらめずに『動物看護師』という仕事に誇りと自信を持ち、努力を重ねて頑張っていただきたいと思います。

◆

中俣由紀子さん

(茨城県・かしま動物病院

本学会認定動物看護師、本学会常任理事)

Q1 日本動物看護学会主催の「動物看護師資格認定試験」を受験した理由

私がこの仕事を始めた時は"動物看護師"という名称もなく、ただ憧れていた職業に就いただけなので、言われたことをするだけでした。その後、徐々にこの仕事が広がりを見せてきた時に、自分自身のレベルは? このやり方でよいのか? など疑問を持つようになり、また知識を再確認したいという気持ちも起き、動物看護と名のつく認定試験に挑戦するようになりました。「新しい目標を克服して自分に自信を持ちたい」という気持ちがありましたので、受験しました。

Q2 勤務先病院での現在の業務内容 ※獣医師指導の下

受付業務、動物舎掃除、診療補助、調剤、手術助手、入院管理、在庫管理、一般検査、飼い主指導、スタッフ教育、雑務など、手術診療以外のほとんどの業務を行っています。

Q3 動物看護師としての自分の信念と目標

動物看護師という仕事は、まだ始まったばかりだと思います。飼い主の動物医療に対する意識は、これからどんどん高まりを見せると思われますので、これに伴い病院も成長していかねばならないと思います。飼い主や動物たちが何を言いたいのか、その言葉を聞き漏らさないようにして、"向上できる病院(チーム作り)"をしていきたいと思います。

Q4 他の動物看護師へのメッセージ

動物看護師の仕事は"動物が好き"だけでは務まりません。人と人とのかかわりが重要です。相手の気持ちになって考えることが大切であり、この点を決して除くことはできません。技術を持っていても一人では行えませんから、獣医師と動物看護師が共に協力する"輪"を守って行くことを忘れないで欲しいと思います。向上心を持ち続けることも必要でしょう。動物看護師自身がこの仕事の素晴らしさを自覚して、それを社会に伝えていきたいですね。

◆

遊座晶子さん

(茨城県・つくば国際ペット専門学校教諭

本学会認定動物看護師、本学会常任理事)

Q1 日本動物看護学会主催の「動物看護師資格認定試験」を受験した理由

動物病院に勤めて 8 年が経ったころ認定試験が行なわれることを知り、自分の行ってきた看護を確認するという気持ちで受験しました。私は専門学校などで学んだ経験はなく、勤めていた動物病院で学んだことがすべてでした。正直言って試験を受けるのは怖かったのですが、「自己流」を見直すよいきっかけとなると考え、思い切って受験しました。

Q2 勤務先病院での現在の業務内容 ※獣医師指導の下

現在は、臨床現場を離れて動物看護系専門学校で講師をしています。主に、基礎動物看護の部分である動物看護学概論や動物看護技術などの指導を担当しています。

Q3 動物看護師としての自分の信念と目標

現在は、臨床現場を離れて動物看護を学ぶ学生の指導にあたっていますが、"人に何かを伝える・指導する"ためには、自分自身が先頭に立って学び続けること、その姿勢を見せることがとても大切だと考えています。指導者の質が学生の質につながり、その先の動物看護師の質にもつながるということを、つねに意識しています。そしてそれらは、さらにその先にある動物医療の質の向上に必ずやつながるものと信じています。より多くを学び、伝えて行きたいです。

Q4 他の動物看護師へのメッセージ

好きなことを仕事にするということは、想像以上にしんどいことですね。日々の忙しさに負けそうになることも多々あるでしょう。そんな時、私はいつも「動物と飼い主さんの喜ぶ姿」をイメージするようにしています。動物看護に対する思いや目標は人それぞれ違いますが、一人

一人の気付きや経験を共有することで看護の幅は広がっていくものと思います。動物医療の発展に伴い、動物看護師の役割は今後ますます高度化・複雑化して行くでしょう。それらのニーズに対応するためにも、専門職としての意識をしっかりと持ち共に学び続けましょう。

◆

橋本美穂さん（広島県・西谷獣医科病院　本学会認定動物看護師）

Q1 日本動物看護学会主催の「動物看護師資格認定試験」を受験した理由

いまのわが国では、様々な動物看護師認定機関がある中で、私は日本動物看護学会の"「学問としての動物看護学の確立」と「動物看護師の社会的地位の確立」を目的とした活動を行っている"というところにひかれて、受験しました。

Q2. 勤務先病院での現在の業務内容　※獣医師指導の下

受付での飼い主対応、会計、電話対応、外来患者の診察補助、注文フードの管理、薬品や物品の在庫管理、手術の機械や器具類の準備と片付け、手術中のモニタリングと麻酔管理、手術後の動物の管理、ペットホテル預かり動物の管理、入院動物の管理や入退院準備、食事指導、病院内外の清掃、洗濯などを行っています。また獣医師やベテラン看護師の指導のもと、歯石除去手術に参加することもあります。

Q3 動物看護師としての自分の信念と目標

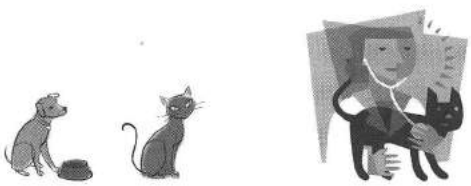
一人ひとりの飼い主様、一頭一頭の動物たちは、生活環境や生活などそれぞれに違い、動物病院で求められるものも違ってきます。その個々の必要としているものに対応し、満足していただけるような「個別性をもった看護」を行っていきたいと考えています。

Q4 他の動物看護師へのメッセージ

動物を看護するというのは本当に難しいことだなあと毎日感じています。しかし飼い主様や動物たちが元気な表情になっていくのをみると、とても大きな幸せを感じます。私たちは誰のために、何のために動物看護をしているのか常に考え、目的や目標をもった看護ができるよう頑張っていきましょう。

あなたのお考えは、いかがでしょう…

「動物看護が担う役割とは何か」「動物看護学とは何か」について
考えていただく、きっかけになれば幸いです。



●報告● 提出された「看護レポート」(69報)のテーマ一覧

「日本動物看護学会認定 動物看護師」の資格は、“永久資格(一度合格したら生涯自動的に継続する資格)”ではありません。資格継続のためには取得後も引き続き、本学会内外において学習研鑽活動を続けることが必要となります。

これは、認定者となった後も研鑽を続けて、動物看護師としての実力向上に努めていただくためです。

本学会規定の「学習ポイント」を2年間ごとに最低10ポイント取得しないと、2年ごとに迎える資格認定の更新時に、資格更新が認められません。

「学習ポイント」取得方法の一つが、「看護レポート(動物看護の事例報告)」の提出です。「看護レポート」1報の提出によって、「学習ポイント」5ポイントを取得できます(審査有)。

この「看護レポート」の提出数が69報に達しました(2008年11月10日現在)。当初は「書き方が分からない」といったお問合せを多く頂いていましたが、本学会から認定者に“看護レポートの書き方”を配布するうちに、提出数が増え始めました。いまでも認定者の方々からは、“文章を書くのは苦手”という声を多くお聞きします(得意という方は少ないと思われますが)。しかし、いちど形式を理解されると、取り上げるテーマは毎日の業務の中に多くあるようです。

下記は、これまでに提出された「看護レポート」67報のテーマ一覧です(審査承認済)。扱われているテーマの幅広さが伺えます。動物医療の最前線にいる動物看護師が、いかに幅広い業務に携わっているか、また向学心を有しているかの証と存じ、ご参考までに初めて掲載いたします。

看護レポートの提出が「大会・例会発表」「学会誌投稿」につながり、ひいては“動物看護事例や問題意識の共有”をもたらすことを願うものです。

事務局

※現状では、「看護レポート」の公開について規定がないため、テーマ表記に留めます。

「オーナー向けセミナー開催後の効果と実績」「生きようとする力と、リハビリと看護の大切さ」「感染症について」「子猫の育て方について」
「当院におけるダイエットの成功率と飼い主指導ー肥満犬を持つ飼い主との会話から分析するー」「躾と問題行動について」
「ペイシャントの種別や性格による接し方と、クライアントコミュニケーションについて」「より良い診察環境づくりのためのアンケート調査」
「内視鏡実施における動物看護師の役割」「内視鏡実施における動物看護師の役割」「より良い診察環境づくりを目指して」

「ズーノーシス」「高齢犬との生活」「犬の前立腺癌の症例と看護」「人と動物の共通感染症」「高齢犬のハウスケア」
「猫白血病ウイルス(FeLV)感染症とリンパ腫の抗がん治療」「動物病院における接客マナー」「避妊手術における動物看護師の役割と業務」
「犬のアレルギー性皮膚炎、犬のアトピー性皮膚炎の治療」「動物病院におけるアルファ・シンドロームの犬の看護と治療」

「尿路結石における食事療法の重要性」「院内でよく受けるパピーについての質問」「眼の病気『白内障』と点眼薬の効果」
「犬の歯に対する管理」「口蓋裂の犬の看護と治療」「犬・猫の『てんかん』」「愛しているからこそ受け入れるペットロス」
「頸部椎間板ヘルニアの看護とリハビリテーションについて」「椎間板ヘルニアに対して行った術後のリハビリの一例」
「人が動物を裏切らないためにー全ての人に知ってほしい動物愛護ー」「犬パルボウイルス感染症の看護について」

「沖縄における高度獣医療」「乳腺腫瘍切除手術を通しての看護師の役割」「受付業務の難しさ」「プリーダーという資格の必要性」
「ペットロスに向き合ったときの動物看護師の役割」「先天性心疾患の不整脈を持つ犬の病態」「動物病院における皮膚疾患犬へのサポート」
「免疫介在性溶血性貧血の犬の看護」「猫の尿路閉塞と食事管理」「子猫の飼育ー生命力と命の大切さー」

「異物誤飲による腸閉塞と異物摘出手術を通しての動物看護師の役割」「右前肢肘部皮膚腫瘤切除の術後管理」
「老齢の大型犬の排泄介護」「子牛の誤嚥性肺炎・下痢の育成者としての対策」「術中の心肺停止ー動物病院で学んだ事ー」
「斜頸症状を示し、認知障害症候群を発症した高齢犬の看護」「動物病院における動物看護師の役割」「パピーパーティ・クラスの開催」
「肥満解消の為の食事療法について」「急性腎不全を起こしたFLUTDの猫の看護」「臍帯炎の防止について」

「糖尿病性ケトアシドーシスの看護」「猫の爪きり往診方法」「野良猫の捕獲・里親探し」「血液塗抹標本作製と鏡検」
「難産(子宮・卵巣摘出術)の症例と看護報告」「ワクチンについて」「伝染性疾患の看護について」「仔犬の基礎行動学」
「保護猫の譲渡会と地域猫について」「リンパ種について」「保定について」「動物看護師として」「愛犬猫の介護ケースについて」
「猫の口内炎治療とケアについて」「肢断脚手術の看護から学んだこと」「動物病院におけるトリミング業務の利点と必要性」

会則改正について

巻頭言でも述べられているように、2008年7月13日に行われた「第14回定時総会」において、本学会の「会則改正」が承認され同日より「新しい会則」が施行されました。

2007～2008年にかけて、会則改正委員会(委員長:渡辺茂委員長)にて改正案を作成の上、理事会ならびに総会における審議・承認を経て施行されました。

本学会活動の活発化に伴い、旧会則では明らかに不足な点が増えていましたが、今回の改正でそれらが是正されましたと言えます。本学会を適切に運営する上で、最低限必須と思われる事項が明文化されました。

事務局

日本動物看護学会「新しい会則」の構成

第1章 総則
第2章 目的と活動
第3章 会員
第4章 役員
第5章 委員
第6章 会議・委員会
第7章 会計
以上 計25条と付則

●日本動物看護学会 会則

1995年12月19日制定　1997年11月29日改正
1999年6月16日改正　2008年7月13日改正

第1章 総則

第1条(名称)

本会の名称は、日本動物看護学会(The Japanese Society of Animal Nursing)とする。

第2条(事務局)

本会の事務局は、東京都千代田区神田淡路町2丁目23番地アクセス御茶ノ水2階におく。

第2章 目的と活動

第3条(目的)

本会は動物看護に関する研究を中心として、会員相互の情報交換の場を設け、この分野における研究の進展を図ることを目的とする。

第4条(活動)

本会は前条の目的を達成するために、次の活動を行う。

1. 大会・例会・講座(講演・研究発表・シンポジウム・セミナーなどを含む)の開催。
2. 学会誌・書籍などの企画・編集・発行。
3. その他、本会の目的を達成するために必要な諸活動。

第3章 会員

第5条(入会資格)

本会の目的に賛同する者であれば、誰でも本会に入会することができる。

第6条(種別)

会員の種別は次のとおりとする。

正会員:本会の目的に賛同する個人。
名誉会員:本会の活動において格段に功労のあった正会員、もしくはこれ以外から、理事会が推薦し総会において承認された個人または法人・団体。
賛助会員:本会の目的に賛同し、本会への財政的援助を申し出た個人または法人・団体。

第7条(会費)

会員は年会費を納入しなければならない。年会費の金額は次のとおりとする。

正会員:5,000円
賛助会員(個人):10,000円
賛助会員(法人・団体):30,000円
役員:10,000円

名誉会員からは年会費を徴収しない。

第8条(会員の資格喪失)

会員が次のどれかに該当した時は、会員資格を喪失する。

1. 退会した時。
2. 死亡もしくは失踪宣告を受けた時。
3. 会費を2年以上滞納した時。
4. 除名された時。本会の名誉を著しく損なう行為があった場合は、総会における承認を経て、該当者を除名することができる。
5. 本会が消滅した時。

第9条(退会)

会員は本会事務局へ届け出た上で、任意に退会することができる。

第4章 役員

第10条(種類・定数)

本会役員は次のとおりとする。

会長:1名　理事長:1名　副理事長:2名

常任理事:若干名　理事:若干名　監事:1～2名

第11条(選出・職務)

1. 会長
①総会において、本会員の中から互選で選ばれる。
②本会を代表し、本会会務を統括する。
2. 理事長
①理事会において、理事の中から互選で選ばれる。
②本会会務を運営する。
③会長に事故があった時、または会長が欠けた時は、その職務を代行する。
3. 副理事長
①理事長の任命によって、理事の中から選ばれる。
②会長・理事長を補佐して、本会会務を運営する。
4. 常任理事
①理事会において、理事の中から互選で選ばれる。
②会長・理事長を補佐して、本会会務を執行する。
5. 理事
①総会において、本会員の中から互選で選ばれる。
②会長・理事長を補佐して、本会会務を運営する。
6. 監事
①総会において、本会員の中から互選で選ばれる。
②本会の会計と会務の執行状況を監査する。

第12条(任期)

役員の任期は2年間とし、再任を妨げない。

1. 役員任期の2年間とは、選出された定時総会終了月の翌月1日から、2年後の定時総会終了月の末日までとする。
2. 役員は、辞任または任期満了後においても、後任者が就任するまではその職務を行う必要がある。

第13条(解任)

役員が次のどちらかに該当する時は、総会において、出席数3分の2以上の議決によって解任することができる。この場合、その役員は議決前に弁明の機会を得る。

1. 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められる時。
2. 役員としての義務違反、その他、役員としてふさわしくない行為があると認められる時。

第5章　委員

第14条(種類・定数)

本会委員は次のとおりとする。

評議員:若干名　編集委員:若干名
動物看護師認定試験委員:若干名

第15条(選出・職務)

1. 評議員
①理事会において本会員の中から選ばれる。
②本会活動に関する意見交換や議論を行うことにより、本会活動に寄与する。
2. 編集委員
①理事会において本会員の中から選ばれる。編集委員長は編集委員の中から互選で選ばれる。
②学会誌・書籍などの企画・編集を行うことにより、本会活動に寄与する。
3. 動物看護師認定試験委員
①理事会において本会員の中から選ばれる。動物看護師認定試験委員長は、理事長が任命し常任理事会の承認を経て選ばれる。
②本会主催「動物看護師資格認定試験」の実施により、本会活動に寄与する。

第16条(任期)

委員の任期は2年間とし、再任もあり得る。

1. 委員任期の2年間とは、選出された定時総会終了月の翌月1日から、2年後の定時総会終了月の末日までとする。
2. 委員は、辞任または任期満了後においても、後任者が就任するまではその職務を行う必要がある。

第17条(解任)

委員が次のどちらかに該当する時は、総会において、出席数3分の2以上の議決によって解任することができる。この場合、その委員は議決前に弁明の機会を得る。

1. 心身の故障のため、職務の執行に堪えないと認められる時。
2. 委員としての義務違反、その他、委員としてふさわしくない行為があると認められる時。

第6章　会議・委員会

第18条(常任理事会)

1. 理事長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 理事長・副理事長・常任理事によって組織される、本会会務の執行機関である。
3. 開催定足数は出席該当者数の1/2以上とする。ただし、開催前に委任状を提出した者、および、審議事項について開催前に書状にて意見を表明した者は出席とみなす。
4. 本会会務の執行に関する諸事項を審議・議決する。議決は出席者の過半数をもって行い、同数の場合は理事長がこれを決する。
5. 理事会での審議・議決が必要とする事項については、これを理事会へ提議する。

6. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
①開催日時・開催場所　②出席者数・出席者名
③審議事項・議決事項

第19条(理事会)

1. 理事長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 理事長・副理事長・常任理事・理事によって組織される、本会会務の運営機関である。
3. 会長は必要と判断する時に、随時招集および出席することができる。
4. 開催定足数は出席該当者数の 1/2 以上とする。ただし、開催前に委任状を提出した者、および、審議事項について開催前に書状にて意見を表明した者は出席とみなす。
5. 本会会務の運営に関する諸事項を審議・議決する。議決は出席者の過半数をもって行い、同数の場合は理事長がこれを決する。
6. 総会での審議・議決が必要とする事項については、これを総会へ提議する。
7. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
①開催日時・開催場所　②出席者数・出席者名
③審議事項・議決事項

第20条(総会)

1. 会長が、毎会計年度終了後 4 か月以内に招集する。
2. 会長が必要と認める時は、臨時総会を招集することができる。
3. 正会員によって組織される、本学会の最高議決機関である。
4. 次の事項を審議・議決する。 議決は出席者の過半数をもって行う。
①活動報告・収支決算報告　②活動計画案・収支予算案
③他に理事会が、総会での審議・議決が必要であると認めた事項
④その他
5. 議長 1 名(本会会員)を、出席者の中から互選で選ぶ。
6. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
①開催日時・開催場所　②出席者数
③審議事項・議決事項
④議長によって選任された議事録署名人 2 名(本会会員)の署名と押印

第21条(評議員会)

1. 会長または理事長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 評議員によって組織され、本会活動に関する意見交換を行う。

第22条(編集委員会)

1. 編集委員長が必要と判断する時に、随時招集する。
2. 編集委員によって組織され、学会誌・書籍などの企画・編集を行う。

第23条(動物看護師認定試験委員会)

1. 動物看護師認定試験委員長が必要と判断する際に、随時招集する。
2. 動物看護師認定試験委員によって組織され、本会主催「動物看護師資格認定試験」を実施する。
3. 開催定足数は出席該当者数の 1/2 以上とする。ただし、開催前に委任状を提出した者、および、審議事項について開催前に書状にて意見を表明した者は出席とみなす。
4. 理事会での審議・議決が必要な事項を発案した時は、これを提議することができる。
5. 開催後、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
①開催日時・開催場所　②出席者数・出席者名
③審議事項・議決事項

第24条(会議・委員会の設置)

会長または理事長が必要と認める時は、理事会の承認を経て、新たな会議・委員会を設置することができる。

第7章 会計

第25条(概要)

会計は次のとおりとする。

1. 本会の経費は、会費・その他の収入をもってこれに充てる。
2. 本会の会計年度は、4 月 1 日～翌年 3 月 31 日とする。
3. 収支決算報告・収支予算案は、総会の議決を要する。

付則

1. 本会則は、正会員 3 名以上の賛成を経て提出された動議に基づき、総会での議決を経て変更できる。
2. 本会則は 1995 年 12 月 9 日に制定されたものを、2008 年 7 月 13 日の総会において改訂したものである。
3. 本学会誌の投稿規定は別途定める。

以上

●日本動物看護学会　役員　敬称略・五十音順・2008年9月1日現在

「第14回定時総会」(2008年7月13日開催)ならびに「2008年度 第2回理事会」(2008年8月7日開催)において、選出されました。

※再任を含む。

会長

今道友則(日本獣医生命科学大学 名誉教授-獣医生理学-)

理事長

桜井富士朗(帝京科学大学アニマルサイエンス学科 教授
-動物看護学・動物栄養学-)

副理事長

杉山尚子(山脇学園短期大学 准教授-心理学・行動分析学-)

西谷孝子(広島県・西谷獣医科病院、本学会認定動物看護師)

常任理事

上野 純(日本動物看護学会 事務局長・編集担当)

長田久雄(桜美林大学大学院教授
-臨床心理学・老年心理学・健康心理学-)

小松千江(東京都・新ゆりがおか動物病院、本学会認定動物看護師)

高橋英司(帝京科学大学 アニマルサイエンス学科長 教授
-動物ウイルス学、伝染病学-)

種市康太郎(桜美林大学 心理・教育学系 准教授
-臨床心理学(産業・医療分野)-・ストレス心理学、
臨床心理士・精神保健福祉士)

中俣由紀子(茨城県・かしま動物病院、本学会認定動物看護師)

村中志朗(東京都・広尾動物病院 院長、東京都獣医師会 会長)

遊座晶子(茨城県・つくば国際ペット専門学校 教諭、
本学会認定動物看護師)

渡辺 茂(慶應義塾大学文学部 教授-動物心理学・比較認知科学-)

渡辺隆之(東京都・エム・ピー・ネットワーク 代表、獣医師)

理事

阿部令子(京都府・アニマルサポートオフィス・ミーチョ 代表、
本学会認定動物看護師)

井田竜馬(京都府・井田竜馬行政書士事務所 所長、
動物法務協議会 関西支部長)

大和田一雄(山形大学准教授、独立行政法人産業技術総合研究所
審議役)

兼島 孝(埼玉県・みずほ台動物病院 院長、
沖縄県・琉球動物医療センター 院長)

桒野 悟(東京都・動物病院モルム 院長)

甲田菜穂子(東京農工大学農学部 准教授
-実験心理学・動物行動学-)

齋藤みちる(神奈川県・七里ガ浜ペットクリニック、
本学会認定動物看護師)

崎山法子(奈良県・王寺動物病院 看護師主任、
本学会認定動物看護師)

佐藤 克(東京都・佐藤獣医科、獣医師)

高橋和明(日本獣医生命科学大学 名誉教授-実験動物-)

多川政弘(日本獣医生命科学大学 獣医学科・教授
-獣医外科学-、同大動物医療センター 病院長)

中井江梨子(東京県・どうぶつ眼科 eye vet、本学会認定動物看護師)

廣田順子(埼玉県・アリスどうぶつクリニック 院長)

福所秋雄(日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学課科
学科主任・教授-獣医微生物学、ウイルス学-)

牧田登之(福岡動物病院看護士学院 学院長-動物解剖学-)

若尾義人(麻布大学 獣医学科 教授-獣医外科学-)

監事

竹内吉夫(編集者)

高見澤重昭(弁護士)

評議員・編集委員・動物看護師認定試験委員の改選は、行われていません ―― 各々の氏名は、本学会ホームページに掲載しています。

（1997年11月１日施行）
（2002年９月10日改正）

【投稿規定】

日本動物看護学会 会誌
『Animal Nursing（アニマル・ナーシング）』
（Journal of Japanese Society of Animal Nursing）

1．投稿論文は動物看護領域に関する未発表の英文の Full Paper（原著）、Note（短報）、Review article（総説）、および和文の原著、総説、技術講座、資料、論文紹介、トピック等とする。
2．著者または共著者は会員、非会員を問わない、また投稿料は無料とする。
3．すべての投稿論文は編集委員または編集委員会が委嘱した論文審査員が審査し、編集委員会が採否を決定する。編集委員会は原稿の訂正を求めたり返却したりする場合がある。動物の福祉面に問題のある論文は採択しない。
4．原著論文の構成は各分野の慣習に従うが、要約（Summary）・序文（Introduction）・材料と方法（Material&Method）・結果（Result）・考察（Discussion）・引用文献（Reference）から成ることが望ましい。
5．要約は欧文（または和文）とし、150語前後で内容を簡潔にまとめ、３～５語の Key Word をつける。原著論文以外の報文も、欧文表題を必ず付け、欧文要約があることが望ましい。
6．和文原稿は新仮名遣いとし、なるべく当用漢字を用い、外来語と生物の和名は片仮名とする。原稿はパソコンまたはワープロを用いてＡ４判用紙に作成する。手書きの場合はＡ４判横書き原稿用紙を用いる。欧文原稿は厚手のタイプ用紙にダブルスペースでタイプし、左端2.5cm あける。
7．文献は本文に引用したものに限り、アルファベット順に記載する。個々の文献の記載例を下に掲げる。

〔雑誌〕著者名（発行年次）表題名，掲載誌名，巻数：最初の頁－最後の頁：発行所.

例　1)赤池久恵（2001）糖尿病の犬と飼い主への関わりを通して看護指導の意義を考える，アニマル・ナーシング，７：４－19：日本動物看護学会.

2)Dennis，R（1997）Veterinary Diagnostic Imaging：into a new era，Veterinary Nursing，12：12－13：J. B. V. N. A.

〔書籍〕著者名（発行年次）書名：最初の頁－最後の頁：発行所.

例　1)熊倉正樹ほか（2002）動物看護学各論：50－51：日本動物看護学会.

2)Paul W.Pratt（1994）Medical，Surgical and Anesthetic Nursing for Veterinary Technicians：259－342：American Veterinary Publications, Inc., Goleta.

8．図および表の番号は「Fig.３，Table.２」または「図３、表２」のようにする。図と表は本文原稿とは別にして、挿入希望箇所を本文原稿中に指定する。図が手書きの場合には黒インクを用い、白地用紙あるいは青罫のグラフ用紙を用いる。
9．上記以外で執筆中の詳細は、執筆者に配布される執筆要綱による。
10．著者校正は初校までとする。原則として誤植の訂正に限り、新たな文章やデータを付け加えることはできない。また、原稿、原図などは、著者に返却される。
11．投稿論文については、カラー印刷に要する費用は著者の負担とする。
12．別刷論文は１編につき50部まで無料、それ以上は著者の負担とする。
13．本誌に掲載された論文の著作権は、日本動物看護学会に属する。

※詳しいことは、学会事務局までお問い合わせください。ご相談を承ります。

日本動物看護学会 主催

第8回「動物看護師資格認定試験」

《実施概要》

わが国の動物看護を育み導く、実力ある動物看護師を認定するための試験

日本動物看護学会は、動物看護学確立のための諸活動に加えて、<動物看護教育の向上>と<動物看護師の社会的地位の確立>をめざし、この試験を 2003 年より実施しています。この試験の合格者 すなわち「本学会認定動物看護師」とは、<動物看護についての一定の知識と技術を持ち、動物看護師としての適格な資質を有する>と本学会が認定した方々です。認定者には、今後のわが国の動物看護を先頭に立って担うことが期待されています。そして獣医師や飼主・広く社会の人たちと協力して、動物医療の発展に貢献することが求められています。現在までの合格者数 1,605 名

【試 験 日】 **2009 年 3 月 8 日(日)**

【試験会場】

札幌	酪農学園大学	北海道江別市文京台緑町 582 番地	JR 大麻駅・新札幌駅
仙台	東北大学・雨宮キャンパス	仙台市青葉区堤通雨宮町 1-1	地下鉄 北四番丁駅・市バス農学部前
東京	日本獣医生命科学大学	東京都武蔵野市境南町 1-7-1	JR 武蔵境駅
大阪	千里ライフサイエンスセンター	大阪府豊中市新千里東町 1-4-2	地下鉄・モノレール 千里中央駅
福岡	福岡建設会館	福岡市博多区博多駅東 3-14-18	地下鉄 東比恵駅
那覇	沖縄ペットワールド専門学校	那覇市東町 19-20	モノレール 旭橋駅・那覇バスターミナル

【受験資格】

<受験資格 1> 新卒者(2009 年 3 月に、卒業見込 および 大学 4 年次へ進級予定の者を含む) と 既卒者

1)文部科学省の定める高等学校を卒業し(または同等以上の学力があると認められ)、
動物看護専門教育機関において、2 年以上の専門教育課程を修了した者(修了見込の者を含む)。
2)その他、1)に相当すると日本動物看護学会が認める者。

<受験資格 2> 現職者(動物看護の現職者)

動物看護にかかわる実務期間(就業年数)を 4 年間以上有する者。ここでいう「実務期間4年間」とは、以下の①～④のいずれかであればよい。
①動物看護専門教育機関を卒業していない場合は、実務経験が 4 年間以上
②動物看護専門教育機関1年制を卒業した場合は、実務経験が 3 年間以上
③動物看護専門教育機関2年制を卒業した場合は、実務経験が 2 年間以上
④動物看護専門教育機関3年制を卒業した場合は、実務経験が 1 年間以上

【受 験 料】 15,000 円 ・合格後、資格登録料 10,000 円と本学会入会に伴う年会費 5,000 円が必要となります。2 年ごとの資格更新時に、資格更新料 10,000 円が必要となります。

【受験願書の入手請求】 **2008 年 12 月 8 日(月)より開始**
・FAX・E-mail・郵便により受付(郵便番号・住所・氏名・電話番号・請求部数を必ず明記のこと
・受験願書は 1 名(1通)につき 1,000 円。ただし、「団体受験(学校単位で 10 名以上)」による場合は 1 名(1 通)800 円。受験願書送付時に この振込用紙を同封します

【受験願書の受付期間】 **2009 年 1 月 13 日(火)～2 月 25 日(水)** ・期間内に本学会事務局へ必着

【合 格 発 表 日】 **2009 年 3 月 31 日(火)** ・合格者の受験番号を、学会ホームページにて発表(受験者へは合否通知を郵送)

【試 験 時 間 割】 筆記試験Ⅰ 10:30～11:50 (80 分、五肢択一式 30 問) 筆記試験Ⅱ 13:00～14:20 (80 分、五肢択一式 30 問)
実地試験 15:00～16:00 (60 分、20 問)

【出 題 範 囲】 筆記試験――本学会編集・発行の教科書『動物看護学(総論・各論)』に準拠・関連した内容より出題する(下記は、同書の主要目次)。
総論◆動物看護概論／動物看護における業務と技術／看護の対象動物(イヌ、ネコ、ニワトリ、小鳥、ウシ・ウマ・ブタ、ウサギ、モルモット・ハムスター、マウス・ラット ※フェレット、その他エキゾチックアニマル、野生動物、学校飼育動物も含む)／動物看護学研究法／動物看護師にかかわる法律問題
各論◆解剖生理学／内科看護学／外科看護学／薬理学／感染病学／繁殖と遺伝／動物心理学・動物行動学／動物栄養学／動物看護公衆衛生学／動物看護師のための輸液学／動物看護師の放射線学

実地試験――動物看護にかかわる業務全般(臨床検査の方法等を含む)について、写真などにより出題する(実地筆答形式)。

【資 格 認 定】 「本会認定動物看護師」資格は、この認定試験に合格して「資格登録手続」を行った者に与えられます(手続後に資格認定証が送られます)。
・この認定資格は"永久資格"ではありません。資格継続のためには、資格取得後も引き続き、本学会の内外において学習活動を続けていただくことが必要となります。これは、試験合格後も動物看護師としての高い実力を維持し、研鑽を続けていただくためです。したがって、「本学会規定による学習ﾎﾟｲﾝﾄ」を 2 年間で 10 ﾎﾟｲﾝﾄ以上取得することが、2 年ごとの資格更新時の条件となります(ただし、妊娠・出産・育児・病気・海外留学などの場合には対応規定があります)。
・学習ﾎﾟｲﾝﾄの取得方法は学会ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞに掲載しています
・本資格取得中に動物看護師の職を辞しても、資格を喪失するものではありません

◆お問合せ先◆

日本動物看護学会 事務局 (平日 10:00～18:00)

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 2-23 アクセス御茶ノ水 2F
TEL. 03-5298-2850 FAX. 03-5298-2851 E-mail info@jsan.gr.jp

・E-mail と FAX では 24 時間受付いたします
・学会ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ(http://www.jsan.gr.jp)に、「試験の趣旨」「第 8 回試験の詳しい案内」「認定者の声」「前回出題ﾃｰﾏ」などを掲載中です

写真：上 2 枚は、試験内容とは関連ありません。下 2 枚は、試験会場風景(東京・福岡)です。

本誌の発行にあたり、各社様よりご協賛(広告掲載)をいただきました。厚く御礼申し上げます。

日本ペットフード株式会社 表2　**日本ヒルズ・コルゲート株式会社** 表2対向
株式会社インターベット p1対向　**株式会社インターズー** 表3・表3対向
ロイヤルカナン ジャポン 表4　掲載ページ順

編集後記

この1年間、動物看護学会を取り巻く環境には、激変がみられます。日本獣医師会に支援された形で動物看護師の職能団体も誕生いたします。動物看護師を養成する大学間の連携の動きもみられますが、大学では動物看護師で専門科目を講義する人はまだ出ていません。現状では主に獣医師が学科を運営しているのですが、獣医界の方ばかり見ていないで、動物看護師、動物看護学と正対して歩みを進めていただきたいと思っています。

制作担当／上野 純

・前号に引き続き経費節減のため、組版を事務局にてWORDソフトで行いました。ご覧いただきづらい点をお詫びいたします。

・本誌内イラストには、版権のないものを使用しています。

日本動物看護学会 学会誌

Animal Nursing（アニマル・ナーシング） Vol. 13 No. 1

2008年12月1日 第1刷発行

定価2,000円(税込) 本誌の購読料は会費に含めて徴収しています。

編 集／日本動物看護学会 編集委員会(委員長 桜井富士朗)

発行人／今道友則

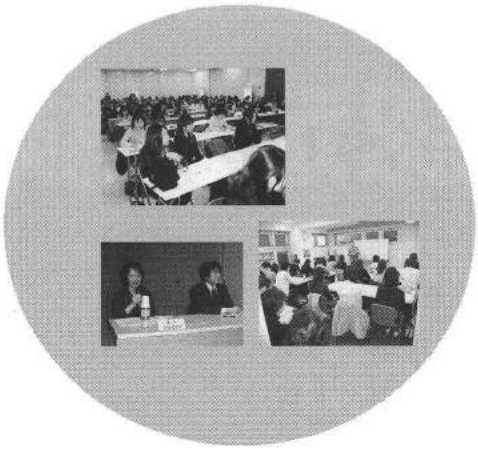
発 行／日本動物看護学会(会長 今道友則)

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2丁目23番 アクセス御茶ノ水2階

TEL. 03-5298-2850 FAX. 03-5298-2851 E-mail info@jsan.gr.jp

印 刷／株式会社 三田村印刷所

本誌の内容を、無断で複写・複製・転載することを禁じます。



本学会行事の開催ご案内 ならびに 実施報告は、
ホームページで行っています。
ぜひご覧ください。

URL　http://www.jsan.gr.jp

検索サイトで日本動物看護学会と入力しても、
アクセスできます。

学会ホームページに掲載している、最近の行事です。講演や発表の内容を詳報しています。

2008 年 2 月 17 日　関西地区 第 1 回例会(大阪)

2008 年 2 月 23 日　第 27 回例会(埼玉)

2008 年 7 月 13 日　第 17 回大会(東京)　幹事校:日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科

2008 年 7 月 26 日　JAHA 年次大会内　本学会共催・動物看護師研究発表会(東京)

ホームページには、2005 年以降の全行事報告を載せています。

☺ 過去5回の問題を完全網羅!

発売中

日本動物看護学会主催

動物看護師資格認定試験 過去問題集'09

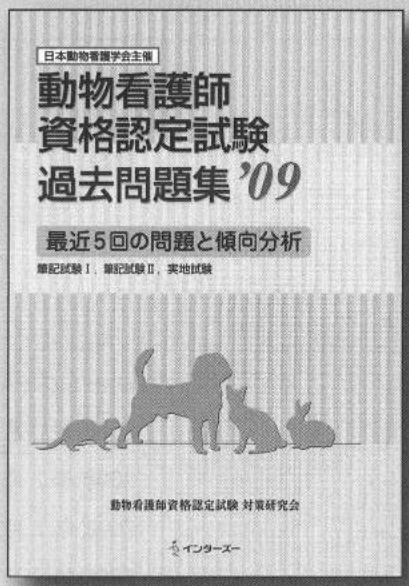
解答つき

最近5回の問題と傾向分析

（筆記試験Ⅰ、筆記試験Ⅱ、実地試験）

この1冊で2009年の受験対策は万全

- ◆日本動物看護学会主催の動物看護師資格認定試験に対応
- ◆過去5回の出題傾向を分析
- ◆全問解答つき
- ◆写真・図版はカラー掲載
- ◆付録・動物看護師資格認定受験案内2009年3月

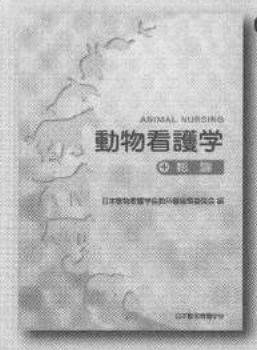


この問題集は日本動物看護学会が主催している動物看護師資格認定試験のあと、受験した人たちからの聞き取り調査をしてまとめたものです。出題傾向は過去5回に出題された問題を分析することで、次回の出題傾向がみえてきます。
また、出題された問題は日本動物看護学会編の「動物看護学〈総論、各論〉」に記載されている項目に関連した部分から多く出題されています。

動物看護師資格認定試験対策研究会 編
B5判　224頁　定価**4,200**円（税込）（本体4,000円＋税）

動物看護師が修得するべき
標準的な知識・技術を提示

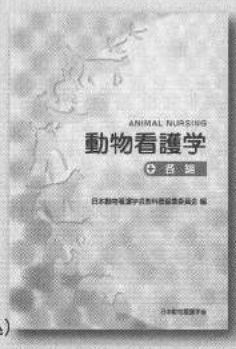
動物看護学【総論・各論】



動物看護学【総論】主要目次

第１章　動物看護概論
第２章　動物看護における業務と技術
カラー写真　看護の対象動物
第３章　看護の対象動物
第４章　動物看護学研究法
第５章　動物看護士（師）に関わる法律問題
資　料

動物看護学【総論】
日本動物看護学会教科書編集委員会 編
B5判並製 326頁　2色刷　定価 **10,290**円（税込）



動物看護学【各論】主要目次

第１章 解剖生理学　第２章 内科看護学
第３章 外科看護学　第４章 薬理学
第５章 感染病学　第６章 繁殖と遺伝
第７章 動物心理学・動物行動学
第８章 動物栄養学
第９章 動物看護公衆衛生学
第10章 動物看護士（師）のための輸液
第11章 動物看護士（師）の放射線学

動物看護学【各論】
日本動物看護学会教科書編集委員会 編
B5判並製 318頁 2色刷
定価 **10,290**円（税込）

発行：日本動物看護学会　発売：（株）インターズー

〒107-0061 東京都港区北青山3-5-12 青山クリスタルビル5F ／ 〒530-0004 大阪府大阪市北区堂島浜1-2-6 新ダイビル9F
interzoo 受注専用フリーダイヤル TEL 0120-80-1906 FAX 0120-80-1872 ホームページ http://www.interzoo.co.jp/

アニマルスペシャリストのためのワークマガジン

「月刊　アズ」 as animal specialist

A4判　96頁　毎月10日発行

1冊定価 （別途送料￥525かかります）
1,980円（税込）

定期購読 （送料サービス）

1年（計12冊）　**18,000円**（税込）
★毎号買うより5,760円もおトク！

2年（計24冊）　**32,000円**（税込）
★毎号買うより15,520円もおトク！

■ 現場で役立つ実践的な情報が満載

「飼い主さんのために動物のために、より知識を深めたい」
「一生の仕事として専門職として誇りをもって働きたい」
「動物看護師の横のつながりを広げたい！」
「as」はそんな読者の皆さんの要望にお応えする雑誌です。

「as」は動物病院で働く動物看護師や受付、トリミングスタッフをはじめ、動物看護師やトリマーを目指して勉強中の学生の方々まで、幅広い層を対象に基礎獣医学や動物看護学、関連情報をいち早くお伝えする国内唯一のアニマルスペシャリスト向け月刊専門誌です。

誌面を＜知識＞＜実践＞＜情報＞＜交流・楽しみ＞の4本柱で構成。即対応の使える情報掲載を心がけ、楽しく学べる雰囲気を大切に、読者の皆さんの声を反映した誌面づくりを行っています。

動物看護に必要な学習情報を、＜知識＞と＜実践＞を意識した2本立てで展開

基礎獣医学から飼い主さんの心のケアやクレーム対応法などまで、多角的な視点で動物看護師に必要な知識や技術をフォローします。また、動物病院で働くトリミングスタッフ向けの記事も満載。イラストや写真を多用したわかりやすく読みやすいデザインです。

読者間の＜交流＞を「as」が積極的にバックアップ！

悩み相談や読者間の意見交換の場を誌面で実現。また、動物看護師同士の「横のつながり」を提供することを目的にas CLUB会員を募り、活動中。会員情報を掲載するページなども設け、読者間の結びつきを大切にしています。

動物看護師がほしい＜情報＞をいち早くお届け。セミナー・学会情報掲載や求人情報の件数の多さにも注目

獣医療界などのタイムリーなニュースや新製品情報、セミナーや学会などの勉強会情報をいち早くお届けします。就職関連情報も多数！

レベルアップや社会的地位向上をバックアップする企画も満載

動物看護師の国家資格化関連情報など社会的地位向上に向けた業界内の最新動向を掲載。また、動物看護関連資格試験の受験情報や対策も掲載。

as animal specialist 編集長より

1989年4月、わが国初のアニマルスペシャリスト専門誌として「as」が誕生しました。年々、動物病院数が増加するなか、“選ばれる動物病院”であるためには、技術はもちろん、飼い主さんの心のケアまでを含めた深く行き届いたサービスが必須だといわれるようになり、動物病院の役割も多岐にわたるようになりました。そのため、動物看護師などの動物と飼い主さんにより近い視点で動ける獣医療スタッフの存在は動物病院のサービス向上に多大な影響を与えていると思います。

「as」はそのような現役動物看護師やトリマー、そして、それらを目指す学生さんを力いっぱい応援する国内唯一の専門情報誌です。読者の皆さんの横のつながりを大切に、私自身の動物看護師としての勤務経験と読者経験をもとに、読者の視点に立った目新しい誌面づくりを今後も心がけていきたいと思っています。「as」は編集部へ寄せられる読者の意見をもとにつくられています。どんなことでも結構ですので編集部までお声をお寄せください!!　よろしくお願いいたします。

as 編集長　高橋 真規子

〒107-0061 東京都港区北青山3-5-12 青山クリスタルビル5F ／ 〒530-0004 大阪府大阪市北区堂島浜1-2-6 新ダイビル9F
interzoo 受注専用フリーダイヤル TEL 0120-80-1906 FAX 0120-80-1872 ホームページ http://www.interzoo.co.jp/

犬用

VETERINARY EXCLUSIVE

動物病院取扱品

ROYAL CANIN
VETERINARY DIET

ロイヤルカナン ベテリナリーダイエット
ベッツプラン ニュータードケア♂♀が誕生。
避妊・去勢したワンちゃんのために
特別に調製された毎日の食事です。
手術後のワンちゃんに特に気をつけてほしい
理想的な体重維持に配慮してつくりました。
下部尿路の健康維持にも配慮しています。

ニュータード♂♀ケア
規格:1kg・3kg・8kg

photo:©Yves Lanceau

VETERINARY

動物病院が選ぶ毎日の食事

Vets Plan ベッツプラン TM

動物病院でお求めください。

●詳細はベッツプランサービスまで、お問い合わせください。0120-76-1012 受付時間 9:30〜18:30（日曜・祝日は定休日） 〒158-8790 東京都杉並区上高井戸1-22-12

ロイヤルカナン ジャポン www.royalcanin.co.jp/

<総販売元> 共立製薬 東京都千代田区八重洲1-5-10